巻頭図版　国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡

(1)時塚１号墳全景(上空から、右下が北)

(2)盾持ち人形埴輪

3．国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡 平成16・18年度発掘調査報告

はじめに

この調査は、農林水産省近畿農政局が実施している国営農地再編整備事業「亀岡地区」に伴い、同局の依頼を受けて当調査研究センターが行った。

各遺跡の調査地設定については、京都府教育委員会ならびに亀岡市教育委員会の試掘調査成果をもとに、近畿農政局をはじめとする開発部局と協議して決定した。

本概要報告では、付表１に示す時塚遺跡第６次・８次・10次、時塚遺跡第10次Ｊ地区と三日市遺跡第９次について報告を行う。なお、時塚遺跡第15次・17次、蔵垣内遺跡第４次については現在整理作業を実施しているところであり、次年度以降に報告する。

発掘調査を行うにあたり使用した座標は、世界測地系国土座標第６座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の真北をさす。

本報告の執筆は、各調査担当者のほか、時塚１号墳出土鉄器については当センター調査員石崎善久が、時塚１号墳出土埴輪については調査員筒井崇史が、時塚遺跡出土の打製石製品については専門調査員黒坪一樹が、磨製石製品については調査第１課資料係長田代　弘が執筆した。また、三日市遺跡の出土縄文土器については京都大学大学院博士課程稲畑航平が、それ以外の出土土器については、筒井が各々執筆した。文責については各項の末尾に記した。

付表１　本報告収録遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積（㎡）	担当者
1	時塚遺跡第６次	京都府亀岡市 馬路町時塚	平成16年２月９日 ～平成16年２月20日	3,800	調査第１係長　奥村清一郎 主任調査員　小池　寛
			平成16年４月23日 ～平成16年９月７日		調査第１係長　小池　寛 専門調査員　黒坪一樹 専門調査員　岡崎研一 調　査　員　福島孝行 調　査　員　村田和弘
	時塚遺跡第８次	京都府亀岡市 馬路町筋違	平成16年８月２日 ～平成16年11月18日	1,200	調査第１係長　小池　寛 主任調査員　引原茂治 調　査　員　村田和弘
	時塚遺跡第10次	京都府亀岡市 馬路町筋違	平成16年12月１日 ～平成17年２月27日	4,120	調査第１係長　小池　寛 専門調査員　岡崎研一
2	時塚遺跡第10次Ｊ地区	京都府亀岡市 馬路町滝ヶ元	平成16年12月６日 ～平成17年２月27日	1,300	調査第１係長　小池　寛 専門調査員　黒坪一樹
3	三日市遺跡第９次	京都府亀岡市 河原林町 河原尻四ノ宮	平成18年１月18日 ～平成18年10月４日	4,850	調査第１係長　小池　寛 主任調査員　引原茂治 主任調査員　岩松　保 主任調査員　森島康雄

現地作業を実施するにあたり、京都府教育委員会・亀岡市教育委員会をはじめとする関係諸機関の協力を得、また地元自治会・地権者・地元住民の方々のご理解とご協力を頂いた。記して謝意を表する。なお、調査に係る経費は、全額近畿農政局が負担した。

（岡崎研一）

位置と環境

今回報告する時塚遺跡や三日市遺跡が所在する亀岡市は、周囲を600m級の山地に囲まれた盆地地形を呈している。この亀岡盆地は、京都市が所在する京都盆地の北西に隣接する。その中央を桂川が北西から南東に向かって流れ、京都盆地で宇治川・木津川と合流し、淀川となって大阪湾へ注ぐ。桂川には、東岸側から三俣川・七谷川・愛宕谷川などが、西岸側から千々川・犬飼川・曽我谷川・年谷川・西川・鵜ノ川などの小河川が流入する。桂川両岸近くを河川に沿う形で低位段丘が続く。この段丘上に時塚遺跡や三日市遺跡が展開する。桂川東岸地域は、近年まで開発が少なく、遺跡の様相が明らかでなかったが、ここ数年続く農地整備事業に伴う発掘調査によって、多くのことが明らかになりつつある。

次に、亀岡市域の主要な遺跡を概観する。

亀岡市域における最も古い遺物として、鹿谷遺跡で縄文時代草創期とされる槍先形尖頭器が出土している。このほかの縄文時代の遺跡としては、早期の土器が出土した案察使遺跡、後期の土器が出土した車塚遺跡、後期・晩期の土器が出土した千代川遺跡、晩期の土器が出土した北金岐遺跡などがある。千代川遺跡では溝が検出されているが、他の遺跡では顕著な遺構は検出されておらず、包含層出土土器があるにすぎない。

弥生時代前期の遺跡として、竪穴式住居跡が検出された大淵遺跡がある。また、前期から中期にかけての遺跡として、推定直径160mを測る環濠集落と考えられる太田遺跡がある。一方、墳墓では、池尻遺跡で中期前半の方形周溝墓が検出された。余部遺跡とともに南丹波地域における古い段階の方形周溝墓である。また、馬路遺跡・余部遺跡・千代川遺跡・天川遺跡では中期後半の方形周溝墓が検出されている。余部遺跡では中期の竪穴式住居跡も検出され、そこで玉作りを行っていたことが明らかになっている。南丹市八木町の池上遺跡でも弥生時代中期後半から後期にかけての方形周溝墓群と環濠集落が検出されている。この遺跡でも、石製品や玉類の製作が行われていた。また、今回報告する時塚遺跡も東岸を代表する中期の集落である。

後期の遺跡としては、蔵垣内遺跡や馬路遺跡で集落が確認されており、池尻遺跡で方形周溝墓が検出されている。以上の弥生時代の遺跡をみると、前期の遺構群は低地部に立地するが、中期から後期に盛期をむかえる遺跡は丘陵裾部の微高地に展開する傾向がみられる。

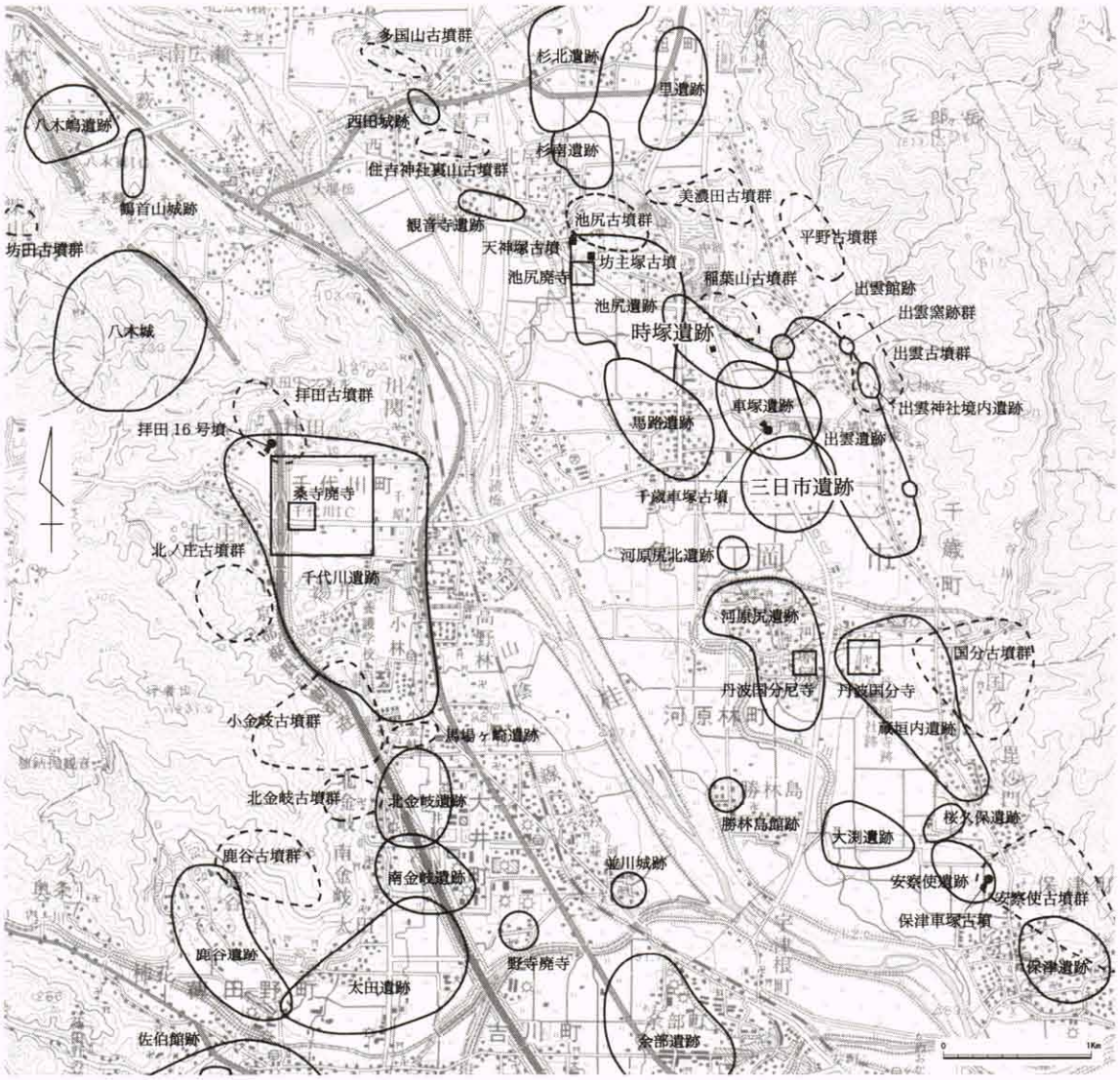
古墳時代になると、前期古墳としては向山古墳が知られるのみで、南丹波地域の前期古墳の動向については不明瞭な点が多い。また、集落遺跡としては、蔵垣内遺跡や時塚遺跡、出雲遺跡などで竪穴式住居跡などが確認され、徐々に検出例が増えつつある。

中期古墳では、平地に方墳を２基築くという傾向が見られる。東岸には亀岡市と南丹市八木町

の境に中期後半に築造された坊主塚古墳と天神塚古墳が、西岸には中期末から後期前半に築造された馬場ヶ崎１・２号墳などがある。坊主塚・天神塚古墳は２段築成で前者は一辺38m、後者は一辺30mを測る。また、東岸域における中期の集落遺跡についてはその動向は明らかではない。

後期になると前方後円墳が築造される。後期初頭に築造された全長約53mの前方後円墳の保津車塚古墳(案察使１号墳)が調査されている。周濠を二重に巡らし、前方部・後円部とも二段築成である。墳丘には葺石を施し、石見型木製品を樹立していたと考えられる。後期前半に築造される全長79mの前方後円墳である千歳車塚古墳は、三段築成の墳丘に二重の周濠をもち、丹波地域を代表する盟主墳と考えられる。また、千歳車塚古墳が築造された頃に、呉弥山裾部から派生する微高地上の開発が開始されたことが池尻遺跡の調査でわかってきた。深さ２mを測る灌漑施設と思われる水路が掘削され、その周辺に集落が営まれる。水路内からは中期後半に製作されたと思われる子持ち勾玉が出土し、何らかの祭祀が行われたであろうことが推測される。

後期後半から飛鳥時代前半にかけて、亀岡市域にも数多くの横穴式石室を内部主体とする古墳が築かれる。



第１図　調査遺跡および周辺主要遺跡分布図(国土地理院　1/50,000　京都北西部)

飛鳥時代には、池尻遺跡の先述の灌漑施設である水路の掘り直しが行われ、その付近に竪穴式住居跡や掘立柱建物跡などが営まれる。この時期の集落としては、池尻遺跡周辺だけでも馬路遺跡や河原尻遺跡、蔵垣内遺跡などがあり、この一帯に大規模な開発が行われたと思われる。また、蔵垣内遺跡の調査では、この時期の古墳が多数発見され、八角形墳の可能性が高い古墳も含まれていることが明らかになった。墳形や副葬品などから地域の有力な人物が葬られたと考えられる。飛鳥時代末から奈良時代にかけて、桑寺廃寺・与能廃寺・観音芝廃寺・池尻廃寺などの寺院が建立される。

奈良時代になると、亀岡市域は律令制の下で丹波国に含まれたが、その国府が亀岡市域にあったと考えられている。丹波国府推定地として、従来から千代川遺跡が考えられていたが、出土土器などから平安時代の可能性が高く、奈良時代の国府所在地は不明であった。しかし、池尻遺跡の調査で、柵や溝によって囲まれた方形区画の中に、大型の掘立柱建物跡数棟が整然と配置された官衙的な建物群の存在が明らかになった。出土遺物から奈良時代前半の短期間で廃絶したと考えられている。このような調査成果から池尻遺跡で検出された官衙的建物群は、奈良時代の丹波国府関連遺構の可能性が指摘されている。

奈良時代中頃には、全国的に国分寺・国分尼寺が建立される。丹波国分寺・国分尼寺ともに亀岡市域の上記遺跡群に近接して建立される。丹波国分寺の創建時の瓦を三日市遺跡で生産しており、水運を利用して運ばれた可能性が指摘されている。国分寺の南側に位置する河原尻遺跡でも奈良時代から平安時代にかけての集落跡が発見され、国分寺や国分尼寺との関係が窺える。

奈良時代の山陰道については、明確な遺構としては未だ検出されていない。足利健亮氏は、国分寺・国分尼寺の間を段丘に沿って北上し、千歳車塚古墳の西側を通って、稲葉山付近で西へ屈曲し、池尻廃寺付近で北へ屈曲して屋賀に至るルートを想定された。このルート上には「大道」の字が存在し、千歳車塚古墳の主軸方位と平行する。このことから、千歳車塚古墳の西側の低位段丘に沿って山陰道が存在したのではないかと考えられている。

平安時代には、亀岡盆地南西部の篠窯跡群で大規模な土器生産が行われ、平安京をはじめ各地に土器を供給していたことが明らかにされている。また、須恵器以外に緑釉陶器も生産されていた。平安時代の集落としては、馬路遺跡において掘立柱建物跡や溝などを検出している。また、呉弥山北側に位置する杉南遺跡からも整然と並ぶ掘立柱建物跡群が見つかっており、官衙的な色彩の強い施設が存在したと考えられている。

中世の集落は、時塚遺跡や三日市遺跡の周辺では確認されていないが、蔵垣内遺跡では掘立柱建物跡や土坑など、中世後期の丹波国分寺に関連する多数の遺構と多量の遺物が出土している。出土遺物から在地領主層の居館もしくは寺院関係の施設が存在したと考えられている。

（岡崎研一）

(1)時塚遺跡第6・8・10次

1．調査の経過

時塚遺跡は京都府亀岡市馬路町滝ヶ元・時塚・筋違及び千歳町千歳に所在する。遺跡は稲葉山の南麓に展開する段丘上を中心に立地し、北西は呉弥山の南麓の微高地の一部までを含んでいる。現在想定されている遺跡の範囲は東西約800m・南北約600mを測る。

時塚遺跡は表面採集された石器群により、弥生時代の遺跡として紹介されていたが、平成6年度の送電線設置工事に伴う調査により、はじめて遺構の存在が確認された。その後、国営農地整備再編事業に伴い、京都府教育委員会、亀岡市教育委員会、当埋蔵文化財調査研究センターにより平成19年10月段階で17次におよぶ調査が実施されている。調査次数・調査機関については付表2に一覧を付した。

今回の調査は、京都府教育委員会・亀岡市教育委員会の試掘調査成果に基づき当センターが面的調査を実施することとなった。また、排土置き場として使用する場所については、耕作土をいったん除去する必要があり、その際、確認された遺構については耕作土除去面での記録作業を実施することが協議の結果決定された。

調査に際しては田畑一筆ごとにトレンチを設定し、隣接するトレンチをまとめて一つの地区とし、アルファベットを付した。また、各地区には枝番を付すこととした。また、検出した遺構については地区ごとに通し番号を付し、掘立柱建物跡や方形周溝墓のように複数の遺構により構成されるものについては本報告では、溝や柱穴・土坑の番号をもって新たに遺構番号としている。また遺構の名称については冒頭に検出した地区名を付すこととした。

第6次調査では、京都府教育委員会が試掘調査により検出した古墳の周溝を含む地区(B地区)と、調査対象地の最も北西に位置する地区(A地区)及びB地区の南に位置する地区(C地区)において面的調査を実施した。調査は平成16年2月9日から平成16年2月20日に重機による表土掘削ならびに一部の人力作業を実施し、平成16年4月23日から人力掘削を再開して行った。その結果、古墳の周溝から特殊な盾持ち人形埴輪が検出され、また、主体部からは多数の鉄製品が出土した。8月21日には現地説明会を実施し、多数の参加者を得ることができた。第6次調査は平成16年9月7日に現地作業を終了した。

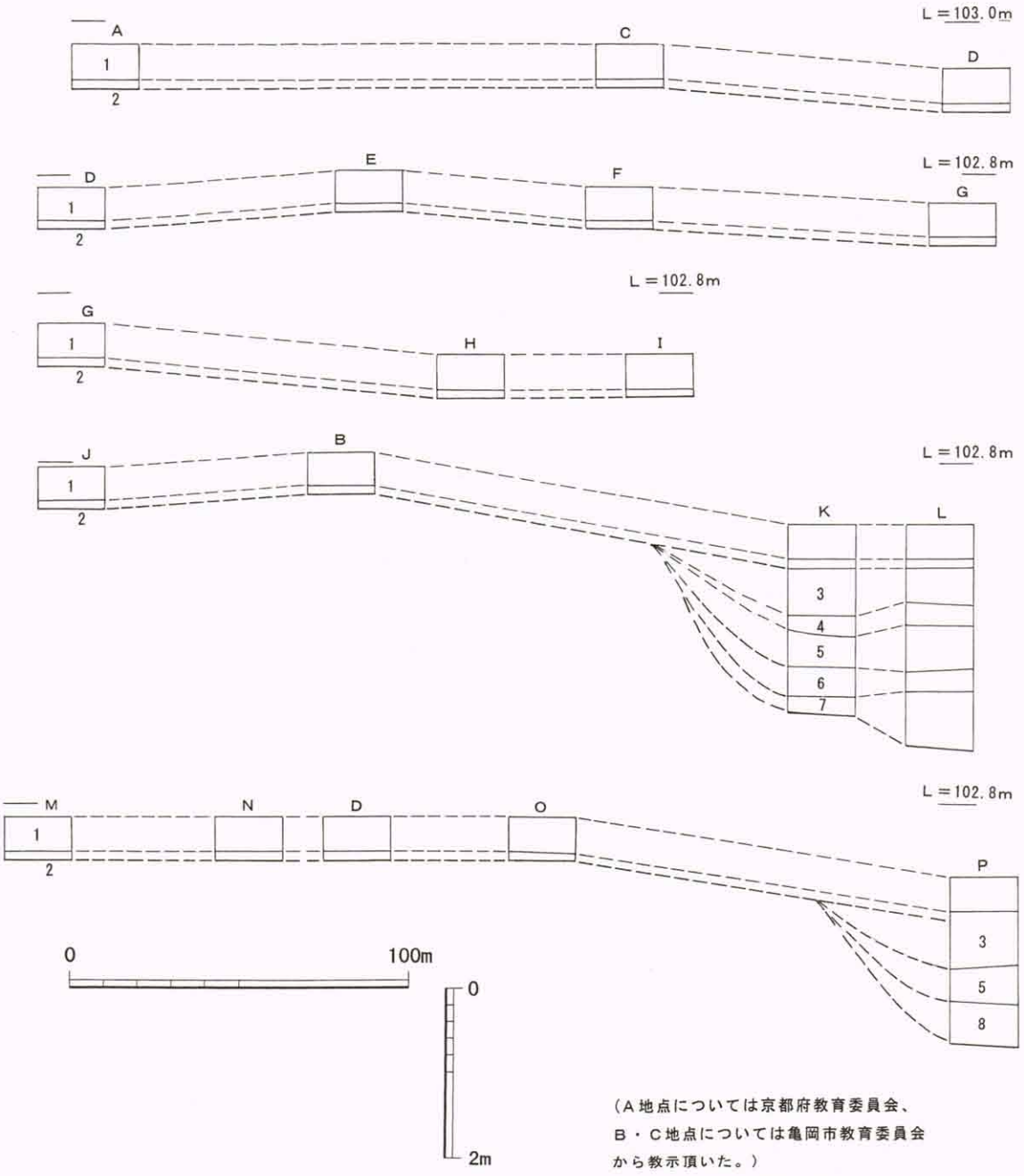
第8次調査は府道の東側に設定された

付表2　時塚遺跡調査次数・調査機関一覧

次数	調査機関	調査年度	文献
1	亀岡市教育委員会	平成6年度	注1
2	亀岡市教育委員会	平成11年度	注2
3	京都府教育委員会	平成15年度	注3
4	亀岡市教育委員会	平成15年度	
5	京都府教育委員会	平成15年度	注4
6	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	平成15･16年度	注5
7	京都府教育委員会	平成16年度	注6
8	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	平成16年度	
9	亀岡市教育委員会	平成16年度	
10	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	平成16年度	注7
11	亀岡市教育委員会	平成17年度	
12	京都府教育委員会	平成17年度	注8
13	京都府教育委員会	平成17年度	
14	京都府教育委員会	平成17年度	
15	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	平成18年度	
16	京都府教育委員会	平成18年度	注9
17	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	平成19年度	

第２図　調査地および柱状図計測地位置図

地区(D・E・F地区)であり、第6次調査と一部併行するかたちで平成16年8月2日に重機掘削を開始した。D地区では多数の土坑・溝など弥生時代を中心とする遺構、並びに新たに方墳1基を確認し、この段階で6次調査で検出した古墳を時塚1号墳・8次調査で検出した古墳を時塚2号墳とすることが決定された。E・F地区については重機掘削を実施した段階で遺構面を確認することができず、サブトレンチによる断ち割り調査を実施した。その結果、遺構面が造成面より深い位置に存在することが確認された。この結果をもとに、E・F地区については遺構面が保護



(A地点については京都府教育委員会、
B・C地点については亀岡市教育委員会
から教示頂いた。)

1．耕土　2．床土　3．灰褐色土混じり明黄褐色粘質土　4．暗灰色粘質土
5．極暗灰色粘質土　6．暗灰褐色シルト　7．黄灰色シルト　8．淡青灰色シルト

第3図　基本層位図

されることとなったため図化・写真撮影による記録作業を行い調査終了した。平成16年11月９日に関係者説明会を実施し、現地調査は平成16年11月18日に終了した。第10次調査は調査対象地のもっとも南の地区（Ｇ・Ｈ・Ｉ地区）を対象に平成16年12月１日から実施し、Ｇ－１地区では時塚１号墳の周溝の一部を確認し、Ｈ・Ｉ地区では方形周溝墓を多数検出することができ、時塚遺跡の墓域が南まで展開することを確認した。平成17年２月27日には、池尻遺跡第７次・馬路遺跡第４次・車塚遺跡第７次調査とともに現地説明会を実施し、同日現地作業を終了した。

整理作業にあたっては、時塚１号墳が複数次の調査が実施されていること、隣接する地区においても複数次の調査にまたがることからこれらを一本化して報告することとした。なおＪ地区に関しては（２）時塚遺跡第10次Ｊ地区で述べる経緯を受け、別項として記載する。

２．基本的層位（第３図）

時塚遺跡における基本的層位は第３図に示すとおり、上層から表土・床土・地山の順である。なお、Ｄ地区では床土の下層にいわゆる丹波クロボク層である暗褐色土の堆積が確認された。地山は黄褐色土を主体とするが、部分的に青灰色粘質土層から形成される地区や角礫を多量に包含する部分が存在することも確認している。

遺構は基本的に表土・床土を除去した段階で確認することができたが、Ｄ地区ではクロボク層を除去した段階で検出するに至った。ただし、クロボク層内には多数の遺物が含まれているため本来、遺構はこのクロボク層上面から掘削されていたものとみられる。他地区での遺構の遺存状況が悪い点は、クロボク層から地山面の一部までが削平されていたことに起因するものだろう。

Ｅ・Ｆ地区は遺跡の立地する段丘の東側緩斜面に相当するとみられ、遺構はかなり低い位置から検出された。遺構面上には灰色系の粘土やシルトを中心とする水流由来の堆積層が確認されている。同層中には弥生土器のほか、須恵器・緑釉陶器・瓦器などが含まれていた。

３．調査の概要

本項では、各地区における検出遺構の概略を記す。なお、当遺跡の遺構の遺存状況は必ずしも良好ではない。そのため、竪穴式住居については中央土坑とみられる土坑と周辺の柱穴の関係から復元的に示したものも存在する。

Ａ－１地区（第６次調査・第４図）　調査対象地のもっとも北西に位置する地区である。遺構面はわずかに西に傾斜していることや、現在の地形から判断して段丘稜線から西側緩斜面の傾斜変換点に相当するものと考える。

この地区では周壁溝の遺存する竪穴式住居跡２基（ＡＳＨ170・168）、ピット群・土坑など弥生時代を中心とする遺構を検出した。遺構の遺存状況は悪く、竪穴式住居跡周辺の土坑、ピットは本来、住居に伴うものであった可能性が高いものと判断される。そのため、竪穴式住居については復元的に示している。

Ａ－２地区（第６次調査・第４図）　Ａ－１地区の東に設定した地区である。Ａ－１地区同様ピ

ット・土坑などを検出した。また、Ａ－１・２地区にまたがって掘立柱建物跡(ＡＳＢ310)を確認している。また、土坑ＡＳＫ344からは縄文時代中期末の深鉢が検出され唯一、縄文時代に比定できる遺構である。

Ｂ－１・２地区(第６次調査・第５図)　調査対象地のほぼ中央に設定した地区である。時塚１号墳の周溝および造出し・造出し上の主体部ＢＳＸ033を検出した。

Ｂ－３・４地区(第６次調査・第５図)　京都府教育委員会の実施した第５次調査のトレンチを拡張して設定した。時塚１号墳の周溝を確認している。周溝に関しては二重周溝の可能性を考慮し検出に努めたが、その痕跡は確認されなかった。周辺からはピット・土坑などが検出された。

Ｇ－１地区(第10次調査・第５図)　Ｂ１・２地区の南に近接する地区である。時塚１号墳の周溝、ピット群を確認した。調査区南西では段丘上平坦面から西斜面への傾斜変換点を確認した。

Ｇ－２地区(第10次調査・第５図)　Ｇ－１地区の東に近接して設定した地区である。なお、調査対象地北東には簡易な小屋があったため調査対象から除外された。この部分については平成17年、京都府教育委員会により第13次調査時に第１トレンチとして発掘調査が実施されている。

この地区からは多数のピット群・掘立柱建物跡・井戸跡などが確認されている。

Ｃ－１・２地区(第６次調査・第６図)　Ｇ－１地区の南に位置する地区である。遺構面は１面のみであったが、遺構の切り合い関係などから上層の掘立柱建物群と下層の方形周溝墓群に分離して調査を実施した。なお、地区西側は段丘の緩斜面に相当し、遺構が希薄な状態であった。

上層の遺構には掘立柱建物跡１棟と周囲に巡らされた柵を確認した。また、井戸１基も掘立柱建物跡の北東から検出している。

下層遺構として方形周溝墓６基を認識した。中には溝内埋葬施設をもつものも存在することが明かとなった。Ｃ－１地区で確認した土坑２基(ＣＳＫ105・106)はこの方形周溝墓に関する遺構と思われるが、性格について明らかにすることはできなかった。

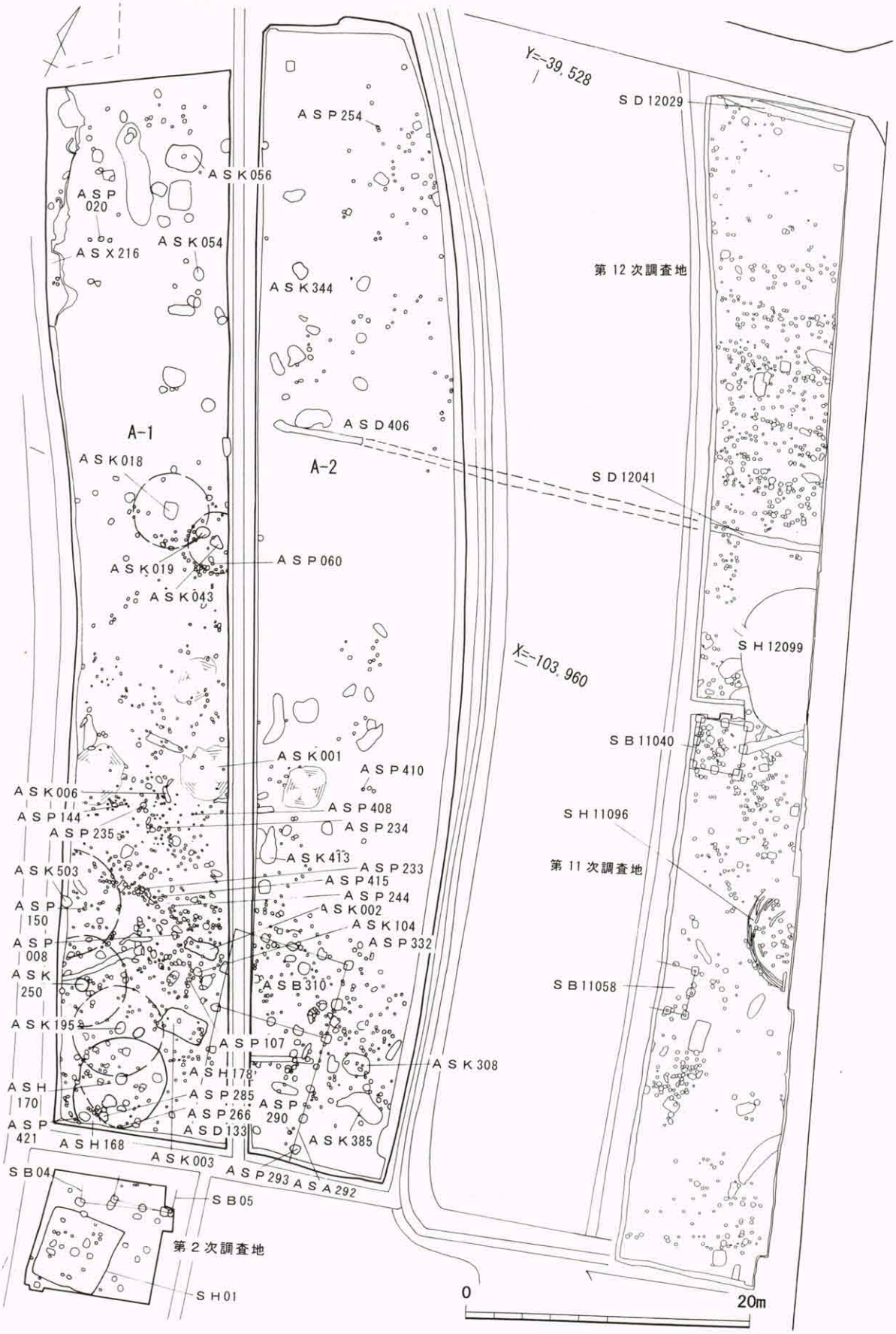
Ｄ地区(第８次調査・第７図)　Ｂ地区の東側に府道を介して設定した地区である。この地区では床土下層にクロボク層の堆積が認められた。クロボク層上面での遺構検出に努めたが、明瞭に遺構の輪郭を把握することができず、クロボク層を除去した段階での遺構検出を行った。

検出した遺構には、土坑・溝・ピット群など弥生時代を中心とする遺構が多く、その形状から竪穴式住居に伴うとみられる土坑も存在したため住居については復元的に示した。

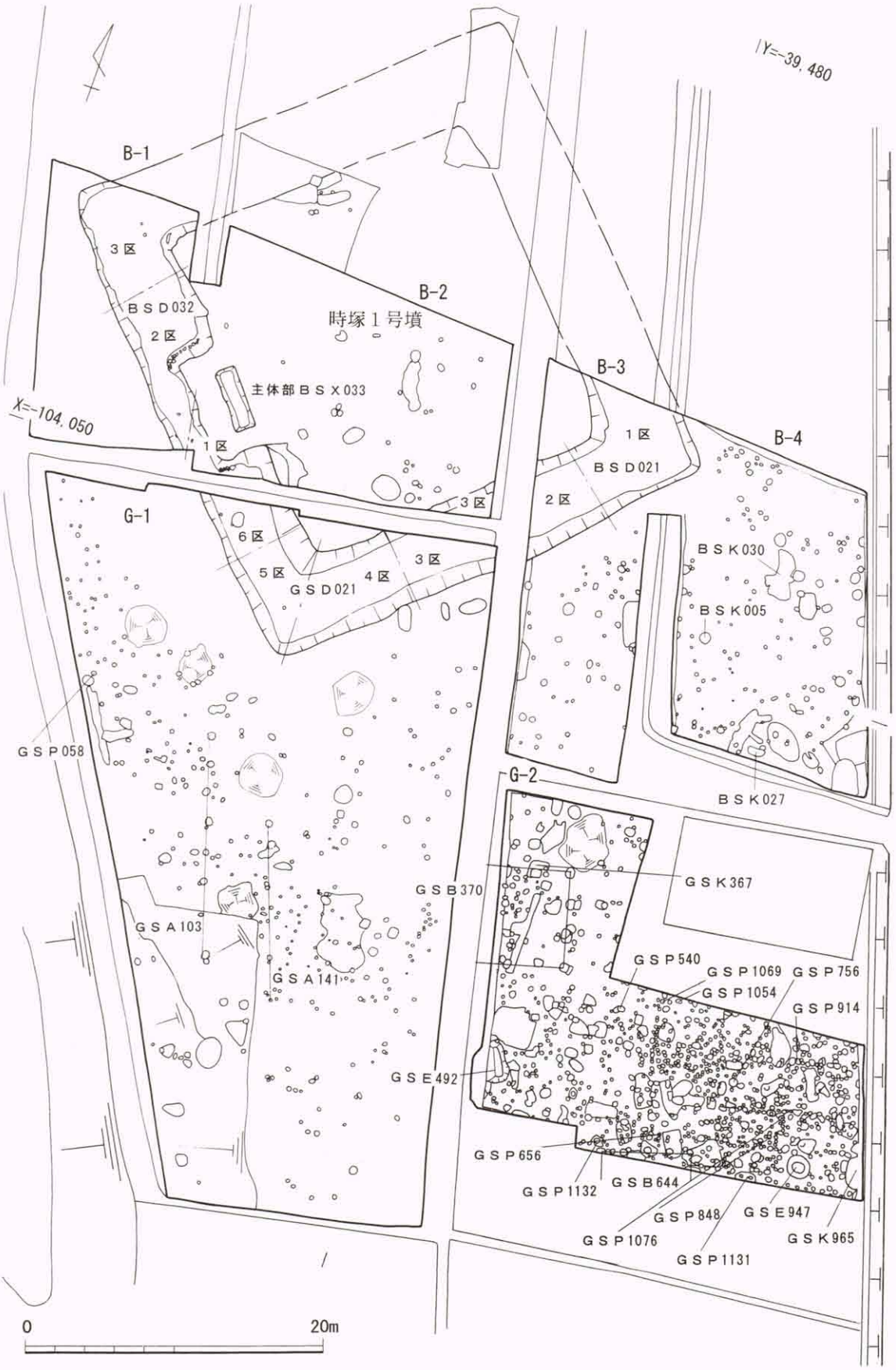
また、屈曲する溝ＤＳＤ500を確認した。この溝は出土遺物から古墳に伴う周溝であることが裏付けられた。時塚２号墳と呼称されることが決定され、複数の埋没古墳が存在することが想定されるに至った。地区東に設定した排土置き場から周溝北東部分が確認され、その規模は一辺約12mであることが確定された。

Ｅ地区(第８次調査・第８図)　Ｄ地区から北東に設定された地区である。調査区内に３か所のトレンチを設定し試掘調査を実施した。なおトレンチには北から１～３の番号を付した。調査の結果、造成工事による遺構の損壊はないものと判断され試掘段階で調査を終了した。

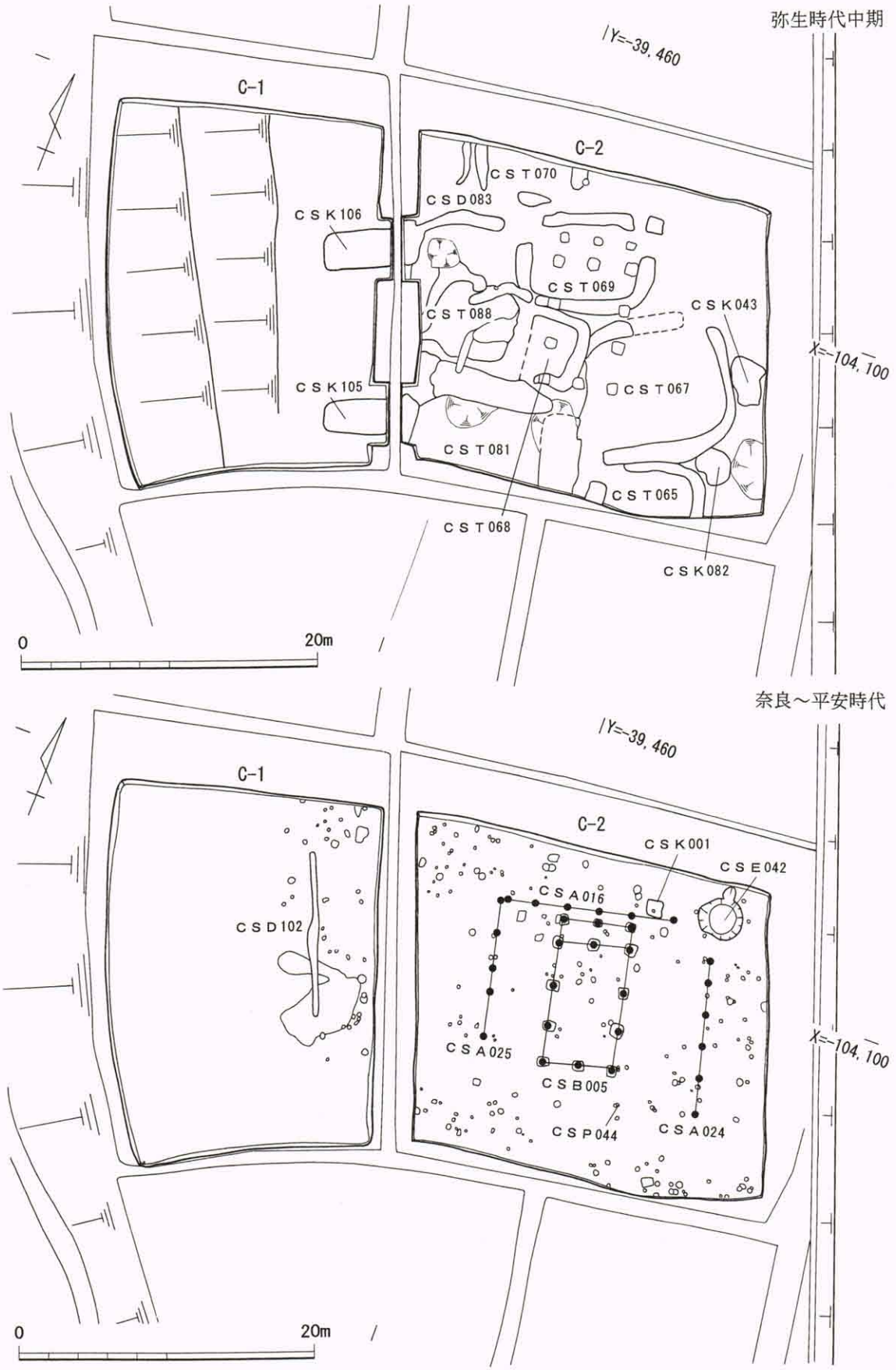
遺構面までは、現地表面から最深で約１ｍを測り、その上層で灰色土の遺物包含層を確認した。



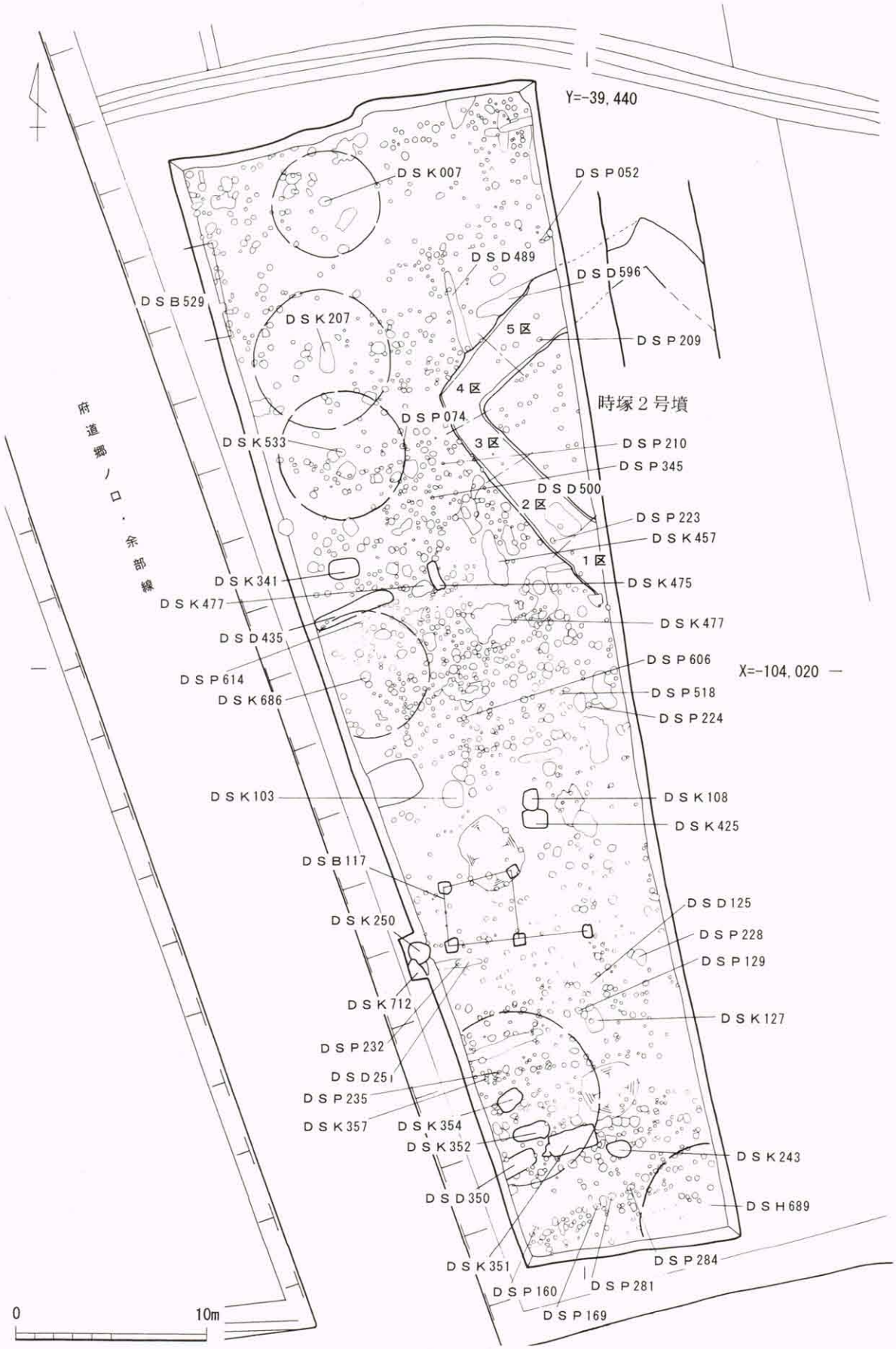
第4図　A地区(第6次)遺構配置図



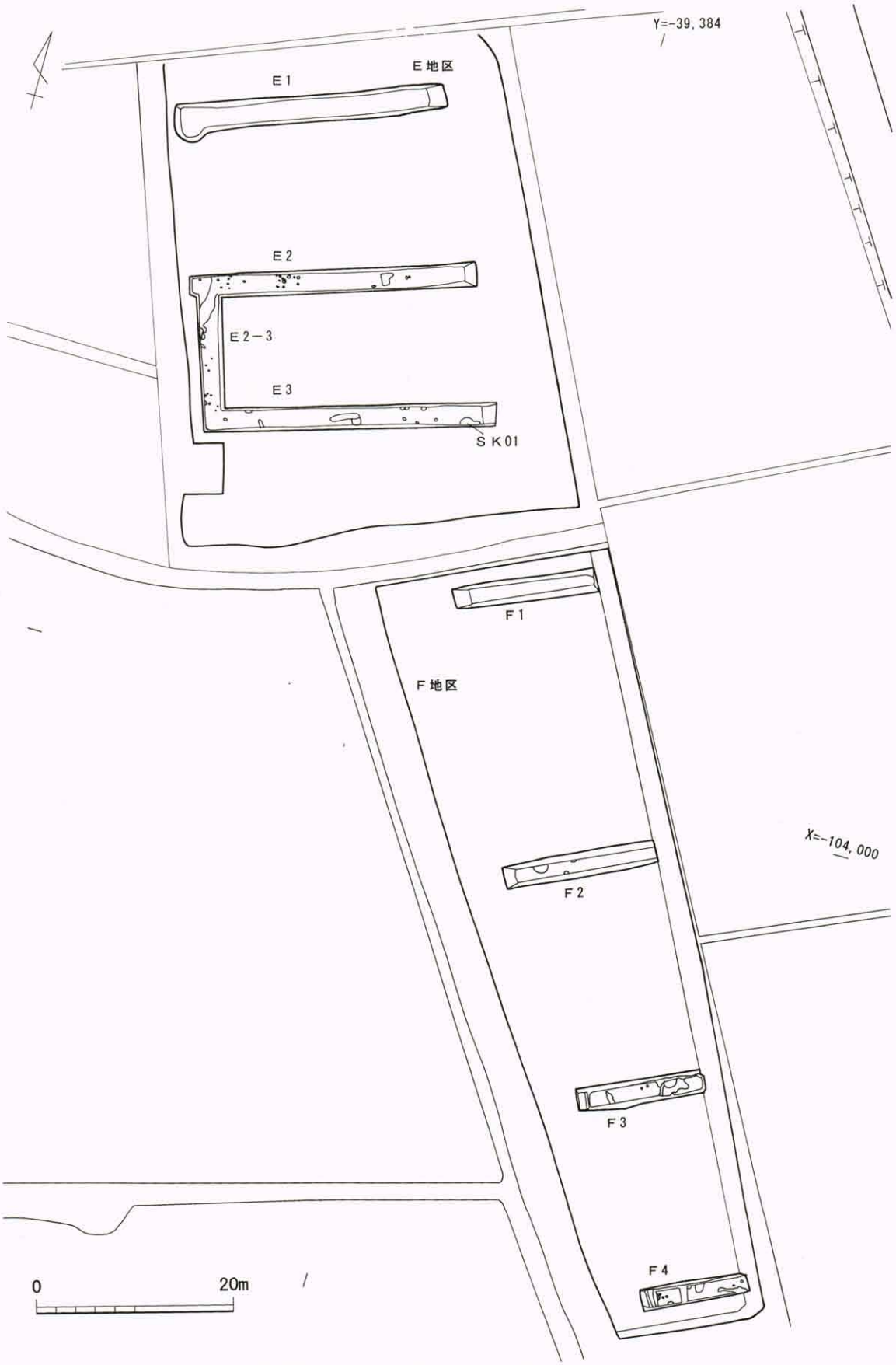
第5図　B地区(第6次)・G地区(第10次)遺構配置図



第6図　C地区(第6次)遺構配置図

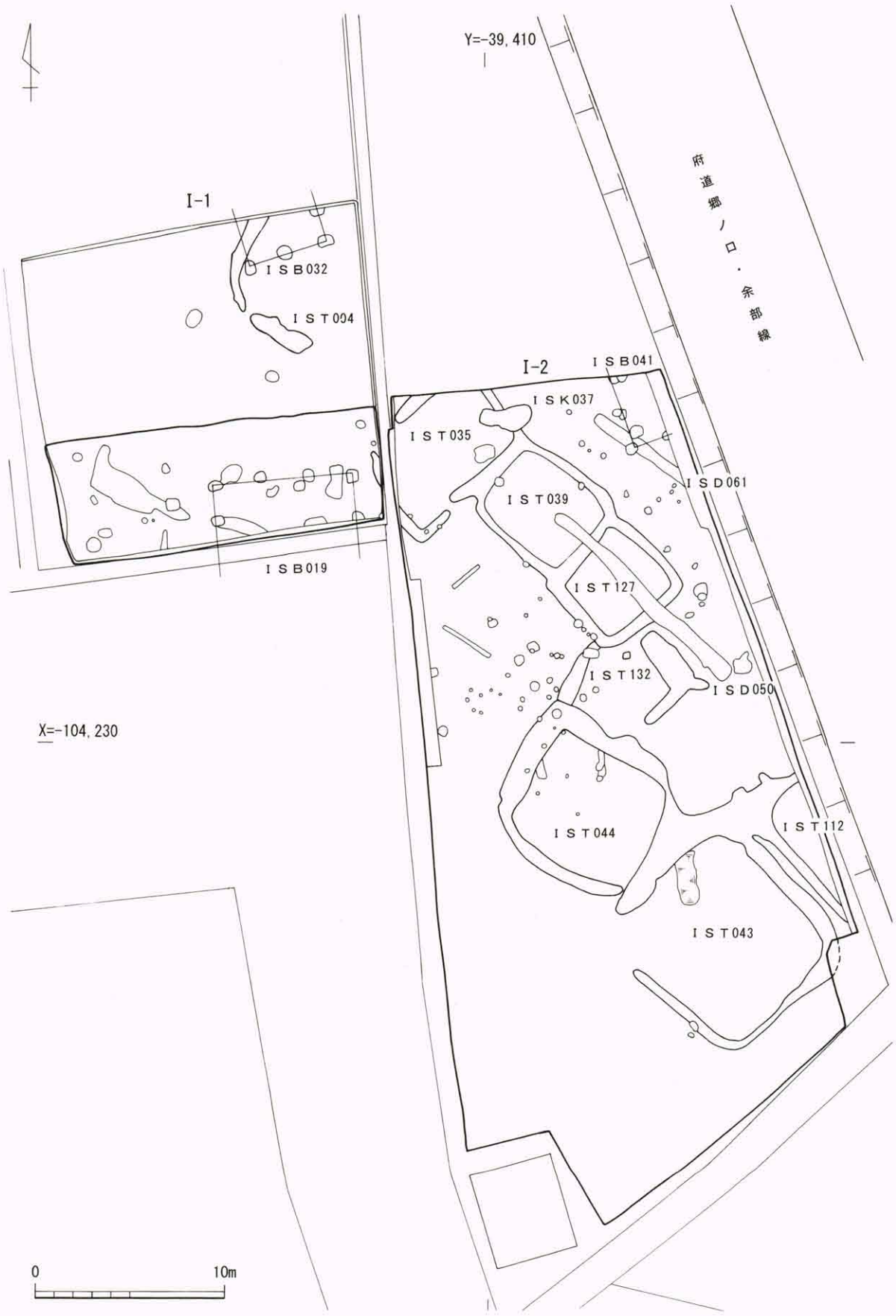


第7図　D地区(第8次)遺構配置図



第８図　Ｅ・Ｆ地区(第８次)遺構配置図

第９図　Ｈ地区（第10次）遺構配置図



第10図　Ⅰ地区(第10次)遺構配置図

遺物包含層からは、弥生土器のほかに須恵器、緑釉陶器、瓦器などの破片が出土した。検出した遺構は、ピットや溝などある。

そのうちＥ－３トレンチで検出された土坑ＥＳＫ001は南半分は調査範囲外であるが、東西幅1.3m・深さ0.18mを測る不整円形の土坑であり、中から弥生土器高杯(第37図73)が検出された。弥生時代の遺構がさらに広範囲に広がるものと推定される。

Ｆ地区(第８次調査・第８図)　Ｅ地区の南に設定された地区である。調査区内に４か所のトレンチを設定し調査を実施した。なおトレンチには北から１～４の番号を付した。調査の結果、造成工事による遺構の損壊はないものと判断され試掘段階で調査を終了した。

遺構面までは、現地表面から最深で約1.2mを測り、その上層にはＥ地区と同様に遺物包含層が堆積していた。検出した遺構は、円形の土坑、ピット、溝などを検出した。弥生時代の遺構はさらに広範囲に広がるものと考えられる。

Ｈ地区(第10次調査・第９図)　Ｃ地区の南東に設定された地区である。対象地南東は耕作が行われていたため調査範囲から除外された。なお、この除外部分は第13次調査第４トレンチとして京都府教育委員会により調査が実施されている。

この地区では遺存状況が悪いものの方形周溝墓６基以上を検出した。その他、全容は不明ながら掘立柱建物を構成するとみられる方形掘形をもつ柱穴を確認した。また、調査地西側に設定した排土置き場では耕作土直下から周溝墓と思われる溝を確認することができた。

Ｉ－１・２地区(第10次調査・第10図)　今回の調査対象地の最南端に設定された地区である。

Ｉ－１地区では掘立柱建物１棟(ＩＳＢ019)を確認したほか、溝を検出している。この溝についても方形周溝墓の可能性を考えておきたい。

また、北に設定した排土置き場では耕作土を除去した段階で方形周溝墓とみられる溝(ＩＳＴ004)と掘立柱建物跡(ＩＳＢ032)を確認し、上面での記録作業を実施した。

Ｉ－２地区では方形周溝墓７基以上を確認した。周溝を連接するように構築されているのが特徴的である。また、掘立柱建物跡１棟(ＩＳＢ041)を地区北東で検出した。

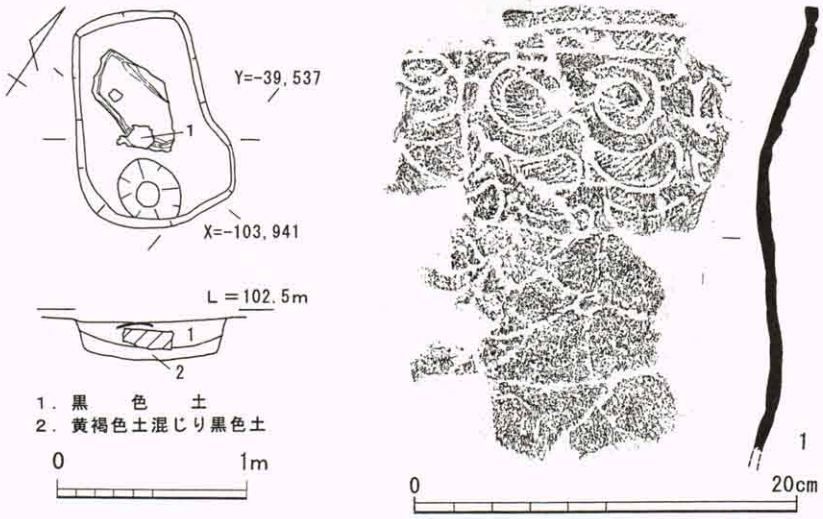
以上、各調査区の概要を記した。次項以降で、個別の遺構について詳述する。

４．縄文時代の遺構・遺物

縄文時代の遺物を出土した遺構はＡ－２地区で検出した土坑ＡＳＫ344のみであるが、時塚遺跡では調査地の各所から縄文時代に属するとみられる石鏃が包含層あるいは弥生時代の遺構埋土中から検出されている。

Ａ．検出遺構

土坑ＡＳＫ344(第４・11図)　Ａ－２トレンチ北側で検出した土坑である。平面形は長方形で、断面は「Ｕ」字形を呈す。長軸1.1m・短軸0.6m・深さ約0.2mを測る。土坑南東部に径約0.3mのわずかな窪みを検出した。土坑底からの深さ約８cmを測る。下層には黄褐色土混じり黒色土が堆積しており、その上面に0.6×0.3m、厚さ約0.1mを測る扁平な石が検出された。縄文土器(第11



第11図　ＡＳＫ344実測図および出土遺物実測図

図１）は、石の上面を覆う形で出土した。

Ｂ．出土遺物（第11図１）

１はＡＳＫ344から出土した深鉢である。口縁部・頸部・胴部の一部まで遺存する。口縁端部は平坦である。口縁部外面には２条の沈線と渦巻き文を施す。胴部外面は磨消縄文を施す。施文や形状から、北白川Ｃ式に相当し、縄文時代中期末のものと考える。

５．弥生時代の遺構・遺物

Ａ．検出遺構

弥生時代に属する遺構としては、竪穴式住居跡・方形周溝墓・土坑・ピット群などがある。今回の調査対象地で検出された遺構の大部分が弥生時代に属するとみられる。以下、遺構の種類ごとに詳述する。

ａ．竪穴式住居跡

竪穴式住居跡については遺存状況が非常に悪いため厳密な基数を確定するには至らなかった。Ａ－１地区のように竪穴式住居跡として周壁溝もしくは住居掘形の認識できたＡＳＨ170・168はかろうじて削平を免れた状態で検出したが、周辺からは住居に伴うとみられる土坑・柱穴が多数検出された。京都府教育委員会・亀岡市教育委員会の実施した第11・12次調査地からも複数の竪穴式住居が検出されているため、Ａ地区には複数の住居が存在したと考える。

そのため、土坑や柱穴の配置をもとに竪穴式住居跡の復元を試みることとした。住居の復元に当たっては、住居内の中央土坑とみられる遺構を認識し、これを元に周辺に一定の規則性をもつ柱穴・ピットの配置を考慮して行った。また、これらの遺構から出土した遺物が弥生時代であることを確認した上で、住居を復原した。同様の作業をＤ地区についても実施し、報告を行うこととする。以下、Ａ・Ｄ地区の各地区について概観する。

Ａ地区　Ａ地区では周壁溝や周壁の遺存する円形竪穴式住居２基を検出したほか、５基の住居の存在を想定した。

竪穴式住居跡ＡＳＨ170（第４・12図）　Ａ－１地区南端部で検出した円形の住居跡である。竪穴式住居跡ＡＳＨ168を切る。残存状況は悪く、周壁溝（ＡＳＤ239）と中央土坑（ＡＳＫ170）及び主柱穴を検出した。床面については削平されている可能性が高い。住居の規模は直径約６ｍ、周

壁溝ＡＳＤ239は幅約0.1m、深さ約0.1mを測る。中央土坑ＡＳＫ170は、長軸0.9m・短軸0.8mの規模をもつ東西方向に長い楕円形を呈し深さ約0.5mを測る。主柱穴は、中央土坑より西・東側約1.5mのところで２か所検出した。柱穴の規模は、いずれも直径約0.3m・深さ約0.3mを測る。埋土中から石包丁(第45図20)が出土した。

竪穴式住居跡ＡＳＨ168(第４・12図)　Ａ－１地区南端部で検出した円形の住居跡である。竪穴式住居跡ＡＳＨ170によって切られる。残存状況は悪く、周壁の一部と中央土坑(ＡＳＫ168)のみを検出した。主柱穴については特定できなかった。住居跡南側については調査地外であり不明である。周壁は南西の一部のみ確認できた。ＡＳＨ170とほぼ同規模と思われる。中央土坑ＡＳＫ168は長軸1.0m・短軸0.8mの東西方向に長い楕円形で、深さ約0.5mが遺存していた。

竪穴式住居跡ＡＳＨ195(第４・12図)　ＡＳＨ170北側の周壁溝近くから、長軸約0.9m・短軸約0.7m・深さ約0.4mを測る南北方向に長い楕円形の土坑ＡＳＫ195を検出した。この土坑がＡＳＨ170の中央土坑と同規模であることから、この土坑を中心とした住居が存在したと考えた。ＡＳＫ195を中心に約3.5m付近を円形に径約0.2mの柱穴が巡ることから、ＡＳＨ170と切り合う住居跡が存在したと考える。ＡＳＫ195から石包丁(第44図７)と太型蛤刃石斧(第50図57)が出土した。

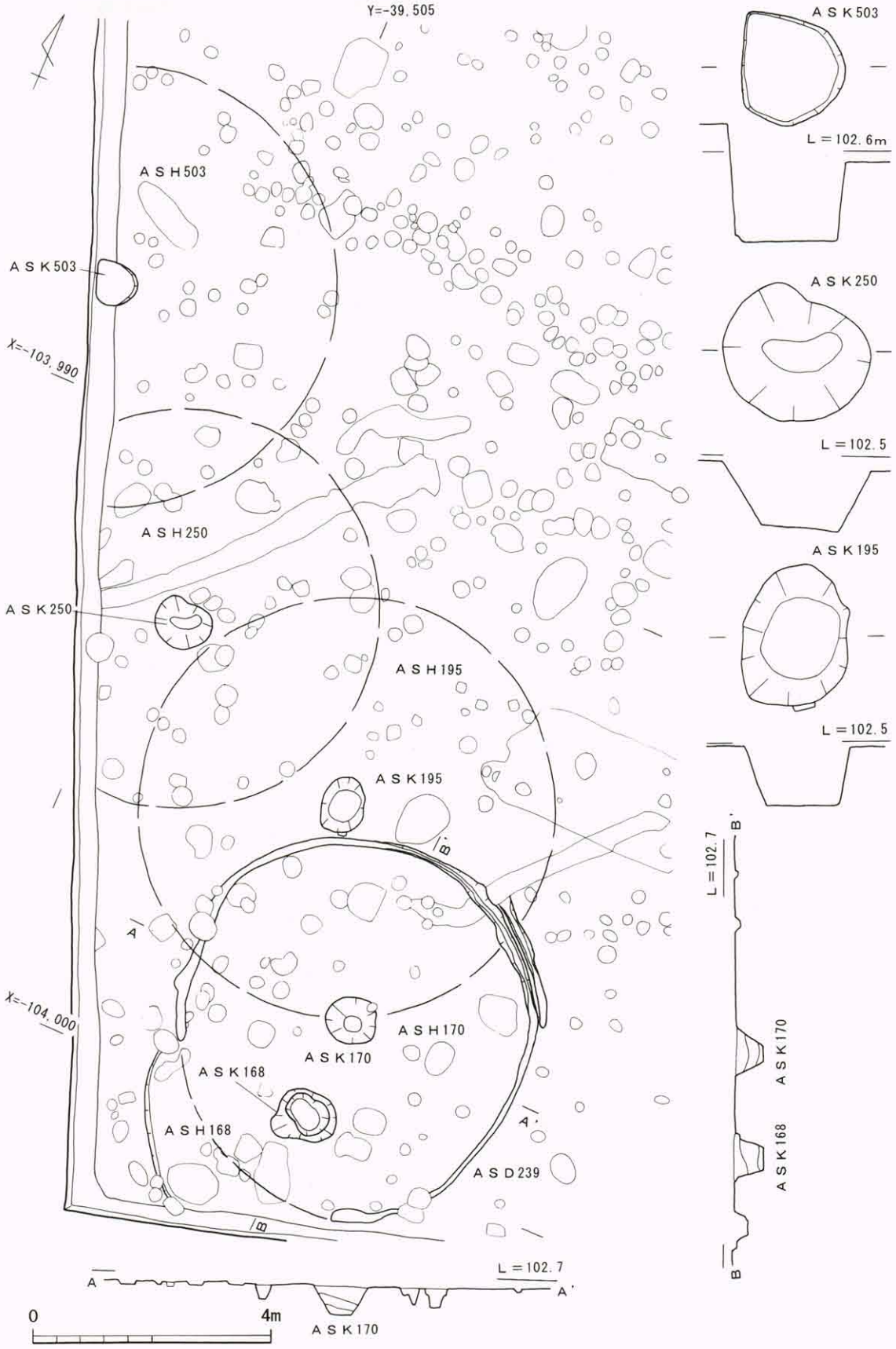
竪穴式住居跡ＡＳＨ250(第４・12図)　Ａ－１トレンチ南端部で復元した住居跡である。竪穴式住居跡としての床面までの掘り込みや周壁溝は認められなかったが、中央土坑と思われる土坑ＡＳＫ250を中心に約３m付近を円形に径0.2～0.3mの柱穴が巡ることから、竪穴式住居跡と考えた。中央土坑ＡＳＫ250は、長軸1.0m・短軸0.9m・深さ約0.4mを測る東西方向に長い楕円形である。

竪穴式住居跡ＡＳＨ503(第４・12図)　Ａ－１トレンチ南側で検出した住居跡である。竪穴式住居跡としての掘り込みや周壁溝は認められなかったが、中央土坑と思われるＡＳＫ503を中心に約3.5m付近を円形に径約0.2mの柱穴が巡ることから、竪穴式住居跡と考えた。土坑ＡＳＫ503の規模は、短軸0.7m・長軸0.7m以上・深さ約0.5mを測り、東西方向に長軸をもつ。

竪穴式住居跡ＡＳＨ018(第４・13図)　Ａ－１トレンチ中央付近に復元した。土坑ＡＳＫ018の規模が南部で検出した中央土坑ＡＳＫ170と同規模であり、この土坑から約2.7m付近に小型の柱穴が集中する傾向にあることから、ＡＳＫ018を中央土坑とする住居を想定した。土坑ＡＳＫ018の規模は、直径約0.6m、深さ約0.3mを測る。掘形はＵ字形を呈す。主柱穴や周壁溝については不明である。

竪穴式住居跡ＡＳＨ043(第４・13図)　Ａ－１トレンチ中央付近に復元した。土坑ＡＳＫ043をその規模から中央土坑であると考え、復原した住居をＡＳＨ043とした。土坑ＡＳＫ043は上面での掘形は不定形であるが、底は方形である。規模は、長軸1.0m・短軸0.8mを測る。土坑埋土中から壺とみられる底部片(第35図58)が出土した。主柱穴は特定できない。

また、土坑ＡＳＫ018と土坑ＡＳＫ043の間に土坑ＡＳＫ019があり、それを中央土坑とする住居跡が重複する形で存在した可能性がある。土坑ＡＳＫ019から、壺(第35図47)と甕(第35図56)



第12図　ＡＳＨ168・170・195・250・503実測図

が出土した。

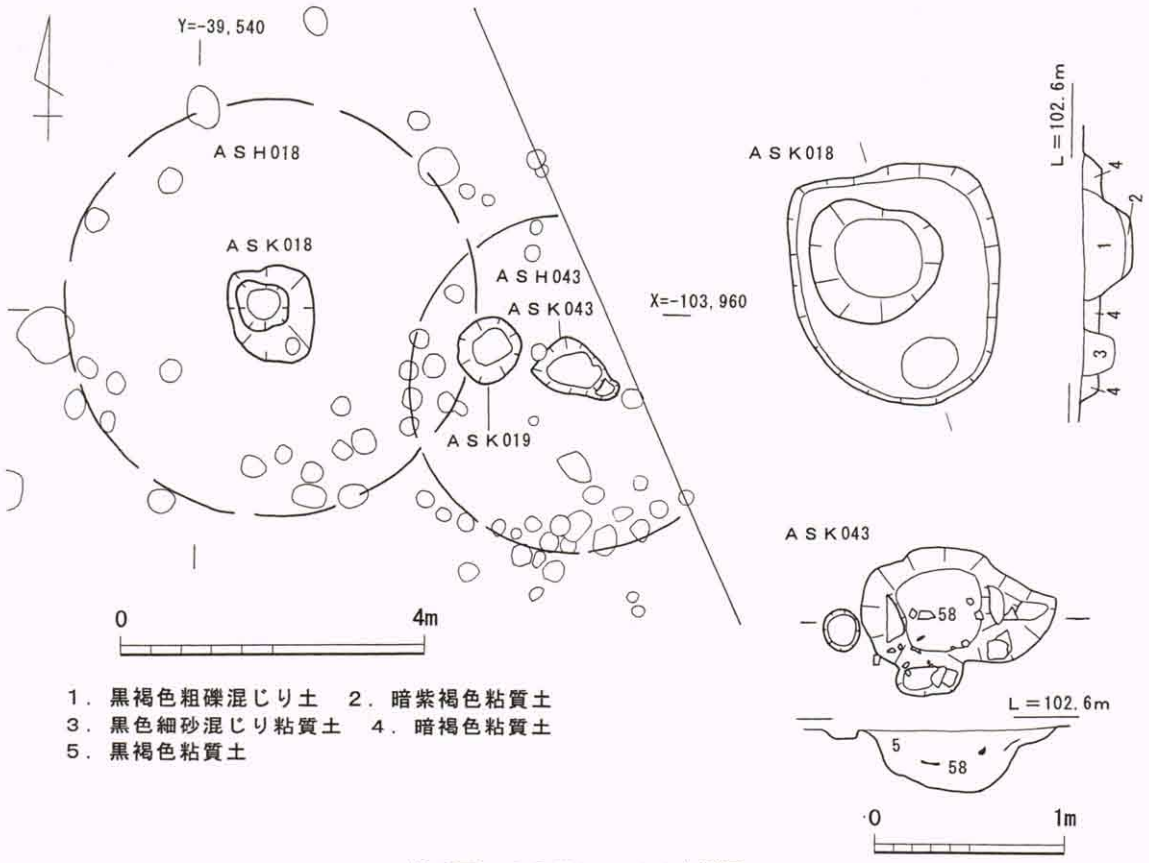
D地区　D地区では周壁溝や住居掘形の確認できたものはないが、6基の住居を復元した。

竪穴式住居跡ＤＳＨ007(第7・14図)　D地区北西隅から土坑ＤＳＫ007を検出した。この土坑は周辺の柱穴よりも深く、土坑から約3m付近を径約0.2～0.3mの柱穴が巡ることから、ＤＳＫ007を中央土坑とする竪穴式住居跡が存在したと考えた。ＤＳＫ007の規模は、長軸0.7m・短軸0.6m・深さ約0.3mを測る。

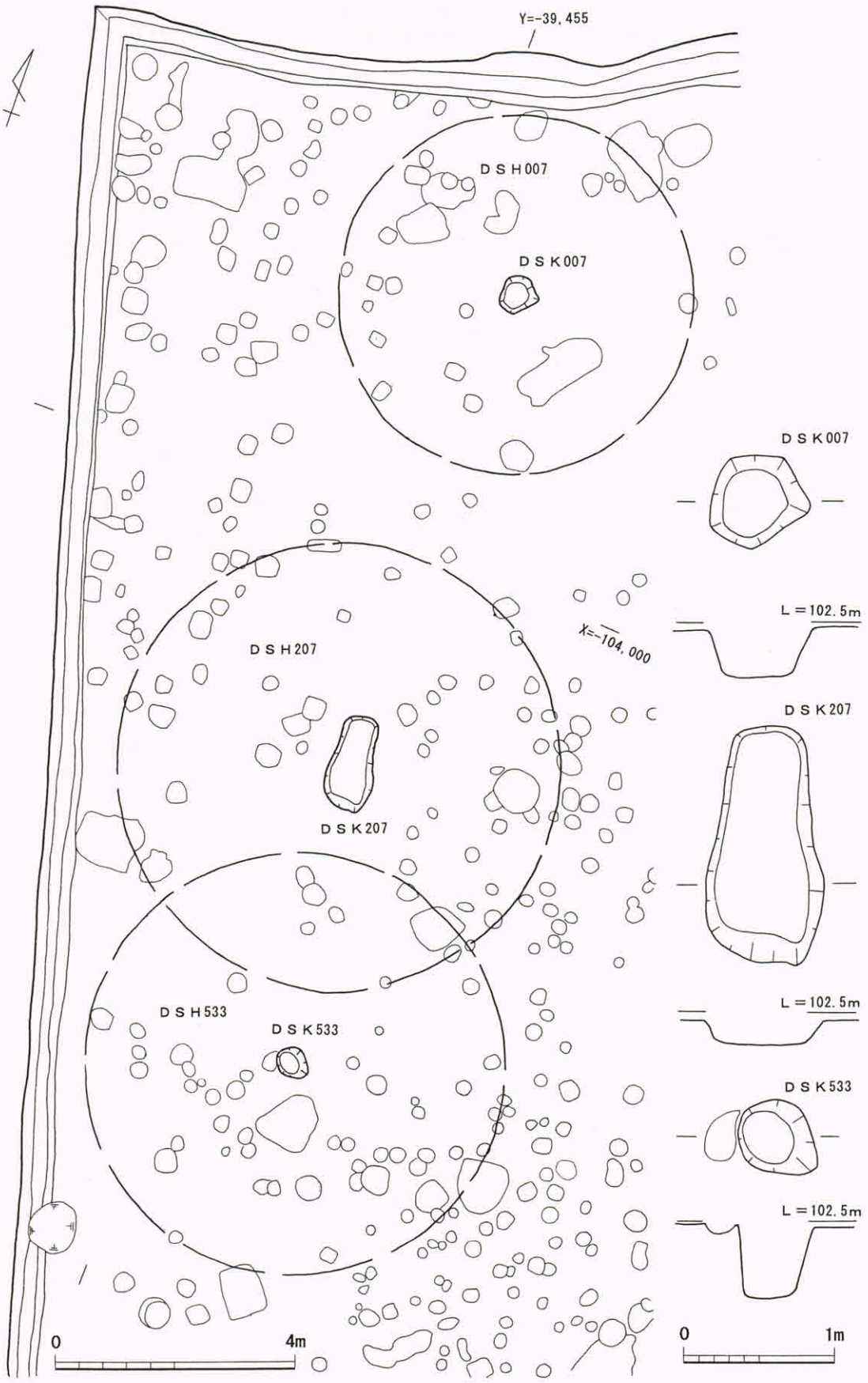
竪穴式住居跡ＤＳＨ207(第7・14図)　D地区北部から土坑ＤＳＫ207を検出した。平面形は不定型であるが、土坑付近は柱穴が希薄であることや、径0.2m程度の柱穴が土坑から約3.5mを巡ることから、竪穴式住居を想定した。ＤＳＫ207の規模は長軸1.6m・短軸0.8m・深さ約0.15mを測る。

竪穴式住居跡ＤＳＨ533(第7・14図)　D地区北部から土坑ＤＳＫ533を検出した。土坑は、径約0.5m・深さ約0.5mを測る不整形な円形を呈する。土坑から約3.5m付近を径約0.2mの柱穴が巡ることから、竪穴式住居を想定した。

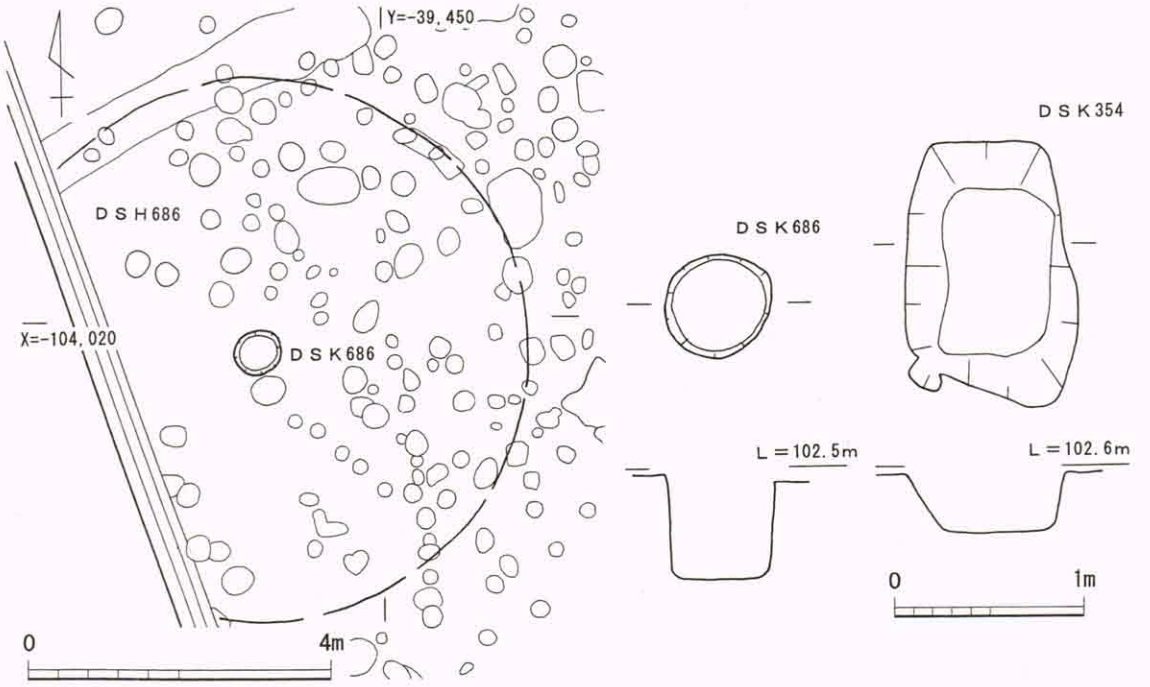
竪穴式住居跡ＤＳＨ686(第7・15図)　D地区中央から土坑ＤＳＫ686を検出した。土坑は、径約0.5m・深さ約0.5mを測る円形を呈する。土坑から約3.5m付近を径0.2～0.5mの柱穴が巡り、住居想定北東部で周壁溝の遺存を示すかのように弧状にわずかに窪む部分が存在したため、竪穴式住居を想定した。



第13図　ＡＳＨ018・043実測図



第14図　ＤＳＨ007・207・533実測図



第15図　ＤＳＨ686・354・689実測図

竪穴式住居跡ＤＳＨ354(第７・15図)　Ｄ地区南部から土坑ＤＳＫ354を検出した。土坑は長軸1.3m・短軸0.8m・深さ約0.3mを測る。土坑から約4.0m付近を径約0.2～0.5mの柱穴が巡ることから、竪穴式住居を想定した。

竪穴式住居跡ＤＳＨ689(第７・15図)　Ｄ地区南端で想定した竪穴式住居である。中央土坑の検出には至らなかったが、径約0.3mの柱穴が弧状に巡ることから竪穴式住居を想定した。

ｂ．方形周溝墓

時塚遺跡の各地区で検出される弥生時代の溝のうち、方形または不整方形の区画を示すものを方形周溝墓として認識した。なお、周溝墓の規模の表記にあたっては、対になる周溝の心心間距離を示している。また、周溝には陸橋状に途切れる部分を示すものも存在するが、削平により浅い部分が失われている可能性を考慮し、陸橋とは表記していない。周溝墓はＣ－２地区、Ｈ地区、Ｉ－１・２地区で確認されている。以下、地区ごとに概観する。

Ｃ地区　Ｃ－２地区では７基の方形周溝墓を検出した。これらの方形周溝墓は、上層の遺構である掘立柱建物跡により周溝の一部が削平されているものもある。

方形周溝墓ＣＳＴ069(第６・16図)　Ｃ－２地区の北側で検出した方形周溝墓である。北を溝ＣＳＤ072、東を溝ＣＳＤ073、南を溝ＣＳＤ069、西を溝ＣＳＤ075によって区画する。北東隅と北西隅は溝が途切れており周溝は完周しないが、周溝の残存状況が悪いため、削平により浅い部分が失われている可能性が高い。方形周溝墓の規模は、東西約8.3m・南北約5.7m・周溝の深さは約0.1mを測る。主軸はＮ20°Ｗである。溝ＣＳＤ075の底面から甕片２個体(第33図14・15)と石包丁(第45図23)が出土した。主体部は削平のためか確認できなかった。

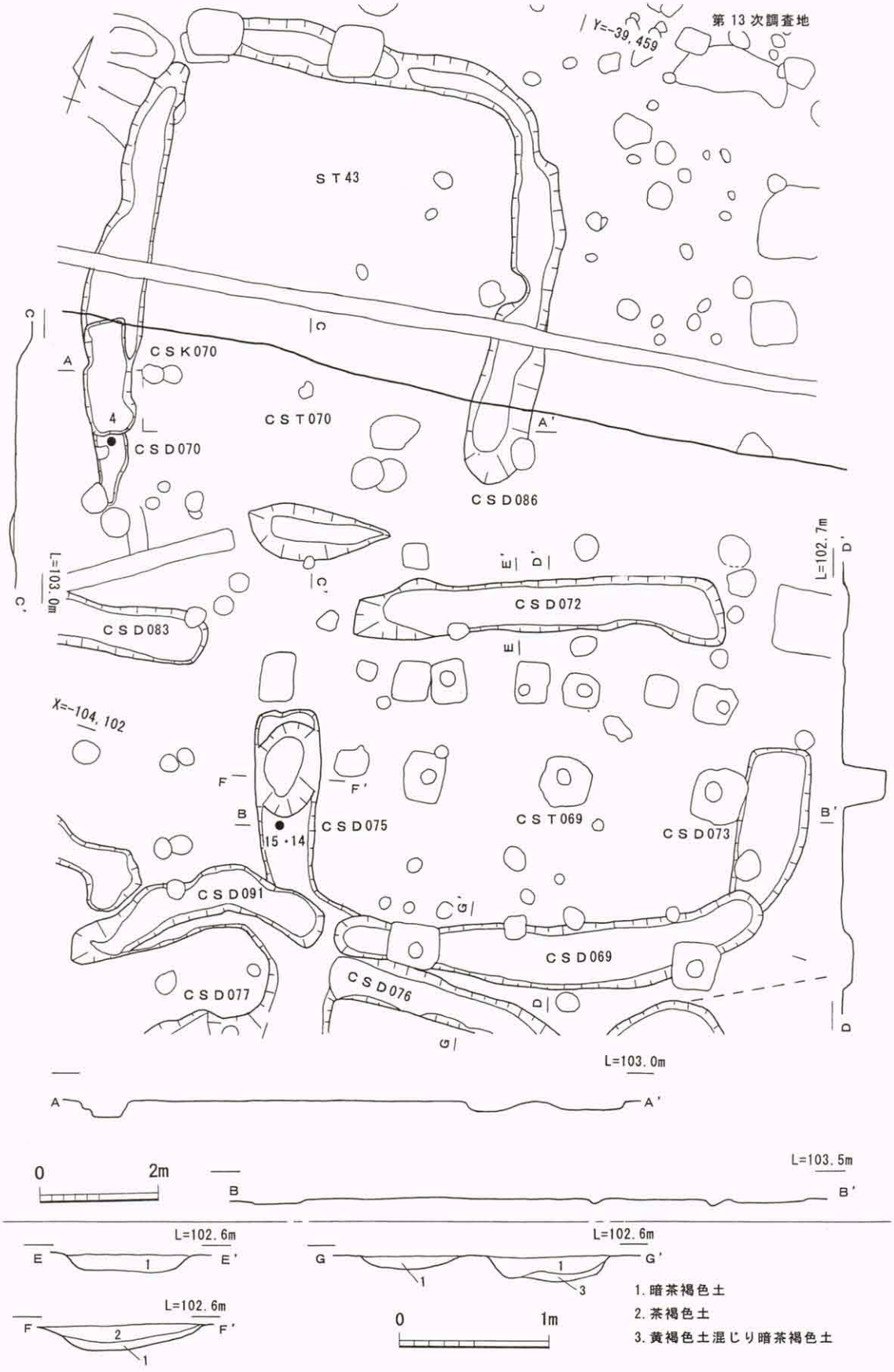
方形周溝墓ＣＳＴ070(第６・16図)　方形周溝墓ＣＳＴ069の北西隣で検出した方形周溝墓である。北半分は、京都府教育委員会の調査区である第13次調査第２トレンチで確認されておりＳＴ43として報告されている。東辺をＣＳＤ086、西辺をＣＳＤ070によって区画される。南辺には、周溝底と思われる幅約0.9m・長さ約2.4m・深さ約0.06mの窪みが確認された。方形周溝墓の規模は東西約6.5m・南北8.0mを測る。主軸はＮ20°Ｗである。墳丘上では主体部は削平のためか確認できなかった。

周溝内出土遺物として溝ＣＳＤ070南端から壺口縁片(第32図４)が検出された。

また、溝ＣＳＤ070の南端付近で平面長方形の土坑を検出した。周溝の掘形を拡張していることや、周溝底面よりも土坑底面が深いこと、断面観察で木棺痕跡が認められたことから、溝内埋葬ＣＳＫ070とした。溝内埋葬ＣＳＫ070については後述する。

方形周溝墓ＣＳＴ068(第６・17図)　Ｃ－２地区のほぼ中央で検出した方形周溝墓である。北を溝ＣＳＤ076、東を溝ＣＳＤ068、南を溝ＣＳＤ078、西を溝ＣＳＤ077によって区画する。検出状況では南西隅で周溝が途切れており周溝は完周しない。方形周溝墓の規模は、東西約4.0m・南北約4.2mで、周溝の深さは約0.05～0.2mを測る。主軸はＮ３°Ｗである。

西辺を画する溝ＣＳＤ077はわずかに東に湾曲しており、隣接する方形周溝墓ＣＳＴ088の構築時に掘り直しが行われたと考える。従って、周溝墓ＣＳＴ088に先行する周溝墓とみられる。



第16図　ＣＳＴ069・070実測図

周溝内の出土遺物として溝ＣＳＤ076から無頸壺口縁片(第32図10)が出土した。

また、溝ＣＳＤ068の南側から平面長方形の土坑を検出した。周溝底面よりも土坑底面が深く掘削されていること、断面観察の結果、木棺痕跡が認められたことから、溝内埋葬ＣＳＫ089とした。溝内埋葬ＣＳＫ089については後述する。

また、溝ＣＳＤ077からも平面長方形の土坑ＣＳＫ095が確認された。当初は溝内埋葬の可能性があるとして調査したが、断面ならびに平面的に木棺痕跡を確認することはできず、また、掘形壁面がＣＳＴ068の方にオーバーハングすることから、周溝墓ＣＳＴ068・088造墓以前の風倒木痕と判断した。

方形周溝墓ＣＳＴ088(第６・17図)　方形周溝墓ＣＳＴ068の西側に隣接する方形周溝墓である。東側の溝ＣＳＤ077は方形周溝墓ＣＳＴ068と共有する。東を溝ＣＳＤ077、北を溝ＣＳＤ091、西を溝ＣＳＤ088、南を溝ＣＳＤ079によって区画する。方形周溝墓の規模は、東西約6.0m・南北約5.7mを測る。溝の深さは約0.1mを測るが、ＣＳＤ079のみ約0.25mを測る。主軸方向は、Ｎ５°Ｗである。周溝は方形に配置されておらず、溝ＣＳＤ088・溝ＣＳＤ079とも西へさらに延びるため、南西部分が不整形に突出している。また、溝ＣＳＤ091の北側に溝ＣＳＤ083を平行して検出した。これは、ＣＳＴ088が拡張された可能性を指摘しておく。

溝内出土遺物として、溝ＣＳＤ088から甕底部と思われる個体(第33図21)と石斧(第49図52)が出土した。溝ＣＳＤ091から石斧(第50図55・第51図67)が、溝ＣＳＤ079から石斧(第50図56)が出土した。また、溝ＣＳＤ077はわずかに東に湾曲しており、方形周溝墓ＣＳＴ088の構築時に方形周溝墓ＣＳＴ068の西側を削平する形で掘り直しが行われたと考える。溝ＣＳＤ077からは鉢(第32図９)・甕(第33図12・17)・高杯脚部(第33図31)が出土しているが、いずれもこの周溝墓に伴うものと考える。

方形周溝墓ＣＳＴ081(第６・17図)　方形周溝墓ＣＳＴ068・088の南に隣接する方形周溝墓である。検出したのは周溝墓の北半分であり、南半分については調査地外となる。Ｃ地区で検出した方形周溝墓の中ではもっとも遺存状況の良いものであった。

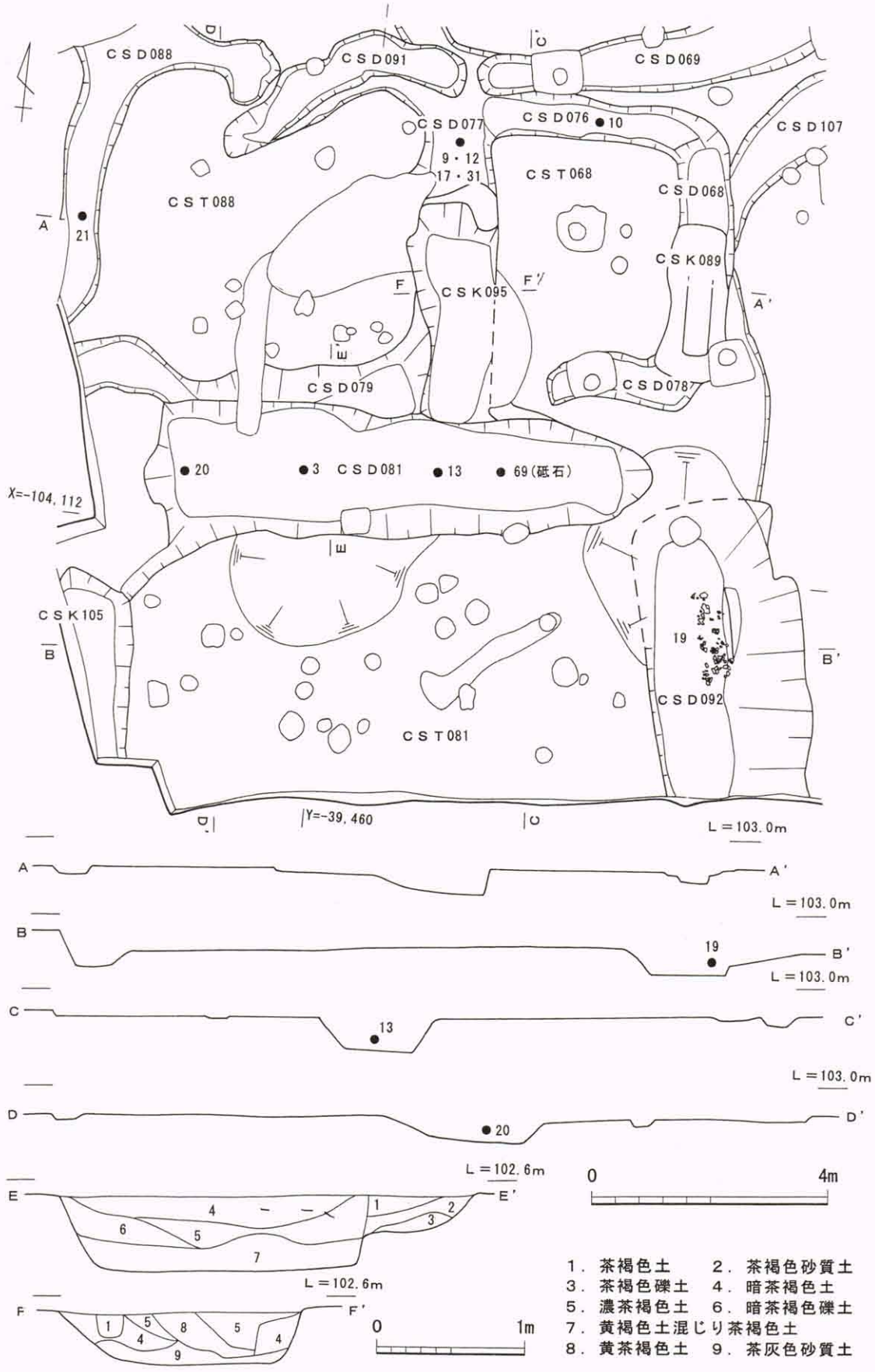
北を溝ＣＳＤ081、東を溝ＣＳＤ092、西を土坑ＣＳＫ105によって区画する。方形周溝墓の規模は、東西約10.3m・南北5.7m以上を測る。主軸はＮ９°Ｗである。検出状況では周溝は完周せず、三方とも独立した土坑状を呈している。

各溝の規模は、溝ＣＳＤ092が幅約2.7m・確認長約５m・深さ約0.5mを測る。溝ＣＳＤ081は幅約2.2m・長さ約8.6m・深さ約0.5mを測る。

また、西辺を区画するＣＳＫ105はＣ－１地区に連続しており、墳丘主軸に直交する。

遺物は、溝ＣＳＤ092の上層から甕底部と思われる個体(第33図19)が、溝ＣＳＤ081の埋土中層から壺(第32図３)・甕(第33図13)・壺底部(第33図20)などの土器と、筋砥石(第52図69)が検出されている。

近接する３基の方形周溝墓ＣＳＴ068・088・081は、ＣＳＤ081が溝ＣＳＤ079を切り、溝ＣＳＤ077は溝ＣＳＴ068を切っていることが明らかである。以上の周溝の切り合い関係から、方形周



第17図　ＣＳＴ068・081・088実測図

溝墓ＣＳＴ068→方形周溝墓ＣＳＴ088→方形周溝墓ＣＳＴ081の順に築かれたものと判断する。

方形周溝墓ＣＳＴ065(第６・18図)　Ｃ－２地区南東隅で検出した方形周溝墓である。周溝墓北側の検出で、南半については調査地外である。北は溝ＣＳＤ065、東は溝ＣＳＤ084で区画する。西側には溝の残欠と思われる東西1.3m・南北1.3m以上の範囲が約0.05m窪んでいることから溝ＣＳＤ071を想定した。検出状況での周溝は完周せず、北西部分が途切れている。方形周溝墓の規模は、東西約6.9m・南北3.2m以上・周溝の深さ約0.2mを測る。主軸はＮ８°Ｗである。

周溝内出土遺物として溝ＣＳＤ071から壺口縁片(第32図２)・甕(第33図16)・甕底部(第33図22)が出土した。

方形周溝墓ＣＳＴ067(第６・18図)　方形周溝墓ＣＳＴ065の北側に隣接する方形周溝墓である。周溝の深さが0.05～0.1mと残存状況が悪いためか、周溝の一部が途切れていた。北を溝ＣＳＤ107、東を溝ＣＳＤ074、南を溝ＣＳＤ067によって区画する。西側は不明瞭であった。溝ＣＳＤ107は、コーナー付近のみの検出であったが、0.02m前後の窪みがその東側に細長く認められたことから、その範囲を破線で復元・図示した。方形周溝墓の規模は、東西約9.8m、南北約8.5mを測る。主軸方位は、Ｎ29°Ｗであった。

溝ＣＳＤ074は土坑ＣＳＫ043を切っており、溝ＣＳＤ067は溝ＣＳＤ065によって切られていた。方形周溝墓ＣＳＴ065とＣＳＴ067の築造順は、周溝の切り合い関係からＣＳＴ067がＣＳＴ065に先行して造墓されたと判断できる。また、ＣＳＴ067は、西隣のＣＳＴ068よりも先行する。

周溝内からの出土遺物はなく、また、削平のためか主体部を検出することはできなかった。

溝内埋葬ＣＳＫ070(第19図)　Ｃ－２トレンチ北側の溝ＣＳＤ070内から検出した。当初周溝墓の溝の一部と思われたが、溝南端部より約1.1mのところで、幅約0.5mの溝が幅約0.7mに広がり、土坑底面は、周溝底面よりも約0.25m深く掘削され、平坦であった。土坑の壁は急傾斜をなし、断面逆台形を呈する。また、土坑中央の断面観察から木棺痕跡が認められた。以上の点から、この土坑を溝内埋葬と判断した。

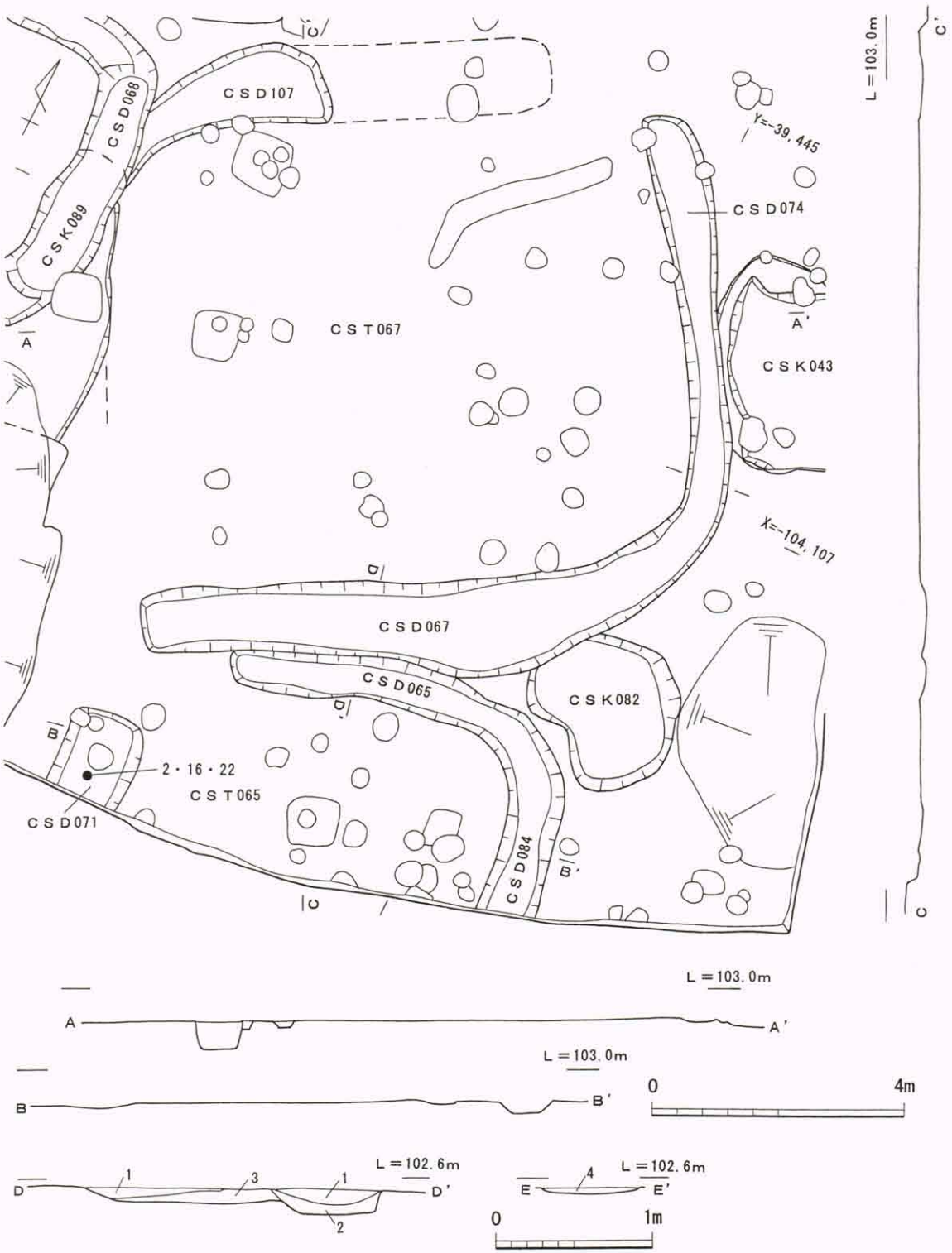
墓壙の規模は長軸1.95m・短軸0.75mを測る。ややいびつではあるが隅丸長方形の平面プランを呈する。木棺は内法で約0.37mを測る。また、土層から想定される棺材の厚さは約５cmである。木棺の規模・構造については明確にできなかったが、断面観察から箱形木棺と考える。

溝内埋葬ＣＳＫ089(第19図)　Ｃ－２地区中央の方形周溝墓ＣＳＴ068を区画する周溝ＣＳＤ068内から検出した。溝ＣＳＤ068の幅が0.7～0.9mに対し、この土坑ＣＳＫ089付近で幅約１mに広がる。また、土層観察の結果、木棺痕跡を確認したため溝内埋葬と判断した。

墓壙は南側がややいびつな隅丸長方形を呈し、規模は長軸2.65m・短軸１mを測る。木棺は組合式箱形木棺と考えられ、幅約0.45m・長さ1.2m以上を測る。棺材の組み合わせ方については明確に確認できなかったが、断面観察から棺材の厚さは約４cmと判断される。

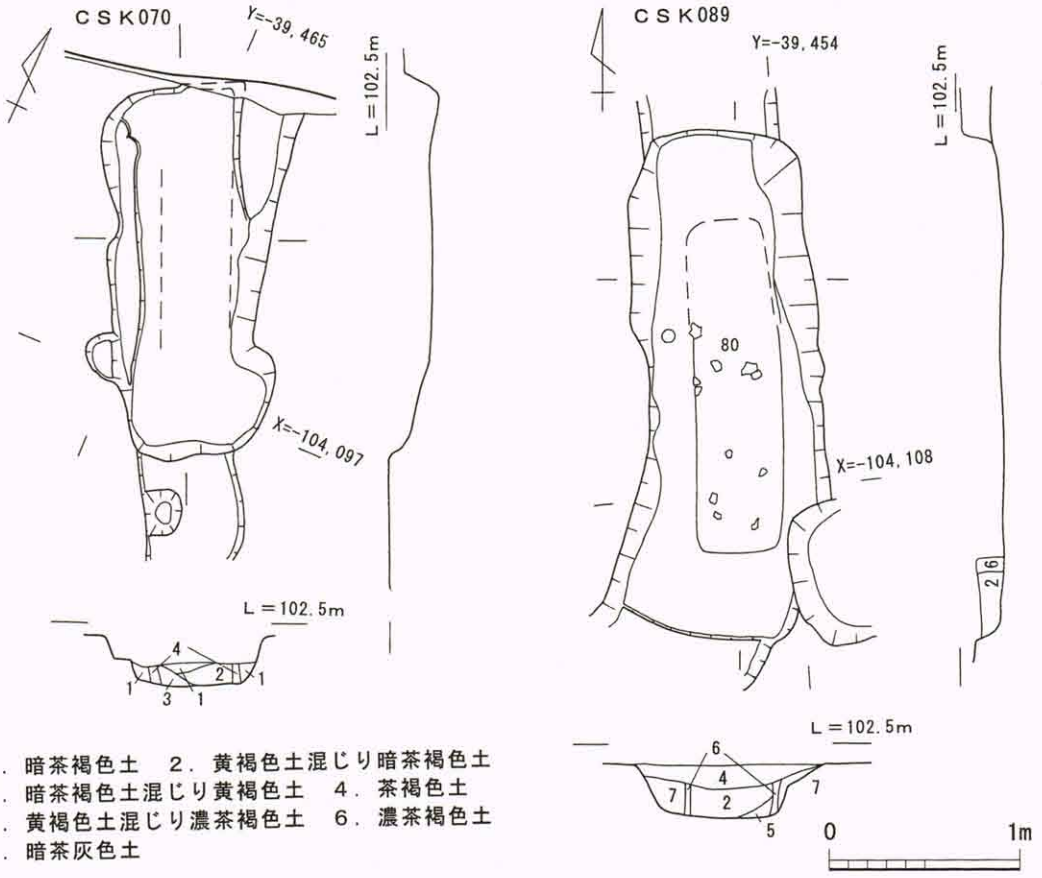
遺物は底部穿孔された壺(第37図80)が、棺内埋土中から検出された。

Ｈ地区　Ｈ地区では６基以上の方形周溝墓を確認した。また、溝ＨＳＤ001は幅約１m・深さ約0.2mを測る。埋土の状況から周溝墓の周溝の可能性を残しているが、大部分が調査区外のた



1．暗茶褐色土　2．黄褐色土混じり暗茶褐色砂質土
3．暗茶褐色砂質土　4．茶褐色土

第18図　ＣＳＴ065・067実測図



第19図　ＣＳＫ070・089実測図

め、方形周溝墓としての報告は実施しない。

またＨ地区南東隅で北東方向（Ｎ15°Ｅ）に主軸をとる溝ＨＳＤ051を検出した。溝ＨＳＤ051は方形周溝墓ＨＳＴ017・015の周溝を切っていた。溝ＨＳＤ051の規模は幅1.0m・深さ約0.5mを測る。溝内からの出土遺物はなく詳細な時期については不明であるが、周溝墓との切り合いや埋土の土色から弥生時代に属する遺構と判断する。周溝墓群を画する溝か周溝墓の可能性があるが、詳細については不明のため方形周溝墓としては報告しない。

方形周溝墓ＨＳＴ002（第９・20図）　Ｈ地区北端で検出した。方形周溝墓の東部分のみの検出で、周溝墓の大半は調査地外とみられる。北を溝ＨＳＤ002、東を溝ＨＳＤ003・004、南を溝ＨＳＤ006で区画する。方形周溝墓の規模は、南北推定9.5mを測る。主軸はＮ17°Ｗである。溝ＨＳＤ006は、南東側のコーナー部より２m付近で途切れているため、現状で周溝は完周しないものとみられる。周溝は深さ0.2～0.4mを測る。

周溝内出土遺物として溝ＨＳＤ002の溝底から甕底部（第33図24）が、溝ＨＳＤ004の溝底から甕底部（第33図25）が出土した。その他土製品（第32図11）・壺（第32図６）・壺底部（第33図30）・壺（第32図７）・甕底部（第33図28）が周溝中層から検出さている。

方形周溝墓ＨＳＴ007（第９・20図）　方形周溝墓ＨＳＴ002南東で「Ｌ」字状に屈曲する深さ約0.15mの溝ＨＳＤ007を検出した。調査範囲が狭小なため、詳細は不明であるが、溝の形状から方形周溝墓の一部と考える。溝ＨＳＤ002が調査区からさらに東へ延び、この周溝墓の北の区画

溝であると仮定した場合、南北の規模は約10mとみることができる。主軸はＮ８° Ｗである。

方形周溝墓ＨＳＴ010(第９・20図)　Ｈ地区中央で屈曲する溝ＨＳＤ010・011を検出した。方形周溝墓の南西コーナー付近を検出したものと考える。大部分は調査区外のため詳細については不明である。西を溝ＨＳＤ010、南を溝ＨＳＤ011で区画する。溝の規模は幅1.0～2.1m・深さ約0.2mを測る。主軸はＮ４° Ｅである。出土遺物はなく、詳細な時期については不明である。

方形周溝墓ＨＳＴ049(第９・21図)　Ｈ地区南側で検出した方形周溝墓である。南北方向に３基並ぶ最も北側の周溝墓である。削平が著しいためか、西を区画する溝については検出できなかった。周溝墓の規模は、南北5.2mである。溝の規模は幅0.3～0.5m・深さ約0.1mを測る。主軸はＮ３° Ｅである。

方形周溝墓ＨＳＴ015(第９・21図)　Ｈ地区南端に位置し、方形周溝墓ＨＳＴ049の南側に隣接する周溝墓である。北を溝ＨＳＤ015、東を溝ＨＳＤ018、南を溝ＨＳＤ017、西を溝ＨＳＤ016で区画する。周溝は完周する。規模は南北5.5m・東西4.6m・周溝の深さは約0.3mを測る。主軸はＮ15° Ｅである。

方形周溝墓ＨＳＴ049の南辺の溝を方形周溝墓ＨＳＴ015の北辺の溝ＨＳＤ015が切ることから、方形周溝墓ＨＳＴ049が方形周溝墓ＨＳＴ015に先行するものと判断する。また、南の溝ＨＳＤ017は、方形周溝墓ＨＳＴ017と共有する。

溝ＨＳＤ017の中央付近から土坑を検出した。平面規模は幅0.3m・長さ2.0mを測る。溝底よりも深く掘削されており、底面は平坦であった。断面観察の結果からは明確な木棺痕跡は認められなかったが、その規模や形状から溝内埋葬の可能性は高いと考える。

周溝内出土遺物として溝ＨＳＤ018から壺口縁(第32図８)が下層から出土した。

方形周溝墓ＨＳＴ017(第９・21図)　Ｈ地区南端に位置する方形周溝墓である。北辺と西辺の一部のみの検出で、大半は調査区外である。北辺の溝ＨＳＤ017は方形周溝墓ＨＳＴ015と共有している。検出状況からＨＳＴ015と同規模の周溝墓と思われる。

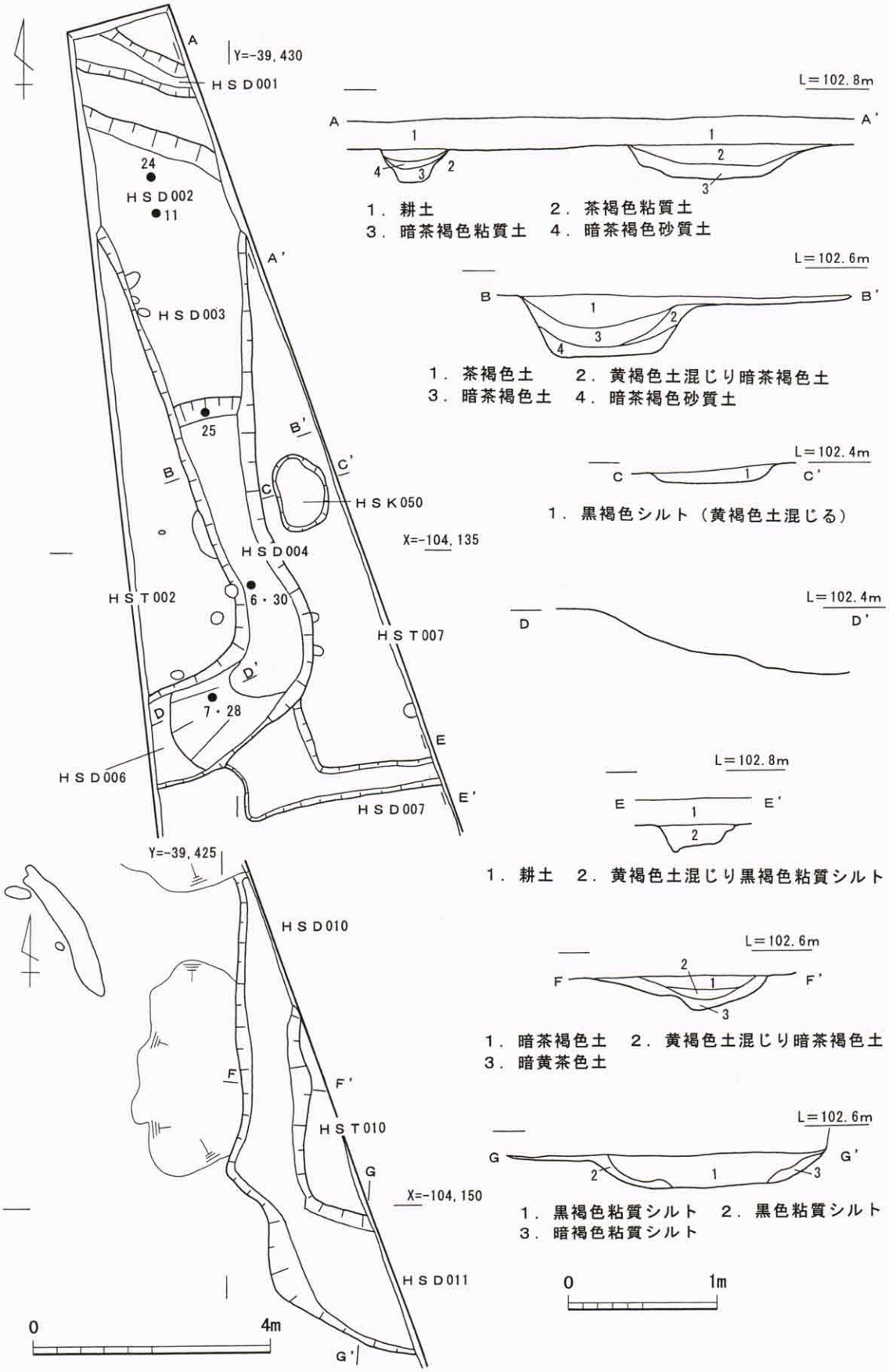
出土遺物は、弥生土器片が少量出土したが、図示できるものではなかった。

Ｉ地区　Ｉ地区ではＩ－２地区で７基の方形周溝墓を検出した。また、Ｉ－１地区の北に設定した排土置き場でも方形周溝墓を検出しているが、上面での記録作業を実施したのみである。

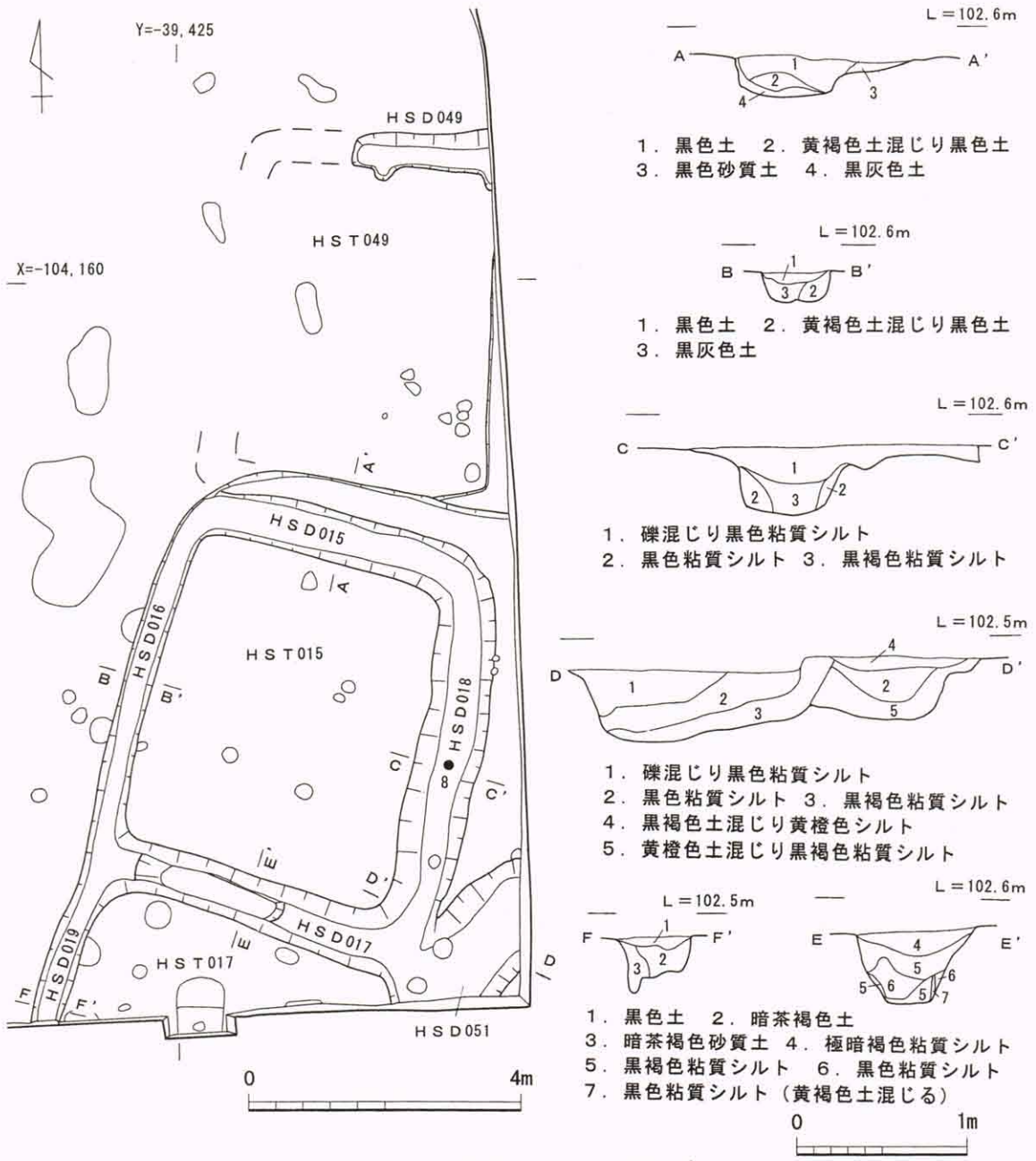
方形周溝墓ＩＳＴ004(第10・22図)　Ｉ地区の掘削土置き場にするため、耕土層を除去した際にＬ字状に屈曲する溝を検出した。調査地でないため上面検出のみである。溝幅0.4～1.2mを測り、主軸はN61° Wである。

方形周溝墓ＩＳＴ035(第10・22図)　Ｉ－２地区北西端で検出した方形周溝墓で、一部Ｉ－１地区に及ぶ。北を溝ＩＳＤ035、東を溝ＩＳＤ036、南を溝ＩＳＤ039、西を溝ＩＳＤ028によって区画する。検出状況では周溝は完周せず、北西部と南辺西側よりが途切れている。また、溝ＩＳＤ036は焼土坑ＩＳＫ037により切られている。周溝墓の規模は、東西7.5m・南北5.5mを測る。周溝は幅0.5～0.8m・深さ約0.2mを測る。主軸はN38° Wである。

溝ＩＳＤ028中層から甕(第33図18)が周溝内埋土から検出された。



第20図　ＨＳＴ002・007・010実測図

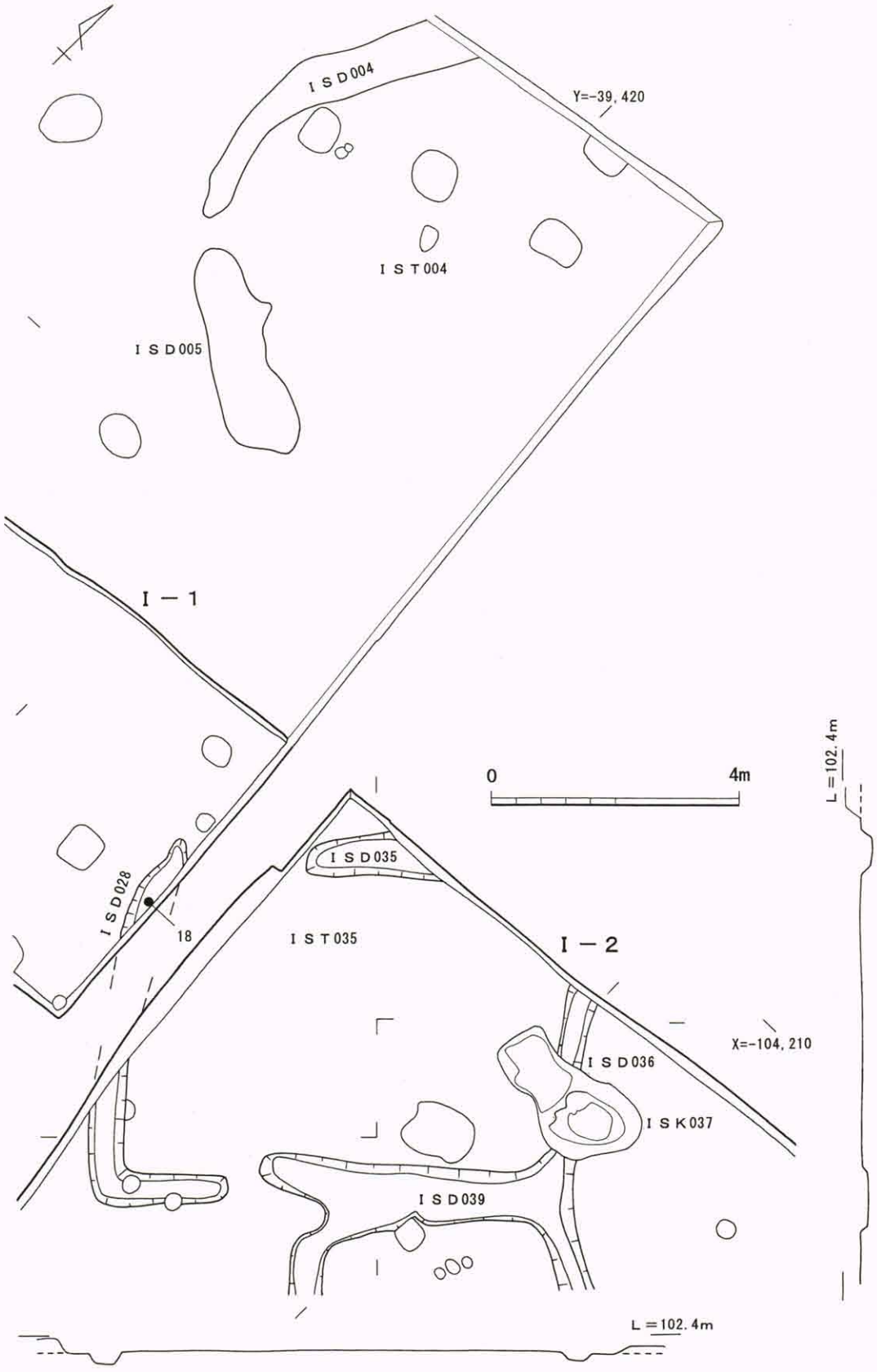


第21図　ＨＳＴ049・015・017実測図

方形周溝墓ＩＳＴ039（第10・23図）　方形周溝墓ＩＳＴ035の南側に隣接する方形周溝墓である。北を溝ＩＳＤ039、東を溝ＩＳＤ040、南を溝ＩＳＤ127、西を溝ＩＳＤ126で区画する。北側と南側の周溝は、それぞれ隣接する方形周溝墓と共有する。土層から前後関係を判断することはできなかった。四方に溝を巡らせる方形周溝墓で、その規模は長辺6.1m・短辺4.7mを測る。周溝は幅0.5～0.8m・深さ0.23mを測る。主軸はN48°Wである。

出土遺物は、弥生土器片がわずかに出土した。

方形周溝墓ＩＳＴ127（第10・23図）　方形周溝墓ＩＳＴ039の南に隣接する方形周溝墓である。北を溝ＩＳＤ127、東を溝ＩＳＤ128、南を溝ＩＳＤ129、西を溝ＩＳＤ130で区画する。溝ＩＳＤ127は、方形周溝墓ＩＳＴ039と共有する。四方に溝を巡らせる方形周溝墓で、その規模は、東西



第22図　ＩＳＴ004・035実測図

5.0m・南北4.9mを測る。周溝は幅0.5～0.8m・深さ約0.2mを測る。方形周溝墓ＩＳＴ039との前後関係は土層観察からも明らかにし得なかった。

出土遺物は弥生土器片が少量出土したが、時期については明確にし得なかった。

方形周溝墓ＩＳＴ132(第10・23図)　方形周溝墓ＩＳＴ127と方形周溝墓ＩＳＴ044の間に築かれた方形周溝墓で、遺存状況は非常に悪い。方形周溝墓ＩＳＴ044の東溝ＩＳＤ052の一部とＩＳＴ127の南側の周溝ＩＳＤ129を共有している。周溝墓の規模は、東西5.5m・短辺4.5m、周溝は幅0.5～1.5m・深さ約0.05mを測る。主軸はN42°Wである。

南・東を区画する溝ＩＳＤ132と133の屈曲部には南東にのびる溝が存在するため、この周溝墓の南側あるいは東側にも方形周溝墓が存在した可能性がある。

方形周溝墓ＩＳＴ127・044との前後関係を遺構から判断することはできず、また出土遺物もないため、詳細な時期は不明である。

方形周溝墓ＩＳＴ044(第10・24図)　Ｉ－２地区中央で検出した方形周溝墓である。北を溝ＩＳＤ053、東を溝ＩＳＤ052、南を溝ＩＳＤ111、西を溝ＩＳＤ044で区画する。検出状況での周溝は完周せず南西隅が途切れている。周溝墓の規模は、長辺8.3m・短辺7.4mを測る。周溝は幅0.7～1.3m・深さ約0.3mである。

溝ＩＳＤ111の幅が東西で大きく異なるのは、方形周溝墓ＩＳＴ043の北側区画溝と重複しているためで、第24図Ｄ－Ｄ'の断面観察の結果から方形周溝墓ＩＳＴ043が方形周溝墓ＩＳＴ044に先行するものと判断した。

溝ＩＳＤ052から壺もしくは甕の底部と思われる個体(第33図26・29)が埋土中から出土した。

方形周溝墓ＩＳＴ043(第10・24図)　Ｉ－２地区南側で検出した方形周溝墓である。北を溝ＩＳＤ111、東を溝ＩＳＤ043、南を溝ＩＳＤ115、西を溝ＩＳＤ114で区画する。検出状況では周溝は完周せず北西隅が途切れている。周溝墓の規模は、東西8.6m・南北9.9mを測る。周溝は、幅0.2～0.9m・深さ約0.3mである。主軸はN41°Wである。

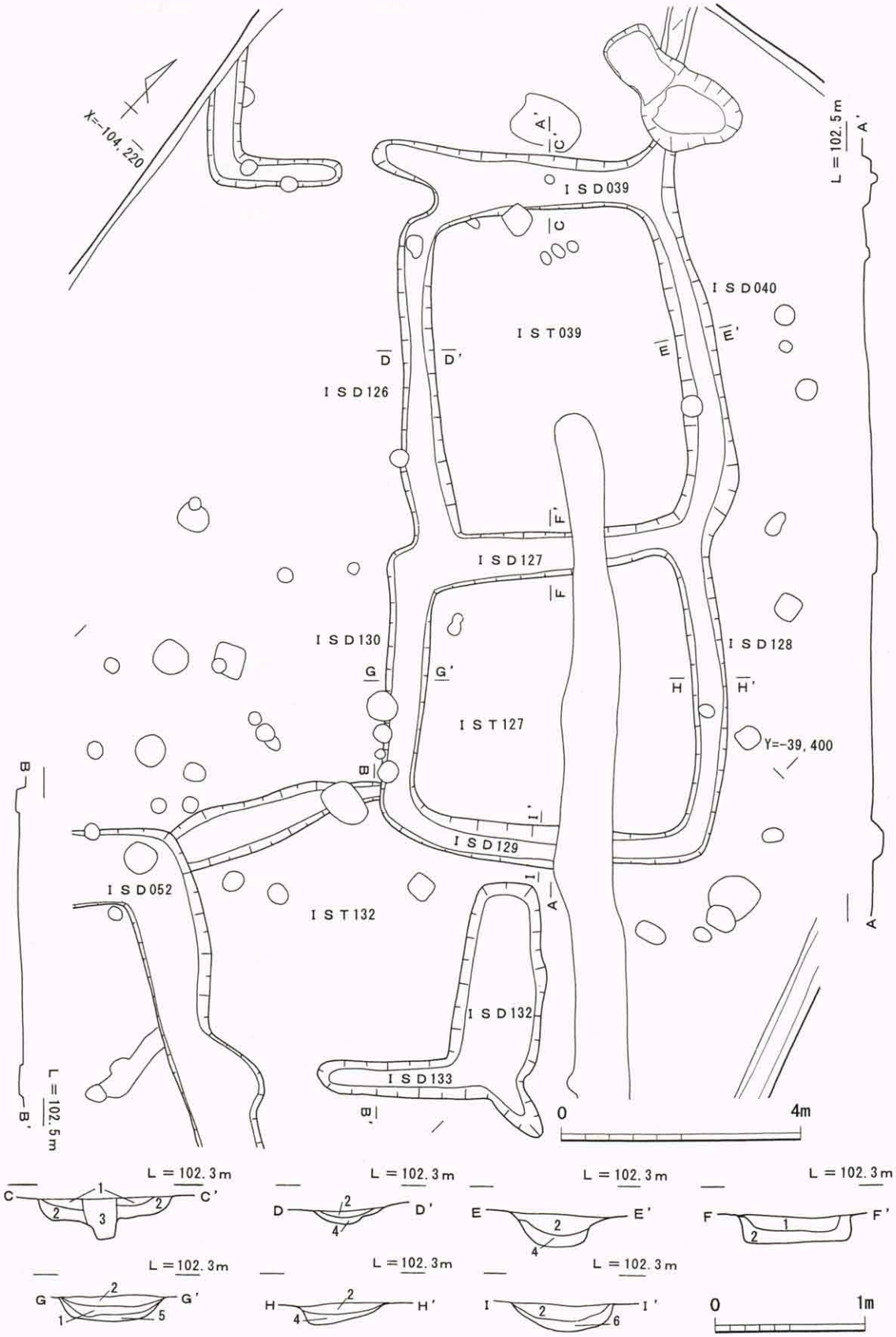
東側に位置する方形周溝墓ＩＳＴ112との前後関係については、溝ＩＳＤ043北側での土層断面の観察によりＩＳＴ112がＩＳＴ043に先行して構築されていることが分かった。

周溝内出土遺物として溝ＩＳＤ111から甕底部(第33図23・27)が埋土中から出土した。

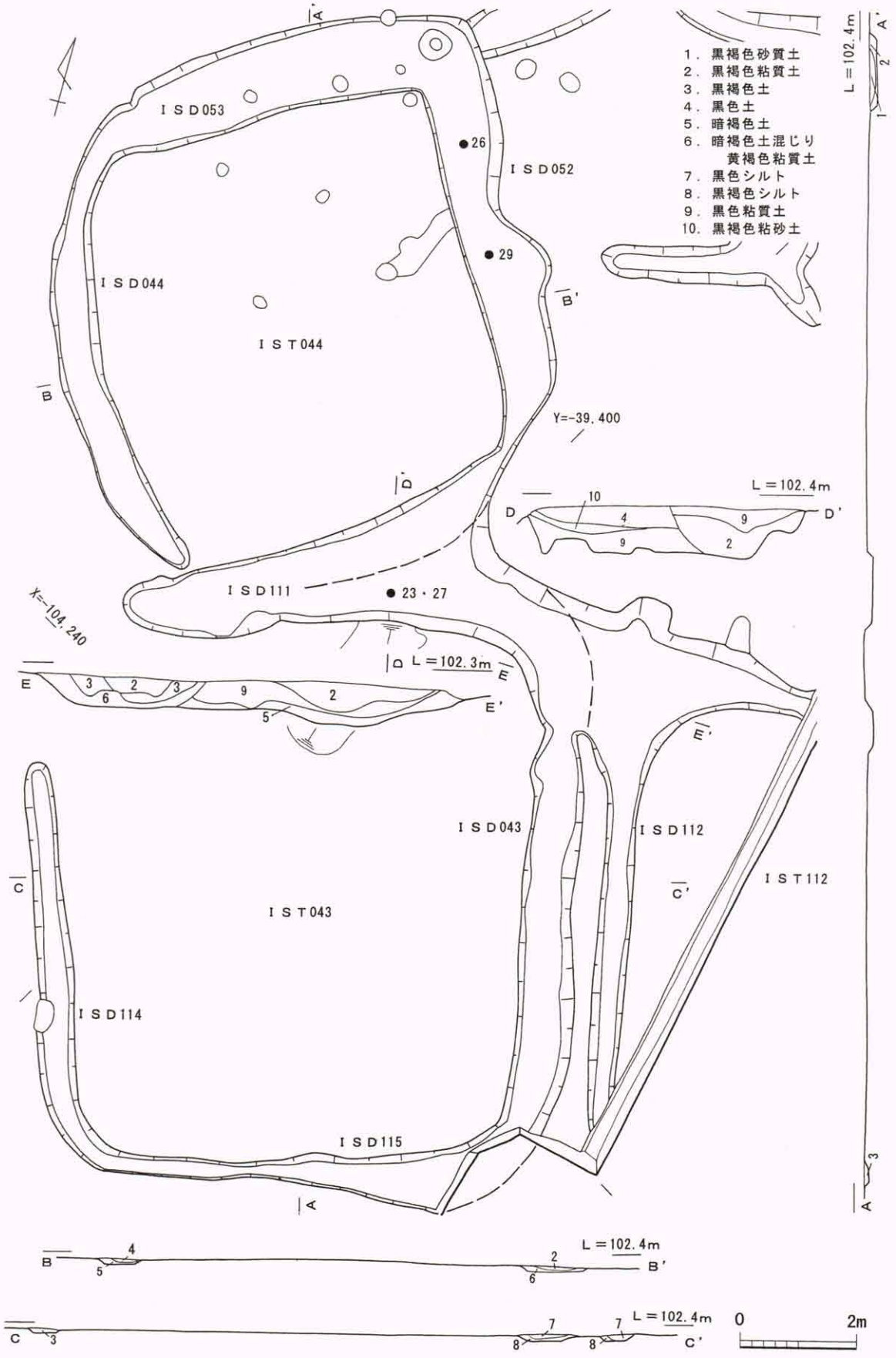
方形周溝墓ＩＳＴ112(第10・24図)　方形周溝墓ＩＳＴ043の東側に隣接して検出された方形周溝墓である。周溝墓の北西部付近のみを検出し、大半は調査地外である。検出状況から判断しておおむね方形周溝墓ＩＳＴ043と同規模であると思われる。周溝の規模は幅0.5～0.9m・深さ約0.3mである。主軸はN41°Wを測る。ＩＳＴ043間の溝は、共有しない。

ＩＳＴ043とＩＳＴ112の北辺を区画する溝が、東西方向に直線であることと、ＩＳＤ133の東端から南東方向に短く溝が延びることから、ＩＳＴ032とＩＳＴ112間に方形周溝墓がもう1基存在した可能性がある。

ｃ．土坑　今回の調査では多数の土坑を検出した。土坑の性格については生活に伴う廃棄土坑、住居に伴う住居内土坑、あるいは墓として掘削された土坑墓などがあるとみられるが、大部分の



第23図　ＩＳＴ039・127・132実測図



第24図　ＩＳＴ043・044・112実測図

ものについてはその性格を明確にできない。本項ではこれらの土坑について主要なものを地区ごとに概観することとする。また、竪穴式住居跡の項で述べた土坑は割愛する。

Ａ地区　この地区は居住域であり、ここで検出された土坑については住居に伴うものか、廃棄土坑である可能性が高いとみられる。

土坑ＡＳＫ056(第４・25図)　Ａ－１地区北端で検出した土坑である。規模は長軸2.6m・短軸2.0m・深さ約0.4mを測る東西方向に長い楕円形を呈する。

断面から上層の黒色粗礫混じり粘質土と下層の暗黒灰色粗砂礫砂質土とに分層した。遺物は上層から壷・水差し形土器・甕（第34図32～36・38・40・43・44、第35図54)など多数の土器が検出された。底部に穿孔をもつものが存在する点が注意される。下層からは上層に比して少量ではあるが、壷・甕など(第34図37・39・41・42)が検出されている。石包丁(第44図２)・石鋸(第52図73)も出土した。これらの土器片は、土坑内に散乱した状況で出土したことから、投棄されたものと判断される。

土坑ＡＳＫ002(第４・25図)　Ａ－１地区南側で検出した平面隅丸長方形の土坑である。規模は長軸2.5m・短軸1.0m・深さ0.2mを測る。底面は平坦でなく、凹凸であった。

平面形ではＡＳＫ003に類似するが、性格については不明である。また出土遺物がなく、詳細な時期については不明である。

土坑ＡＳＫ003(第４図)　Ａ－１地区南側で検出した。竪穴式住居跡ＡＳＨ178の北東に隣接する土坑である。東西に長く、その規模は長軸3.4m・短軸1.9mを測る。深さは約0.07mと、非常に残存状況が悪い。土坑床面は平坦で、埋土は暗黒褐色粘質土である。出土遺物はなく、詳細な時期や性格については不明である。

土坑ＡＳＫ413(第４・25図)　Ａ－２地区中央で検出した北側が舌状に張り出す楕円形の土坑である。規模は、長軸約2.0m・短軸約1.1mを測る。

埋土中から、壷(第35図46)・甕(第35図49・51)・高杯(第35図59)が出土した。遺構の性格については不明である。

土坑ＡＳＫ019(第４・14・25図)　Ａ－１地区中央で検出した土坑である。平面は円形を呈し、規模は直径約0.8m・深さ約0.35mを測る。

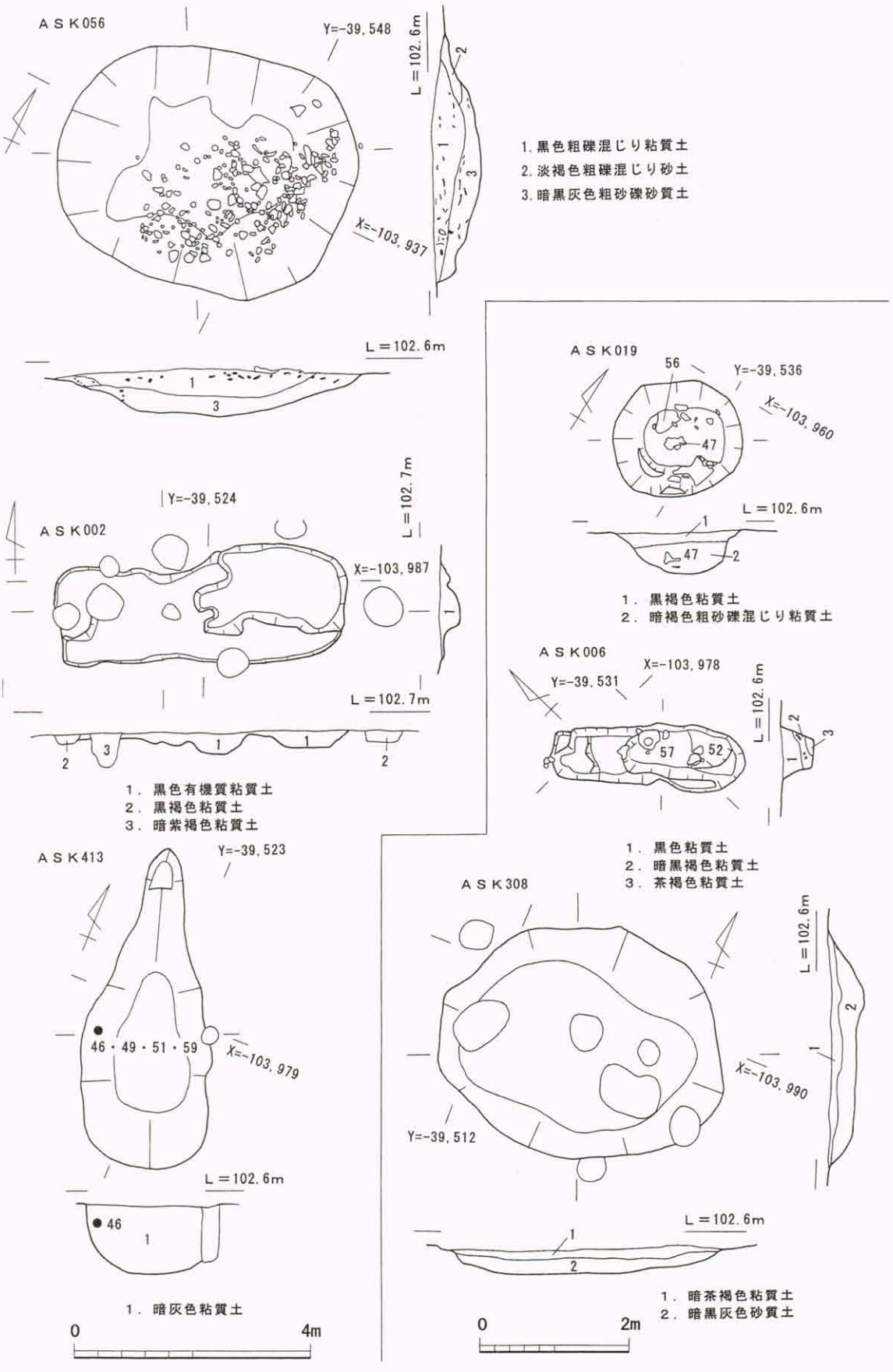
竪穴式住居跡ＡＳＨ018の土坑ＡＳＫ018と同規模であり、埋土も黒色系と同じであることからこの土坑も住居に伴う土坑の可能性があるが、付随する柱穴等を確定するには至らなかった。

埋土下層から壷(第35図47)・甕(第35図56)が出土した。

土坑ＡＳＫ006(第４・25図)　Ａ－１地区中央で検出した土坑である。平面形は南北方向に長い不整な長方形を呈し、規模は幅約0.4m・長さ約1.25m・深さ約0.2mを測る。埋土下層から壷・甕(第35図50・52・57)が出土した。遺構の性格については不明である。

土坑ＡＳＫ308(第４・25図)　Ａ－２地区南側で検出した土坑である。平面形は東西方向に長い楕円形を呈し、規模は長軸1.9m・短軸1.6m・深さ約0.2mを測る。

出土遺物はなく、遺構の性格や詳細な時期については不明である。



第25図　ＡＳＫ056・002・413・019・006・308実測図

土坑ＡＳＫ385(第４図)　Ａ－２地区南側で検出した土坑で、土坑ＡＳＫ308の南側に隣接する。平面形は不定形で、長軸3.4m・短軸1.9m・深さ約0.6mを測る。土坑内から弥生土器壺(第35図45・55)・甕(第35図48))が出土した。

土坑ＡＳＫ104(第４図)　Ａ－１地区南側で検出した土坑である。平面は円形を呈し、規模は直径約0.3m・深さ約0.1mを測る。埋土中から甕(第35図53)が出土した。

Ｃ地区　この地区は方形周溝墓を中心とした遺構が多く、ここで検出された土坑については、周溝墓に伴う施設である可能性のあるものも存在する。また、周溝墓の溝に切られる土坑も存在している点が注目される。

土坑ＣＳＫ106(第６・26図)　Ｃ－１地区北東部で検出した。また、東側はＣ－２地区にも及んでいる。方形周溝墓ＣＳＴ069の北西隅に近接する溝ＣＳＤ083の西端に位置する。平面は東西方向に主軸をとる長方形を呈し、規模は長軸6.8m・短軸2.8m・深さ約0.1mを測る。また、南東辺にテラス状の平坦面をもつ。土坑底面は平坦である。

土坑底面から弥生土器底部が出土した。詳細な時期については不明である。

土坑ＣＳＫ105(第６・26図)　Ｃ－１地区南東部で検出した。東側はＣ－２地区にも及んでおり、方形周溝墓ＣＳＴ081の西側を区画する。平面は東西方向に主軸をとる長方形を呈する。規模は長軸6.3m・短軸2.6m・深さは0.3mを測る。底面は水平である。

土坑ＣＳＫ106と規模・形態的に酷似しており、位置関係からも土坑ＣＳＫ105・106は計画的に掘削されたものとみられる。これらの遺構の性格については不明であるが、方形周溝墓に伴う施設である可能性が高い。

出土遺物はなく、詳細な時期については不明である。

土坑ＣＳＫ043(第６・27図)　Ｃ－２地区東部で検出した、不定形な土坑である。規模は長軸3.4m・短辺2.1m・深さ約0.1mを測る。土坑西側から細片化した弥生土器が出土した。また、石包丁(第44図９)も出土した。

方形周溝墓ＣＳＴ067の周溝ＣＳＤ074に切られていることから、方形周溝墓ＣＳＴ067に先行する土坑とみられる。

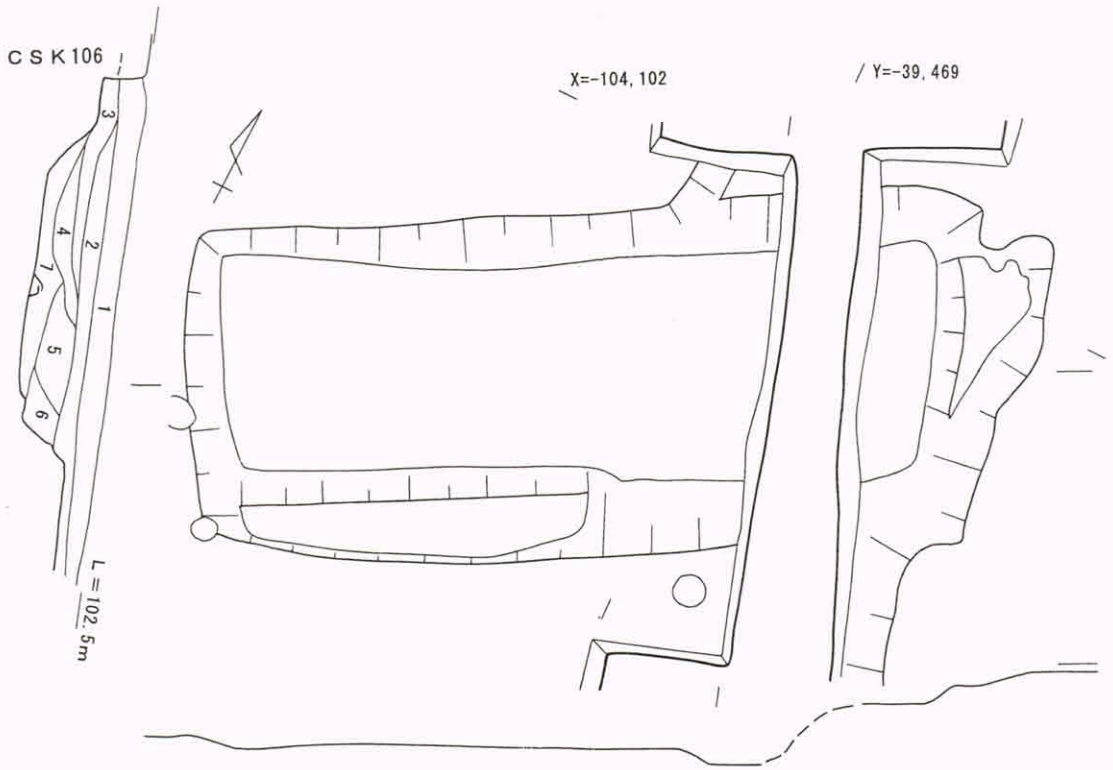
土坑ＣＳＫ082(第６・27図)　方形周溝墓ＣＳＴ067の南東から検出した不定形な土坑である。規模は長軸2.5m・短軸1.1m・深さ0.15mを測る。

方形周溝墓ＣＳＴ067の周溝ＣＳＤ067に切られており、方形周溝墓ＣＳＴ067より古い土坑であると判断される。土坑内南側から水差形土器(第36図67)が細片化した状態で出土した。

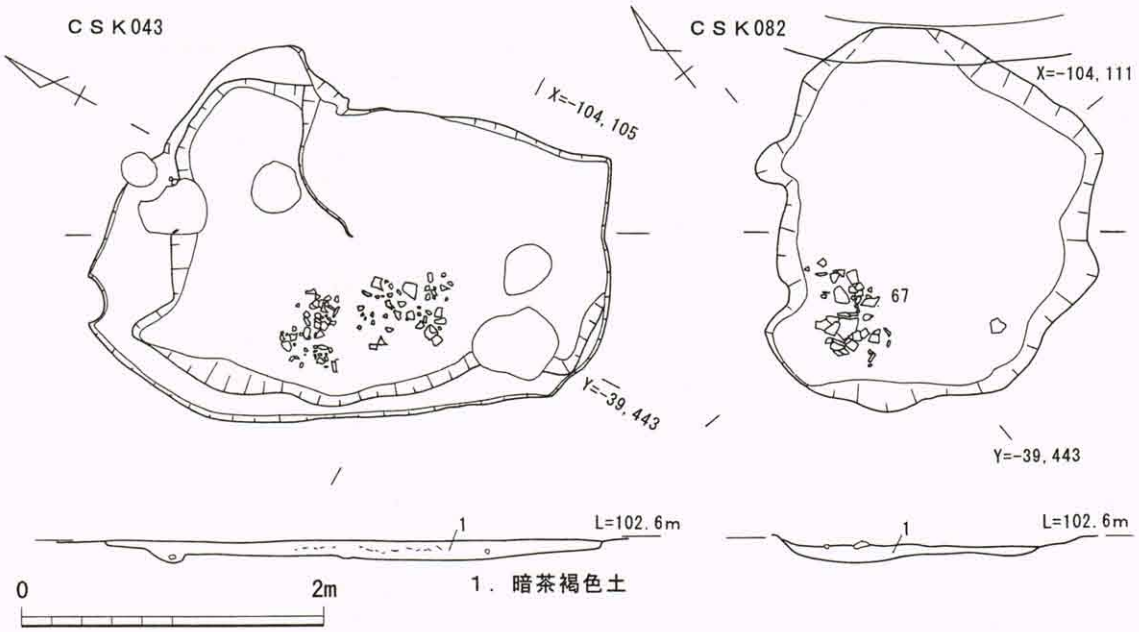
Ｄ地区　Ｄ地区は先述のとおり、本来居住域であったとみられる地区である。そのため、ここで検出された土坑は、住居に伴うものや、廃棄土坑などがあると考えられる。ここでは特徴的なものや、遺物が検出されたものを中心に述べることとする。

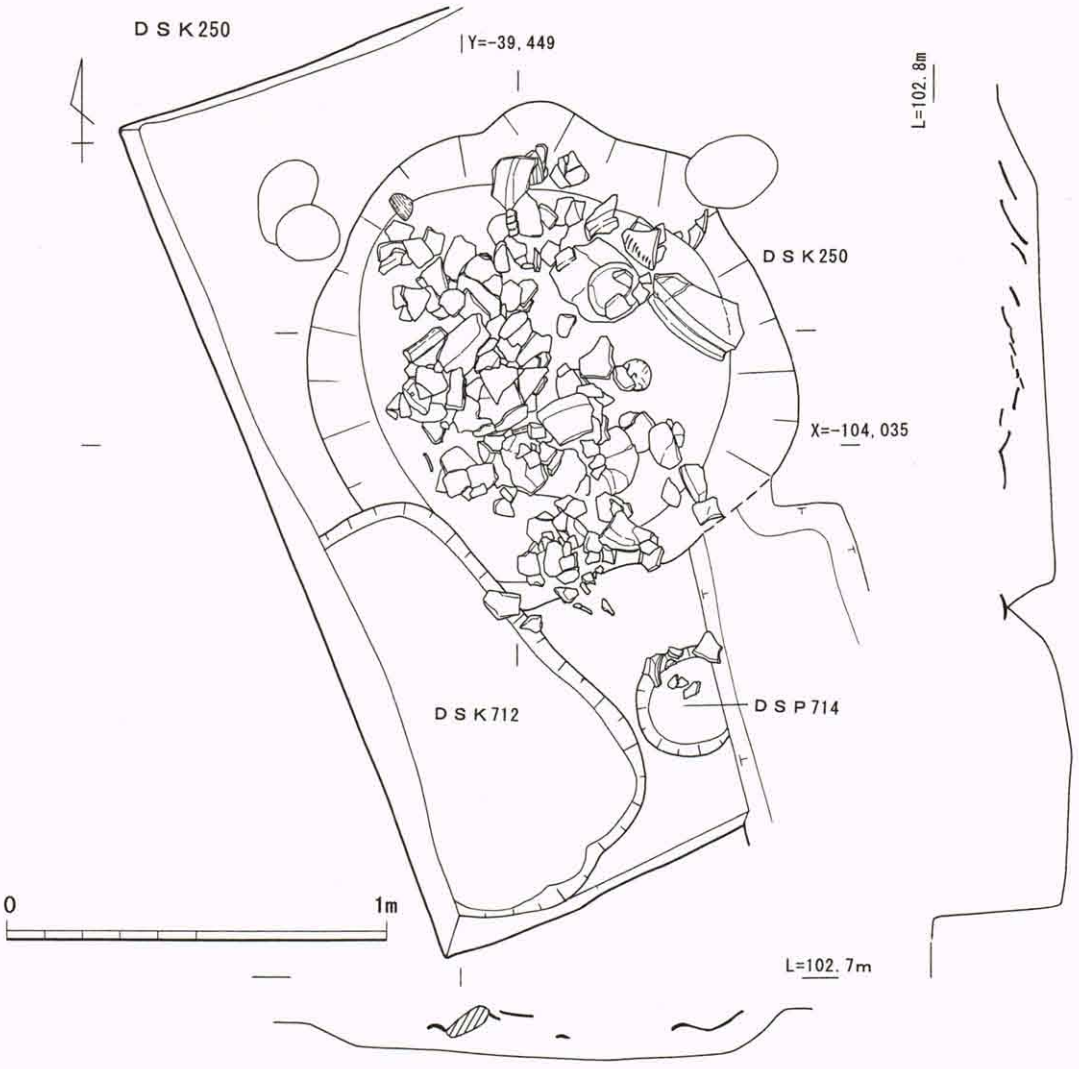
土坑ＤＳＫ250(第７・27図)　Ｄ地区の南西部で検出した不整円形を呈する土坑である。規模は直径約1.2m・深さ約0.15mを測る。

土坑内からは多量の弥生土器が破片となって検出された。出土土器には壺(第36～38図66・

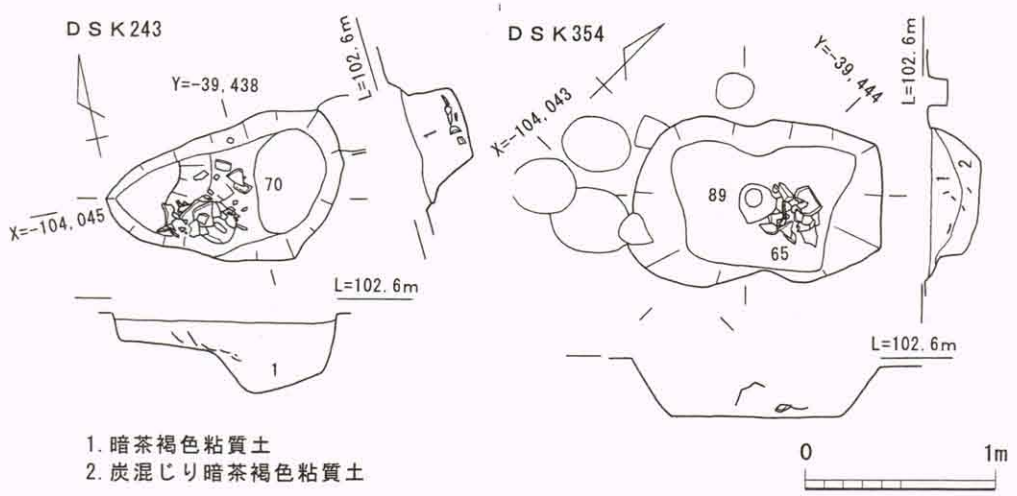


第26図　ＣＳＫ106・105実測図





第27図　ＣＳＫ043・082、ＤＳＫ250実測図



第28図　ＤＳＫ243・354実測図

68・75・82、第39図94～96・98・100)・高杯(第37図71)・甕(第38図84・87)・壺甕類の底部(第38図88・91・93)・ミニチュア無頸壺(第39図99)などがある。これらの土器は遺構検出面から埋土中層にかけて出土し、底面直上からは検出されなかった。また土坑ＤＳＫ712が、この土坑の南西隅を切っている。

土坑ＤＳＫ243(第７・28図)　Ｄ地区の南西部で検出した不定形な土坑である。規模は東西約1.2m・南北約0.8m・深さ約0.4mを測る。土坑は東側が一段深く掘削される形態を呈する。西側の土坑底面付近から高杯(第37図70)が検出された。

土坑ＤＳＫ354(第７・28図)　Ｄ地区の南西部で検出した長方形の土坑である。長軸約1.3m・短軸約0.9m・深さ約0.3mを測る。埋土中から壺(第36図65)・壺底部(第38図89)が出土した。

土坑ＤＳＫ341(第７・29図)　Ｄ地区の中央部で検出した東西に軸をとる平面長方形の土坑である。規模は長軸約1.5m・短軸約0.9m・深さ約0.2mを測る。底面にはわずかに凹凸がみられる。埋土中から壺口縁(第39図97)が出土した。

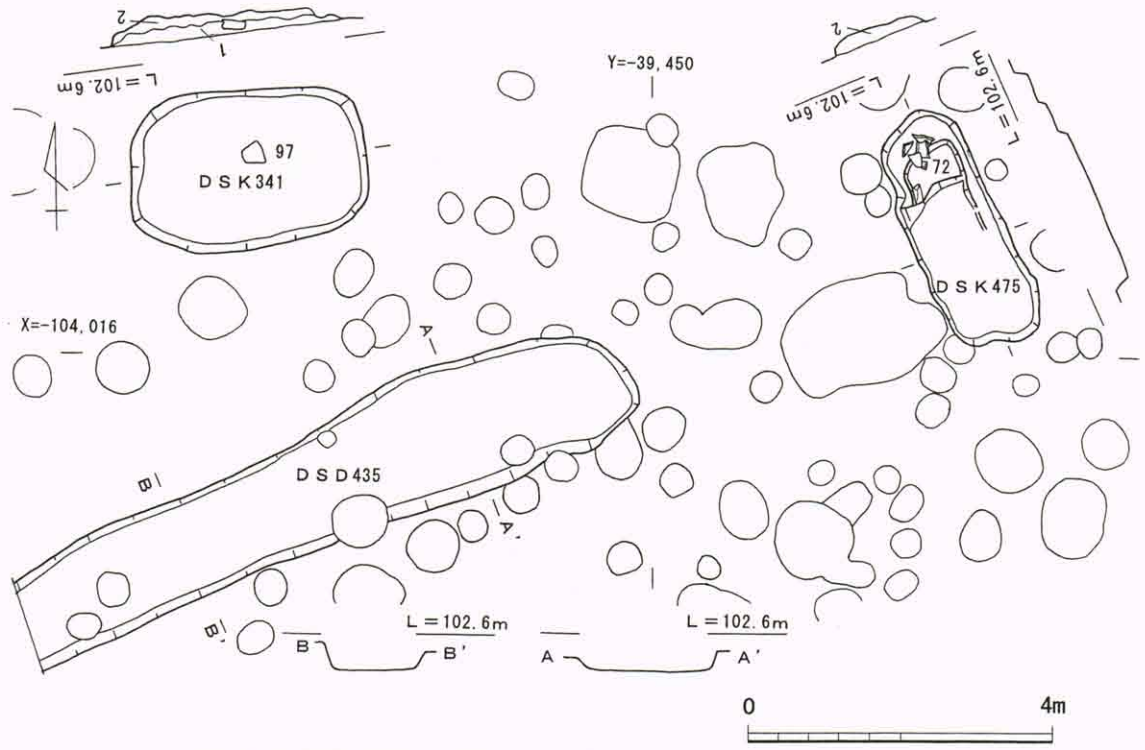
土坑ＤＳＫ475(第７・29図)　Ｄ地区の中央部で検出した隅丸長方形を呈する土坑である。規模は長軸約1.65m・短軸約0.6m・深さ約0.1mを測る。土坑内の北側から高杯脚部(第37図72)が検出された。

土坑ＤＳＫ352(第７・29図)　Ｄ地区の南西部で検出した楕円形の土坑である。規模は東西約1.9m・南北約0.8m・深さ約0.1mを測る。埋土中から甕(第38図85)が検出された。

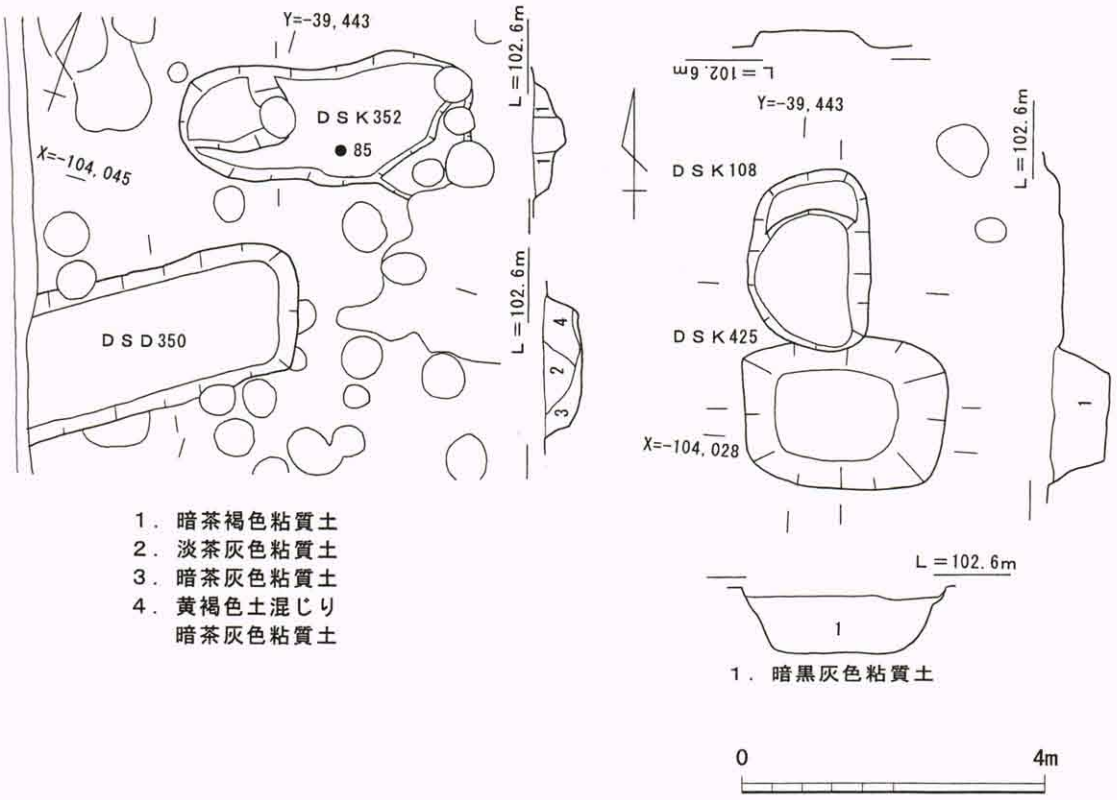
土坑ＤＳＫ108(第７・29図)　Ｄ地区の南半部で検出した楕円形を呈する土坑である。規模は、東西約0.8m・南北約1.2m・深さ約0.1mを測る。土坑ＤＳＫ425の北側を切る。出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。

土坑ＤＳＫ425(第７・29図)　Ｄ地区の南半部で検出した長方形を呈する土坑である。規模は東西約1.3m・南北約１m・深さ約0.45mを測る。出土遺物がなく、時期は不明である。土坑ＤＳＫ108に切られる。

土坑ＤＳＫ351(第７・30図)　Ｄ地区の南西端部で検出した東西方向に主軸をもつ長方形を呈する土坑である。規模は東西約2.55m・南北1.2m・深さ0.3mを測る。



1. 暗茶灰色粘質土　2. 黒灰色粘質土　3. 暗黒灰色粘質土



1．暗茶褐色粘質土
2．淡茶灰色粘質土
3．暗茶灰色粘質土
4．黄褐色土混じり
　暗茶灰色粘質土

1．暗黒灰色粘質土

第29図　ＤＳＫ341・475・352・108・425、ＤＳＤ350・435実測図

土坑内で、長軸約1.6m(推定)・短軸約0.55mを測る棺痕跡かと思われる長方形を呈する土色変化を確認した。断面観察の結果、第30図に示す第3層淡茶褐色粘質土と第4層暗茶灰色粘質土が棺材の痕跡と考えられた。

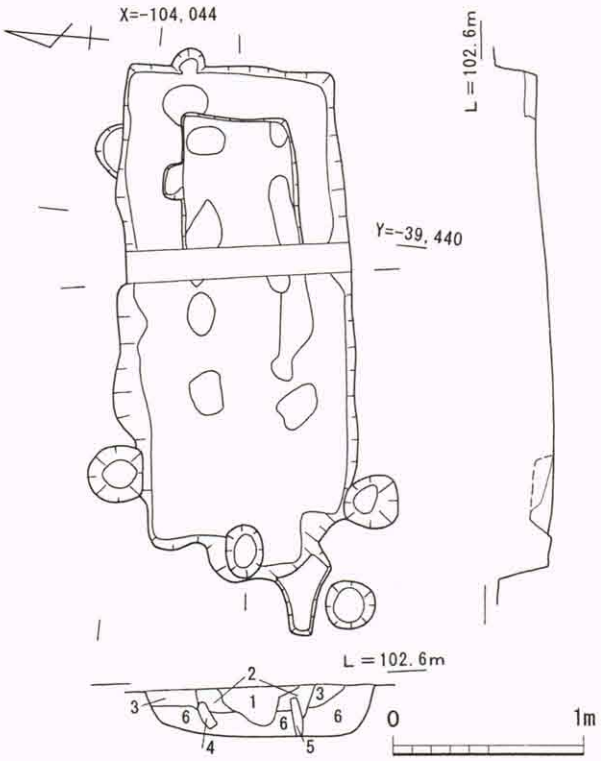
弥生土器片が、少量出土した。小片のため詳細な時期は特定できないが、弥生時代の木棺墓である可能性が高いと考える。

土坑ＤＳＫ457(第7図)　D地区中央で検出した、南北方向に長い不定形な土坑である。埋土中から甕(第37図76)が出土した。

土坑ＤＳＫ477(第7図)　D地区中央で検出した、東西方向に長い不定形な土坑である。埋土中から甕(第38図86)が出土した。

土坑ＤＳＫ127(第7図)　D地区南側で検出した、方形の土坑である。埋土中から壺底部(第38図90)が出土した。

土坑ＤＳＫ103(第7図)　D地区中央で検出した、方形の土坑である。埋土中から壺底部(第38図92)が出土した。



第30図　ＤＳＫ351実測図

Ｇ地区　この地区では多数のピット群と土坑群が検出された。北に隣接する京都府教育委員会の実施した第13次調査第1トレンチでは円形竪穴式住居跡が確認されており、居住域の一角を占める位置に相当すると考える。従って、ここから検出された土坑群も住居に伴うものや廃棄土坑であるものが存在すると考える。そのうち、遺物を出土したものについて概観する。

土坑ＧＳＫ367(第5・31図)　Ｇ－2地区北端で検出した。平面形は東西方向に長い隅丸長方形を呈する。南辺中央を後世の柱穴で切られていた。規模は長軸1.3m・短軸0.8m・深さ約0.1mを測る。土坑内から高杯(第37図69)・鉢(第37図74)が出土した。

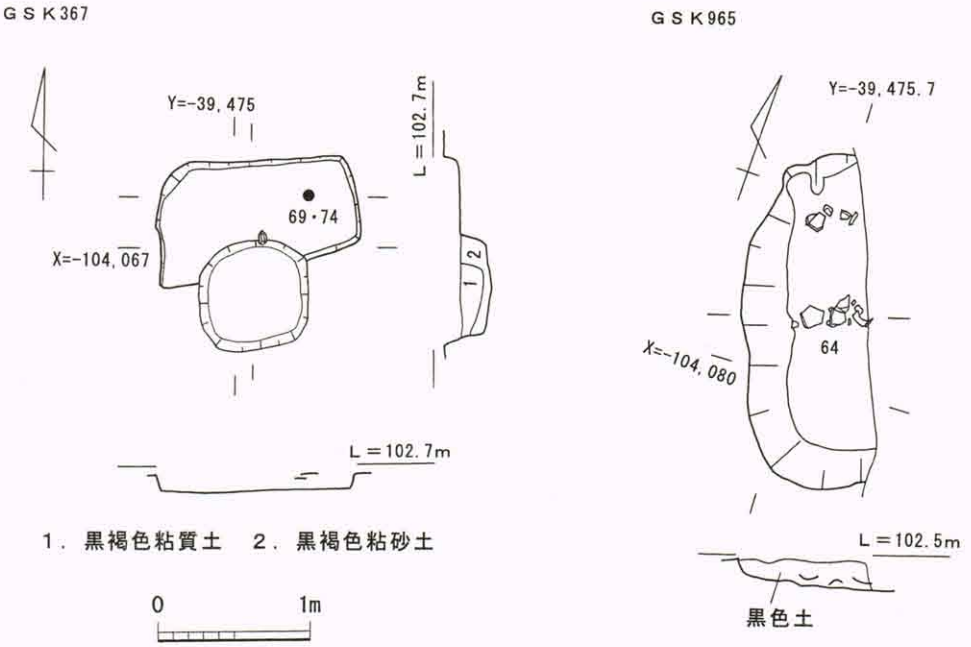
土坑ＧＳＫ965(第5・31図)　Ｇ－2地区東端で検出した。土坑の半分は調査区外であり全容については不明である。検出した規模は、南北約2.2m・東西検出長0.8m・深さ約0.2mを測る。埋土下層から壺(第36図64)が出土した。

Ｈ地区　H地区は既述したように方形周溝墓が多数存在する地区である。

土坑ＨＳＫ050(第20図)　方形周溝墓ＨＳＴ003の西側で検出した土坑である。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.3m・短軸0.8m・深さ約0.1mを測る。遺存状況は良好ではない。

平面が楕円形であり、周溝墓西端で検出したことから、埋葬施設ではないと考える。

ｄ．その他の遺構　上記の遺構以外に時塚遺跡では周溝墓以外の溝をD地区で検出した。



第31図　ＧＳＫ367・965実測図

溝ＤＳＤ435(第７・29図)　Ｄ地区の中央部で検出した幅約1.85ｍ・深さ約0.15ｍ、主軸方向Ｎ66°Ｅを測る溝である。少量であるが、弥生土器の小片が出土した。

溝ＤＳＤ350(第７・29図)　Ｄ地区の南西部で検出した幅約0.9ｍ・深さ約0.25ｍ、主軸方向Ｎ60°Ｅを測る溝である。少量であるが、弥生土器の小片が出土した。

(村田和弘・岡崎研一)

Ｂ．出土遺物

時塚遺跡から出土した弥生時代に属する遺物には、土器(土製品を含む)・磨製石器・打製石器などがある。なお、各土器の出土遺構については付表３に対照表を付した。

ａ．弥生土器

方形周溝墓出土土器

方形周溝墓ＣＳＴ069出土遺物(第33図14・15)　14・15は、如意形口縁をもつ甕である。口縁端部はわずかに面をなす。外面は縦方向、口縁内面は横方向のハケにより調整する。14のハケは非常に粗い。また、外面に煤が付着している。

方形周溝墓ＣＳＴ070出土遺物(第32図４)　４は大型の広口壺の口縁である。口縁端部を肥厚させ、外面に縦方向のハケがみられる。器壁が厚い。

方形周溝墓ＣＳＴ068出土遺物(第32図10)　10は無頸壺口縁部の小片である。口縁端部は丸く、外面に７条２帯の櫛描直線文がみられる。

方形周溝墓ＣＳＴ088出土遺物(第32・33図21・９・12・17・31)　21は甕もしくは壺の底部。９は鉢である。「く」の字の頸部から口縁が短く水平方向にのび、端部は面をなす。外面はタタキの後、ハケにより調整される。タタキは口縁部下面にまで及んでいる。12は「く」の字甕である。口縁端部にヘラ状工具で刻目を施す。17は「く」字状口縁から球胴状の体部からなる壺であ

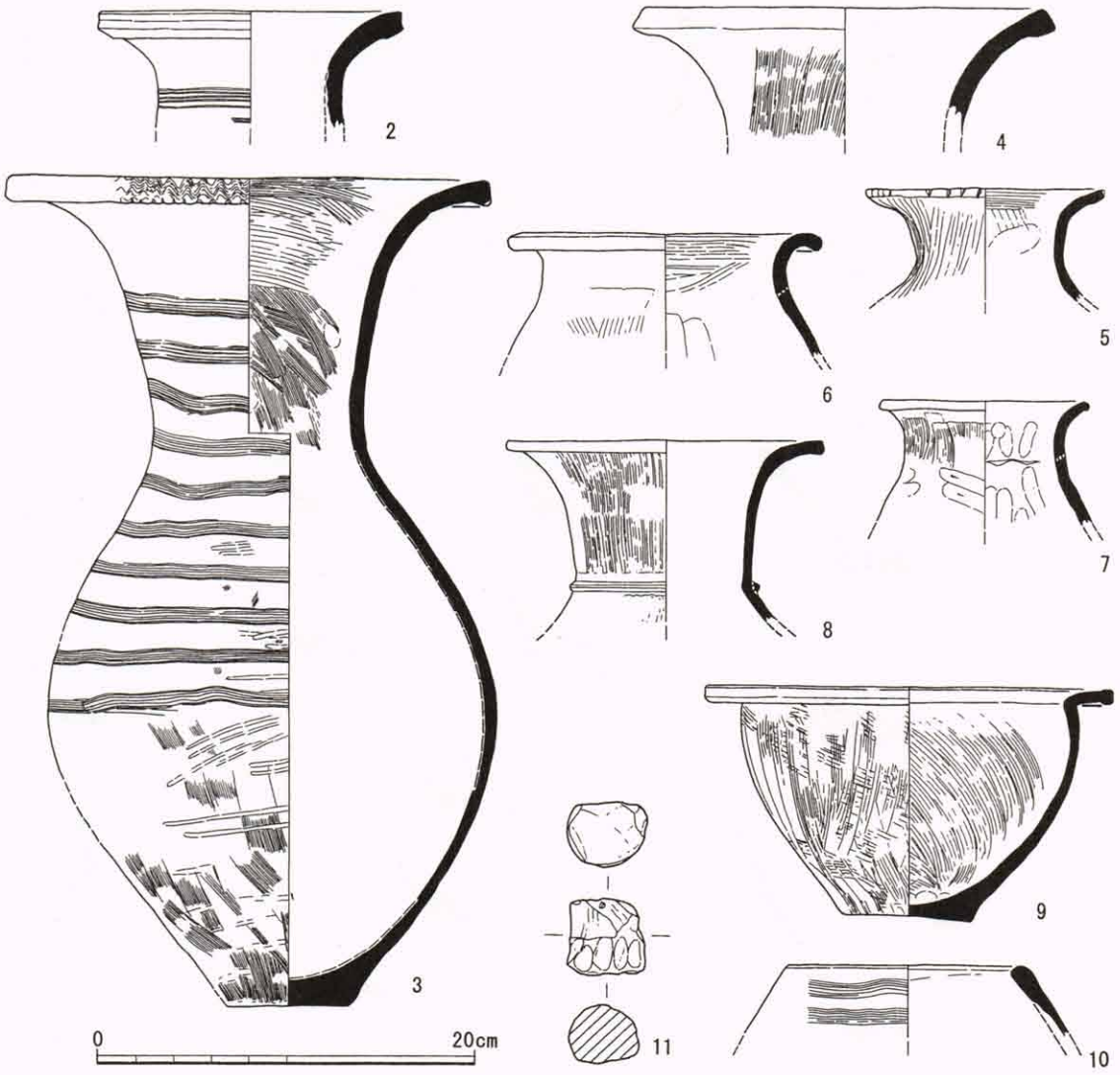
る。口縁端部は面を形成する。内外面ともハケにより調整を行う。31は高杯脚部である。

方形周溝墓ＣＳＴ081出土遺物(第32・33図19・３・13・20)　19は甕の底部である。３はほぼ完形に近く復元できた広口壺である。精良な胎土を用いており、頸部から体部最大径付近に６条単位とした10帯の櫛描直線文を施文する。口縁部は櫛描波状文で加飾し、下端面に刻目を施す。13は如意形口縁の甕である。20は壺の底部とみられる。

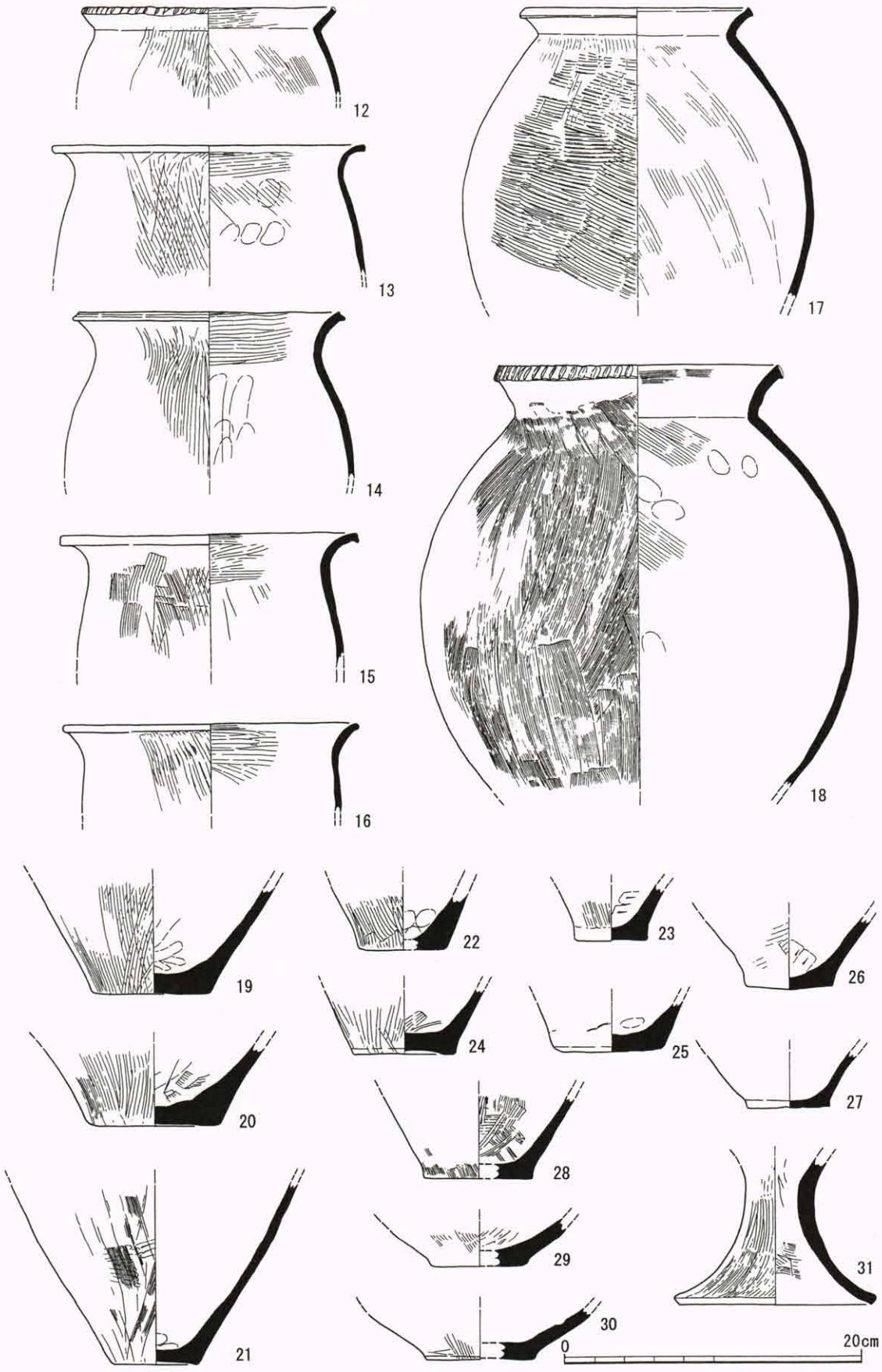
方形周溝墓ＣＳＴ065出土遺物(第32・33図２・16・22)　２は広口壺口縁部である。頸部外面に櫛描直線文が４帯観察される。16は如意形口縁の甕である。内外面ともハケにより調整する。22は甕の底部と思われる。

溝内埋葬ＣＳＫ089出土遺物(第37図80)　80は壺の底部で、焼成前底部に穿孔を行っている。

方形周溝墓ＨＳＴ002出土遺物(第32・33図24・25・11・６・30・７・28)　24・25は甕の底部である。11は円筒状の粘土塊を焼成した土製品である。用途等については不明。６は太頸の広口壺口縁である。外反気味に垂下する短い口縁をもつ。30は壺の底部である。７は広口壺口縁部である。28は甕底部とみられる



第32図　出土遺物実測図(弥生時代１)



第33図　出土遺物実測図(弥生時代２)

方形周溝墓ＨＳＴ015出土遺物（第32図８）　８は広口壺である。頸部に断面三角形の貼り付け突帯を巡らす。

方形周溝墓ＩＳＴ035出土遺物（第33図18）　18は「く」字状の頸部から口縁部にかけて短く外反する壺である。口縁外面に刻目を施す。

方形周溝墓ＩＳＴ044出土遺物（第33図26・29）　26は甕の底部と思われる。タタキ後ハケで調整する。29は壺の底部である。

方形周溝墓ＩＳＴ043出土遺物（第33図23・27）　23・27とも甕の底部と思われる。

土坑出土土器

土坑ＡＳＫ056出土遺物（第34図32～44・第35図54）　32・33は無文の広口壺である。34は大形の広口壺で頸部に貼り付け押圧突帯を巡らす。35は直口壺である。口縁外面に３条の突帯を巡らせ、刻目を施す。頸部には櫛描直線文がみられる。36は摂津型の水差形土器である。口縁端部に刻目、口縁外面には６条を単位とする５帯の櫛描直線文がみられる。37は甕蓋。38は「く」字状口縁の甕である。口縁外端面に板状工具による刻目文を施す。39は如意形口縁の甕。40は短く外方に開く口縁をもつ甕であり、当該地では類例の少ないものと思われる。口縁端面には微細なハケ状工具による波状文が施される。外面には煤が付着する。41は「く」字甕である。42は甕底部。43は壺底部であり、焼成前穿孔がなされている。44は甕底部である。

土坑ＡＳＫ413出土遺物（第35図46・49・51・59）　46は広口壺である。垂下する口縁の外側面には２条の原体からなる斜格子文、内面には櫛工具による羽状文を施す。頸部には３条の貼り付け突帯がみられる。49は「く」字状口縁をもつ甕である。口縁端部に刻目を施す。51は甕底部とみられる。59は高杯脚部である。

土坑ＡＳＫ019出土遺物（第35図47・56）　47は受け口状口縁をもつ壺である。口縁外端面および下端部にそれぞれ１条の凹線文を施す。頸部には押圧文突帯を貼り付ける。体部外面をタタキ調整した後ハケ調整を部分的に行う。56は「く」字状口縁の甕である。口縁端部をわずかに上方に屈曲させる。外面にタタキがみられる。

土坑ＡＳＫ006出土遺物（第35図50・52・57）　50は如意形口縁の甕である。内面はヘラケズリを行う。52は甕底部、57は壺底部である。

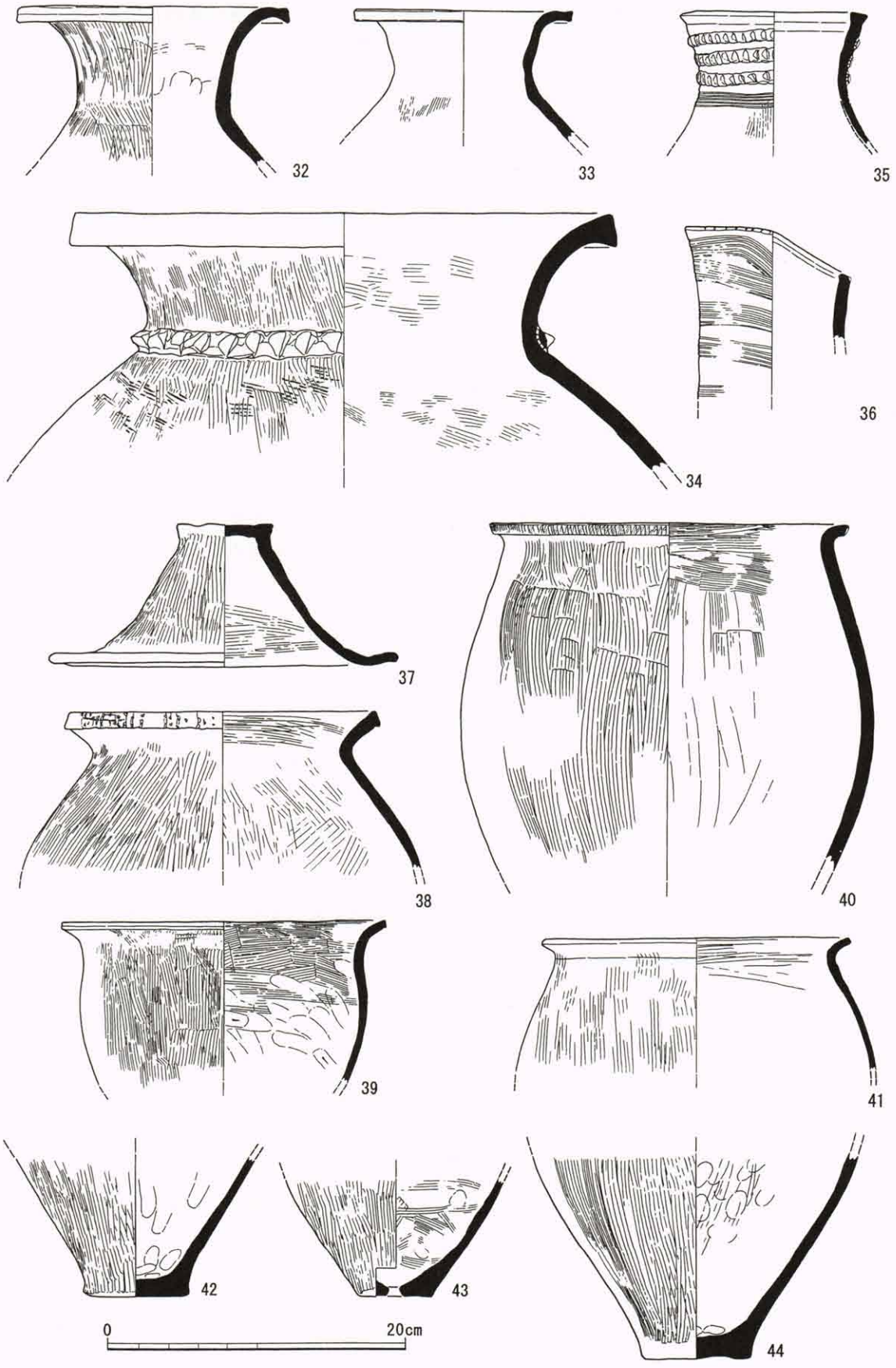
土坑ＡＳＫ385出土遺物（第35図45・55・48）　45は広口壺、口縁内面に扇形文を施す。頸部から体部に櫛描直線文・櫛描波状文・櫛描直線文の順に施文する。55は大形壺の底部と思われる。48は大形の「く」字状口縁をもつ甕である。口縁端部に刻目を施す。

土坑ＡＳＫ104出土遺物（第35図53）　53は如意形口縁をもつ甕である。外面を縦方向、口縁内面を横方向のハケで調整する。

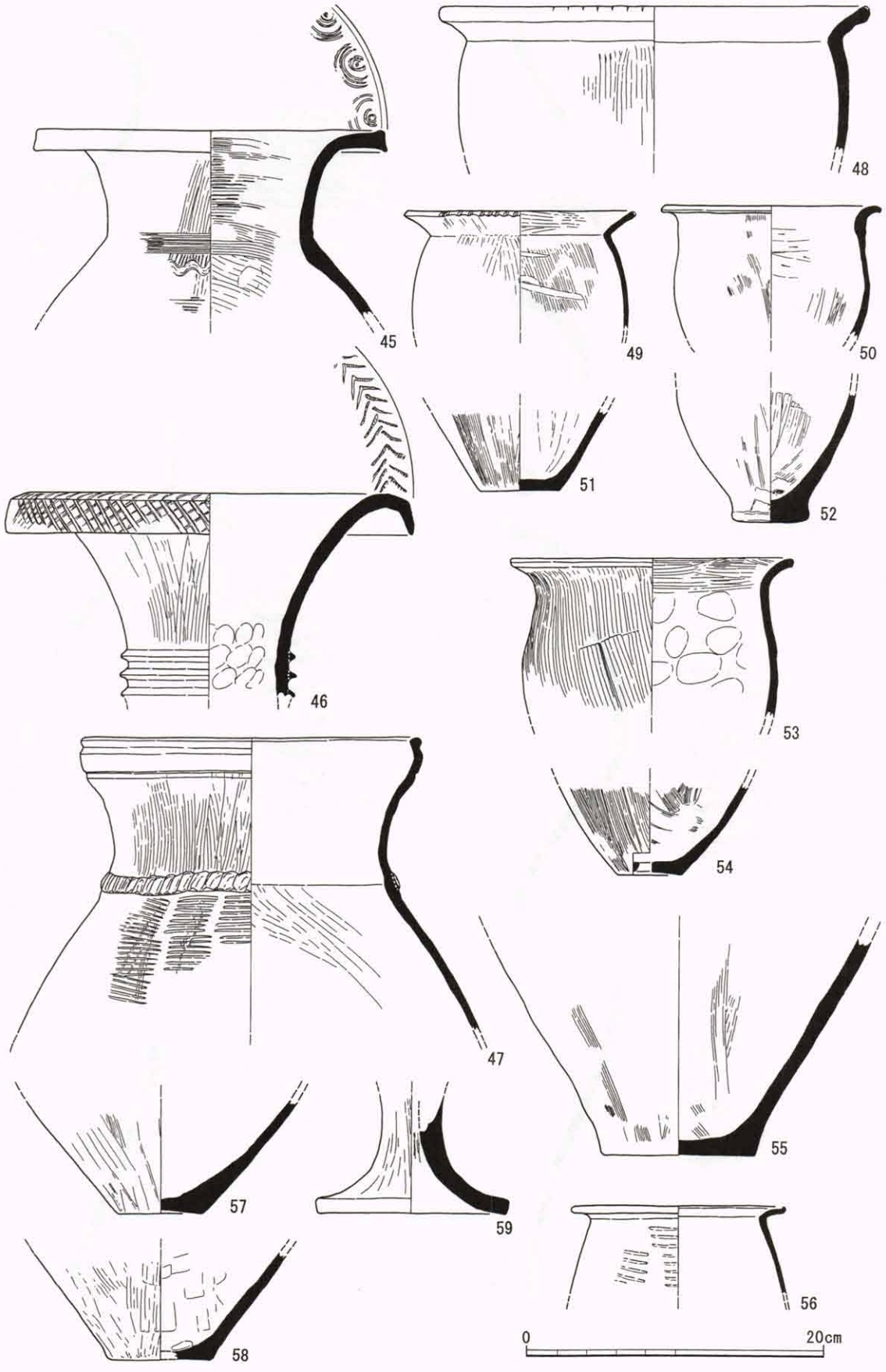
土坑ＡＳＫ043出土遺物（第35図58）　58は甕の底部と思われる。外面はハケにより調整する。

土坑ＣＳＫ082出土遺物（第36図67）　67は水差形土器である。口縁部外面に７帯の櫛描直線文を施し、体部上半は９帯の櫛描波状文を施文する。体部下半は磨きを行う。

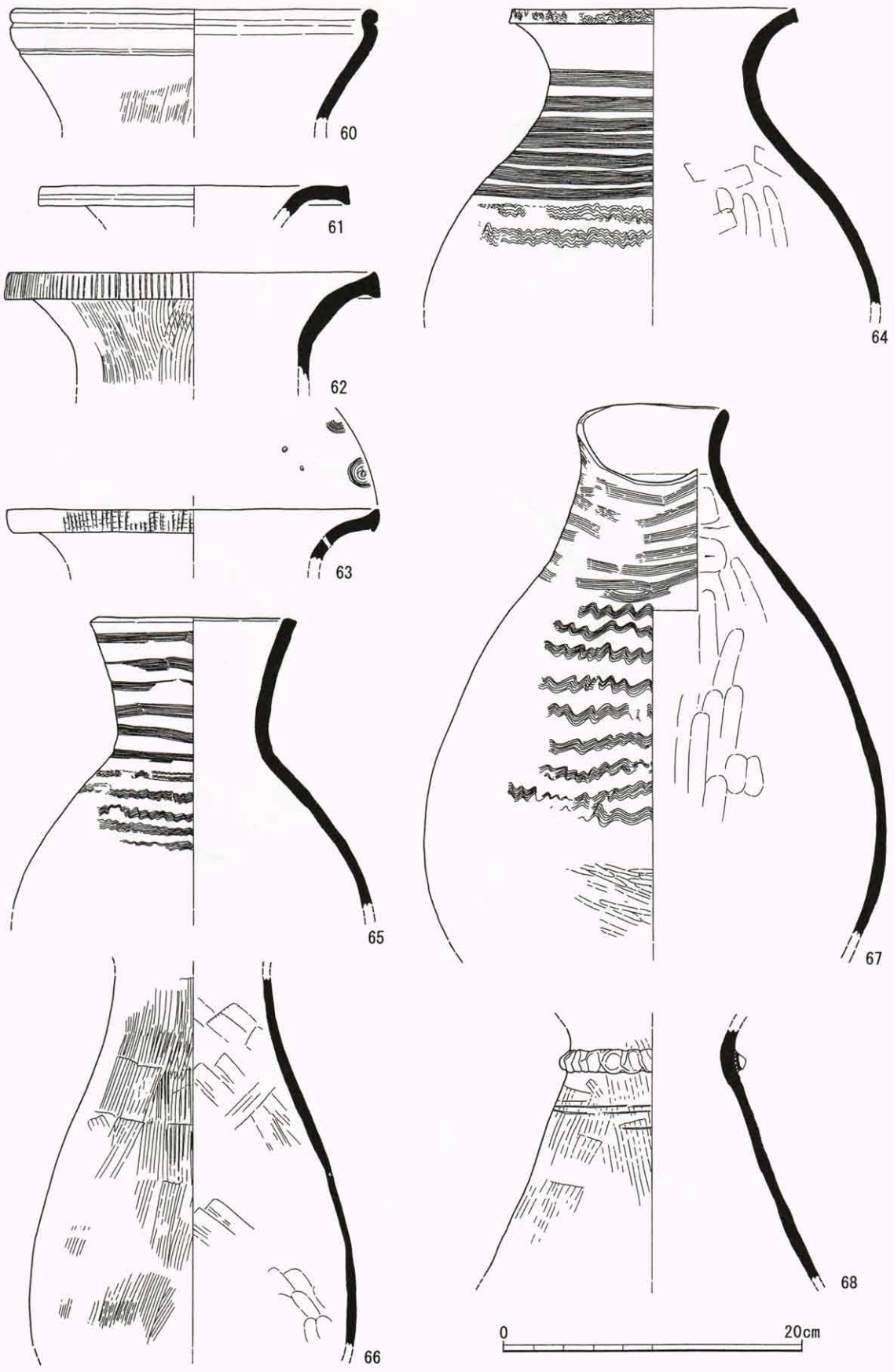
土坑ＤＳＫ250出土遺物（第36～39図66・68・81・82・94～96・98・100・71・84・87・88・



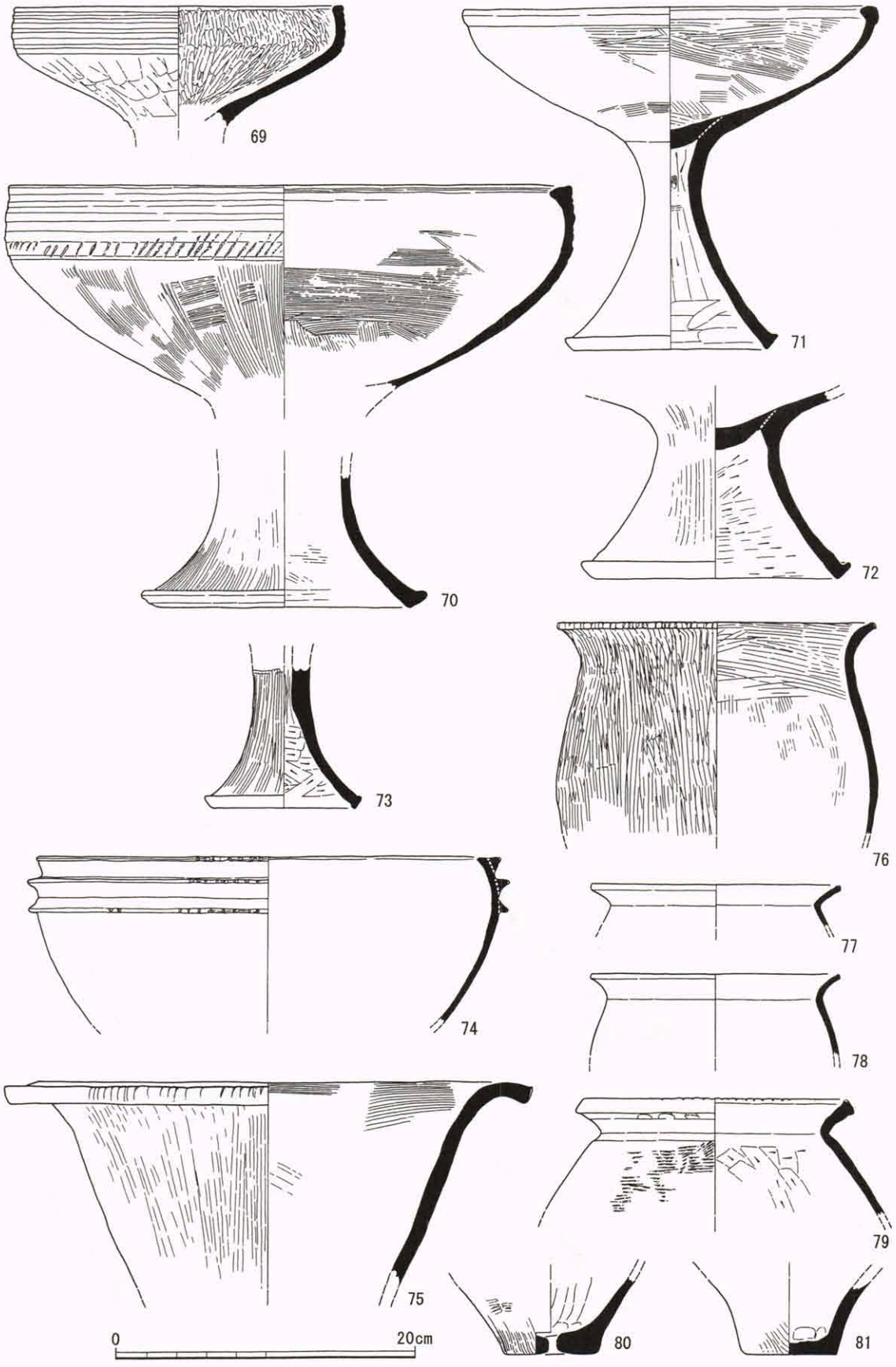
第34図　出土遺物実測図(弥生時代３　土坑ＡＳＫ056)



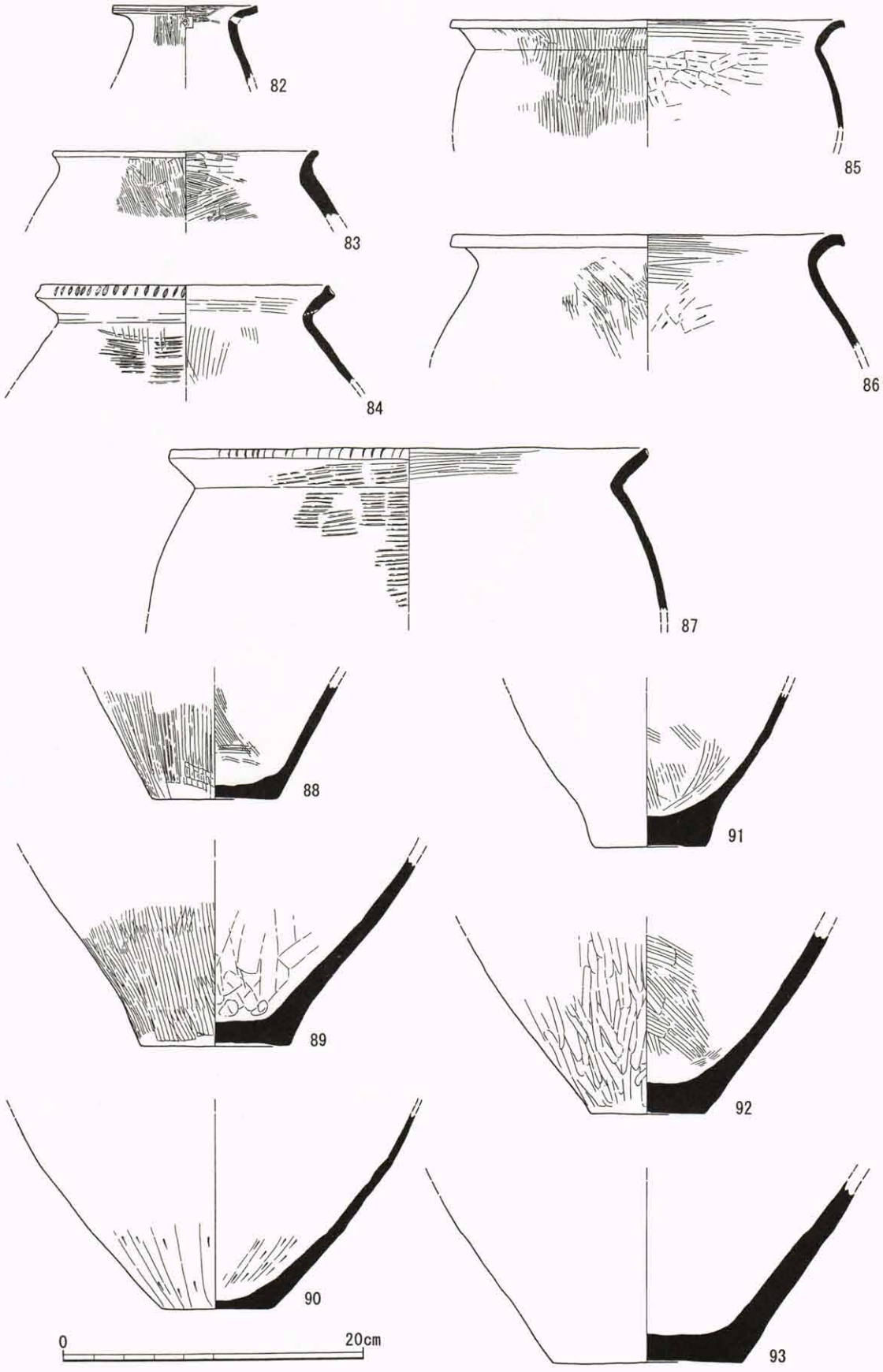
第35図　出土遺物実測図(弥生時代４　土坑出土遺物１)



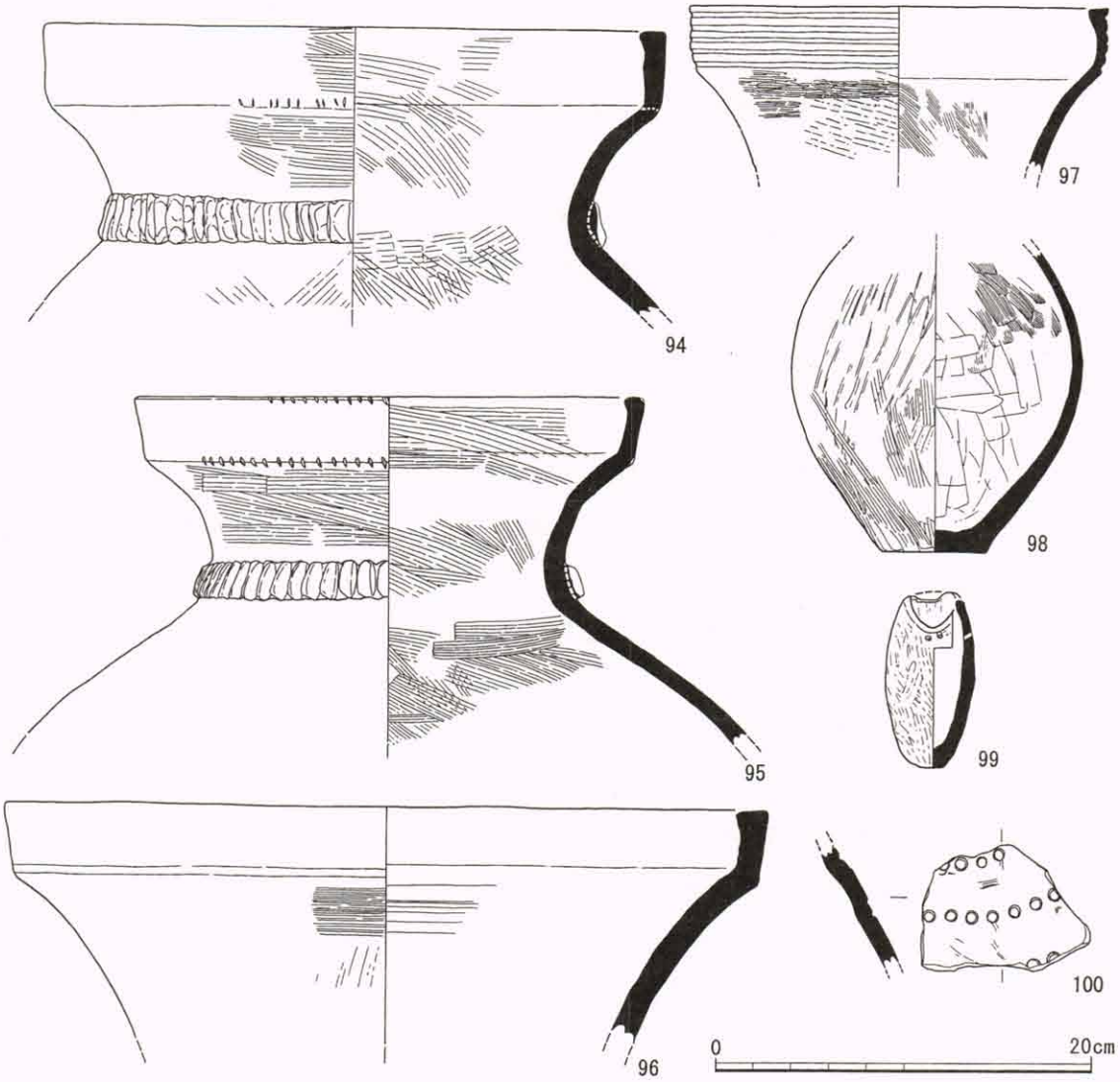
第36図　出土遺物実測図(弥生時代５　土坑出土遺物２)



第37図　出土遺物実測図(弥生時代６　土坑出土遺物３)



第38図　出土遺物実測図（弥生時代７　土坑出土遺物４）



第39図　出土遺物実測図(弥生時代８　土坑出土遺物５)

91・93・99)　66は水差形土器の体部と思われる破片である。細身の形態をとるとみられる。68は貼り付け押圧突帯もつ広口壺と思われる。75は大形広口壺の口縁である。口縁端面に刻目が施される。82は小形壺である。細片であるが、円孔が１か所確認できる。94～96は大型受け口状口縁壺である。94・95は頸部に貼り付け押圧突帯を付す。94は口縁下端部に、95は口縁上端と下端部にそれぞれ刻目を施す。98は壺体部である。外面は板状工具により調整されている。100は竹管文で加飾する壺体部の細片である。71は高杯である。脚柱部は細長く脚端部はわずかに上方に屈曲し面をなす。杯部口縁端部は内外に肥厚する。84・87は「く」字状口縁の甕である。口縁端面に刻目を施す。88・91は甕の底部、93は壺の底部と思われる。99はミニチュア土器である。口縁を斜めに整形することから、水差形土器を模したものと考える。２個１対の円孔を設ける。

土坑ＤＳＫ243出土遺物(第37図70)　70は大形の高杯である。出土状況から同一個体の可能性が高い。杯部の口縁部外面に３条の凹線文、口縁部と体部の境に櫛状工具による列点文を施す。杯部は外面タタキのちハケ、内面はハケで調整する。脚部は内外面ともハケにより調整する。

土坑ＤＳＫ354出土遺物(第36・38図65・89)　65は直口壺である。頸部外面に５条を単位とす

る６帯の櫛描直線文、肩部以下に残存する限りで５帯の櫛描波状文を施す。89は甕の底部とみられる。

土坑ＤＳＫ341出土遺物（第39図97）　97は受け口状口縁壺である。口縁外側面に５条の凹線文を施す。

土坑ＤＳＫ475出土遺物（第37図72）　72は大形高杯の脚とみられる個体である。外面縦方向のハケ、内面はヘラ削りである。脚端部を斜め上方に拡張する。

土坑ＤＳＫ457出土遺物（第37図76）　76は如意形の甕である。口縁端部に刻目を施す。外面は縦方向の粗いハケ、内面は体部が縦方向のハケの後ナデ、頸部から口縁部が横方向の粗いハケで調整する。

土坑ＤＳＫ477出土遺物（第38図86）　86は口縁部が丸味をもって外反する甕で、口縁端部がわずかに垂下する。外面縦および斜め方向のハケ目調整、内面口縁部が横方向のハケ目調整、内面体部がヘラ削り後ナデ調整である。

土坑ＤＳＫ127出土遺物（第38図90）　90は壺の底部とみられ、体部が湾曲気味に立ち上がる。内外面ともヘラ削りが観察される。

土坑ＤＳＫ103出土遺物（第38図92）　92は壺の底部とみられる。外面が縦方向のミガキ調整、内面は斜め方向のハケ目調整である。

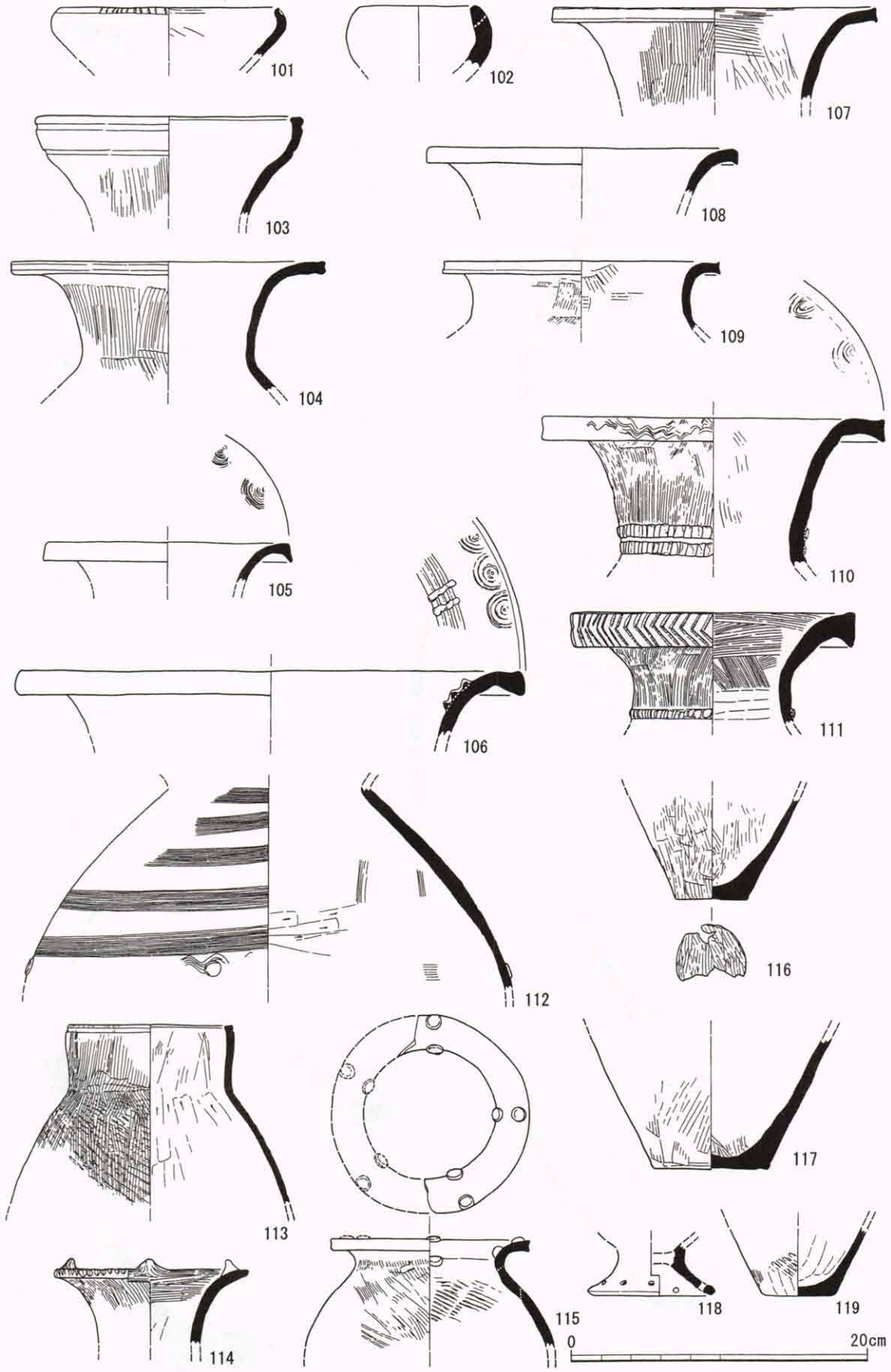
土坑ＧＳＫ367出土遺物（第37図69・74）　69は高杯である。口縁部外面に５条の凹線文を施す。杯部外面はヘラ削り、内面はヘラミガキを行う。74は大形椀状の鉢である。断面三角形の貼り付け突帯を３条付し、突帯先端に刻目を施す。器壁が摩耗しており調整不明である。

ＧＳＫ965出土遺物（第36図64）　64は広口壺である。口縁部外面に波状文を施す。頸部から体部上半部に７帯の櫛描直線文を施し、その下には２帯の櫛描波状文が巡る。

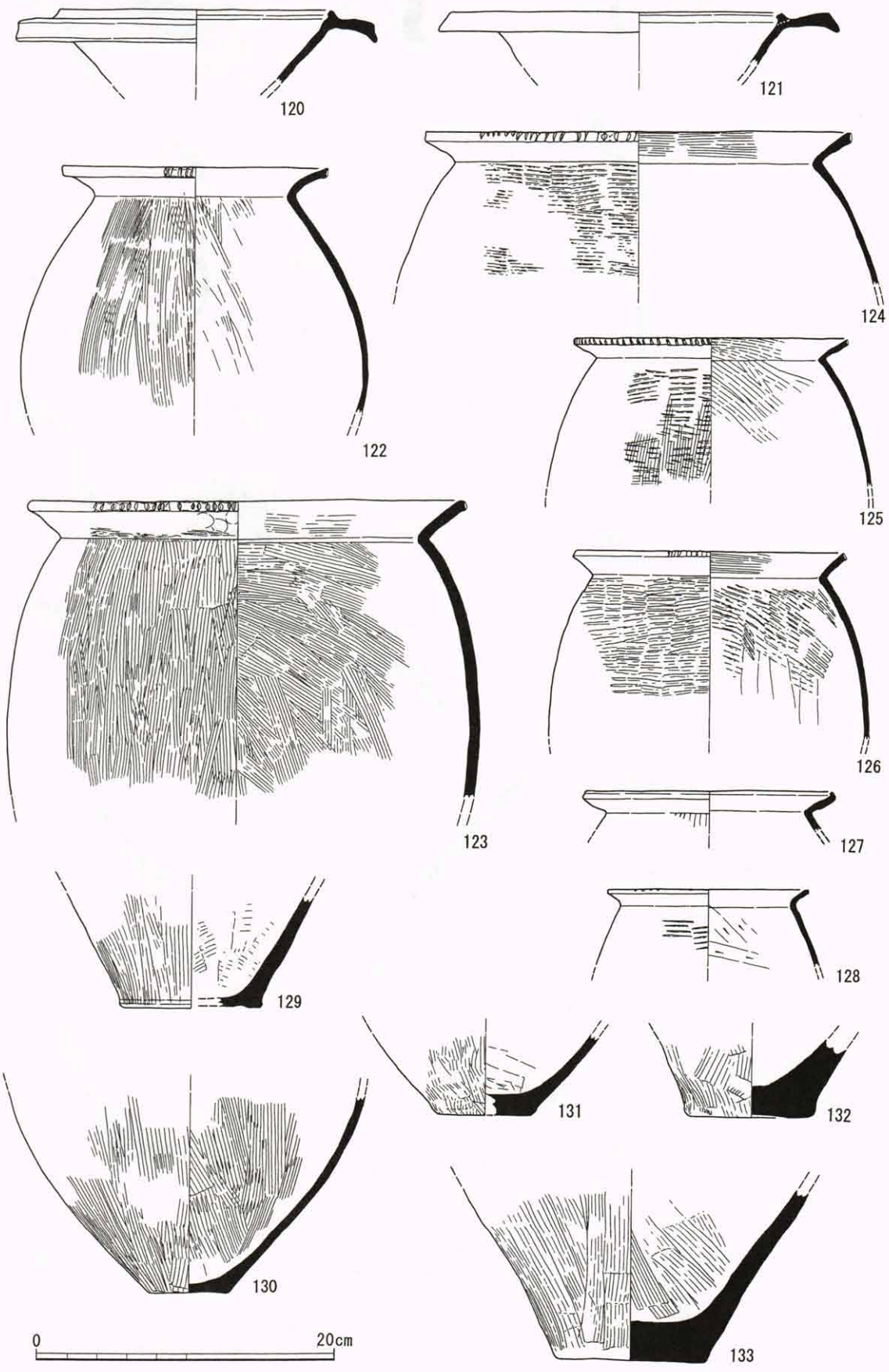
Ａ地区出土遺物（第40～42図103・105～107・115・118～122・125・127・137）

付表３　実測遺物・遺構対照表

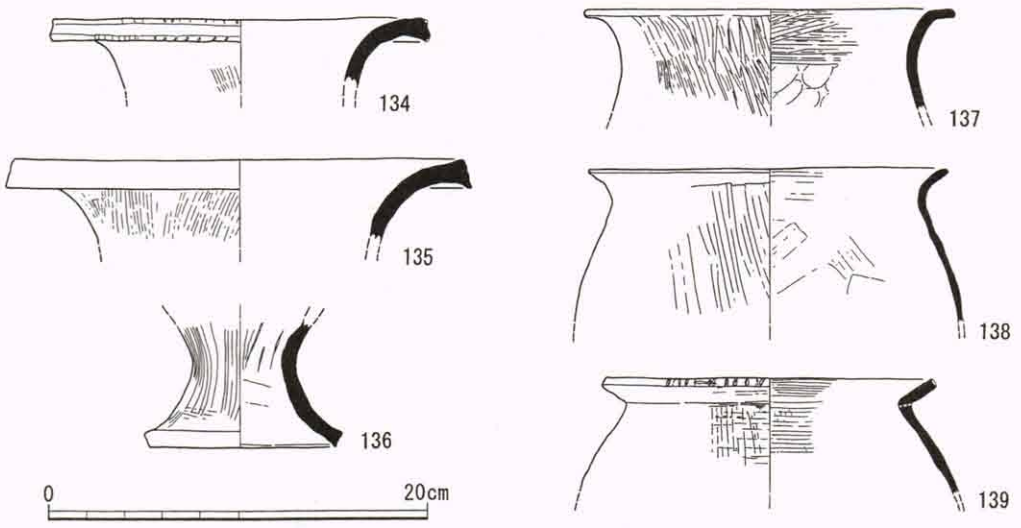
2	ＣＳＤ071	22	ＣＳＤ071	42	ＡＳＫ056	62	ＣＳＫ081	82	ＤＳＫ250	102	ＤＳＰ129	122	ＡＳＰ293
3	ＣＳＤ081	23	ＩＳＤ111	43	ＡＳＫ056	63	ＤＳＫ357	83	ＤＳＫ345	103	ＡＳＰ421	123	ＤＳＰ052
4	ＣＳＤ070	24	ＨＳＤ002	44	ＡＳＫ056	64	ＧＳＫ965	84	ＤＳＫ250	104	ＤＳＰ052	124	ＤＳＰ518
5	ＩＳＤ111	25	ＨＳＤ004	45	ＡＳＫ385	65	ＤＳＫ357	85	ＤＳＫ352	105	ＡＳＰ107	125	ＡＳＰ235
6	ＨＳＤ004	26	ＩＳＤ052	46	ＡＳＫ413	66	ＤＳＫ250	86	ＤＳＫ477	106	ＡＳＰ290	126	ＤＳＰ232
7	ＨＳＤ002	27	ＩＳＤ111	47	ＡＳＫ019	67	ＣＳＫ082	87	ＤＳＫ250	107	ＡＳＰ008	127	ＡＳＰ332
8	ＨＳＤ018	28	ＨＳＤ006	48	ＡＳＫ385	68	ＤＳＫ250	88	ＤＳＫ250	108	ＤＳＰ228	128	ＤＳＰ235
9	ＣＳＫ095	29	ＩＳＤ052	49	ＡＳＫ413	69	ＧＳＫ367	89	ＤＳＫ354	109	ＤＳＰ210	129	ＤＳＰ209
10	ＣＳＤ076	30	ＨＳＤ004	50	ＡＳＫ006	70	ＤＳＫ243	90	ＤＳＫ127	110	ＤＳＰ223	130	ＤＳＰ160
11	ＨＳＤ002	31	ＣＳＫ095	51	ＡＳＫ413	71	ＤＳＫ250	91	ＤＳＫ250	111	ＤＳＰ281	131	ＧＳＰ1076
12	ＣＳＫ095	32	ＡＳＫ056	52	ＡＳＫ006	72	ＤＳＫ475	92	ＤＳＫ103	112	ＤＳＰ284	132	ＤＳＰ606
13	ＣＳＤ081	33	ＡＳＫ056	53	ＡＳＫ104	73	ＥＳＫ001	93	ＤＳＫ250	113	ＧＳＰ756	133	ＤＳＰ169
14	ＣＳＤ075	34	ＡＳＫ056	54	ＡＳＫ056	74	ＧＳＫ367	94	ＤＳＫ250	114	ＧＳＰ1054	134	ＤＳＤ489
15	ＣＳＤ075	35	ＡＳＫ056	55	ＡＳＫ385	75	ＤＳＫ250	95	ＤＳＫ250	115	ＡＳＰ020	135	ＤＳＤ596
16	ＣＳＤ071	36	ＡＳＫ056	56	ＡＳＫ019	76	ＤＳＫ457	96	ＤＳＫ250	116	ＧＳＰ1069	136	ＤＳＤ251
17	ＣＳＫ095	37	ＡＳＫ056	57	ＡＳＫ006	77	ＢＳＫ030	97	ＤＳＫ341	117	ＧＳＰ058	137	ＡＳＤ133
18	ＩＳＤ028	38	ＡＳＫ056	58	ＡＳＫ043	78	ＢＳＫ027	98	ＤＳＫ250	118	ＡＳＰ266	138	ＤＳＤ125
19	ＣＳＤ092	39	ＡＳＫ056	59	ＡＳＫ413	79	ＢＳＫ005	99	ＤＳＫ250	119	ＡＳＰ234	139	ＤＳＤ251
20	ＣＳＤ081	40	ＡＳＫ056	60	ＡＳＫ001	80	ＣＳＫ089	100	ＤＳＫ250	120	ＡＳＰ410		
21	ＣＳＤ088	41	ＡＳＫ056	61	ＢＳＫ027	81	ＣＳＤ081	101	ＤＳＰ518	121	ＡＳＰ254		



第40図　出土遺物実測図(弥生時代９　各地区ピット出土遺物１)



第41図　出土遺物実測図(弥生時代10　各地区ピット出土遺物２)



第42図　出土遺物実測図(弥生時代11　各地区溝出土遺物)

A地区出土土器は13点を図示した。壺には受け口状口縁壺(103)と広口壺(105～107・115)がある。103は口縁部外面上端と下端に各々1条の凹線文を施す。105は口縁内面に扇形文を、106は口縁内面に扇形文を1帯施し、頸部内面には3条の突帯を施し、2条1対からなる棒状浮文を施す。115は小型品であり、口縁内面に縦方向の2個1対の円形浮文を四方に施す。118は台付鉢の脚台とみられる。径4㎜の小孔を巡らせる。120・121は水平口縁をもつ高杯である。122・125・127は甕である。いずれも「く」字状口縁をもつ。127は口縁端部を上方につまみ上げている。137は如意形の甕である。

B地区出土遺物(第36・37図61・77～79)

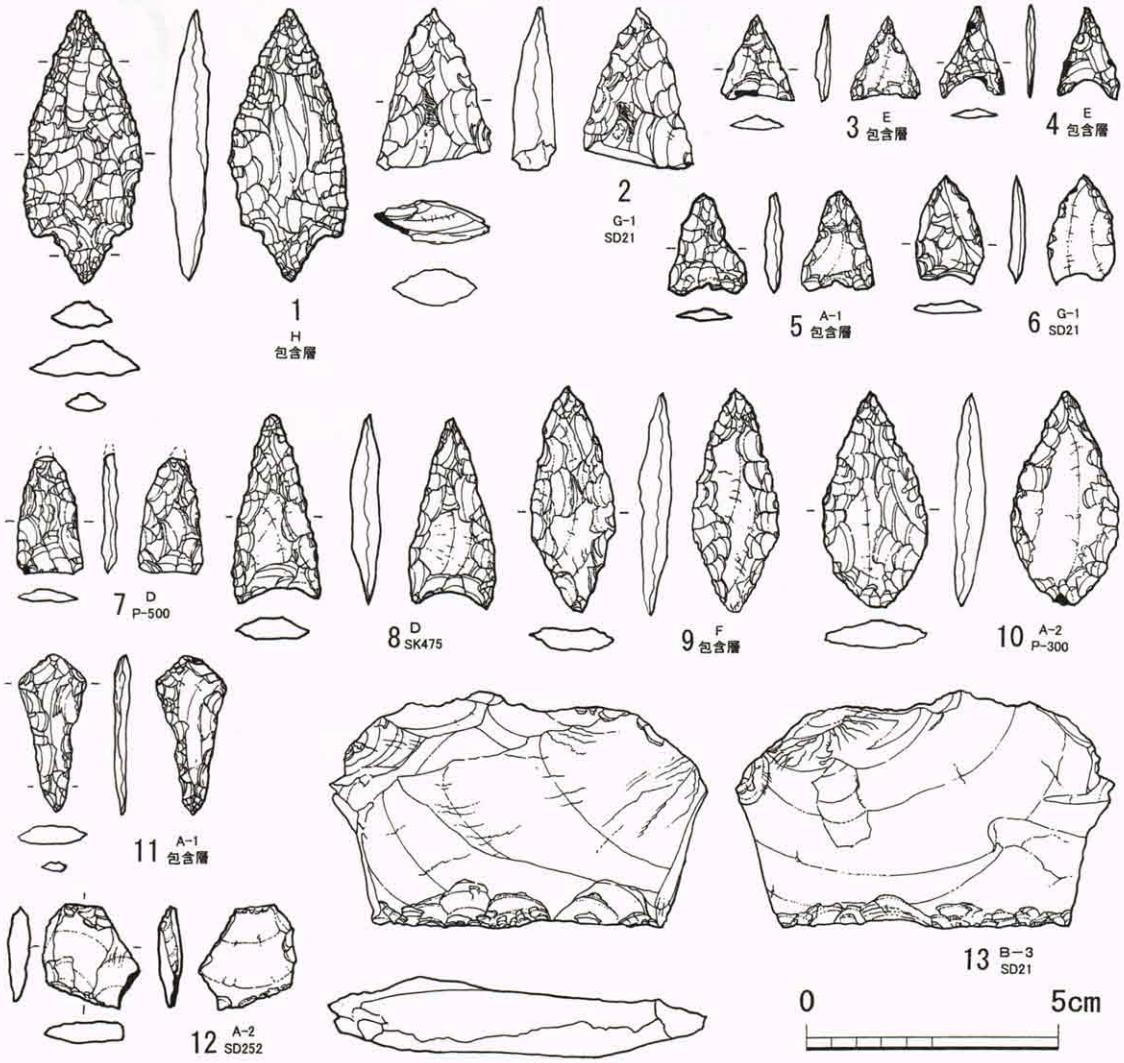
B地区出土土器には広口壺(61)・甕(77～79)がある。61は無文である。甕には如意形のものと「く」の字形のものの両者が存在する。79は口縁端部に刻目を施す。

D地区出土遺物(第40～42図101・102・104・108～112・123・124・126・128～130・132～136・138・139)

D地区出土土器は21点を図示した。壺には広口壺(108～111・134・135)のほか内湾する口縁をもつ特殊な壺(101)がある。108・109は無文である。110は頸部に2条の押圧突帯を、111は頸部に1条の突帯をそれぞれ施す。体部のみ遺存する112は8条を単位とする5帯の櫛描直線文と1帯の櫛描波状文を施文し、円形浮文を施す。甕(123・124・126・128・138・139)はいずれも「く」字状口縁をもち、口縁端部に刻目を施す。調整はタタキによるものと、縦方向のハケにより最終調整を行うものがある。また、128は内面をヘラ削りにより調整する。138は如意形の甕である。136は鉢の脚台とみられる。102はミニチュア品と思われるが共伴遺物がなく弥生時代以降のものである可能性もある。

G地区出土遺物(第40・41図113・114・116・117・131)

G地区出土土器は5点を図示した。壺には直口壺(113)、広口壺(114)がある。113は水差の可能性もある。口縁端部に1条の凹線文を施す。114には口縁内面の4か所に乳状突起が付される。その他は壺あるいは甕の底部である。　(引原茂治・岡崎研一)



第43図　出土遺物実測図(打製石器)

b．打製石器(第43図)

打製石器は総数38点を確認した。その内訳は尖頭器２点、石鏃(未製品を含む)19点、石錐３点、楔形石器６点、削器８点である。その他に多量の剥片がある。剥片の中には加工痕のある剥片(ＲＦ)５点、使用痕ある剥片(ＵＦ)８点、大型石鏃や石剣などの製作過程にでる調整剥片などがある。１と２は縄文時代草創期の有舌尖頭器(１)および尖頭器片(２)である。ともに流紋岩を石材とする。３～10は石鏃で、凹基式鏃(３～６・８)、平基式鏃(７)、尖基式鏃(９)、円基式鏃(10)がある。８～10は大型品である。11は石錐である。先端部の断面形はレンズ形で、細かな調整剥離がみられる。12は楔形石器で、上下両端に打撃による細かな剥離痕がみられ、側面部に裁断面が形成される。断面形は紡錘形である。13は比較的大型の削器で、下辺に細かなスクレーピングエッジが形成されている。これらは二上山サヌカイトを石材としている。時期は縄文時代から弥生時代中期に至るものまである。

(黒坪一樹)

c．磨製石器類(第44図～第52図)

ここに報告する資料は、弥生時代中期に製作・使用されたとみられる磨製石製品とその未製品類である。これらの遺物は、使用された当時の生活面が後の時代に破壊され、再堆積した土層から出土したものである。いわゆる包含層出土遺物である。年代指標となる土器との共判関係が明らかなものはわずかであり、弥生時代中期のどの時期に帰属するものであるかなど細かな点は不明である。このように、当該資料の大半は出土状況から見ると二次的資料であり、資料的価値は必ずしも高いとは言えない。

しかし、器種が豊富で出土量も多く、当該遺跡での磨製石器類の生産と使用の実態を知ることができると言う点において重要な資料群といえる。そこで、出土した遺物の中から細片以外はできるだけ図化し、図に掲げて解説することにした。

出土した磨製石器類は、農具、工具、武器などの器種があり、器種毎に形態的特徴によって、さらに細別することができる。器種毎に整理し、順に説明する。本文では、主に形態上の特徴を記述する。出土地点・出土層位・法量・石材などは、別表を参照されたい(付表４)。なお、石材については、山城郷土資料館橋本清一氏のご教示を得た。

ア．農具

石包丁(第44図１～11、第45図12～15・19・20)

外湾する背と外湾する刃部をもつもの(Ａ類)と、外湾する背と直線的な刃をもつもの(Ｂ類)がある。

Ａ類は杏仁形のもので、これに該当するものは、第44図１・２・３である。

１は、調整が不十分であること、紐孔が認められないことなどから未製品の可能性がある。３は、器体が厚く、器表面の調整も充分ではない。刃部は、いずれも片刃である。

Ｂ類は、半月形直線刃形のもので、４～14・19が該当する。半月形のものより、器体が長いものが多い。刃部は、いずれも片刃である。器体が長く丸みを帯びたもの(５・７)、長方形に近いもの(11)などがある。

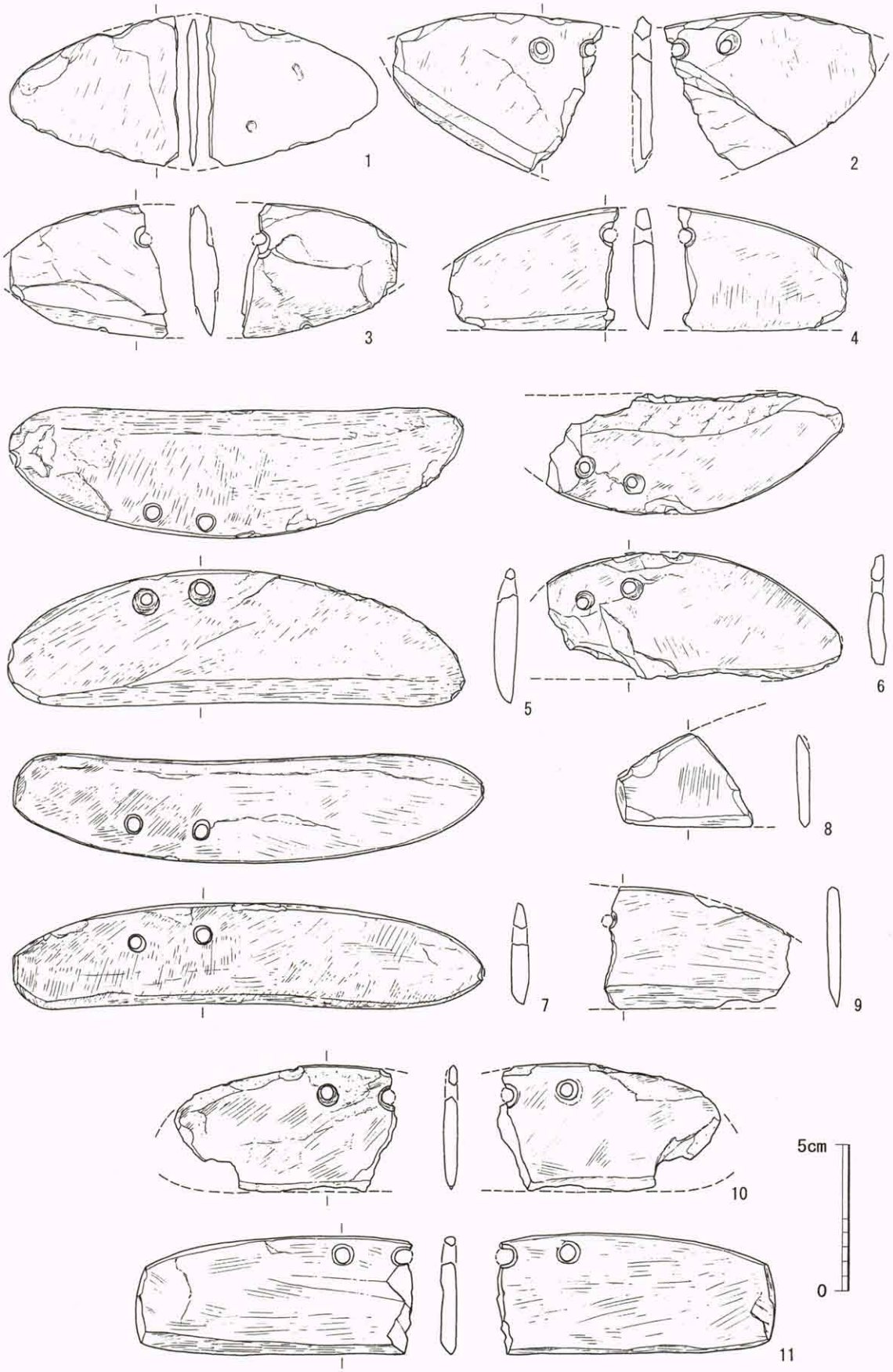
５・７は完存品である。いずれも、紐孔が器体の左寄りにある。紐孔直下を中心として、刃部に著しい摩耗が認められる。６は、不整形な素材から製作されており、器体がゆがみ、鎌状の形態を持つ。刃部に鋸刃状の剥離痕が連続して認められる。剥離痕は、表面にのみ認められるので、背面側からの表面に力がかかって生じたものである。このような使用痕は他の石包丁には認められないので、石包丁以外の磨製刃器である可能性もある。10・13・14は、粗略な製品である。

折損品(第45図15・17・19・20)

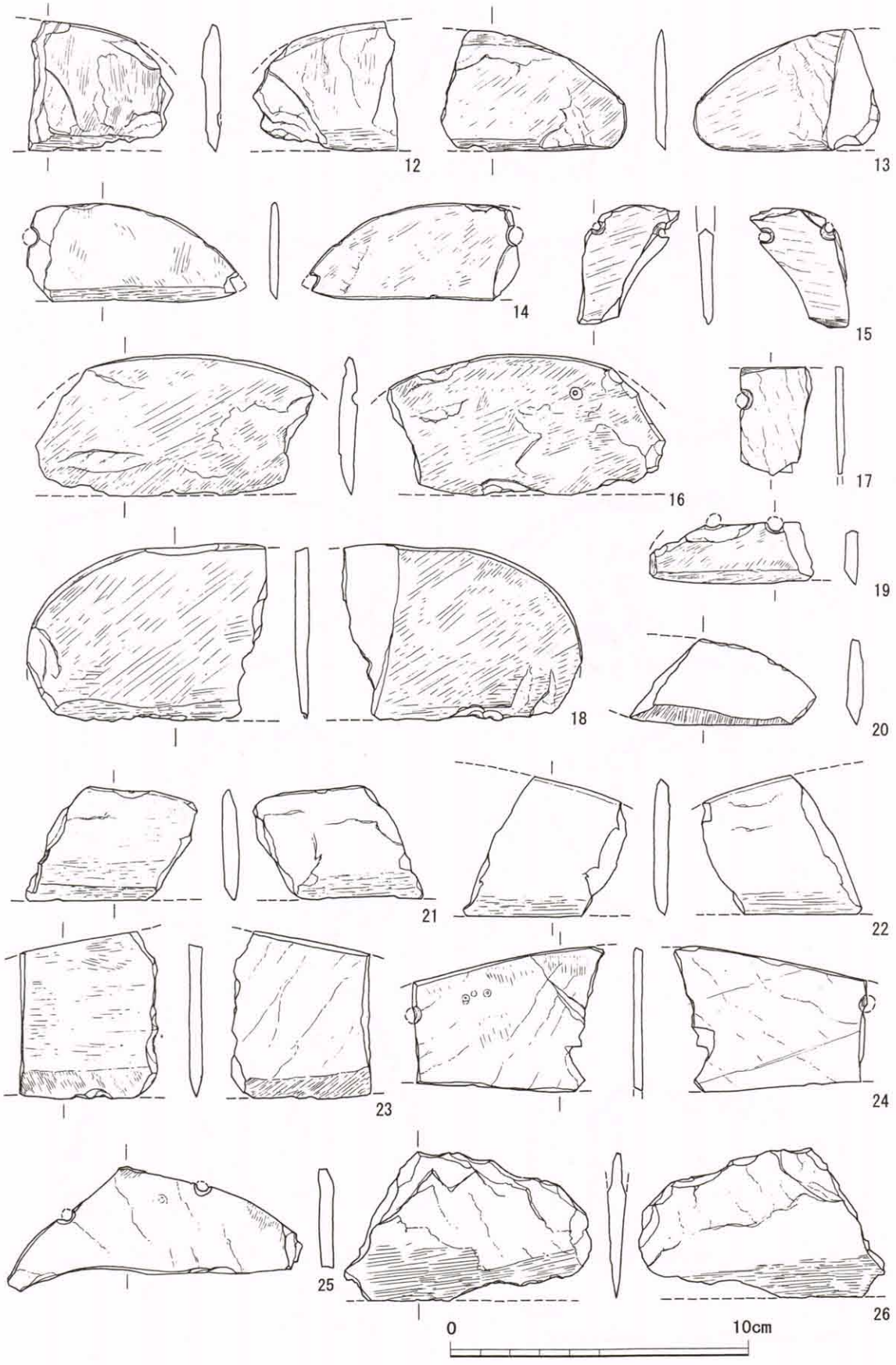
19・20はＢ類であろう。15・17は、刃部も背部も遺存せず、形状が明らかでない。

石包丁素材・未成品(第45図16・18・第46図29・30～33)

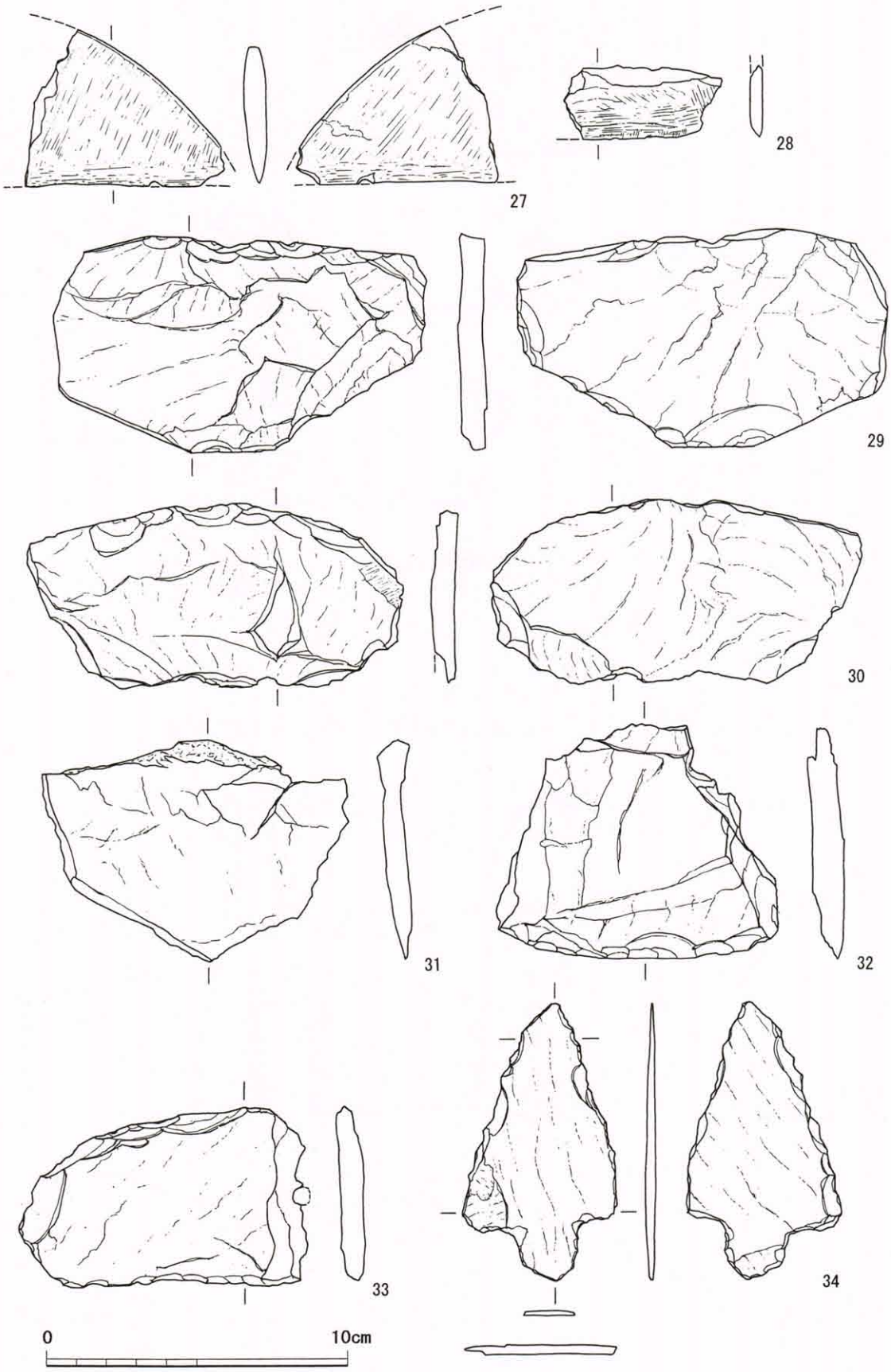
集落遺跡における未成品の存在は、集落内に素材が搬入され、集落内で加工した事実を反映するものである。集落の人々がどの様な状態の素材を集落内に運び込んだか、どの様な形の製品を作ろうとしていたかが、その観察を通じて知ることができる。



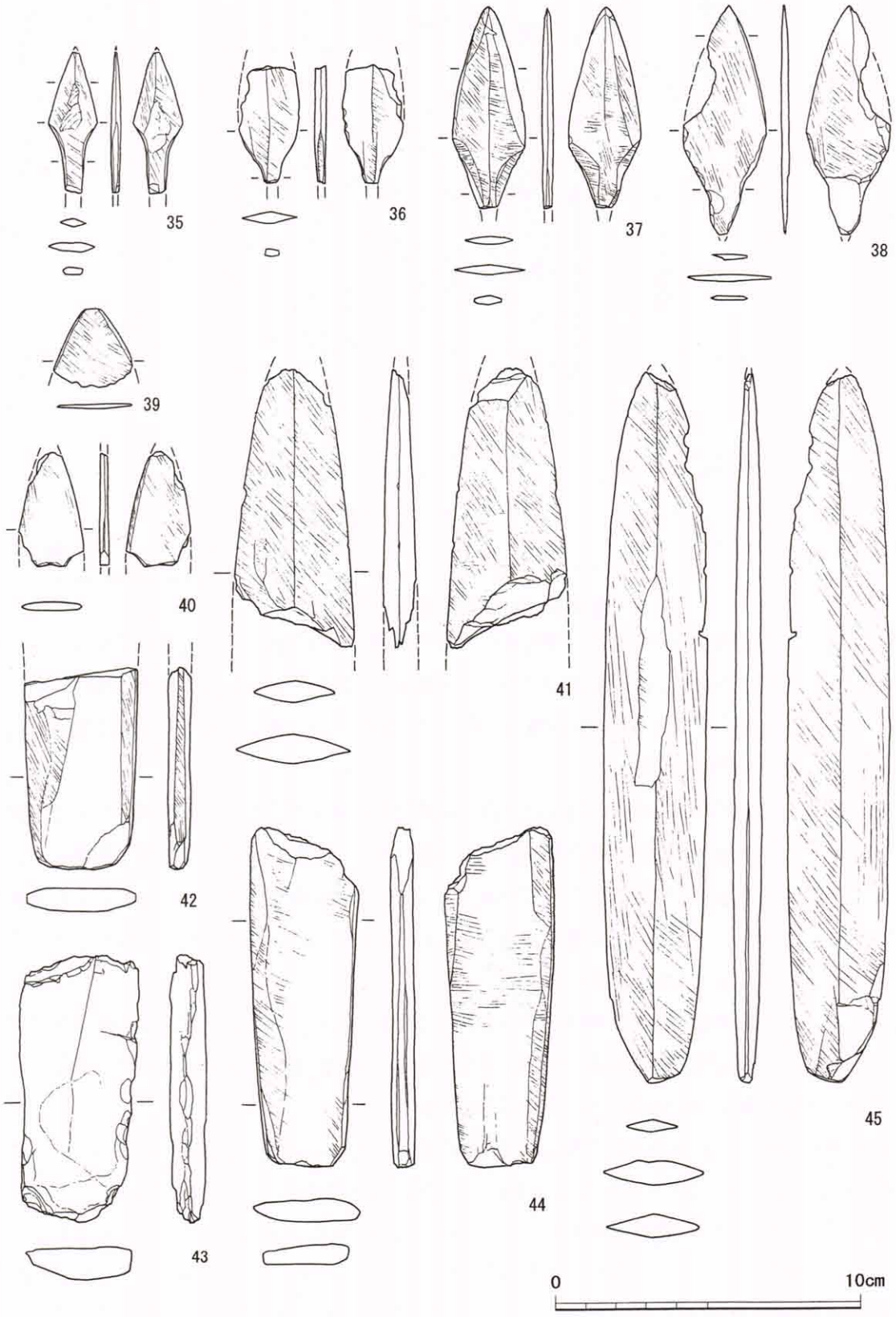
第44図　出土遺物実測図(磨製石器１)



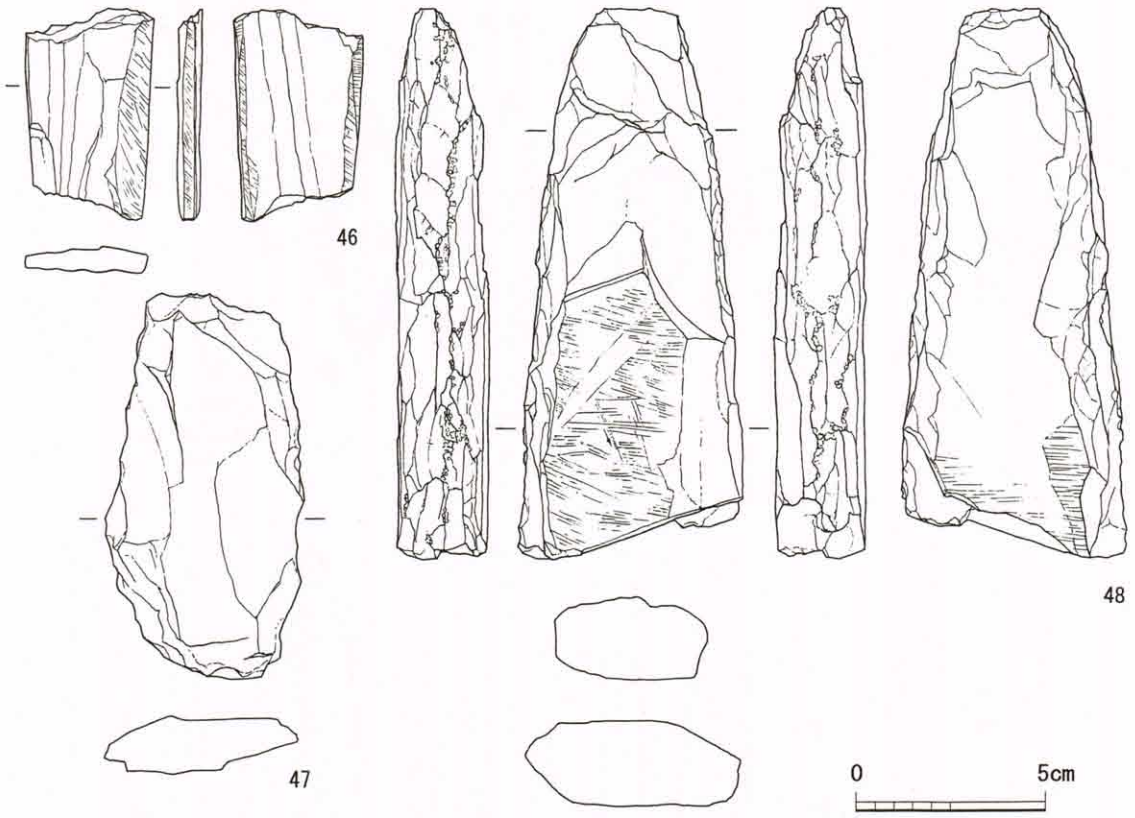
第45図　出土遺物実測図(磨製石器２)



第46図　出土遺物実測図(磨製石器３)



第47図　出土遺物実測図(磨製石器４)



第48図　出土遺物実測図(磨製石器５)

16・18は、Ｂ類の未製品である。素材剥片を主に研磨により成形し、背面と刃部を作り出し始めた段階の資料である。いずれも片刃である。刃部はこの段階でおおむね作り出されていることがわかる。18は紐孔を穿孔する直前段階まで仕上げられたものである。16は、穿孔を始めており、18の次の段階を示す資料である。

29～32は、粘板岩の板状剥片の周縁に連続する階段状剥離が認められる調整剥片である。29は石器石材として適さない軟弱な風化面が認められる。風化面を含む母岩の表層部を剥離し、利用しようとしたが適さず、廃棄されたものであろう。30は一辺が折損しており、目的とする形状を得られないことから、製作途中で放棄されたものとみられる。31・33は、加工途中で折損、廃棄されたものであろう。20は折損品である。

これらの加工剥片は、石包丁製作に関わる資料と考えられる。29は、敲打による成形がほぼ完了し、研磨による成形が開始された直後の資料である。18の直前の工程を示すものである。

石鎌・大型石包丁(第45図21～26・第46図27・28)

破片資料の中に、上記の石包丁類として分類し得ないものがある。石鎌とみられるもの(21・22)、大型石包丁の一部とみられるもの(23～27・28)などである。

21・22は、横長で非対称な形状をもつとみられ、両刃で器体が厚い。27は、半月形である。23は背部と両側を欠損し、器体の両面とも剥離している。折損後に研磨した跡が認められる。24・25には、折損後に穿孔した跡が認められる。再生を試みたが、廃棄したものであろう。25は、背部・刃部・両側面が失われた折損品である。26・28は刃部だけが遺存したものである。28は両刃

である。27は半月形、両刃である。器体が厚い。

イ．武器類(第46～48・51図)

磨製石鏃(第47図35～38)

35～38は、有茎の磨製石鏃である。35は、断面長方形の長い茎と鏃身に鋭い刃部をもつ。36は鏃身が丸みを帯びた柳葉形である。鏑が発達しており、鏃身は断面菱形である。37は、35・36と比べると粗雑な作りである。刃部と茎に未調整の部分残しているが、刃部が鋭く研がれており、完成品とみられる。38は、明瞭な鏑を作らず、鏃身は扁平である。軟質の素材で作られた粗製品である。

磨製石鏃未製品(第46図34)

厚さ２～４㎜ほどの薄い素材を用いたものである。薄板の周縁を加工して有茎磨製石鏃の平面形を作り出したものである。風化の進んだ粘板岩を用いており、製品として完成しても実用的機能はあまり期待できない。38のような鏑を形成しない扁平な磨製石鏃は、こうした素材から製作されたのであろう。

磨製石剣(第47図39～42・44～45)

出土した資料は、いずれも鉄剣形磨製石剣である。

39は、厚さ２㎜ほどの薄いものである。磨製石鏃38のように、薄く脆弱である。実用性に乏しいものであり、儀器などの非実用品としてとして製作されたものであろうか。

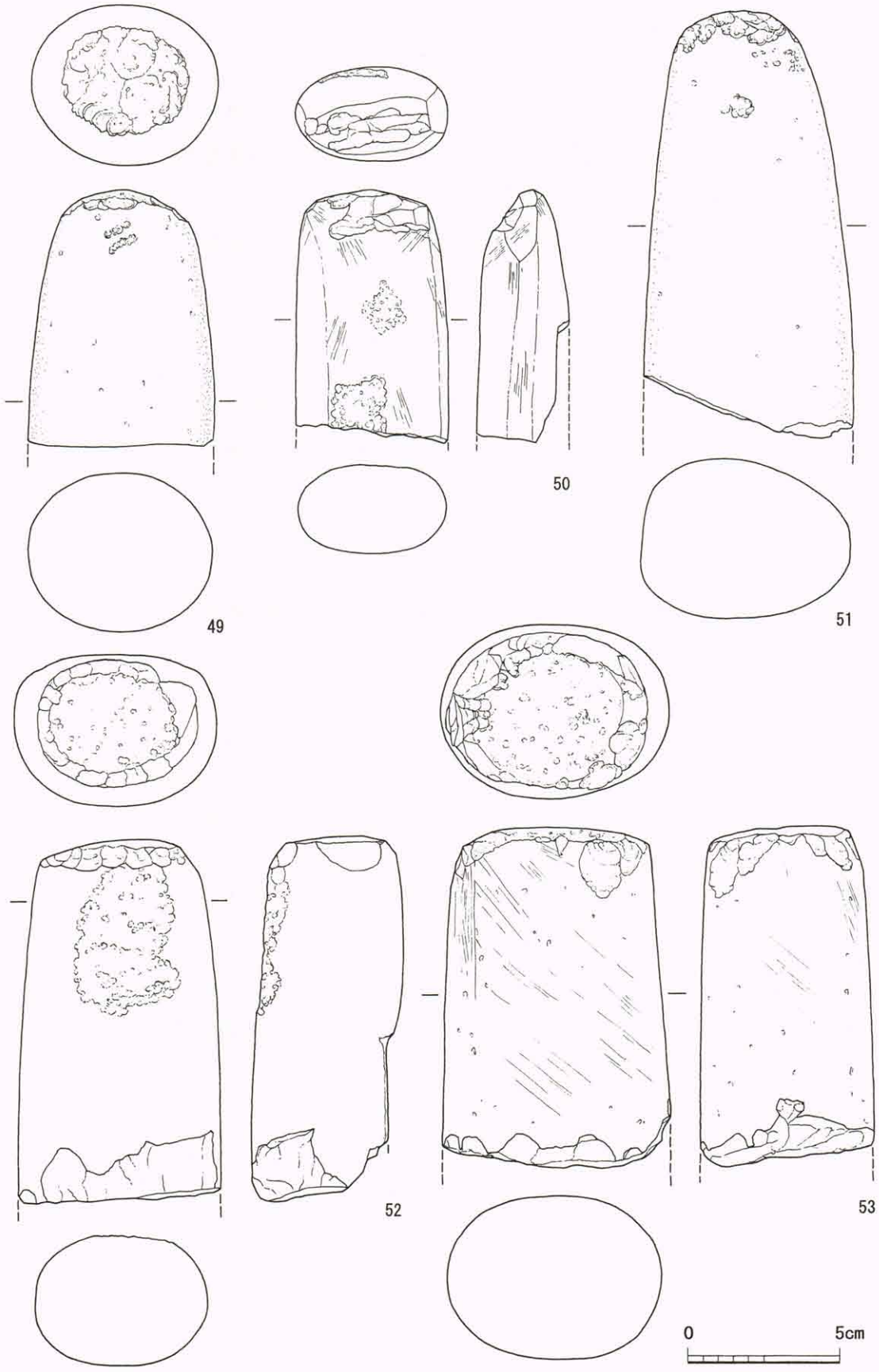
40・41は、折損して切先だけが遺存したものである。40は、薄作りで鏑がない。小形の粗製品である。41は、良質の素材が用いられている。鏑が明瞭で、身の断面は菱形である。刃部は鋭く研ぎ出されている。42・44は、折損して柄部が遺存したものである。両側縁に研磨調整による刃潰しが施されている。どちらも良質の素材を用いているが、完成度が低く、完成間近の未製品か、やや粗製の製品とみられる。

45は完存品である。良質の素材が用いられている。全長21.1cm、最大幅3.3cm、最大厚1.25cmを測る。鏑は、切先から柄尻まで明瞭である。刃は鋭く研ぎ出されている。身部は菱形の断面形をもつ。柄部には両側縁に研磨による刃潰しが施されている。刃潰しは、柄尻から13cmのところまで施されている。器体の一部に未加工面がみられるのと、柄が非対称に作られている点を除けば完成度が高い。これらは、素材剥片の形状に制約されたことによるものと思われる。

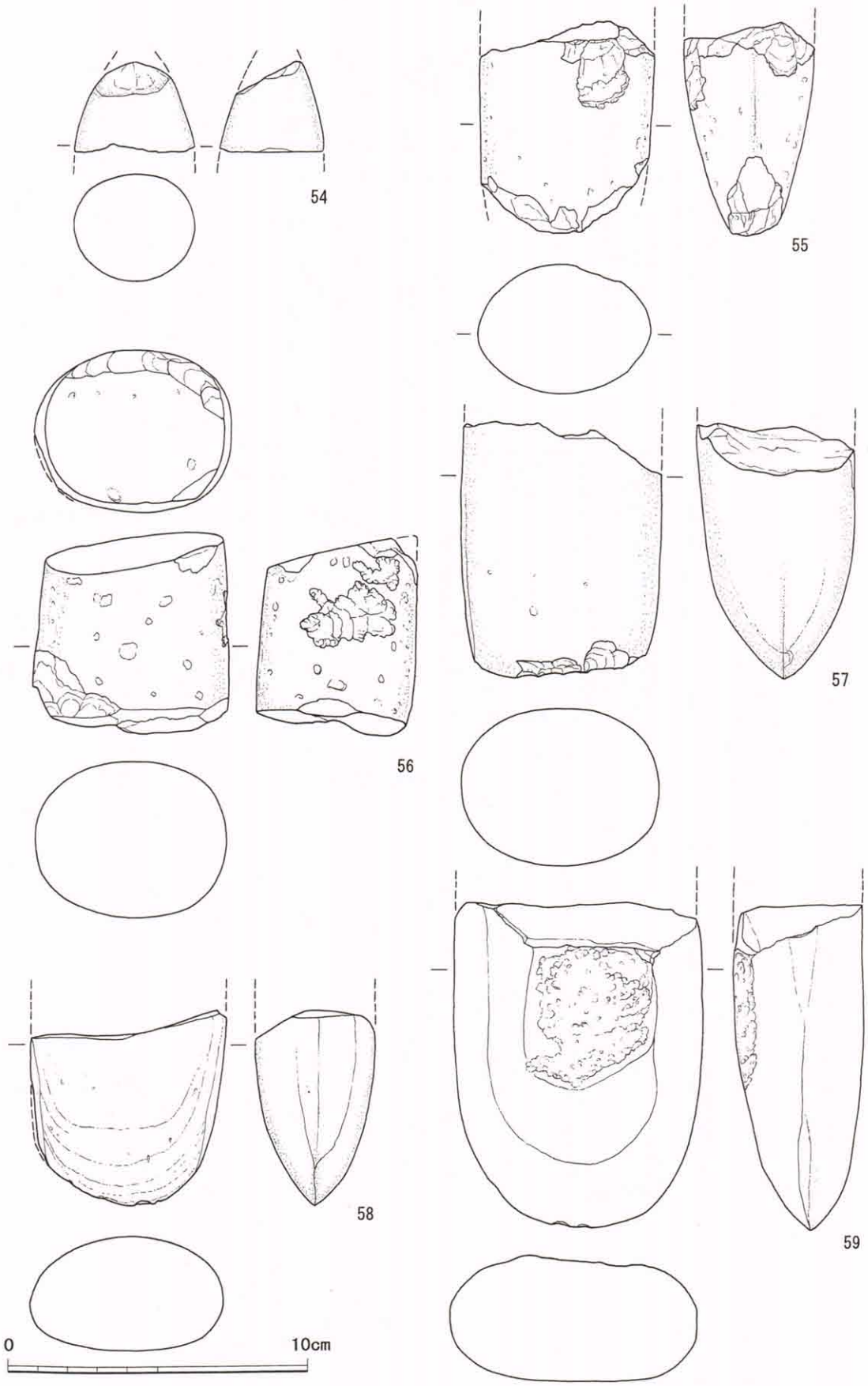
磨製石剣未製品(第47図43・第48図46～48・第51図66)

鉄剣形石剣の未製品とみられる資料があるので取り上げておく。43・46・47は基部であろう。66もその可能性がある。43は、素材を剣としておよその形状に整える際に折損したものであろう。47は、調整剥離を経て研磨直前の段階に達したが、折損したものであろう。小形の扁平片刃石斧の素材として転用を図った可能性がある。46は、敲打による整形が完了し、研磨による成形が開始された段階のものであろう。身に先行して側縁の成形がおこなわれている。

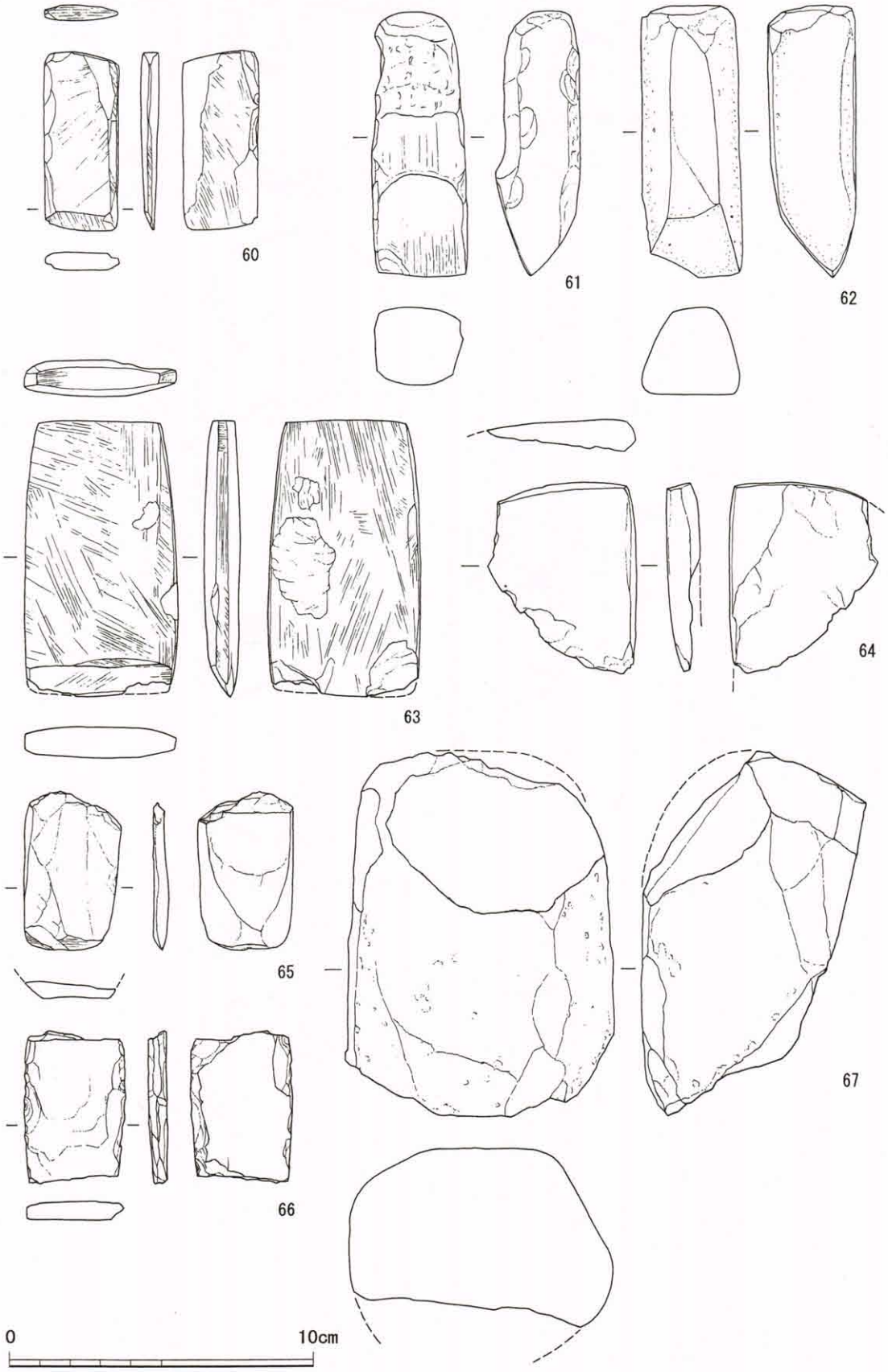
48は、身と基部が失われ、先端部だけが遺存したものである。幅６cm、厚さ２cmを越える大型の未製品である。敲打による成形が完了し、研磨成形が始まった段階の資料である。身は、敲打



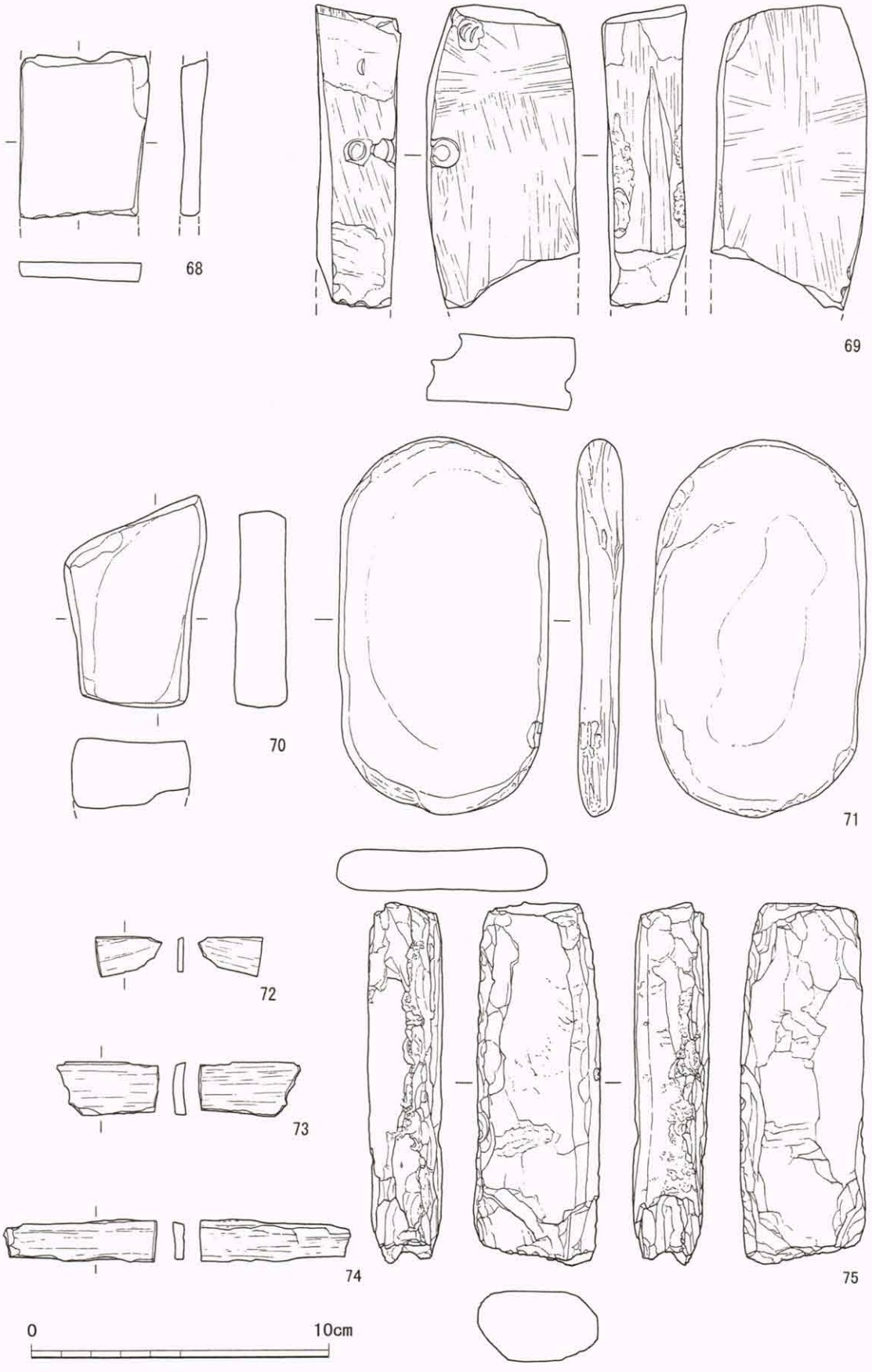
第49図　出土遺物実測図(磨製石器６)



第50図　出土遺物実測図(磨製石器７)



第51図　出土遺物実測図(磨製石器８)



第52図　出土遺物実測図(磨製石器９)

成形により、およその形が作り出され、研磨により扁平に整形されている。両側には階段状剥離痕が連続して認められ、研磨は認められない。この未製品からどのような製品を作ろうとしたのであろうか。45は厚さ１cm、幅３cm未満であり、このような法量を持つ鉄剣形磨製石剣を製作するには大きすぎる観がある。この未製品は法量で倍以上あるので、研ぎ出すには相当な手間を必要とし無駄も多い。45は身に素材剥離段階に生じた面を器体にとどめており、素材はこのように大きなものではない。とすると、この未製品は、銅剣形石剣のような大型品か、手間をかけて素材の中心まで研ぎ出す優品製作を意図したものと言うことができる。

ウ．工具類

石斧類（第49図～第52図）

太型蛤刃石斧（第49図49・50～53、第50図54～59）

49～54は、太型蛤刃石斧の基部である。54は、頭頂部だけが遺存したものである。55・57～59は刃部である。50は側縁に面を形成しており、身がやや扁平な形状である。扁平両刃石斧の可能性もある。

50・52・56・59の身には、石器加工台として利用された結果生じたとみられる、あばた状の使用痕がある。49・51の頭頂部、55の先端部には、ハンマーとして転用した結果生じたとみられる、あばた状の潰れが認められる。

56は、基部と刃部が折損したものである。基部側の折損面を丁寧に研磨し、再生を図っている。

太型蛤刃石斧　未製品（第51図67）　上端の一部と下端が折損している。器表全面に、敲打によるあばた状の成形痕が残る。転石を素材とし、粗加工の後に器体表面の成形を始めた段階で折損した資料である。

扁平片刃石斧（第51図60・63～65）　60・65は、小形品である。60・63は、良質の粘板岩を用いた製品である。64は、折損して基部だけが遺存したものである。65は、不整形な縦長剥片を素材としたものである。刃部と側縁の一部を加工しただけもので、完成度は低い。折損品を再利用したものだろう。66は磨製石剣の未製品が折損したものとみられるが、60は、こうした精良な石材を有する折損品が再利用された可能性がある。

抉入柱状両刃石斧（第51図61）　転礫を素材とするもので、器体に自然面を残している。抉りが浅く、器体の加工度も低い。粗製品である。

柱状片刃石斧（第51図62）　刃部と側縁の一部を欠損する。台形の断面をもつ。器表面は、丁寧に研磨されている。

砥石（第52図68～71）　68は小形扁平な砥石である。69は、側縁に筋状の使用痕跡が認められる。いわゆる筋石である。回転研磨痕跡の認められる円形の凹みが３か所に認められる。玉生産に関わる砥石と考えられる。70は、断面長方形の不定型な砥石である。折損品を再加工して利用したとみられるものである。71粘板岩の転石製である。扁平な自然石を利用した砥石である。

石鋸（第52図72～74）　紅簾片岩の剥片である。いずれも細片であり、緑色凝灰岩製管玉製作の際に、施溝具として用いられる石鋸の折損したものであろう。

付表4　磨製石器法量表

番号	器種名称	出土地点・層位	法量 (cm)			石材	備考
			最大長	最大幅	最大厚		
1	石庖丁	ＡＳＰ144	(5.60)	4.90	0.35	頁岩ないし粘板岩	
2	石庖丁	ＡＳＸ056(ＳＷ区Ｒ－２)	(6.90)	(5.10)	0.64	千枚岩	
3	石庖丁	Ｂ１・２区間アゼ第４層	5.15	4.50	0.95	頁岩ないし粘板岩	
4	石庖丁	Ｅ－３トレンチ包含層	(5.70)	4.10	0.80	頁岩ないし粘板岩	
5	石庖丁	Ｂ－３・４区間アゼ第３層	15.40	4.40	0.85	千枚岩	
6	石庖丁	Ｄ地区包含層	(9.90)	4.10	0.69	千枚岩	
7	石庖丁	ＡＳＫ195	15.80	3.40	0.60	千枚岩	
8	石庖丁	ＢＳＤ032(３区第３層)	(4.60)	(3.10)	0.40	千枚岩	
9	石庖丁	ＣＳＫ043(ＳＷ区)	(6.20)	4.10	0.49	千枚岩	
10	石庖丁	ＧＳＤ021(５区第３層)	(7.45)	4.20	0.52	千枚岩	
11	石庖丁	ＤＳＰ224	(9.30)	4.00	0.65	千枚岩	
12	石庖丁	ＧＳＤ021(６区第２層)	(4.70)	4.30	0.62	千枚岩	
13	石庖丁	ＣＳＫ101 *1	(6.20)	4.05	0.43	千枚岩	
14	石庖丁	Ｂ－３・４区間アゼ	(7.10)	3.25	0.35	千枚岩	
15	石庖丁	ＡＳＰ150	(3.30)	4.00	0.49	千枚岩	
16	石庖丁未製品	Ｅ－３包含層	(9.40)	4.65	0.65	千枚岩	
17	石庖丁	ＢＳＤ032(２区第２層)	(2.35)	(3.60)	0.31	千枚岩	
18	石庖丁未製品	ＧＳＰ914	(8.00)	5.80	0.51	千枚岩	
19	石庖丁	ＢＳＤ021(１区第４層)	(5.50)	(2.10)	0.55	千枚岩	
20	石庖丁	ＡＳＨ170(埋土中) *2	(6.30)	(2.80)	0.56	千枚岩	
21	石鏃	Ｂ－１・２区間アゼ第３層	(5.77)	(3.75)	0.55	頁岩ないし粘板岩	
22	石鏃	Ｂ－３・４区間アゼ第３層	(5.50)	(4.60)	0.61	頁岩ないし粘板岩	
23	大型石庖丁	ＣＳＤ069	(4.70)	(5.60)	0.51	頁岩ないし粘板岩	
24	大型石庖丁	Ｇ－２区包含層	(6.55)	(4.85)	0.36	千枚岩	
25	大型石庖丁	ＧＳＤ021(６区第２層)	(9.90)	(3.65)	0.54	千枚岩	
26	大型石庖丁	ＡＳＰ415	(8.20)	(5.10)	0.62	千枚岩	
27	大型石庖丁	ＢＳＤ032(３区)	(6.60)	(5.10)	0.84	千枚岩？	
28	大型石庖丁	ＧＳＫ367	(5.30)	(2.30)	0.44	千枚岩	
29	石庖丁未製品	Ｂ－３・４区間アゼ	(12.30)	(7.10)	0.89	頁岩ないし粘板岩	
30	石庖丁未製品	Ｇ－２区包含層	(12.50)	(6.00)	0.81	千枚岩	
31	石庖丁未製品	ＣＳＰ052	(10.10)	(7.20)	1.00	頁岩ないし粘板岩	
32	石庖丁未製品	ＢＳＤ032(３区第２層)	(9.30)	(7.65)	1.10	千枚岩	
33	石庖丁未製品	ＧＳＤ021(５区第２層)	(9.50)	(6.00)	0.85	千枚岩	
34	磨製石鏃未製品	ＡＳＰ244	9.20	5.10	0.35	頁岩ないし粘板岩	
35	磨製石鏃	Ｅ地区表採	(4.50)	(1.60)	0.35	頁岩ないし粘板岩	
36	磨製石鏃	Ｂ－３・４区間アゼ第３層	(3.75)	1.90	0.40	頁岩ないし粘板岩	
37	磨製石鏃	Ｇ－２区南東部床土	(6.45)	2.40	0.37	頁岩ないし粘板岩	
38	磨製石鏃	ＧＳＰ644	(7.35)	2.75	0.27	頁岩ないし粘板岩	
39	磨製石剣	ＡＳＰ060	(2.50)	(2.55)	1.50	泥岩ホルンフェルス	
40	磨製石剣	ＡＳＰ233	(13.70)	(2.05)	0.30	珪質頁岩ないし珪質粘板岩	
41	磨製石剣	ＤＳＰ074	(6.55)	3.90	1.00	千枚岩	
42	磨製石剣	Ｂ－３・４区間アゼ第３層	(9.00)	3.70	0.75	千枚岩	
43	磨製石剣未製品	ＤＳＤ500(５区)	(8.70)	3.90	1.25	千枚岩	
44	磨製石剣	ＧＳＤ021(５区第１層)	(10.95)	3.55	0.80	千枚岩	
45	磨製石剣	ＧＳＤ021(５区第１層)	(21.10)	3.30	0.85	珪質頁岩ないし珪質粘板岩	
46	磨製石剣未製品	ＢＳＤ032(３区第２層)	(5.50)	3.40	0.60	珪質頁岩ないし珪質粘板岩	
47	磨製石剣未製品	ＡＳＰ408	(10.30)	(5.20)	(1.50)	千枚岩	
48	磨製石剣未製品	Ｂ－３・４区間アゼ第３層	(14.35)	5.90	2.35	珪質頁岩ないし珪質粘板岩	
49	太型蛤刃石斧	ＧＳＥ492	(8.40)	6.15	5.25	砂質ホルンフェルス	
50	太型蛤刃石斧	ＤＳＤ500(３区)	(8.30)	5.05	3.00	砂質ホルンフェルス	
51	太型蛤刃石斧	ＡＳＰ285	(14.00)	6.95	5.40	泥質ホルンフェルス	
52	太型蛤刃石斧	ＣＳＤ088	(12.00)	6.70	4.70	砂質ホルンフェルス	
53	太型蛤刃石斧	ＢＳＤ021(１区)	(11.20)	7.60	5.75	泥質ホルンフェルス	
54	太型蛤刃石斧	ＡＳＫ054	(3.00)	4.00	3.50	砂質ホルンフェルス	

＊計測値の () は残存値を示す。

番号	器種名称	出土地点・層位	法量(cm)			石材	備考
			最大長	最大幅	最大厚		
55	太型蛤刃石斧	ＣＳＤ091	(6.95)	5.75	4.35	玢岩	
56	太型蛤刃石斧	ＣＳＤ079	(6.55)	6.50	5.25	玢岩	
57	太型蛤刃石斧	ＡＳＫ195	(8.50)	6.60	5.25	斑糲岩？	
58	太型蛤刃石斧	ＧＳＤ021(５区第２層)	(6.45)	6.50	4.00	砂質ホルンフェルス	
59	太型蛤刃石斧	ＤＳＫ243	(10.75)	8.15	4.35	砂質ホルンフェルス？	
60	扁平片刃石斧	Ｅ－３トレンチＳＰ614	5.75	2.45	0.60	千枚岩	
61	抉入柱状両刃石斧	ＡＳＫ056(ＳＥ区)	8.55	3.10	2.75	珪質頁岩ないし珪質粘板岩	
62	柱状片刃石斧	Ｂ－３・４区間アゼ第３層	8.75	3.25	2.85	砂質ホルンフェルス	
63	扁平片刃石斧	ＤＳＤ500(４区)	9.00	5.00	1.15	千枚岩	
64	扁平片刃石斧	Ｂ－３・４区間アゼ第３層	(6.20)	(4.80)	(1.00)	珪質頁岩ないし珪質粘板岩	
65	扁平片刃石斧	ＢＳＸ033(埋土)	(5.00)	(3.10)	(0.70)	千枚岩	
66	磨製石剣未製品	ＢＳＤ032(３区第３層)	(4.90)	3.35	0.65	千枚岩	
67	太型蛤刃石斧未製品	ＣＳＤ091	(11.80)	(8.60)	(5.50)	砂質ホルンフェルス	
68	砥石	Ｇ－２地区包含層	(5.50)	4.40	0.90	細粒砂岩	
69	砥石	ＣＳＤ081 *3	(10.10)	5.00	2.80	流紋岩	
70	砥石	ＢＳＤ032(２区第１層)	7.10	4.60	2.30	泥質ホルンフェルス	
71	砥石	ＧＳＰ848 *4	12.60	7.10	1.60	千枚岩	
72	石鋸	Ｇ－２地区包含層	(2.20)	(1.35)	(0.20)	紅簾石片岩	
73	石鋸	ＡＳＫ056	(3.40)	(1.75)	(0.39)	紅簾石片岩	
74	石鋸	ＧＳＰ656	(5.10)	(1.35)	(0.40)	紅簾石片岩	
75	ハンマー	Ｅ－３トレンチ包含層	(8.80)	4.20	2.45	珪質頁岩ないし珪質粘板岩	

＊計測値の()は残存値を示す。

＊１　ＣＳＫ101は調査時ＣＳＤ101　　＊２　ＡＳＨ170は調査時ＡＳＨ178

＊３　調査時ＣＳＫ104　　＊４　ＡＳＫ012と同一遺構

ハンマー(第52図75)　平面が長方形、断面が楕円形のチャートの転礫を利用したハンマーである。側縁に、敲打によって生じたあばた状の使用痕が連続して認められる。

(田代　弘)

５．奈良～平安時代の遺構・遺物

Ａ．検出遺構

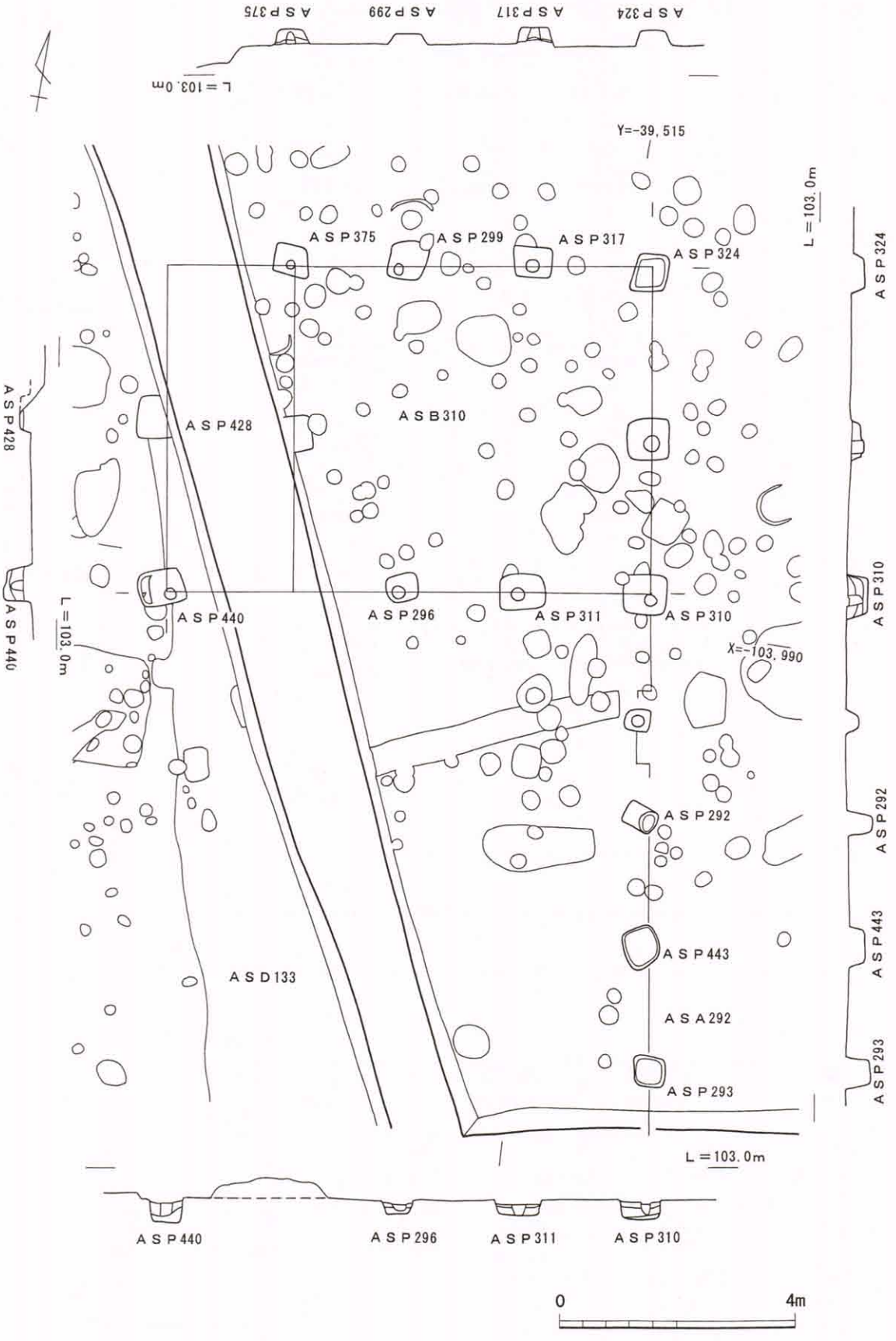
奈良～平安時代の遺構は、Ａ・Ｃ・Ｄ・Ｇ・Ｈ・Ｉの各地区で検出した。各地区で検出された遺構数は、それほど多くない。また、Ｂ地区では、時塚１号墳の周溝埋土の上・中層から奈良～平安時代の土器が多数出土しているものの、１号墳周辺で顕著な遺構は検出されなかった。

ａ．Ａ地区検出遺構(第４図)

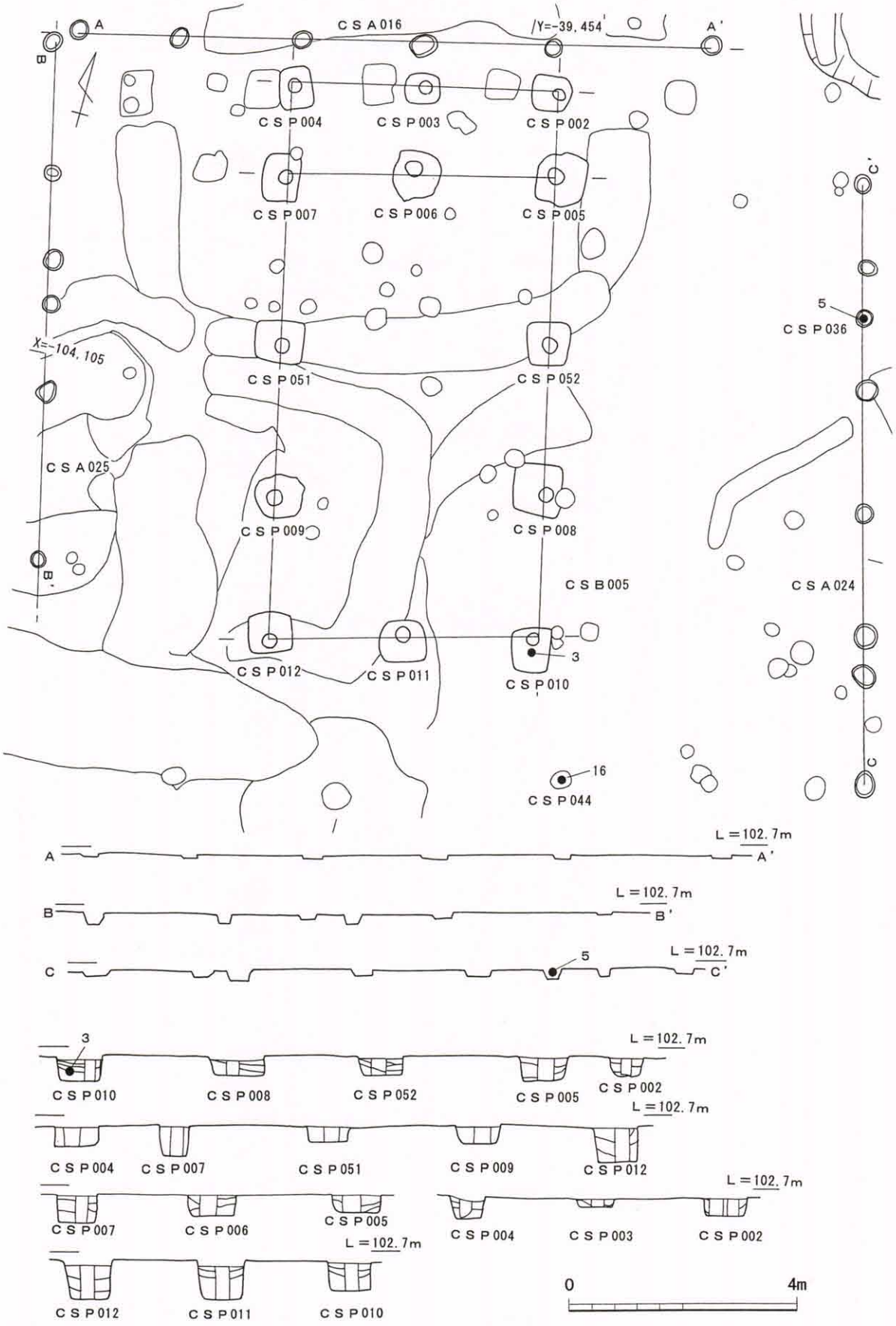
Ａ地区では掘立柱建物跡１棟、柵１条、溝１条のほか、多数の柱穴・小ピットを検出した。

掘立柱建物跡ＡＳＢ310(第４・53図)　Ａ地区南側で検出した掘立柱建物跡で、西側に庇を持つ。身舎の規模は、南北２間(5.5m)、東西３間(6.0m)で、身舎の西妻から庇までは2.2mを測る。柱穴掘形は方形で、一辺0.5～0.7m、深さ約0.3mを測り、柱痕は径約0.2mである。主軸はN81°Ｅである。桁行の柱間は1.7～2.2m、梁間は2.6～3.0mである。出土遺物は、須恵器片と土師器片がわずかに出土した。

柵ＡＳＡ292(第４・53図)　掘立柱建物跡ＡＳＢ310の東妻柱列を南に延長したところで検出された柵である。４間(8.1m)分を検出し、さらに南へ延びると考えられる。柱穴掘形は方形で、一辺0.3～0.6m、深さ0.2～0.4mである。出土遺物は土師器片がわずかに出土した。



第53図　ＡＳＢ310、ＡＳＡ292実測図



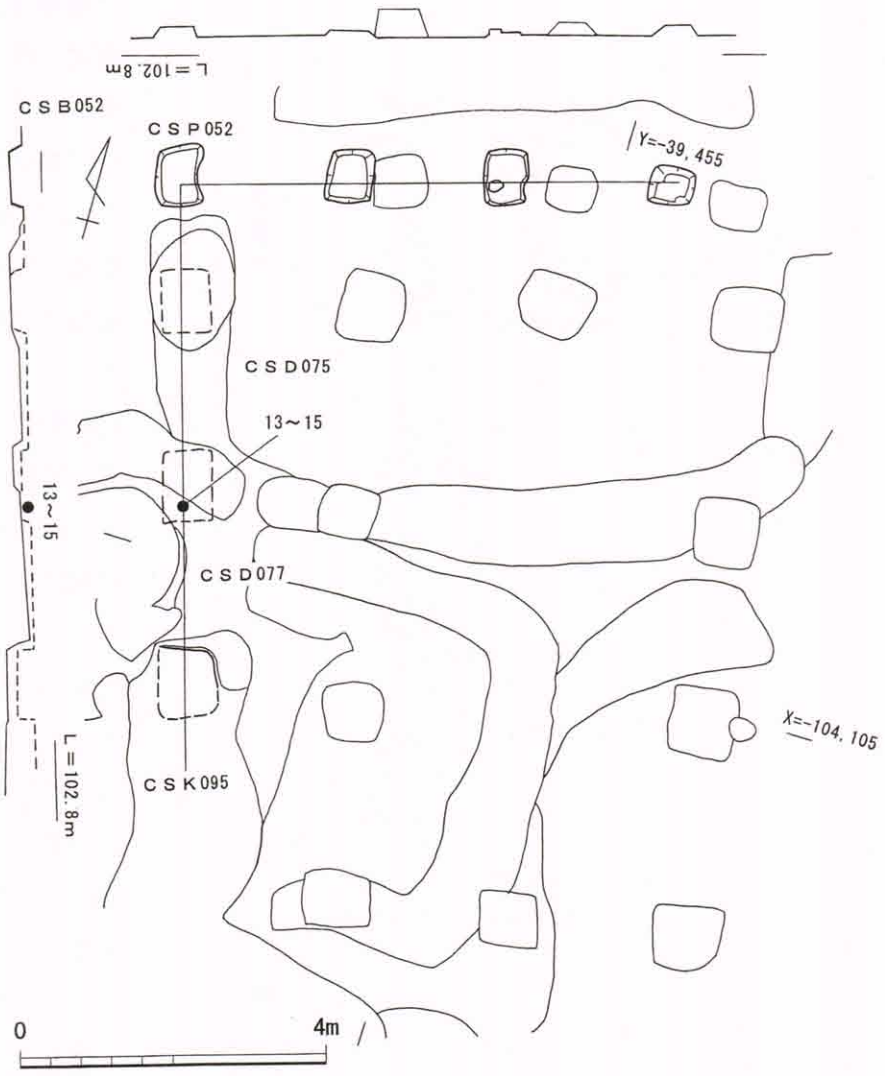
第54図　ＣＳＢ005、ＣＳＡ025・016・024実測図

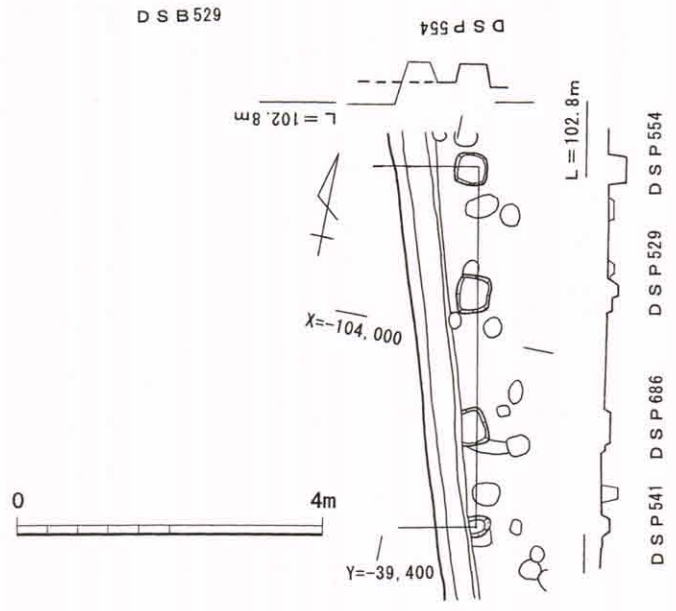
溝ＡＳＤ406（第４図）　Ａ－２地区中央付近で検出した溝である。全長6.4ｍ、幅0.4ｍ、深さ0.2ｍを測る。主軸はＮ75°Ｅである。遺物は出土しなかった。京都府教育委員会が調査した第12次調査地で検出されたＳＤ12041の延長に当たると考えられる。また、主軸がＡＳＢ310とほぼ同一方位である。

ｂ．Ｃ地区検出遺構（第６図）

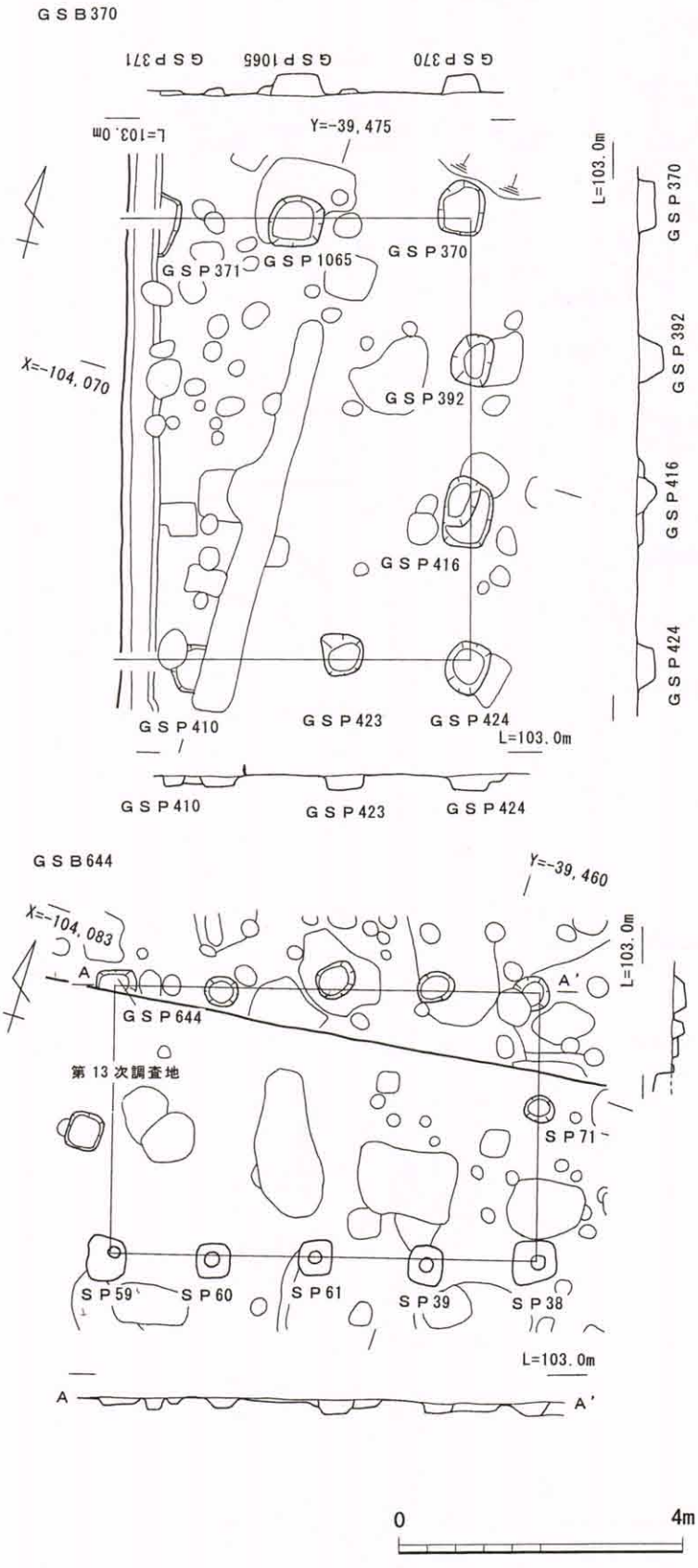
Ｃ地区では、掘立柱建物跡１棟、柵４条、井戸１基、土坑１基のほか、多数の柱穴・小ピットを検出した。このほかに掘立柱建物跡の可能性があるものが１棟ある。

掘立柱建物跡ＣＳＢ005（第６・54図）　Ｃ－２地区中央で検出した掘立柱建物跡で、北側に庇を持つ。身舎





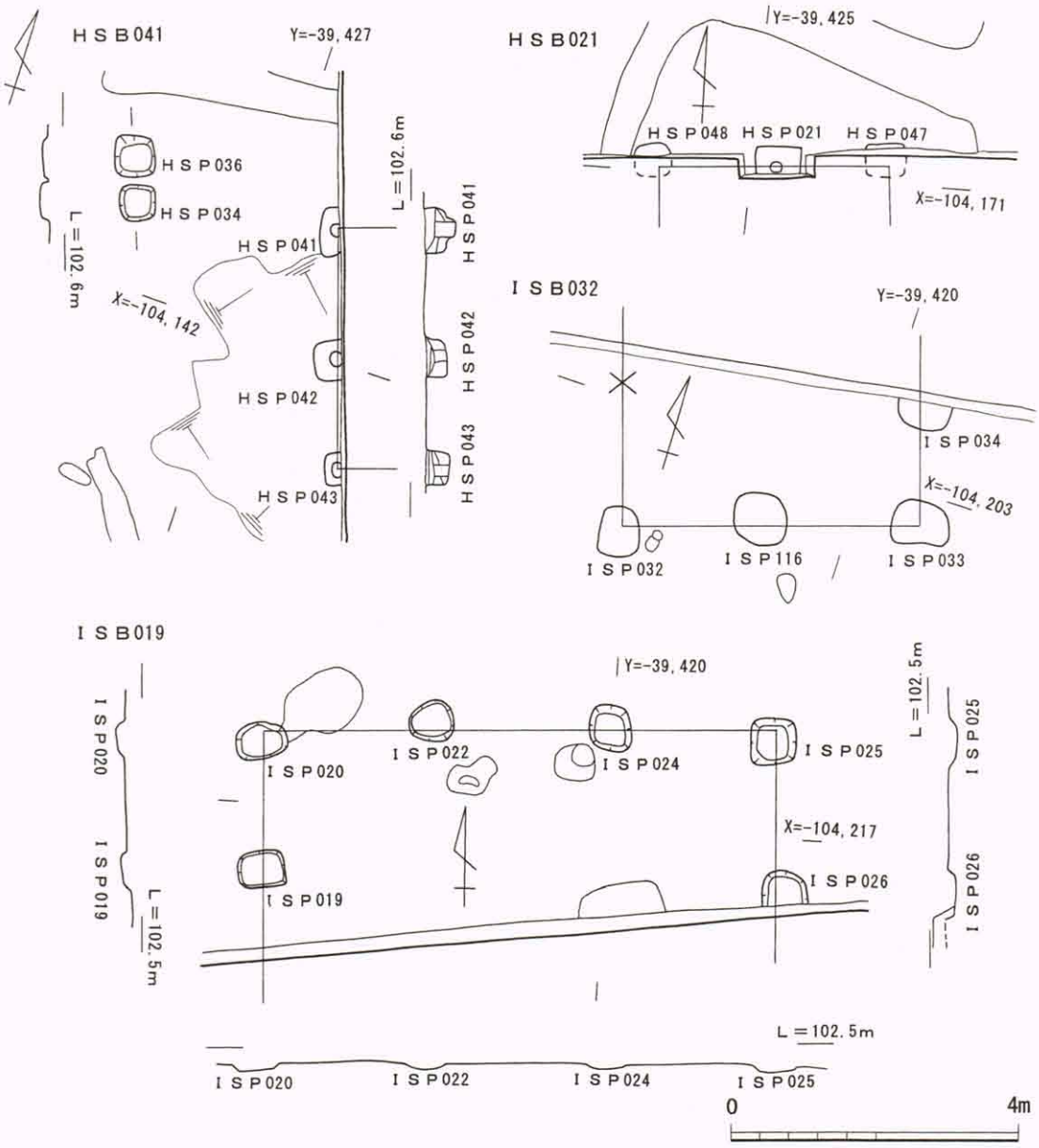
第55図　ＣＳＡ052、ＤＳＢ529実測図



第56図　ＧＳＢ370・644実測図

の規模は、東西２間(4.8m)、南北３間(8.2m)で、身舎の北妻から庇までは1.6mを測る。柱穴掘形は方形で、一辺0.7～0.9mを測り、柱痕は直径0.2～0.3mである。建物の隅にあたる柱穴は深く掘り込まれ、0.5～0.7mを測る。その他の柱穴は比較的浅く、0.25m前後である。建物の主軸はN12°Wである。桁行の柱間は2.4～2.9m、梁間は2.2～2.4mである。遺物としては、南東隅の柱穴ＣＳＰ010から須恵器杯(第62図３)が出土した。上述の掘立柱建物跡ＡＳＢ310におおむね直交する建物跡である。また、ＣＳＢ005は後述するように東・西・北側の三方を柵によって囲まれていた可能性がある。

柵ＣＳＡ016・024・025(第６・54図)　ＣＳＢ005の東・北・西を画する柵と考えられる。北のＣＳＡ016と西のＣＳＡ025は近接してＬ字形に屈曲するが、ＣＳＡ016と東のＣＳＡ024は3.5mほど離れている。それぞれの規模は、ＣＳＡ024が５間(10.4m)、ＣＳＡ016が５間(11.2m)、ＣＳＡ025が４間(9.0m)を測る。主軸はＣＳＢ005とほぼ同一の主軸を採る。ＣＳＡ024の北から３番目の柱穴ＣＳＰ036から平安時代中期の須恵器杯(第62図５)が出土し

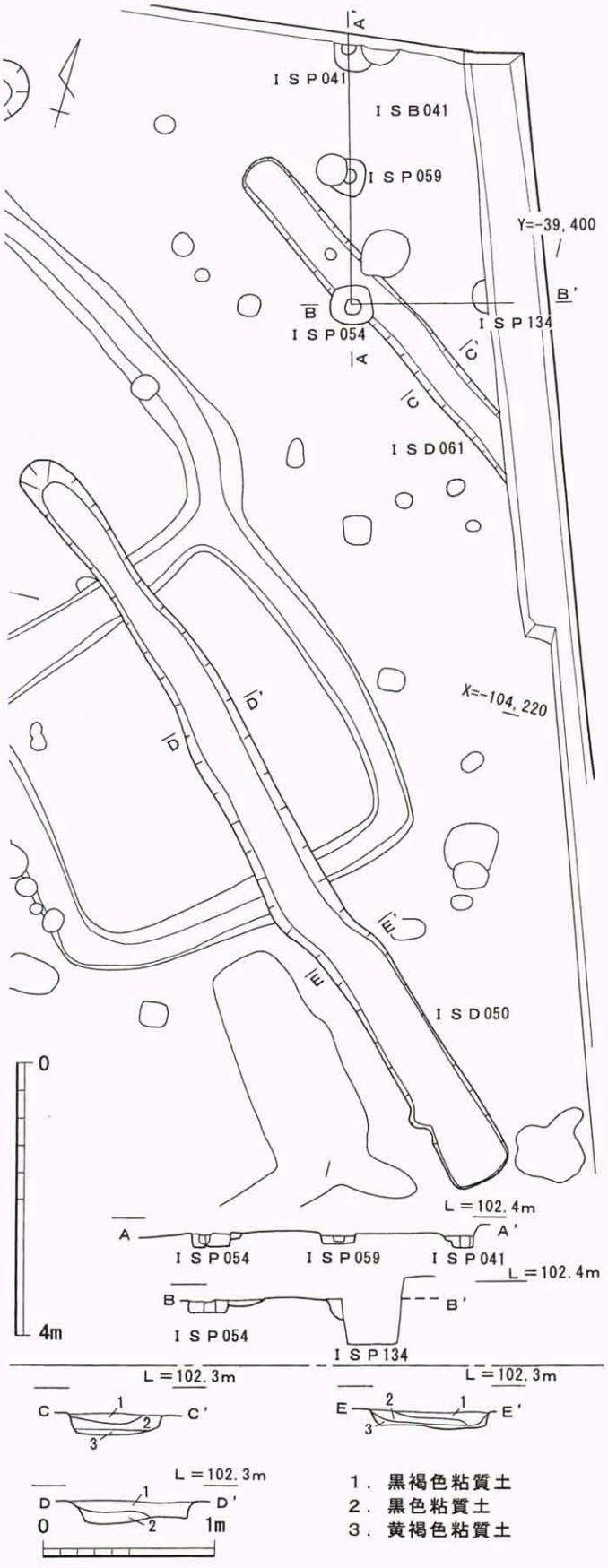


第57図　ＨＳＢ041・021、ＩＳＢ032・019実測図

た。

柵ＣＳＡ052(第55図)　Ｃ－２地区中央で検出した柵である。掘立柱建物跡ＣＳＢ005の北側庇と重複し、ＣＳＢ005を切っている。ＣＳＡ052は３間(6.6m)である。柱穴掘形は方形で、一辺0.4～0.7m、深さ約0.1mである。主軸はＮ18°Ｗである。ＣＳＰ052の南約1.5mに土坑状の落ち込みがみられた。さらに南方約2.5m方形周溝墓の周溝ＣＳＤ077を掘削している際に、緑釉陶器や墨書土器(第62図13～15)が出土したことから、明確な土色の違いは認められなかったが、柱穴が存在すると考えた。以上のことから、「Ｌ」字状に屈曲する柵と考えた。

井戸ＣＳＥ042(第６・59図)　Ｃ－２地区北東隅で検出した素掘りの井戸である。径約2.8m、深さ約0.7mで、底は平坦である。埋土最下層にはシルト層が認められた。井戸の西側斜面には長さ1.5m、幅0.4mほどの平坦面がある。また、井戸の北側には、井戸に向かって傾斜した溝状の遺構が認められる。遺物は井戸の上・中層から奈良時代中頃～後半の土器が多数出土した(第



第58図　ＩＳＢ041、ＩＳＤ050・061実測図

63図18～42)。

土坑ＣＳＫ001(第６・61図)　Ｃ－２地区北東隅で検出した方形の土坑である。一辺1.1m、深さ約0.1m、主軸Ｎ10°Ｗを測る。周囲の壁に沿って幅３～５cm、深さ約６cmの溝が巡り、その断面形はＶ字形に近い。床面付近から、平安時代前期の須恵器杯と蓋が出土した(第64図48・49)。

柱穴ＣＳＰ044(第６・54図)　掘立柱建物跡ＣＳＢ005の南東隅から南東へ約2.5mに位置する柱穴である。直径0.3m、深さ0.1mを測り、埋土から平安時代中期の須恵器椀(第62図16)が出土した。

ｃ．Ｄ地区検出遺構(第７図)

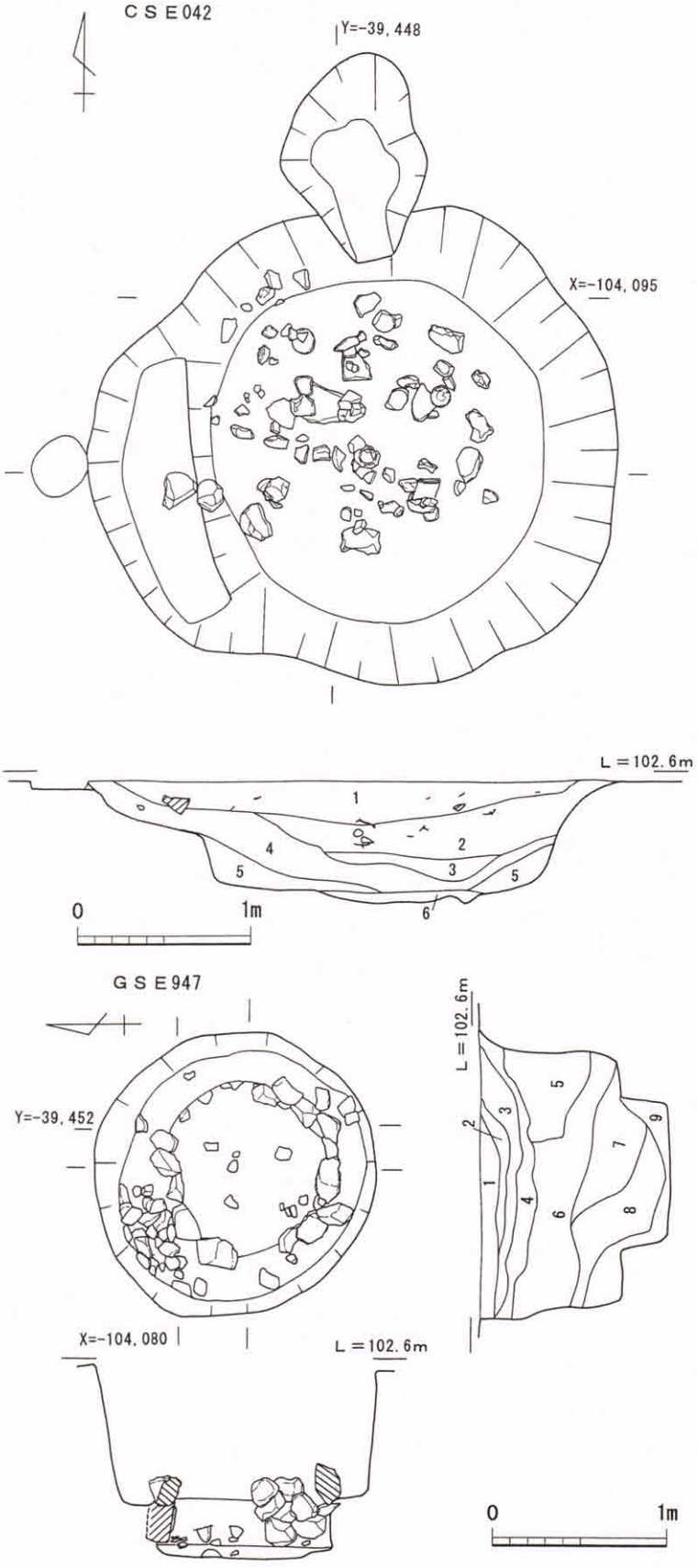
Ｄ地区では、掘立柱建物跡の可能性が高い柱列を１条検出した。そのほか、多数の柱穴・小ピットを検出した。

掘立柱建物跡ＤＳＢ529(第７・55図下)　Ｄ地区の北西部で検出した。建物跡の東側柱列のみの検出で、西側の調査区外へ延びると考えられる。検出した長さは３間(4.7m)、主軸はＮ12°Ｗである。柱穴掘形は方形で、一辺約0.5m、深さ0.1～0.2mである。出土遺物はない。柱穴の規模や形状、主軸がＣＳＢ005と同一方位であることなどから、同時期の建物と考えられる。

ｄ．Ｇ地区検出遺構(第５図)

Ｇ地区では、掘立柱建物跡２棟、柵２条、井戸１基のほか、多数の柱穴・ピットを検出した。

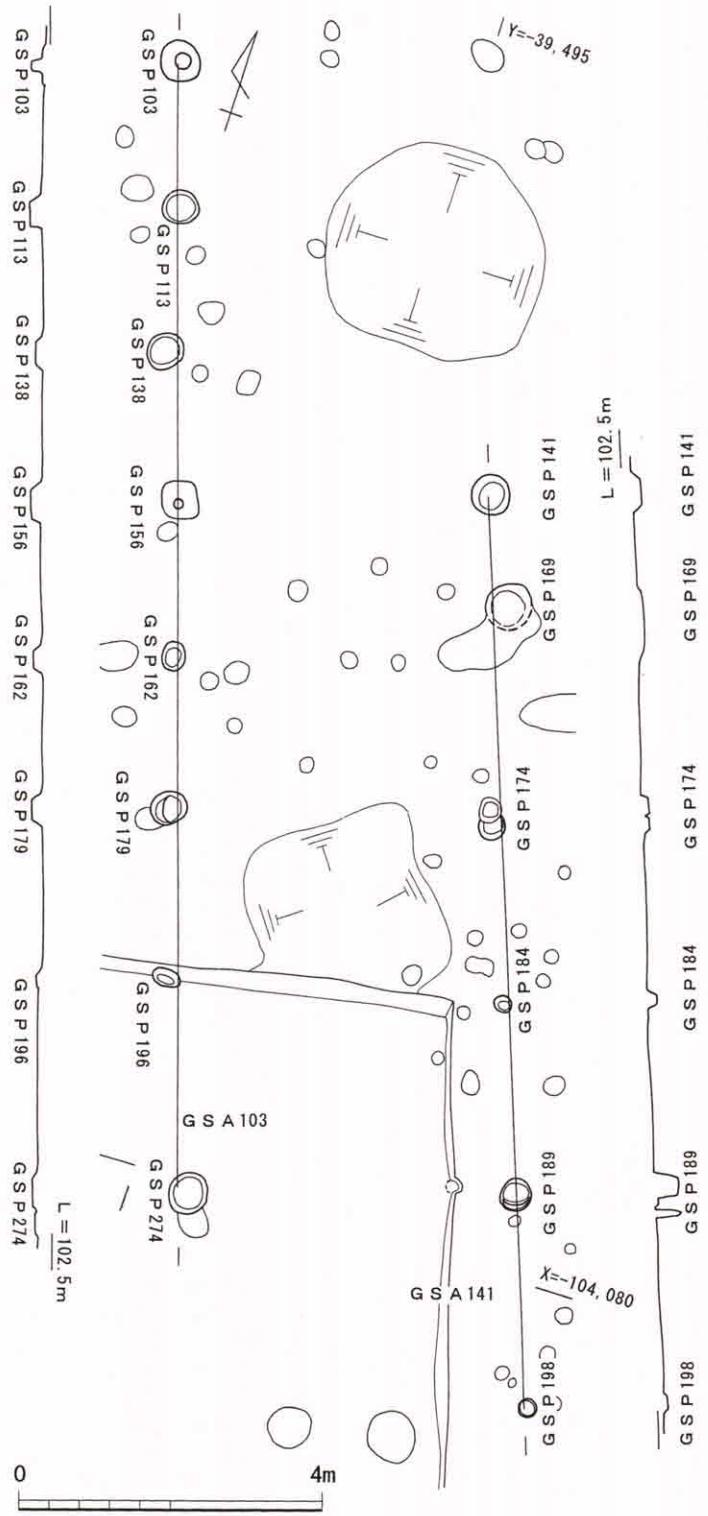
掘立柱建物跡ＧＳＢ370(第５・56



1．茶褐色土
2．暗茶褐色土
3．黄褐色土混じり
　暗茶褐色土
4．黄褐色土混じり
　暗茶褐色粘質土
5．灰茶褐色シルト
6．黄褐色土混じり
　灰茶褐色シルト

1．黒褐色砂質土
　（黄褐色土混入）
2．黒褐色砂質土
　（１～３cm大の礫含む）
3．黒褐色土混じり
　黄褐色砂質土
4．黒褐色砂質土
　（１cm大の礫含む）
5．黄褐色粘質土と
　黒色砂土の互層
6．黒褐色土
　（黄橙色粘質土混入）
7．明黄褐色砂質土
8．淡黄色シルト
9．黒色粘土

第59図　ＣＳＥ042、ＧＳＥ947実測図



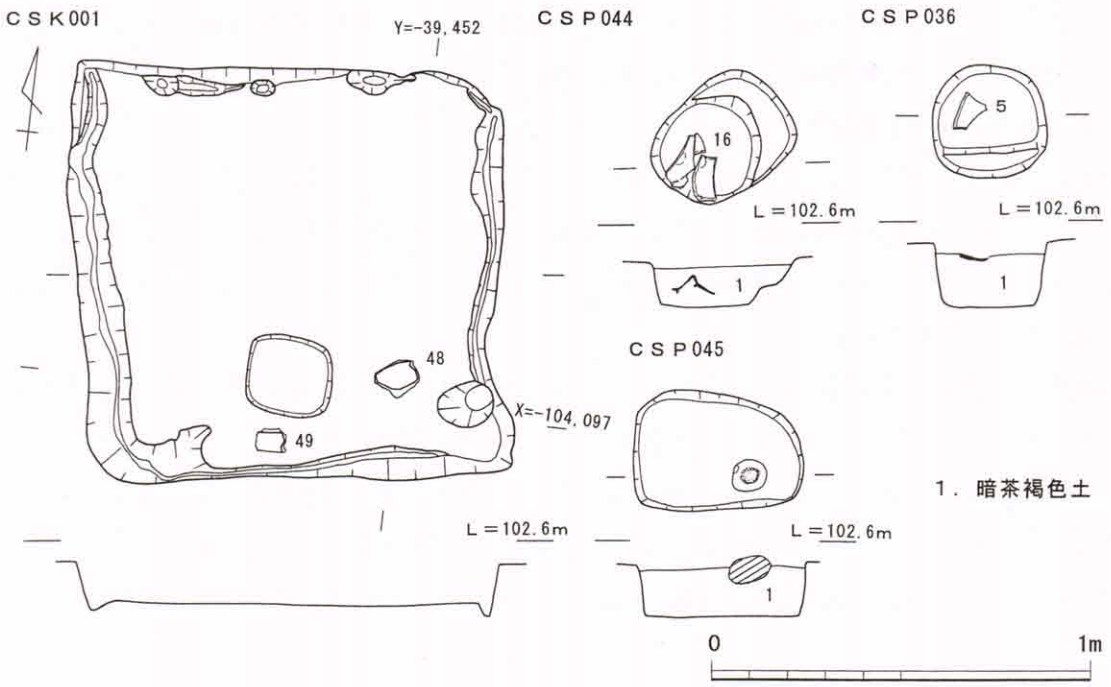
第60図　ＧＳＡ103・141実測図

図上）　Ｇ－２地区北部で検出した掘立柱建物跡である。建物跡の西半部が調査区外ため、全容は不明である。検出できたのは、南北３間(6.2m)、東西２間(4.3m)以上である。Ｇ－１地区において建物跡の延長となる柱穴が認められなかったことから、３間四方の建物跡と推定される。主軸はＮ15°Ｗである。柱穴掘形は隅丸方形で、一辺が0.5～１ｍ、深さ約0.3mである。出土遺物はない。主軸がＣＳＢ005とほぼ同一方位であることから、おおむね同時期の建物でないかと思われる。

掘立柱建物跡ＧＳＢ644(第５・56図下)　Ｇ－２地区南部で検出した掘立柱建物跡である。建物跡の南半部は、京都府教育委員会が調査した第13次調査第２トレンチで検出された。建物跡の規模は東西４間(6.0m)、南北２間(3.6m)を測り、主軸はＮ73°Ｅである。柱穴掘形は隅丸方形で、一辺が0.4～0.6m、深さ0.1～0.2mである。出土遺物はない。ＧＳＢ370に直行する。

柵ＧＳＡ103(第５・60図)　Ｇ－１地区中央で検出した。長さ14.8ｍ、主軸Ｎ18°Ｗを測る。柱穴掘形の平面形は円形や方形で、一辺または径0.2m、深さ0.1mを測り、柱痕は径約0.15mであった。出土遺物はなく、詳細は不明である。

柵ＧＳＡ141(第５・60図)　Ｇ－１地区中央で検出した。長さ12.1m、主軸方向Ｎ20°Ｗを測る。一辺または径0.2m、深さ0.1mを測り、柱痕は径約0.15mであった。出土遺物はない。ＧＳＡ103とおおむね同一の主軸を採り、柵間の距離は約４ｍを測る。



第61図　ＣＳＫ001、ＣＳＰ044・036・045実測図

井戸ＧＳＥ947(第５・59図)　Ｇ－２地区南東隅で検出した井戸である。規模は、径約1.6m、深さ約1.1mである。検出面から深さ約0.8mまで掘り下げ(上段)、さらに井戸の中央部径約１mを約0.3m掘り下げている(下段)。下段の壁面には人頭大の石を２～４石積み上げる。井戸内から奈良時代後半から平安時代前半にかけての土器が若干出土している(第63図43～47)。

ｅ．Ｈ地区検出の遺構(第９図)

Ｈ地区では、掘立柱建物跡の可能性が高い柱列を２条検出した。

掘立柱建物跡ＨＳＢ041(第９・57図)　Ｈ地区中央で検出した３基の柱穴で、東半分は調査区外である。柱穴掘形が一辺0.4～0.5mの方形で、径約0.3mの柱痕も明確に認められたことから、掘立柱建物跡の西側柱列と考えた。検出長は、南北２間(3.3m)で、主軸はＮ18°Ｗである。出土遺物はわずかに土師器片が出土した。柱穴の規模や形状から奈良～平安時代の遺構である可能性が高い。

掘立柱建物跡ＨＳＢ021(第９・57図)　Ｈ地区南端で検出した３基の柱穴で、大半が調査区外に広がっていた。柱痕の状況を確認するため、調査区を一部拡張してＨＳＰ021の柱痕の状況を確認した。柱穴掘形が一辺0.5mの方形で、径約0.3mの柱痕が明確に認められたことから、掘立柱建物跡の北側柱列と想定し得た。検出長は、東西２間(3.2m)で、主軸はＮ６°Ｗである。出土遺物はない。柱穴の規模や形状から奈良～平安時代の遺構である可能性が高い。

ｆ．Ｉ地区検出遺構(第10図)

Ｉ地区では、掘立柱建物跡２棟を検出したほか、隣接する排土置き場で掘立柱建物跡の可能性が高い柱穴群を検出した。

掘立柱建物跡ＩＳＢ019(第10・57図)　Ｉ－１地区東部で検出した掘立柱建物跡である。建物の規模は、東西３間(7.2m)、南北１間(1.8～2.2m)以上で、主軸はＮ85°Ｅである。柱穴掘形

は、約0.4mの隅丸方形や楕円形を呈し、深さ約0.1mと浅い。東西方向の建物跡と思われる。出土遺物はない。柱穴の規模や形状から奈良～平安時代の遺構である可能性が高い。

掘立柱建物跡ＩＳＢ041(第10・58図)　Ｉ－２地区北東隅で検出した掘立柱建物跡である。建物跡の規模は、南北２間(3.7m)以上、東西１間(2.1m)以上で、主軸はＮ15°Ｗである。柱穴掘形は、約0.5mの隅丸方形か楕円形である。柱痕は径0.2～0.3mであった。出土遺物はなく、詳細については不明である。主軸がＣＳＢ005とほぼ同一方位であることから、おおむね同時期の建物でないかと思われる。

掘立柱建物跡ＩＳＢ032(第10・57図)　Ｉ－１地区北側の水田を掘削土置き場にするため、耕土を除去したところ、床土がなく、地山を掘り込む遺構が認められた。「Ｌ」字状に柱穴が並んでいたことから、東西２間(4.2m)、南北１間(1.7m)以上の掘立柱建物跡と考えられる。柱穴掘形は隅丸方形で、一辺が0.4～0.5mである。主軸Ｎ18°Ｗである。調査地外であることから、上面を検出したのみである。柱穴の規模や形状から奈良～平安時代の遺構である可能性が高い。

B. 出土遺物

ａ．Ａ地区出土遺物

柱穴ＡＳＰ004出土土器(第62図４)　４は須恵器杯Ｂの底部である。底部から体部への立ち上がりはやや丸みを帯びる。高台は内面と設置面にそれぞれ回転ナデ調整を施す。

柱穴ＡＳＰ286出土土器(第62図７)　７は須恵器杯の口縁部である。大型の杯である。内外面とも回転ナデ調整である。

柱穴ＡＳＰ148出土土器(第62図９)　９は須恵器長頸壺で、肩部内面に口頸部の接合部が確認できる。

土坑ＡＳＫ417出土土器(第64図50)　50はやや内湾気味に立ち上がる口縁部からなる。底部外縁に断面四角形の高台を貼り付ける。底部から口縁部にかけては回転ナデ調整を施し、底部外面はヘラ切り後ナデ仕上げしている。

ｂ．Ｂ地区出土遺物

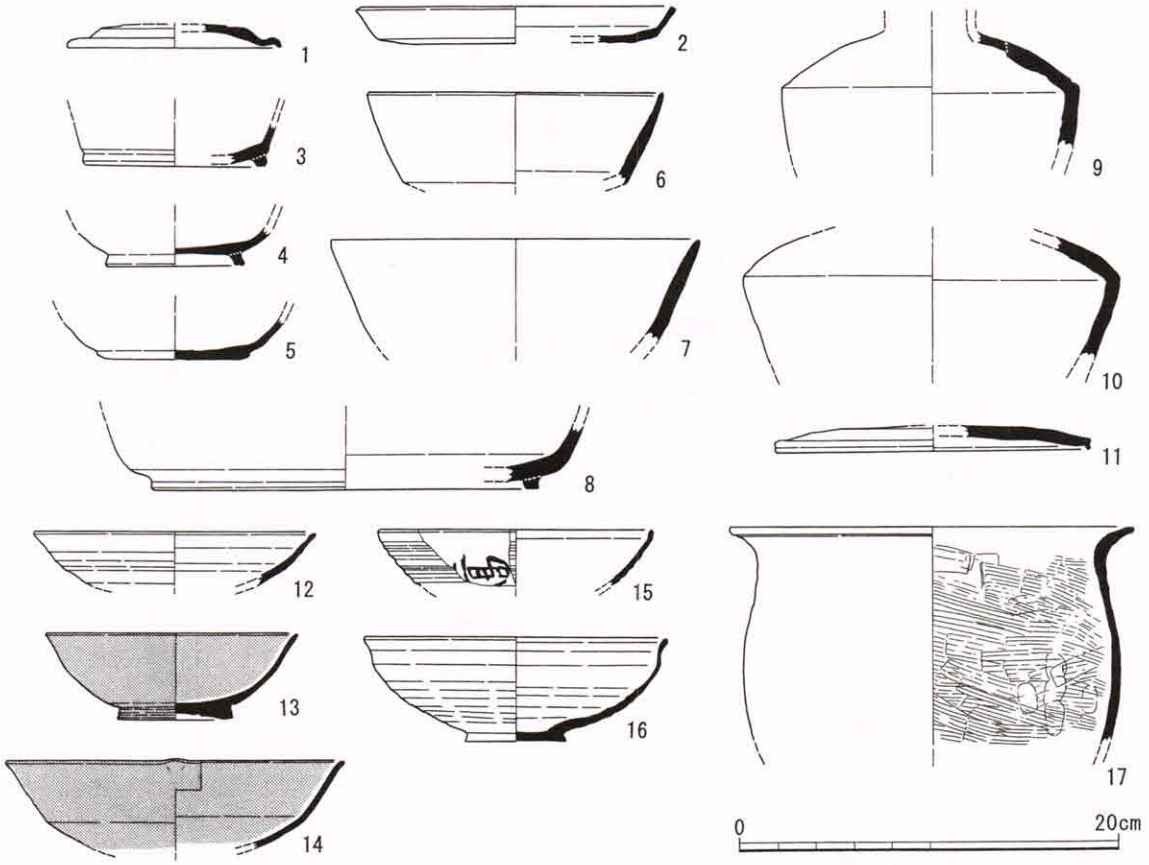
柱穴ＢＳＰ036出土土器(第62図12)　12は須恵器椀である。底部が欠損するが、体部中位で屈曲する。回転ナデ調整の痕跡が明瞭である。

ｃ．Ｃ地区出土遺物

掘立柱建物跡ＣＳＢ005出土土器(第62図３)　３は柱穴ＣＳＰ010から出土した須恵器杯Ｂの底部である。高台は底部外縁に貼り付ける。回転ナデ調整を施す。

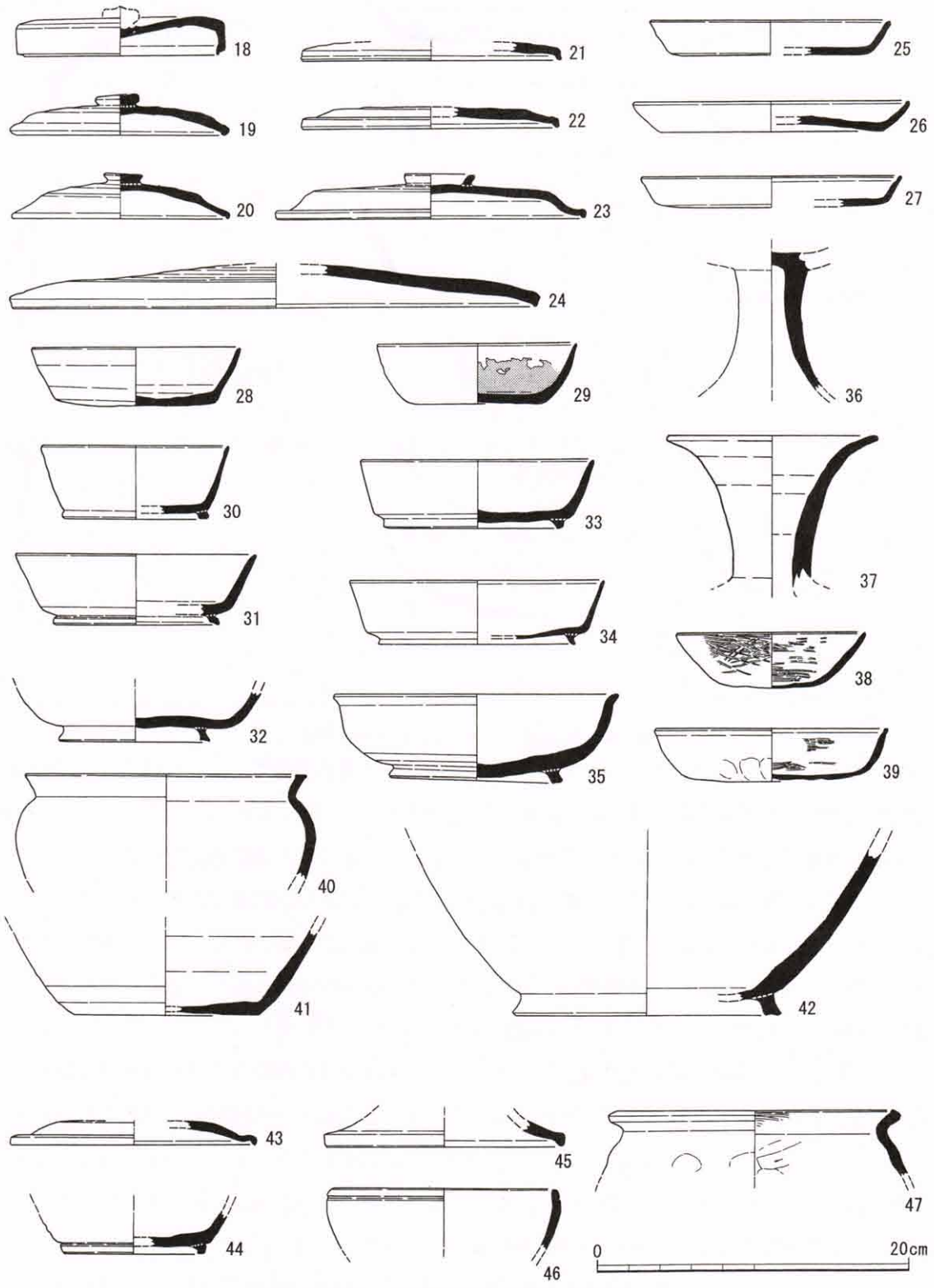
柵ＣＳＡ024出土土器(第62図５)　５は須恵器杯Ａの底部である。柱穴ＣＳＰ036から出土した。平底の底部にやや内湾気味に立ち上がる体部を有する。

柱穴ＣＳＰ044出土土器(第62図16)　16は須恵器椀である。口縁部は外反する。内外面とも回転ナデ調整の痕跡が明瞭に残る。底部内面は明瞭に凹む。底部外面には糸切り痕がみられる。口径16cm、器高5.5cm、底径5.4cmを測る。



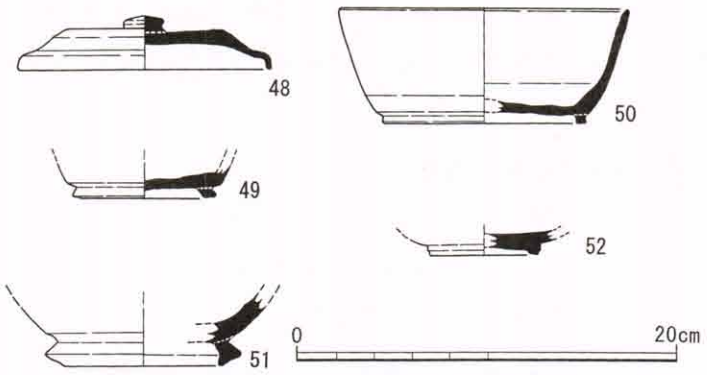
第62図　出土遺物実測図(奈良・平安時代１)

井戸ＣＳＥ042出土土器(第62・63図11・18～42)　11は須恵器蓋である。つまみを欠損する。内面中央部にわずかに墨痕が認められ、その付近が磨滅していたことから、転用硯と考えられる。18は須恵器短頸壺の蓋である。焼け歪むものの、平坦な天井部に、ほぼ垂直に口縁部が下方に向かってのびる。端部は内傾する。つまみは欠損する。19～24は須恵器蓋である。19・20は形態が笠形を呈し、扁平なつまみを付ける。21・22はやや扁平な須恵器蓋の破片である。23は、輪状のつまみを貼り付ける。回転ナデ調整を施しており、天井部はヘラ切り後ナデ仕上げする。24は口径34cmを測る大型の蓋である。25～27は須恵器皿である。平坦な底部と外上方に短く立ち上がる口縁部からなる。整形は回転ナデ調整を主体とする。26は底部外面がヘラケズリ調整を施す。27は口縁部内面に１条の沈線を施す。28・29は須恵器杯Ａである。28の口縁部は外上方にほぼ直線的にのびていくが、29はやや内湾気味に立ち上がる口縁部を呈する。30～34は須恵器杯Ｂである。口径は12～17cm前後であるが、器高は５cm以下のものが多い。高台は、内面と設置面にそれぞれ回転ナデ調整を施す丁寧なもの(31・32)や断面方形のもの(30・33)がある。時期差を反映している可能性がある。口縁部は内外面とも回転ナデ調整、底部外面はヘラキリ後にナデ調整を施す。34はやや焼成が甘く、灰白色を呈する。35は須恵器杯Ｆである。底部から湾曲して立ち上がり、口縁部は大きく外反する。高台は底部内側に貼り付け、底部から体部への屈曲付近はヘラケズリ調整を施す。いわゆる稜椀の範疇として捉えられる。36は須恵器高杯の脚部である。脚端部は欠損する。37は須恵器長頸壺の口縁部である。大きく逆「ハ」字状に開く。口縁端部は丸く収める。



第63図　出土遺物実測図(奈良・平安時代２)

回転ナデ調整を施し、口縁部内面に絞り痕跡は認められない。38は土師器椀Ａである。内外面ともミガキ調整を施す。底部にかすかにヘラケズリ調整の痕跡を確認することができる。39は土師器杯Ａである。口縁端部は内側に巻き込んで肥厚する。内面にミガキ調整を施す。底部から口縁部の立ち上がり付近にはユビオサエ痕が認められる。他にも破片が出土したが、図示できたのは



第64図　出土遺物実測図(奈良・平安時代３)

２点のみである。40は須恵器鉢Ｄである。肩の張る体部に、短く外上方に立ち上がる口縁部がつく。口縁端部は平坦である。回転ナデ調整を施す。41は須恵器鉢Ｄの底部と考えられる。底部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。42は須恵器壺または鉢の底部である。外下方に踏ん張る高台を貼り付ける。

土坑ＣＳＫ001出土土器(第64図48・49)　48は須恵器杯Ｂ蓋である。平坦な天井部と下方に屈曲する口縁部からなる。回転ナデ調整を施し、天井部外面はヘラ切り後ナデ仕上げである。49は須恵器杯Ｂで、小型品である。

周溝ＣＳＤ077出土土器(第62図13～15)　13・14は緑釉陶器椀で、ともに口縁端部は緩やかに外反する。13は底部が削り出しの蛇の目高台で、内湾しながら口縁部まで立ち上がる。14は底部を欠損するが、体部中位に明瞭な稜を有する。15は須恵器椀で、体部下半を欠損する。口縁端部内面がわずかに肥厚する。外面には「高」の字が墨書されていた。

ｄ．Ｇ地区出土遺物

柱穴ＧＳＰ995出土土器(第62図６)　６は須恵器杯である。回転ナデ調整を施す。

柱穴ＧＳＰ967出土土器(第62図17)　17は土師器甕である。肩のあまり張らない体部と大きく外反する口縁部からなる。外面は磨滅のため調整不明、内面は横方向のハケ調整を施す。

井戸ＧＳＥ947出土土器(第63図43～47)　43は口縁端部が屈曲する須恵器蓋である。天井部外面はヘラ切り後ナデ調整を施す。44は須恵器杯Ｂである。45は高杯の脚端部である。端部が下方に屈曲する。46は須恵器鉢である。内湾しながら口縁部まで立ち上がる。口縁部外面にヘラ状工具による弱い沈線を施す。47は土師器甕である。体部から「く」字状に屈曲する口縁部をもつ。口縁端部は内上方につまみ上げる。体部内面にヘラケズリ調整を施す。外面はわずかに指圧痕が認められた。

土坑ＧＳＫ497出土土器(第64図51)　51は須恵器壺の底部である。

土坑ＧＳＫ328出土土器(第64図52)　52は須恵器椀の底部である。削り出し高台である。

ｅ．Ｈ地区出土遺物

柱穴ＨＳＰ045出土土器(第62図１)　１は須恵器蓋である。扁平な天井部と屈曲する口縁部からなる。天井部外面はヘラ切り後ナデ仕上げする。その他は回転ナデ調整である。

柱穴ＨＳＰ046出土土器(第62図10)　10は須恵器長頸壺の肩部から体部にかけての破片である。回転ナデ調整を施す。

ｆ．Ｃ－１地区西側包含層出土遺物

Ｃ－１地区の西側斜面の埋土から出土した遺物としては、第62図２・８がある。２は口縁端部

が平坦な須恵器皿である。回転ナデ調整を施す。底部外面はヘラ切り後ナデ調整を施す。８はやや大型の須恵器杯Ｂである。断面台形の高台を持つ。底径21.2cmを測る。

６．中世の遺構・遺物

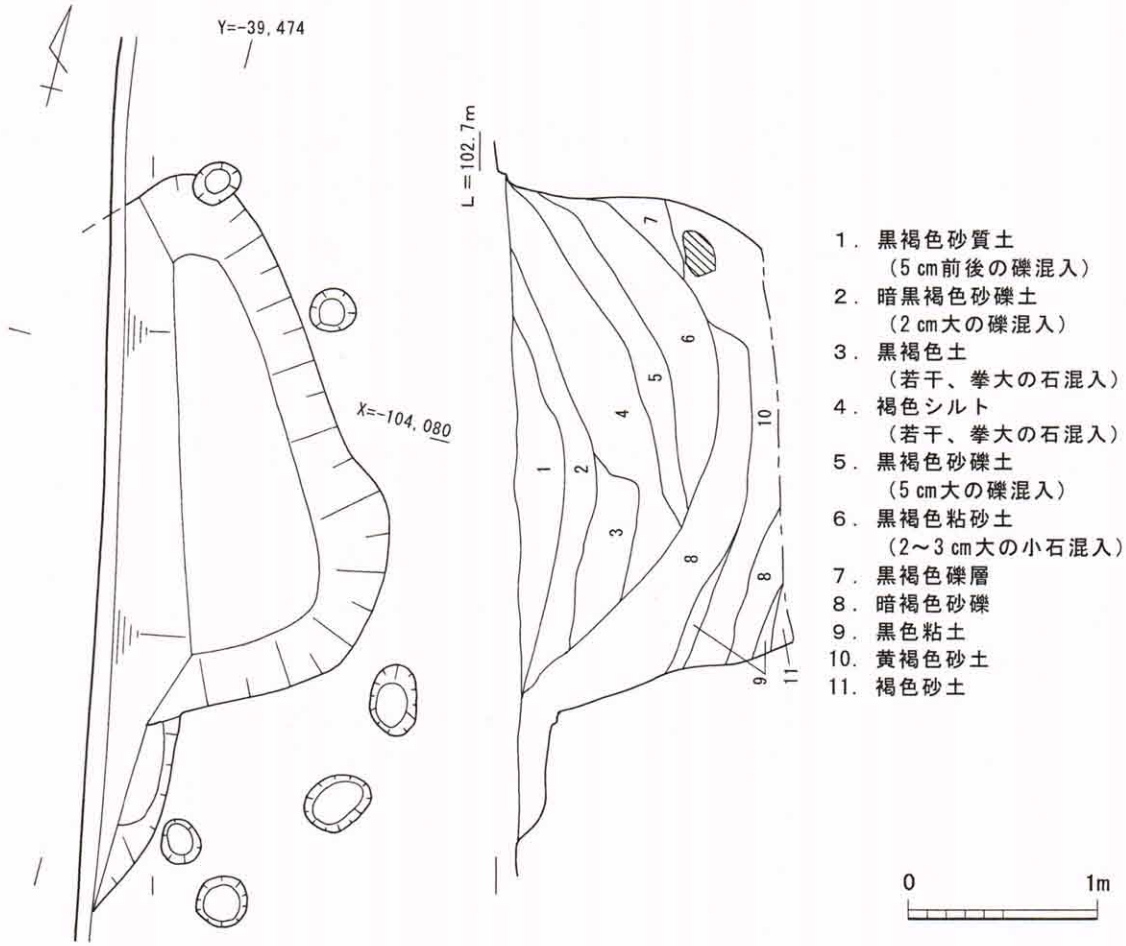
Ａ．検出遺構

中世の遺構としては、Ｇ地区で検出した井戸１基のほか、柱穴、土坑、溝などがあるものの、平安時代以前に比べ著しくその数が少ない。

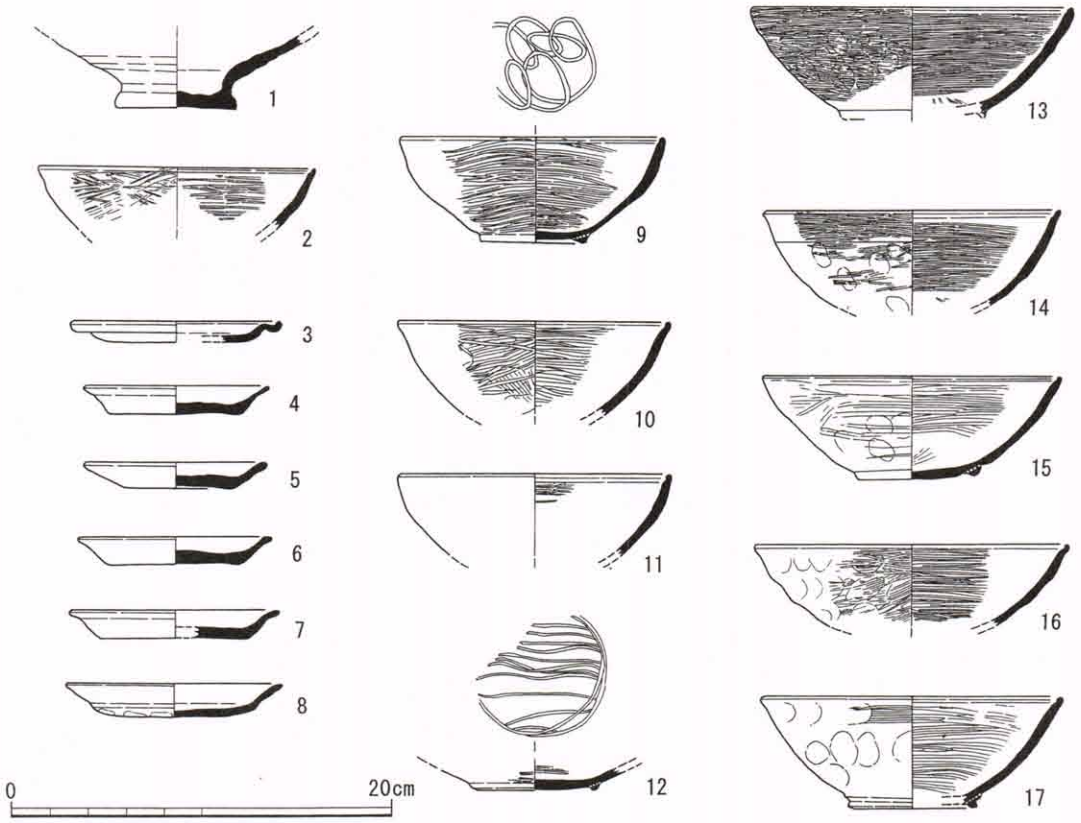
井戸ＧＳＥ492(第５・65図)　Ｇ－２地区南西隅で検出した方形の井戸である。Ｇ－１地区との間に畦畔があり、その東半部を検出したにとどまる。規模は一辺2.7ｍを測り、主軸はＮ35°Ｗである。埋土から土師器皿・瓦器椀(第66図３～８・10～12・16・17)などが出土した。

Ｂ．出土遺物

井戸ＧＳＥ492出土土器(第66図３～８・10～12・16・17)　３～８は土師器皿である。３はいわゆる「ての字口縁」の皿である。４～７は底部に糸切り痕がみられる。平坦な底部からわずかに外反しながら斜め上方に立ち上がる口縁部からなる。８は底部にユビオサエを施す皿である。口縁部が外反気味である。10～12・16・17は瓦器椀である。12は底部の破片で、断面台形状の低い高台を貼り付ける。見込みに平行線状の暗文を施す。10・11・16・17は、体部が内湾しながら



第65図　ＧＳＥ492実測図



第66図　出土遺物実測図(中世)

立ち上がるもので、口縁端部内面に沈線１条施す。体部内外面に密にミガキ調整を施す。外面には指頭圧痕が残るものもある。

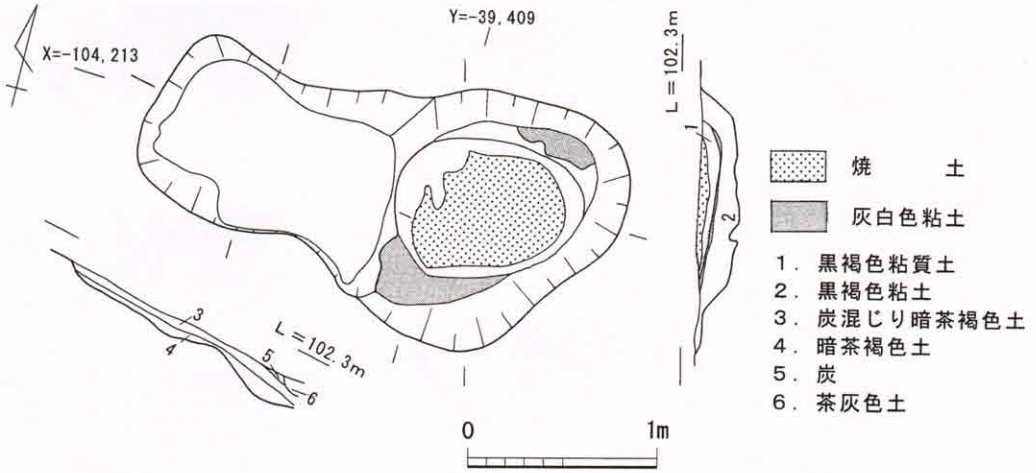
土坑ＧＳＫ360出土土器(第66図１・14)　１は土師器杯である。平坦な底部から短く立ち上がったのち、外上方に開く体部をもつ。底部外面に糸切り痕がみられる。回転ナデ調整である。14は瓦器椀である。体部が内湾しながら立ち上がり、口縁端部内面に沈線１条を施す。体部内外面に密にミガキ調整を施す。

柱穴ＧＳＰ926出土土器(第66図２)　２は瓦器椀である。内外面にミガキ調整を施し、口縁端部内面に沈線を１条施す。

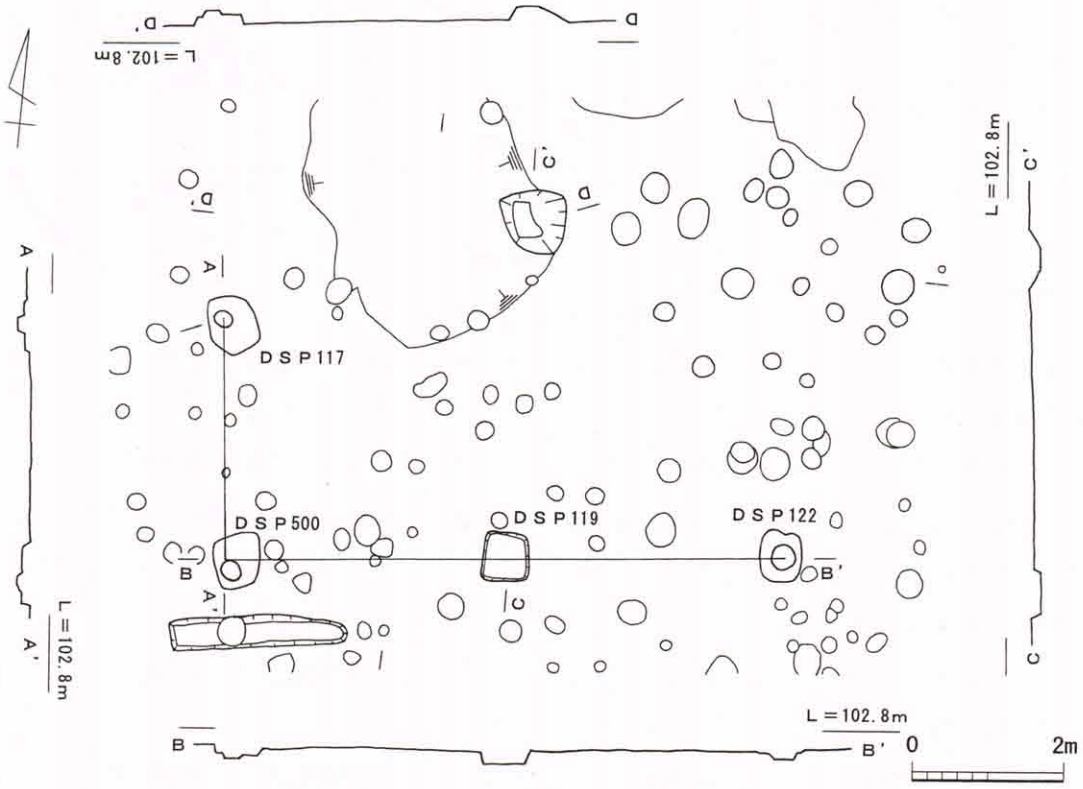
土坑ＧＳＫ497出土土器(第66図９)　９は瓦器椀である。内外面にミガキ調整を施し、口縁端部内面に沈線を１条施す。底部外縁に断面三角形の高台を貼り付け、見込みに螺旋状暗文を施す。口径13.6cm、器高5.4cmを測る。

溝ＧＳＤ401出土土器(第66図13)　13は瓦器椀である。内外面ともに緻密にミガキ調整を施し、口縁端部内面に沈線を１条施す。

土坑ＧＳＫ540出土土器(第66図15)　15は瓦器椀である。内外面ともミガキ調整を施し、口縁端部内面に沈線を１条施す。断面三角形の高台を貼り付けるが、高台接地面と底部がほぼ同じ高さとなっている。口径15.6cm、器高5.4cmを測る。



第67図　ＩＳＫ037実測図



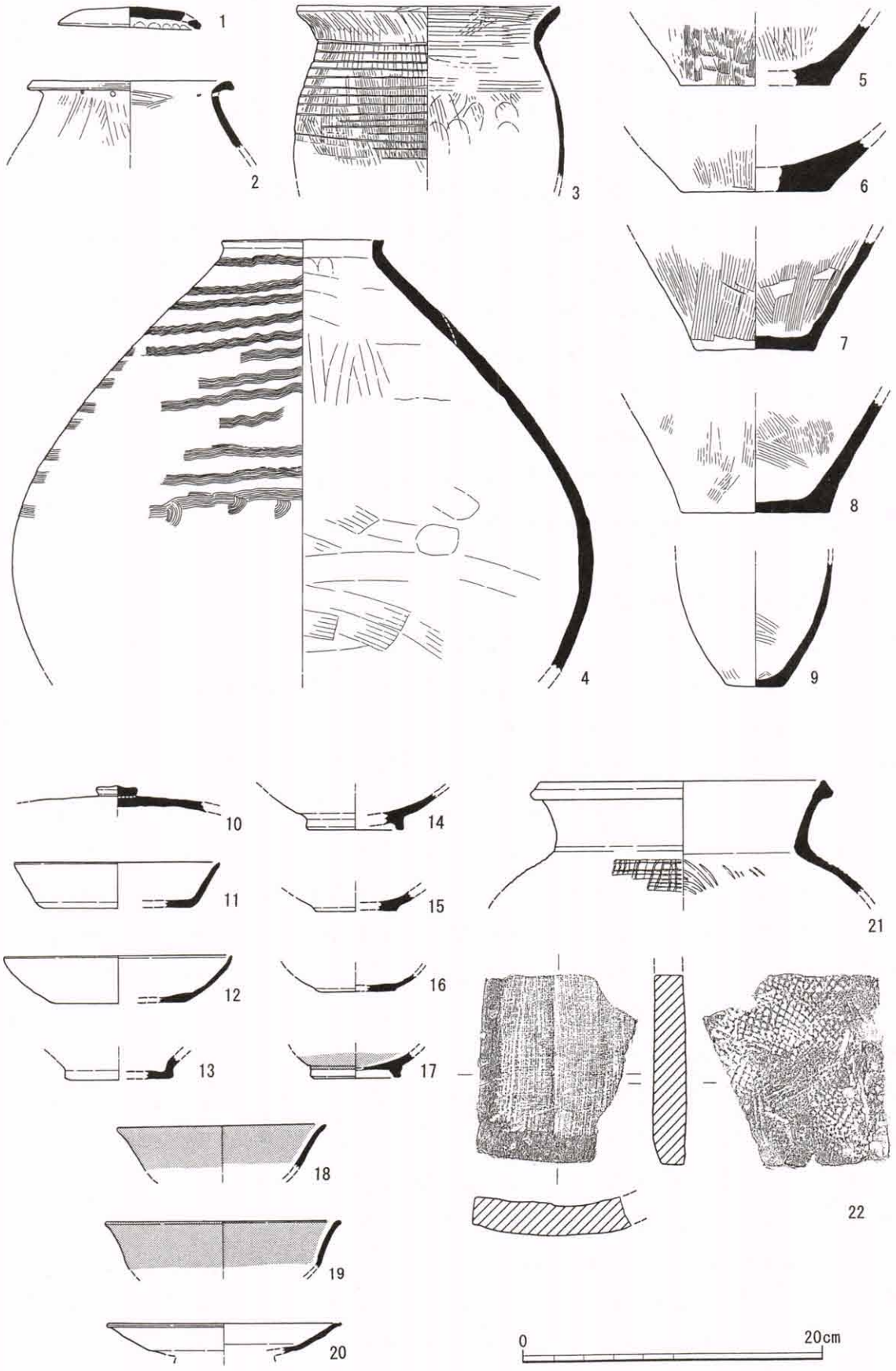
第68図　柱穴列ＤＳＢ117実測図

7．時期不明の遺構

溝ＣＳＤ102(第６図)　Ｃ－１地区東半部で検出した。幅約0.2m、検出長約11m、深さ0.1mである。主軸はＮ21°Ｗである。出土遺物がなく、時期は不明である。

溝ＩＳＤ050・061(第10・58図)　Ｉ－２地区中央で検出した平行する２条の溝である。ＩＳＤ050は、幅約0.8m、検出長12.5m、深さ0.2～0.3mである。ＩＳＤ061は、幅約0.6m、検出長6.0m、深さ約0.35mである。両溝間の距離は約５mを測り、主軸はＮ46°Ｗで、大きく西に振る。出土遺物はなく、時期は不明である。

焼土坑ＩＳＫ037(第10・67図)　Ｉ－２地区北側で検出した。短軸1.3m、長軸1.4m、深さ約



第69図　包含層出土遺物実測図

0.25ｍを測る。断面Ｕ字形の土坑で、埋土は黒褐色粘土である。中央部から焼土を検出した。赤色焼土の範囲は、長軸0.8ｍ、短軸0.6ｍで厚さ６㎝ほどが比熱していた。出土遺物がなく、時期や性格については不明である。焼土坑の西側に長軸長1.4ｍ、短軸長0.8ｍ、深さ約0.1ｍの土坑を検出した。土坑底面は、焼土坑に向かって深くなる。炭の堆積や炭混じり暗茶褐色土が堆積していた。性格については不明である。

柱穴列ＤＳＢ117（第７・68図）　Ｄ地区南西部で検出した柱穴群である。周辺のピットとは規模・形態が異なるため、当初は５基の柱穴で構成される掘立柱建物跡と考えたが、掘立柱建物跡としてのまとまりに欠けるため、柱穴列として報告する。遺構を構成する柱穴は、ＤＳＰ117・500・119・122と風倒木痕内から検出したものである。先の４柱穴はＬ字状に配されるが、風倒木痕内の柱穴のみが突出する。柱間は平均で3.4ｍと長い。出土遺物がなく時期は不明である。

以上のほかにＡ・Ｄ・Ｇの各地区で、東西方向を指向する列状のピット群を確認している。平面的な分布状況から見て、複数のピット列が存在するものとみられるが、各ピットの共時性や正確な時期を把握することはできなかった。ピットは断面形状から柱穴とみられるもののほか、断面が円錐形で杭を打ち込んだかのような形状を示すものが混在している。

８．包含層出土遺物（第69図）

13～16・19・20はＡ地区から、５・10はＢ地区から、11・12はＣ地区から、１・３・４・７・９・22はＤ地区から、２・８・17・18・21はＥ地区から、６はＦ地区から出土した。

１～９は弥生土器である。１は蓋で、端部付近に紐穴がある。２は口縁部が短く外反する甕で、頸部に２か所の紐穴を施す。外面に縦方向のハケ調整、内面にナデ調整を施す。３は甕である。外面は粗い縦方向のハケ調整後、横方向の浅い平行沈線を施す。内面は、口縁部が横方向の粗いハケ調整、体部がハケ調整後、ナデ調整である。４は無頸壺で、外面上半部に12条の櫛描波状文を施し、外面下半部はミガキ調整である。内面はハケ調整もしくはケズリ後、ナデ調整である。５～８は壺または甕の底部である。いずれも内外面とも縦方向のハケ調整を施すが、６の内面は磨滅のため不明である。９は壺の下半部である。内外面とも部分的にハケ痕跡が残る。

10～16、21は須恵器である。10は須恵器蓋である。扁平なつまみを付ける。11・12は、平底の杯である。口縁部内外面に回転ナデ調整を施し、底部外面はヘラ切り後ナデ調整を施す。形態から11は奈良時代の、12は平安時代の杯と考えられる。13は平坦な底部から屈曲して外上方に立ち上がる。底部外面に糸切り痕が見られることから、椀の底部と思われる。14～16は、椀の底部と考えられる。15・16は糸切り痕がみられる。21は甕で、口径19㎝を測る。口縁部は回転ナデ調整である。体部外面にタタキ痕、内面に当て具痕がみられる。

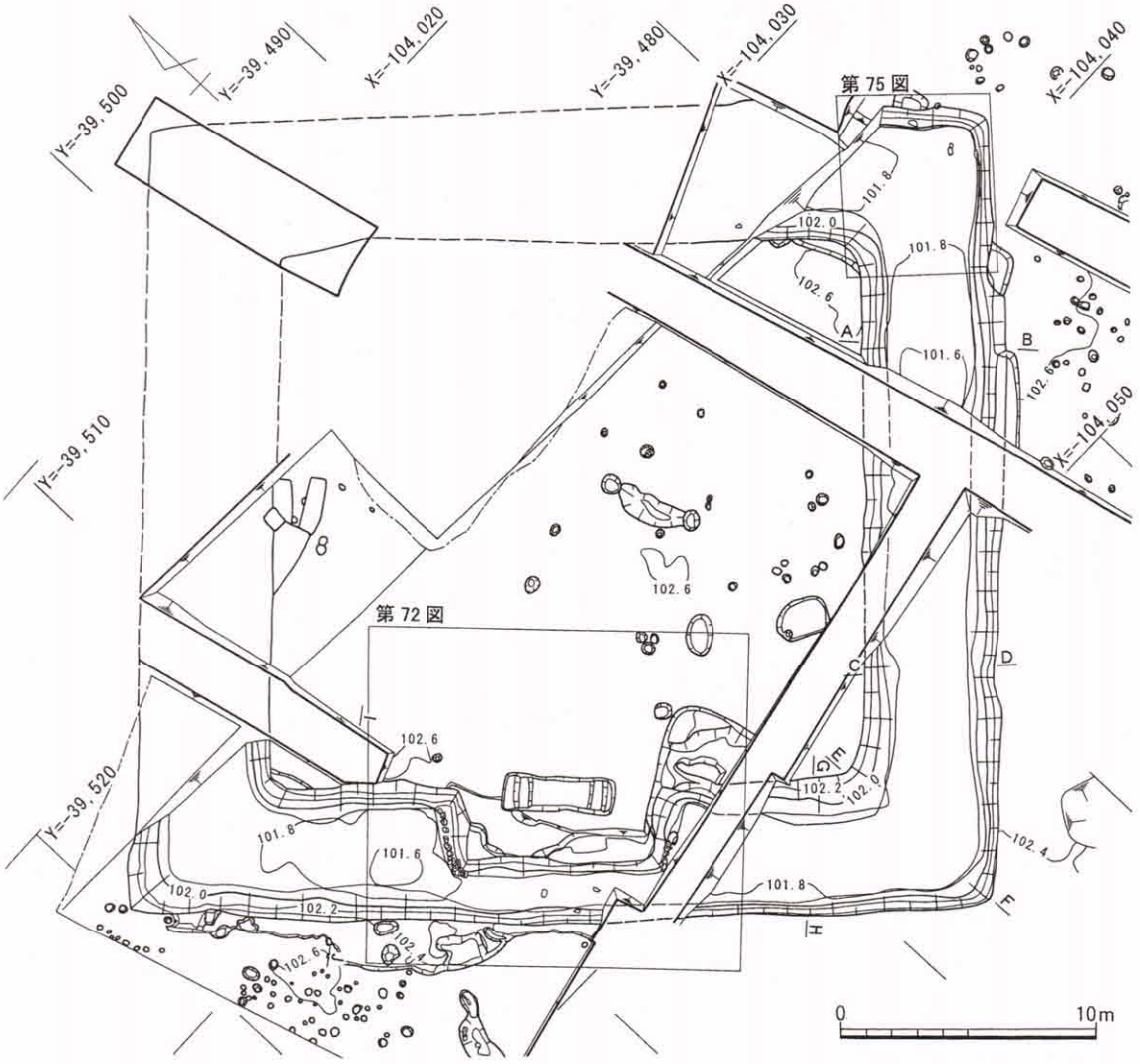
17～19は緑釉陶器椀である。17は底部の破片で、高台を貼り付ける。18・19は口縁部の破片で、緩やかに外反する。20は灰釉陶器の皿である。体部半ばで屈曲する。高台は欠損する。22は平瓦片で、凹面に布目痕跡、凸面に格子タタキの痕跡がみられる。厚さ２㎝を測る。調査地内から出土した奈良時代の平瓦はこの１点のみである。　（岡崎研一）

9．時塚古墳群（1・2号墳）

時塚古墳群は、今回の調査が実施されるまでその存在は知られておらず、京都府教育委員会の第5次調査により埴輪の出土する溝が確認され[注10]、第6次調査により方墳であることが明らかとなった。その後、第8次・第15次調査でも古墳が検出され、平成19年度に実施した第17次調査では11基の古墳が確認され、平成19年段階で総数14基の古墳が確認されている。未調査の部分も多いことから、時塚遺跡内にはさらに多数の埋没古墳が存在しているものと考えられる。

調査以前には古墳は完全に水田の下にあり、地表面には何ら痕跡をとどめていなかった。ただ「時塚」という地名だけがその存在を伝え、「亀岡口碑集」に時を知らせる塚があったことが伝承されていたことを記すのみである。近年発行された『新修亀岡市史』において故足利健亮氏がこの段丘上に千歳車塚古墳に連なる古墳群の存在を推測していたが、時塚遺跡の調査により氏の卓見が証明されることとなった。なお、第6次調査の時点ではこの古墳を時塚古墳としたが、以後複数の古墳が確認されるに至り、時塚1号墳から14号墳と呼称することとなった。今回は時塚1・2号墳の概要について報告する。

（福島孝行）

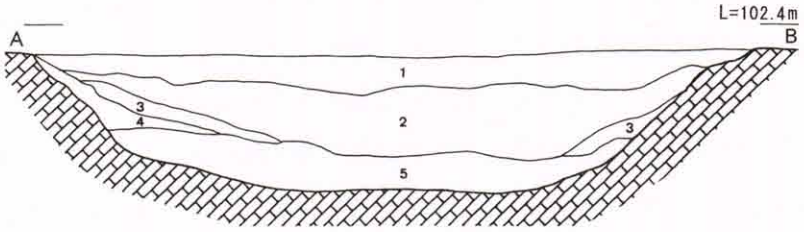


第70図　時塚1号墳平面図

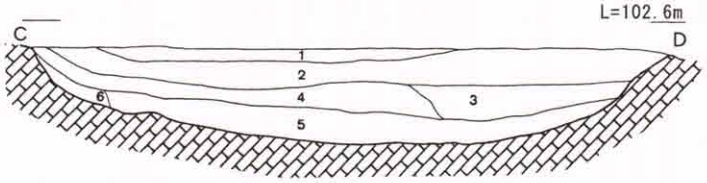
時塚１号墳

Ａ．墳丘

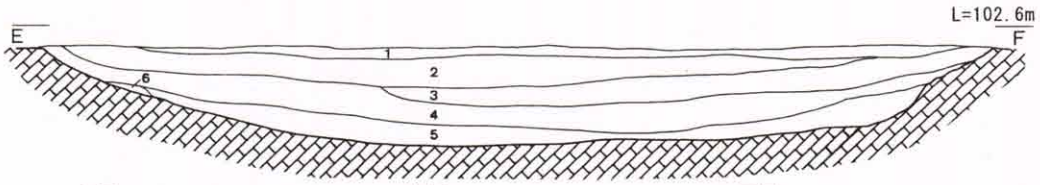
時塚１号墳は周囲に方形の周溝を巡らす造出し付き方墳である。１号墳は第６次調査Ｂ－１～４地区から第10次調査Ｇ－１地区にかけて検出された。なお、周溝および墳丘の北西隅について



1. 濃灰茶褐色粘質土
(3～5 cm礫，土器片多量含)
2. 暗灰茶褐色粘質土
(3～5 cm礫，土器片多量含)
3. 暗黄茶色粘質土
4. 灰茶褐色粘質土
5. 淡灰茶褐色砂礫土
(3～5 cm礫多量含)



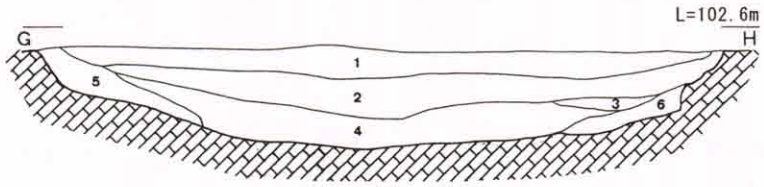
1. 褐色砂質土
2. 暗褐色粘質土(1～8 cm礫含)
3. 黒褐色粘質土(3 cm前後の礫含)
4. 暗褐色粘質土(1～5 cm礫含)
5. 黒褐色粘質土(1～8 cm礫含)
6. 黒褐色粘質土



上層
1. 褐色砂質土
2. 暗褐色粘質土(5 cm前後の礫含)

中層
3. 暗褐色粘質土(5 cm前後の礫含)
4. 黒褐色粘質土

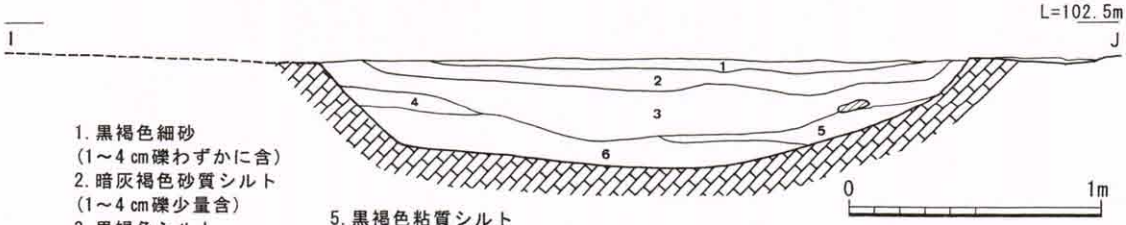
下層
5. 黒褐色砂質土(1～5 cm礫含)
6. 黒褐色粘砂土



上層
1. 暗褐色粘質土
(5 cm前後の礫少量含)

中層
2. 暗褐色粘質土
(5 cm前後の礫含)

下層
3. 黒褐色粘質土
4. 黒褐色砂質土
(1～3 cm礫多く含)
5. 黒褐色粘砂土
6. 黒褐色粘質土



1. 黒褐色細砂
(1～4 cm礫わずかに含)
2. 暗灰褐色砂質シルト
(1～4 cm礫少量含)
3. 黒褐色シルト
4. 暗灰褐色砂質シルト
(1～2 cm礫多量含)
5. 黒褐色粘質シルト
6. 黒灰色粘質細砂(1～5 cm礫多量含)

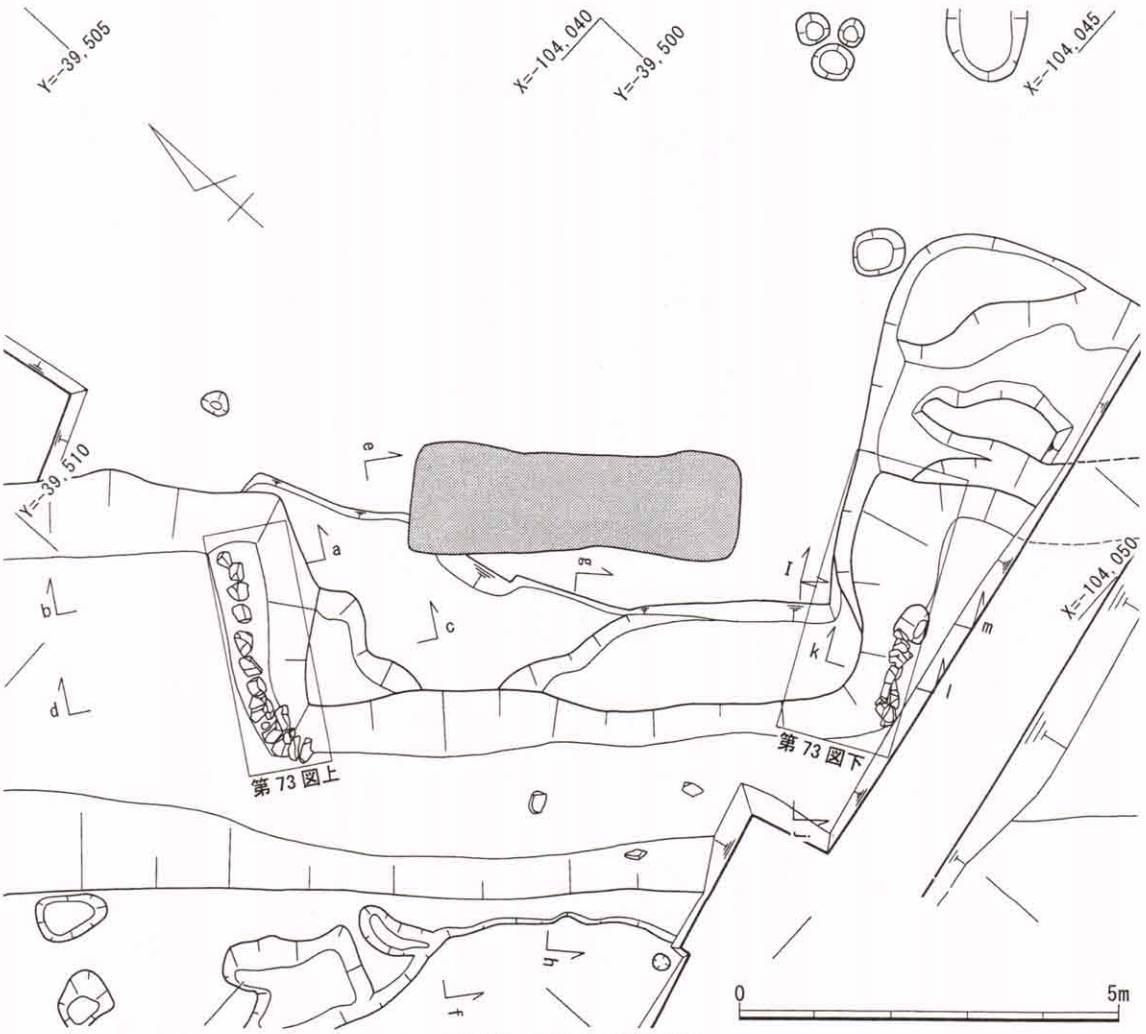
第71図　周溝内土層断面図

は、調査の排土置き場確保のため、表土を掘削した水田で周溝の輪郭が確認されたため、平板による検出状況の記録作業を実施したのみで周溝内は未調査である。

古墳の検出地点は時塚遺跡の立地する段丘の西端に位置している。これは、西に広がる平野部からの眺望を意識したためと推定される。

墳丘の規模は、造出しを含む全長25.4m以上、造出しを除いた長さ約24m、幅24mを測る。ほぼ正方形の主丘部をもち、南西辺の中央に造出しを付設している。墳丘の盛土は地山面まで完全に削平され、中心の埋葬施設はその痕跡すら検出できなかった。古墳の主軸は北から47°東へ振っているが、これは墳丘前面の段丘崖の方向に合わせていると考えられる。

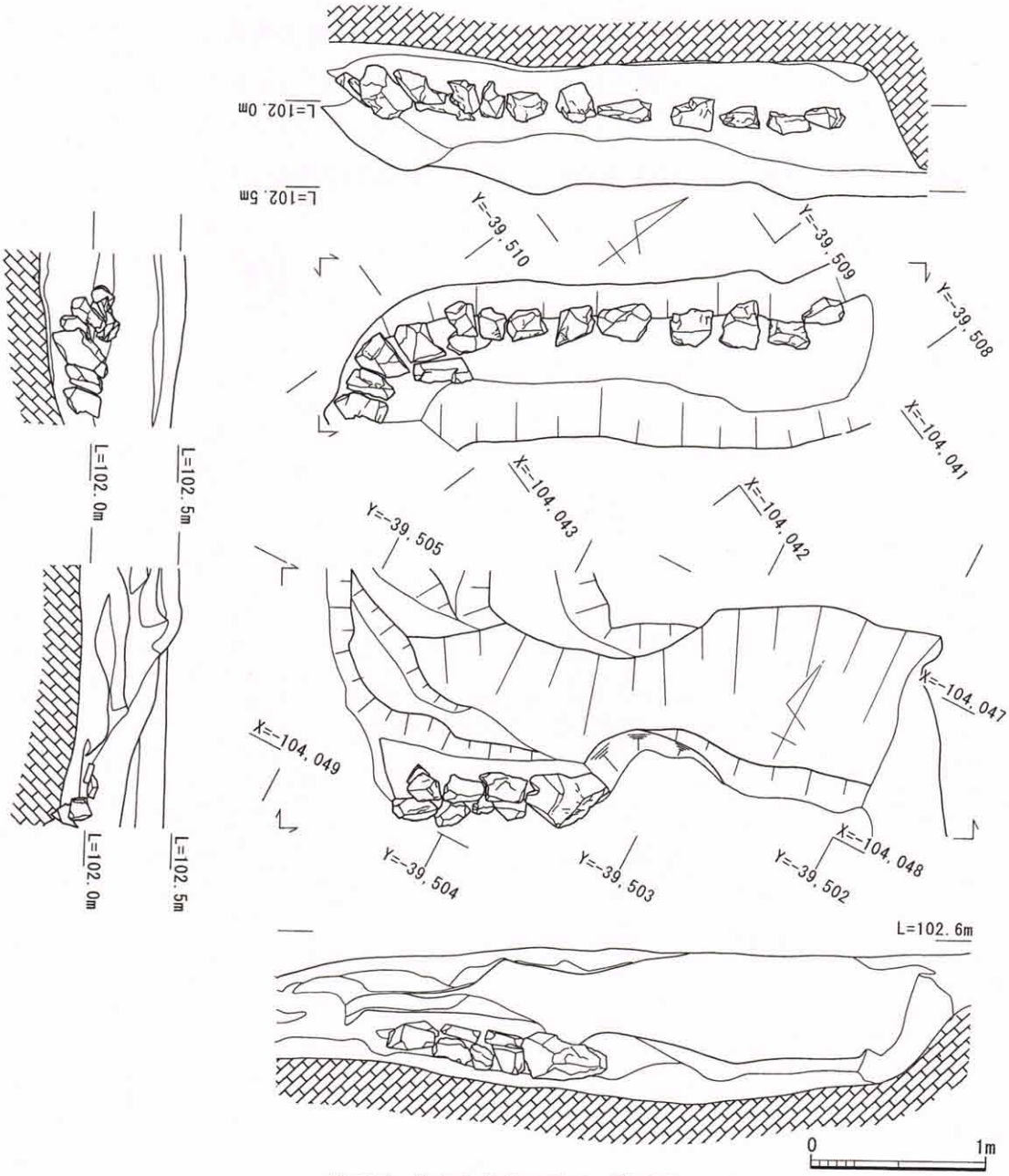
造出しは周溝側の幅が狭い台形状を呈し、長さ3.6m、幅は墳丘側が10.0m、周溝側が8.4mを測る。造出しの北辺・南辺の一部で葺石を２段分検出した。葺石は人頭大の亜角礫である。造出しの前面の葺石は抜き取られていた。造出し以外の墳丘部分に葺石が残存していた場所はないが、周溝東部分に置き去られた葺石が見られたため、墳丘にも葺かれていた可能性がある。造出しの前面の傾斜は不自然なほど急になっている。また造出しの前面部上端隅も不自然に削平されており、残存する葺石と併せて、周溝底から墳丘に上るための階段状を呈している。これらの事実は



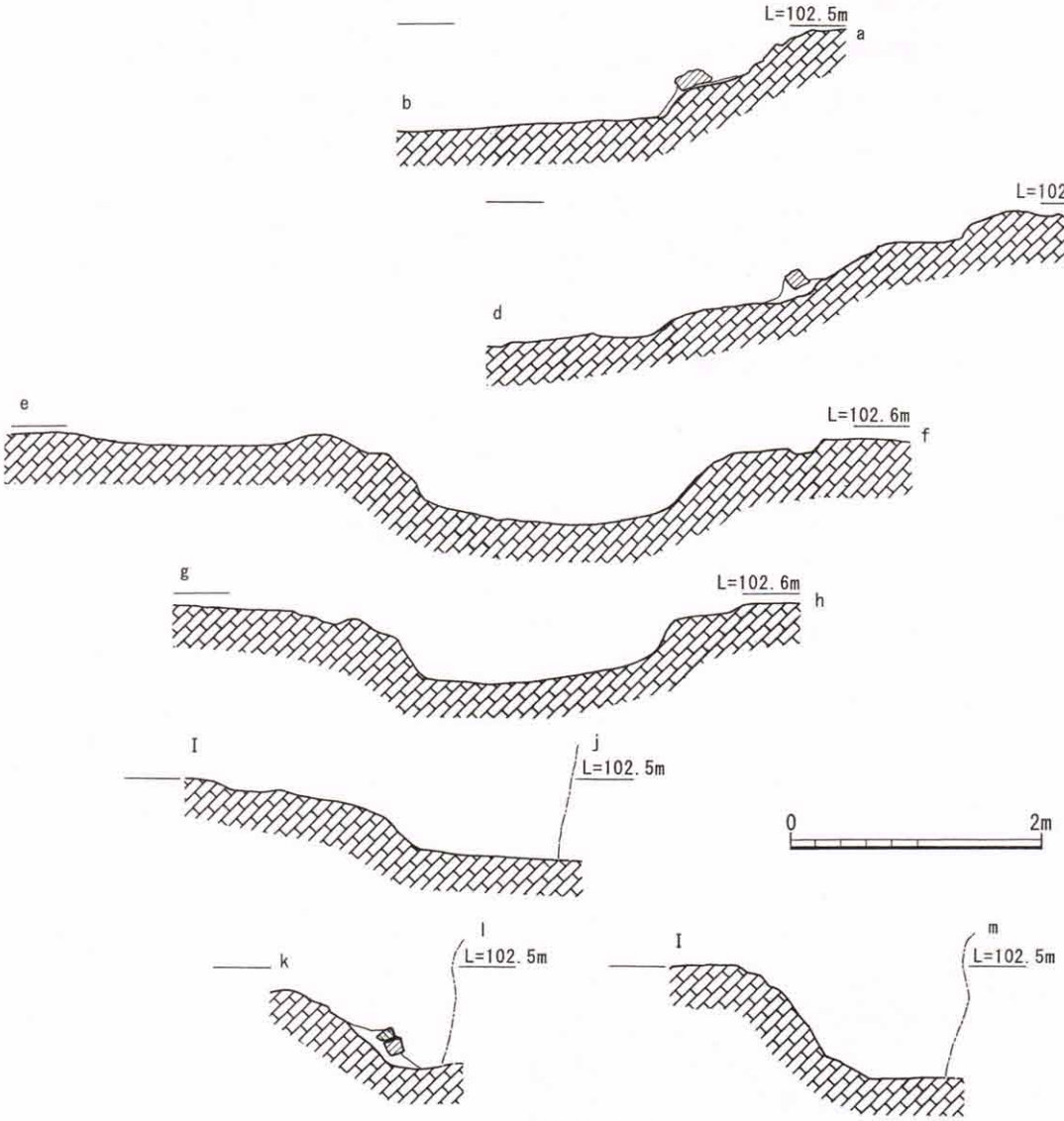
第72図　造出し部平面図

後述する墳丘の改変と関わりがある。

墳丘の周囲には幅６ｍ、深さ最大0.9ｍの周溝を方形に廻らしている。周溝は造出しの北側が最も深く、造出しの前面が最も浅い。周溝は河岸段丘上の洪積礫層を穿って掘削されている。周溝埋土は黒褐色の黒ボク土の再堆積層を主体とするが、最下層には礫を多量に含み、中層は礫を含まない層を含む。周溝埋土からは古墳築造以前の時塚遺跡に伴う多量の弥生時代中期の土器や台石が出土したが、これらとともに奈良時代の須恵器が周溝の中層からも出土した。これは後述する墳丘の改変と関連する事項である。また亀岡盆地でしばしば見られる二重周溝については、周溝からかなり離れた地点まで調査したが、耕作土・床土の直下には地山面が露出していた。また周溝が最深部で0.9ｍを測ることから、周溝外の削平はさほど大きくはないことが予想される。



第73図　造出し部葺石平面・断面図



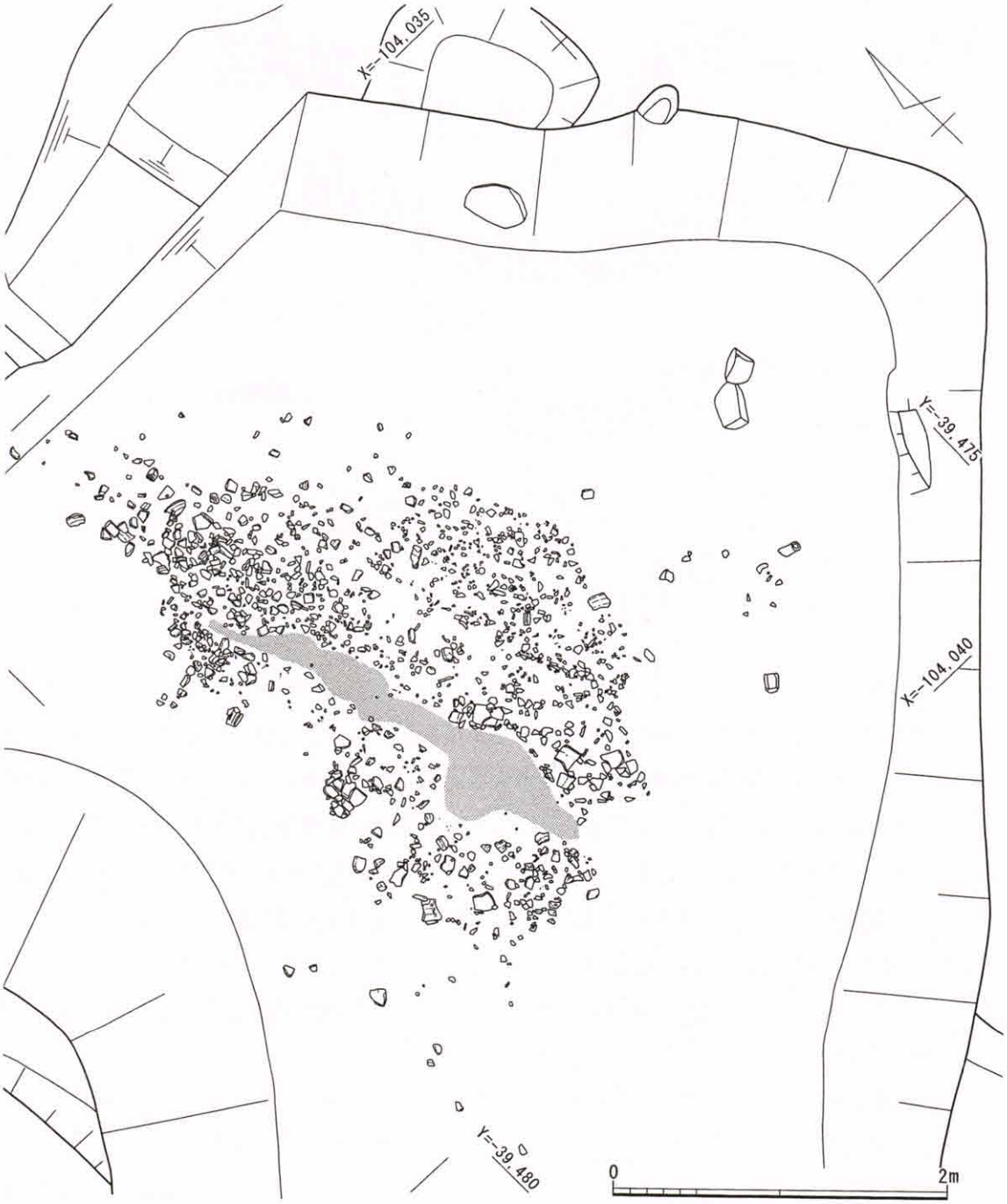
第74図　造出し部断面図

従ってこの時塚１号墳に関しては、墳丘の削平を考慮しても、存在しなかった可能性が高い。古墳の墳丘斜面は傾斜が急で、斜度は最大約60°になっている。また確実に葺石があったと考えられる造出し前面は葺石が抜き取られ、斜度が大きくなっている上に、墳端のラインが抉られたように内側に屈曲している。さらに既述したように墳丘東側の周溝内、埴輪出土地点周辺部でも持ち出し損ねた葺石が残存しており、このことから墳丘を取り巻いていた葺石のほとんどが抜き取られた可能性もある。以上の２点と周溝内から出土する奈良時代の土器を考え合わせると、奈良時代に時塚１号墳は大きく改変を受けていた可能性を示唆している。周溝内から奈良時代の土器が出土することは時塚古墳から北西約１kmにあるほぼ同時期の坊主塚古墳でも見られるが、削平の様子は木津川市上人ケ平５号墳の在り方に近い。(注11)

時塚１号墳に伴う周溝の東隅で埴輪群が検出された。これらは、はじめにも述べたように、京都府教育委員会による第５次調査で確認され、当調査研究センターが第６次調査として実施することになったものである。第６次調査では、当初、調査対象地の畦畔手前まで調査区を広げて調

査を行った。その結果、試掘調査で検出された埴輪群の続きを検出することができた。しかし、同時に、これらの埴輪群が畦畔の下まで広がることが明らかになったため、改めて畦畔を除去し、可能な限り調査区を広げることとした。その結果、周溝の東角を検出するとともに、埴輪群の全容をおおむね明らかにすることができた。以上のように、周溝出土埴輪群の調査、記録、取り上げ作業は、3回に分けて実施した。その都度、縮尺1/10の埴輪出土状況図を作成し、担当者が埴輪片の胎土・色調の類似性や同一個体の可能性のあるものを確認しながら、グループごとにまとめて取り上げた。

埴輪群は、周溝の東南辺から東北辺へと至る東角のコーナー部分で検出された。埴輪群は、お



第75図　埴輪出土状況図(1)

おむね南北４ｍ、東西2.4ｍの範囲に、ややまとまった状態で出土した。埴輪群は、周溝底のほぼ直上で出土したが、10cm前後の厚さを持っていた。層位的には周溝埋土下層に当たる（第71図断面Ａ－Ｂの５層）。なお、出土状況図（第75図）中央の網点は、埴輪が出土したものの諸般の事情により図化できなかった範囲を示している。

出土した埴輪群には、整理作業の結果[注12]、盾持ち人形埴輪・人物埴輪・器財埴輪などの形象埴輪のみで、円筒埴輪は含まれていない。また、埴輪群の出土位置を検討した結果、広範囲に散らばった破片が接合でき、同一個体と判断できたこと、さらに、完形に復原できたのは盾持ち人形埴輪に限られ、大半の埴輪は、完形に復原することはできなかったこと、などから、墳丘や周溝外堤に樹立されていたものが転落したとは考えられない。以上の状況から、墳丘上などにあった埴輪をまとめて人為的に廃棄・投棄された可能性が高いと考えられる。

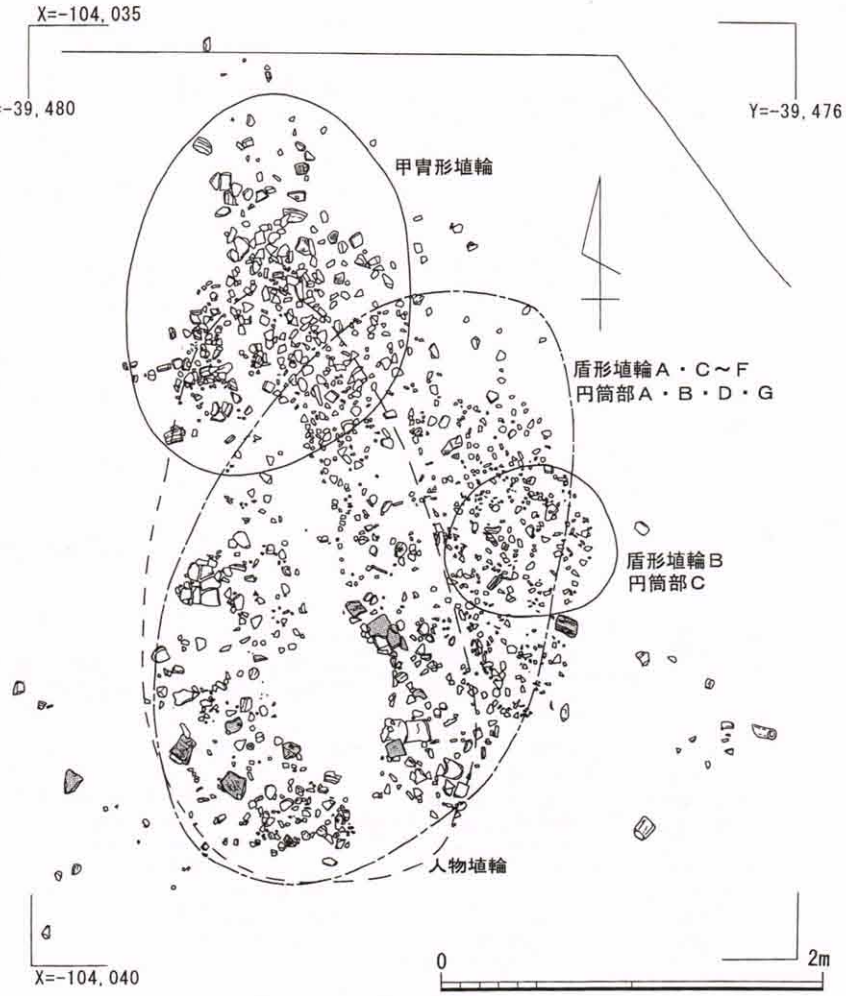
このほか、周溝からの出土遺物として、上・中層（第71図断面Ａ－Ｂの１・２層）から奈良時代を中心とする土器が出土した（第97・98図１～53）。

Ｂ．主体部

時塚１号墳では、造出しに１基の主体部ＢＳＸ033を検出した。この埋葬施設は、削平を免れた副次的なものと考えられ、本来の中心主体部があるべき主丘部では削平のため確認することはできなかった。

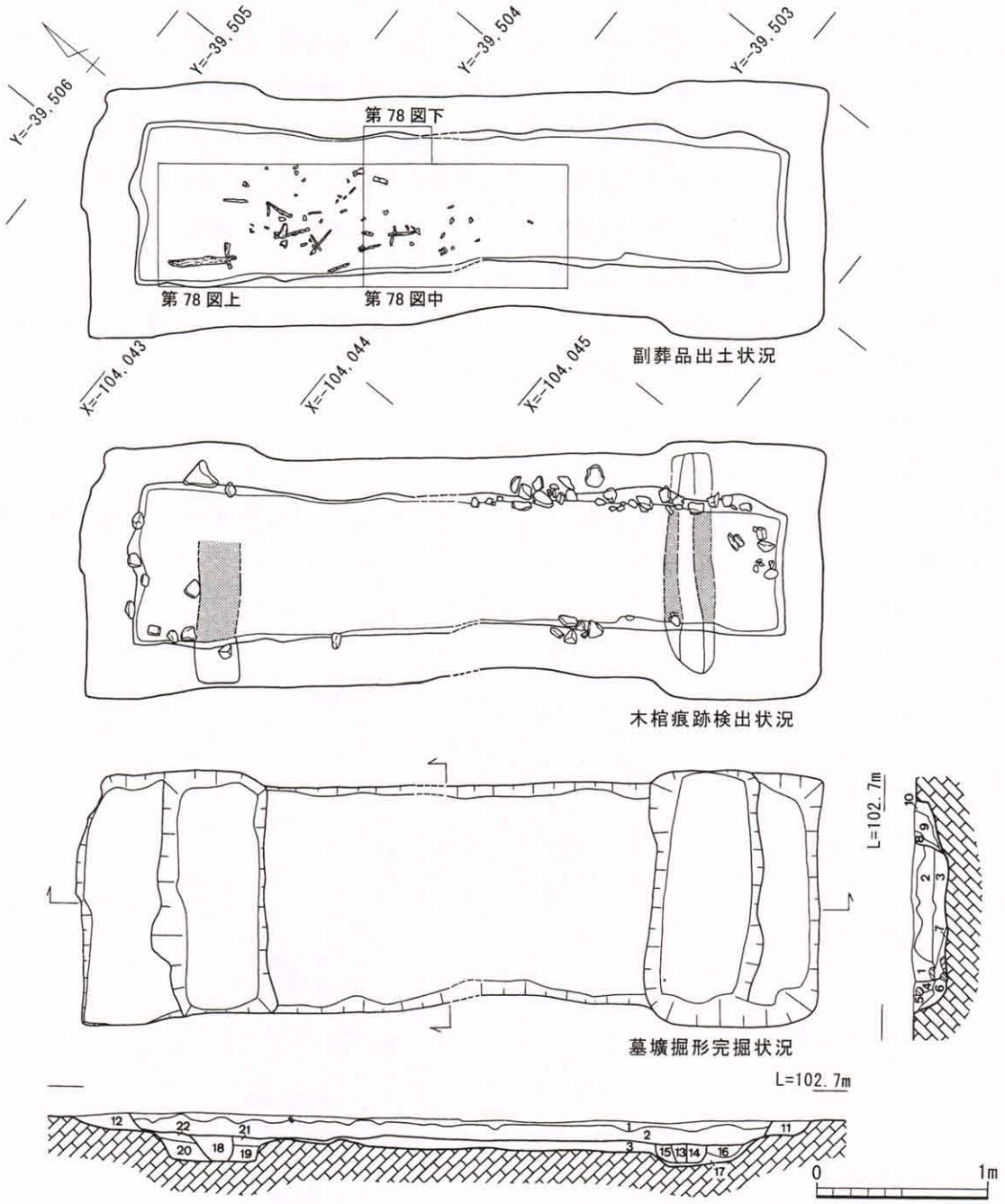
造出しの主体部ＢＳＸ033は、造出しのほぼ中央部に位置する木棺直葬形態をとる主体部である。墓壙の主軸方向はＮ39°Ｗを測り、墳丘主軸に直交する。

墓壙は平面長方形を呈する。墓壙は基本的に素掘りで、両小口付近には小口板を据えるための小口溝が設けられている。小口溝は断面観察の結果、墓壙を



第76図　埴輪出土状況図（２）

一端掘削し、整地土(第77図第３層)を施した後に掘削されたとみられる。墓壙の規模は全長4.3m・幅1.5m・検出面からの深さ0.24mを測る。地山面上で検出したが、墓壙が比較的浅いことから、上面は削平されている可能性も考えられ、盛土から掘り込まれていた可能性も残る。



1. 暗褐色シルト(砂少量含、1.5～4cm円礫多量含)
2. 極暗褐色シルト(1～3cm礫多量含)
3. 極暗褐色粘質シルト(2～4cm礫少量含)
4. 極暗褐色シルト(砂少量含、5mm～1.5cm礫少量含)
5. 暗黄褐色シルト(砂少量含)
6. 極暗黄褐色砂質シルト
7. 暗黄灰褐色粘質シルト
8. 暗黄褐色シルト質極細砂
9. 黒褐色粘質シルト(砂少量含)
10. 暗灰褐色シルト(砂・1～2cm礫少量含)
11. 極暗褐色シルト(3～5cm礫多量含)
12. 極暗褐色シルト(3～5cm礫少量含)
13. 極暗黄灰色シルト(黄褐色粘土塊含)
14・15. 極暗灰黄色砂礫(2cm礫ランダムに含)
16. 極暗灰褐色シルト
17. 極暗灰色細砂
18. 極暗灰黄色砂礫(19・20層より礫多く、ランダムに含)
19・20. 極暗灰黄色砂礫
21・22. 極暗灰褐色シルト

第77図　主体部ＢＳＸ033平面・断面図

墓壙内では長さ3.6m、幅0.7～0.8mを測る箱形木棺の痕跡を検出した。南西幅のほうが、北東幅よりも広いことや、後述する鉄鉾などの大型武器の配置から、被葬者の頭位は北西にとられていたものと考えられる。小口溝内の木棺材痕跡の観察によると、小口板は小口溝の長さいっぱいの幅で、おそらく小口板の上部を凸型に加工して長側板を受ける形であったと推測される。この小口板間での棺内内法長軸は約2.7mを測る。この小口板と平面から確認した木棺痕跡・土層の検討から、木棺両小口部分には副室構造状の空間が存在したものとみられる。また、木棺の側面には拳大の小礫や粘土塊が詰められており、木棺の固定に用いられていたと考えられる。底板の有無については明確にできなかった。

遺構掘削の進行に伴い、鉄製品が多数確認された。その多くが棺底から５～10cmほど浮いて検出されたため副葬品のほとんどは棺蓋上からの転落であると考えられる。これらの鉄製品は、以下のように検出されている。

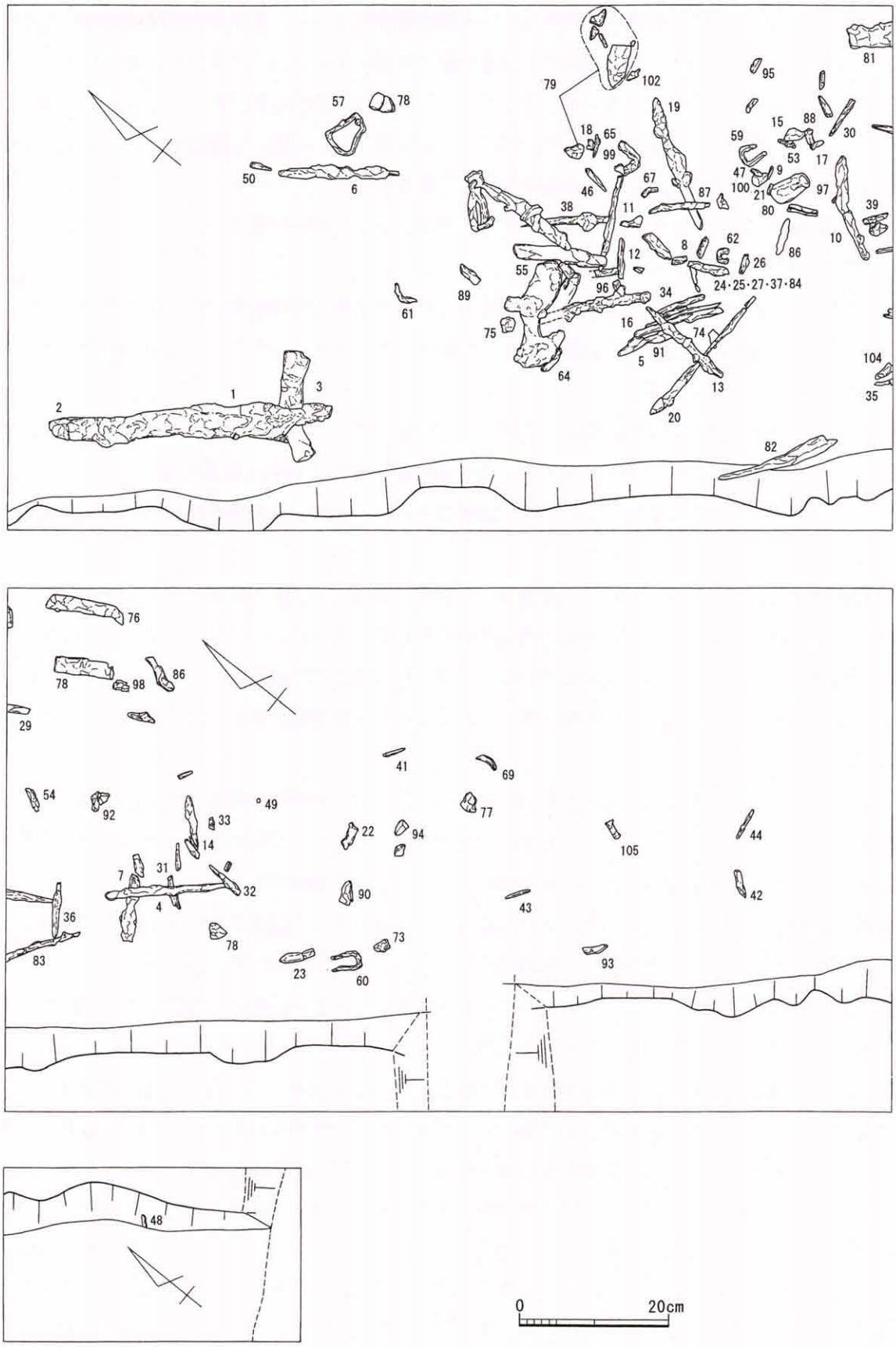
棺上北西からは切先を北西に向け、鉄剣(１)が検出された。鉄剣の茎部には鉄鏃(３)が、刃部先端を南東に向けた状態で錆着していた。この出土状況から、鉄剣と鉄鏃を組み合わせた「戟」であった可能性が考えられる[注13]。この鉄剣・鉄鏃の下には、鉄鉾(２)が軸を揃えた状態で置かれていた。

鉄鏃は棺上各所から検出された。鉄製ｆ字形鏡板付轡(55)の南東方向から切先を東から北に向けた状態で確認されている。これらの鉄鏃群は比較的まとまりを示しており、束状での副葬、もしくは矢盛り具に入っていた可能性がある。一方、棺上南東部では細片化した鉄鏃が確認されており、仮に土圧により崩壊したとみた場合、かなりの二次的移動とそれに伴う破損を受けていると考えられる。

鉄製ｆ字形鏡板付轡(55)は棺上北東部中央からやや北東棺側寄りで検出された。銜部を下にし、その上に折り重なった鏡板から引手が南北に伸びていた。さらに北側の引手の先端には引手壺が連接していた。鏡板の立聞には吊り金具が付随しているのが観察できた。

鉸具は遺物検出範囲の各所や、轡の下からも出土し、ほとんどの副葬品を取り上げた後の棺床面の精査時にも出土した。革金具は、轡周辺から２点(74・75)を検出したほか、南東の鉸具(60)に近接して検出したもの(73)もあり一定のまとまりは示していない。また、(70～73)は掘削作業中に検出したもので原位置を特定できなかった。

鉄鎌(76)はほぼ完形で、棺上中央付近から検出され、その北西からは鉄鎌(79)が細片化した状態で検出された。一方、鉄鎌(78)は鉄鎌(70)の南西で基部が検出されたが、先端は鉄鎌(79)の南西や、鉄鏃(４)の南といった広範にある破片が接合した。袋状鉄斧(80)は轡のやや北東から切先を西に向けた状態で、袋状鉄斧(81)は鎌(70)のすぐ北西から切先を南東に向けた状態でそれぞれ検出された。鉇(82)は南西棺側付近から切先を東に向けた状態で、鉇(83)はそのすぐ東から軸を同じくして検出された。鑿(84)は轡の南の鉄鏃群と錆着して検出されている。また、工具の茎と思われる個体(85)は轡と錆着して検出された。刀子(86)は鉄斧(65)の南西と、鉄鎌(70)の南から検出した破片が接合し、その他のものも、轡の南西から、遺物検出範囲の南東付近までの広範に



第78図　主体部ＢＳＸ033副葬品出土状況拡大図

わたって細片化した状態で検出された。

鉄釘状性格不明鉄製品は、鉄鎌(79)のすぐ南(102)や鉄斧(80)の北、鉇(83)のすぐ北、遺物検出範囲のほぼ南東付近(105)から原位置を保った状況で検出されている。この出土状況からは必ずしも棺材の固定に使用されたとは判断できず、遺物本体の検討結果から、釘ではないものと判断した。

主体部ＢＳＸ033では、上記のように棺上と推される位置から棺内に転落した状態で鉄製品が検出されているが、鉄鎌(78)や、刀子(86)のように同一個体がかなり離れて検出されたものが多い。また、鉄鏃はほぼ全ての個体に矢柄の痕跡が残されており、矢柄を装着した状態であったことは間違いないが、鉄鏃も南東の一群は細片化が著しく、意図的に破砕したとは考え難い。この状況から、棺上でも棺側付近に置かれた一群の副葬品が、棺の腐朽に伴い、棺内に転落、破損したものと考えることができる。従って、検出状況では棺上における副葬品の配置状況から大きく移動してしまっているものと思われる。また、棺底付近から検出された鉸具(56・58)についても、棺蓋の腐朽に伴い棺内に転落したものとみて大過ないと考える。鉄鉾や鉄槍(戟)については、棺上棺側寄りに棺長軸に沿って配置されたものとみられ、棺小口板付近に副葬されたこともあり、大きく移動は受けていないと判断する。このように、ＢＳＸ033出土遺物はすべて棺上遺物であり、棺内からは副葬品は検出されなかった。

(福島孝行・石崎善久・筒井崇史)

Ｃ．出土遺物

時塚１号墳出土遺物には、造出しの主体部ＢＳＸ033出土の鉄製品、周溝内出土の弥生土器・須恵器・埴輪・鉄製品がある。以下、主体部出土遺物と周溝内出土遺物の順に概観する。

ａ．主体部ＢＳＸ033出土遺物(第79～85図)

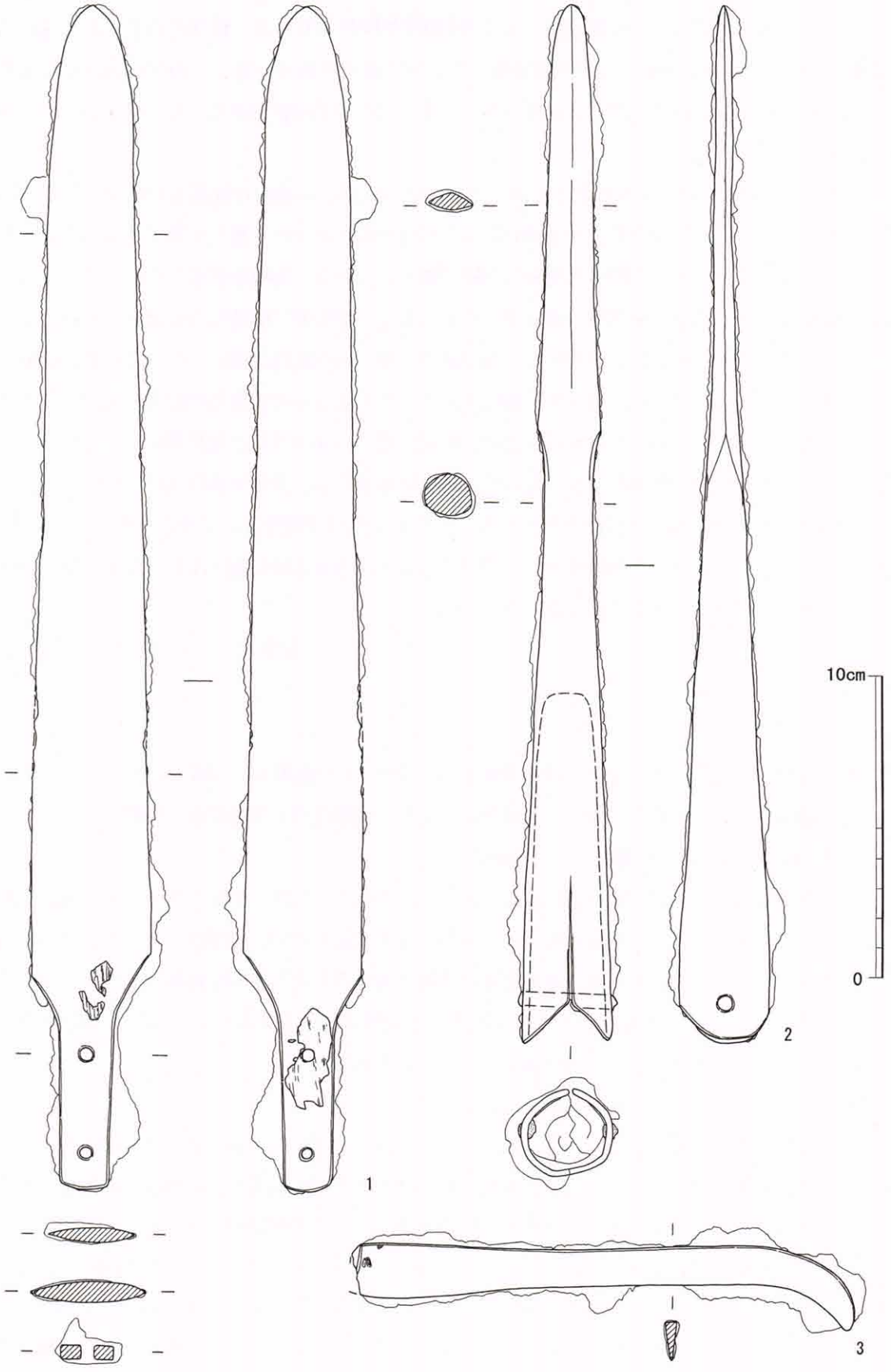
主体部ＢＳＸ033出土遺物は全て鉄製品である。器種には、馬具・武器・農工具・釘状鉄製品などがある。鉄製品は保存処理前と処理後に実測作業を実施したが、処理後に大きく形態の変化してしまったものも含まれており、原則的に処理後に再実測した実測図を掲載している。また大型鉄製武器や馬具といったＸ線による写真撮影の必要性の高いものについては、保存処理時に(財)元興寺文化財研究所に委託して実測を行ったものもある。(注14)

武器は鉄鉾１点・鉄剣１点・鉄鏃20余点が検出された。

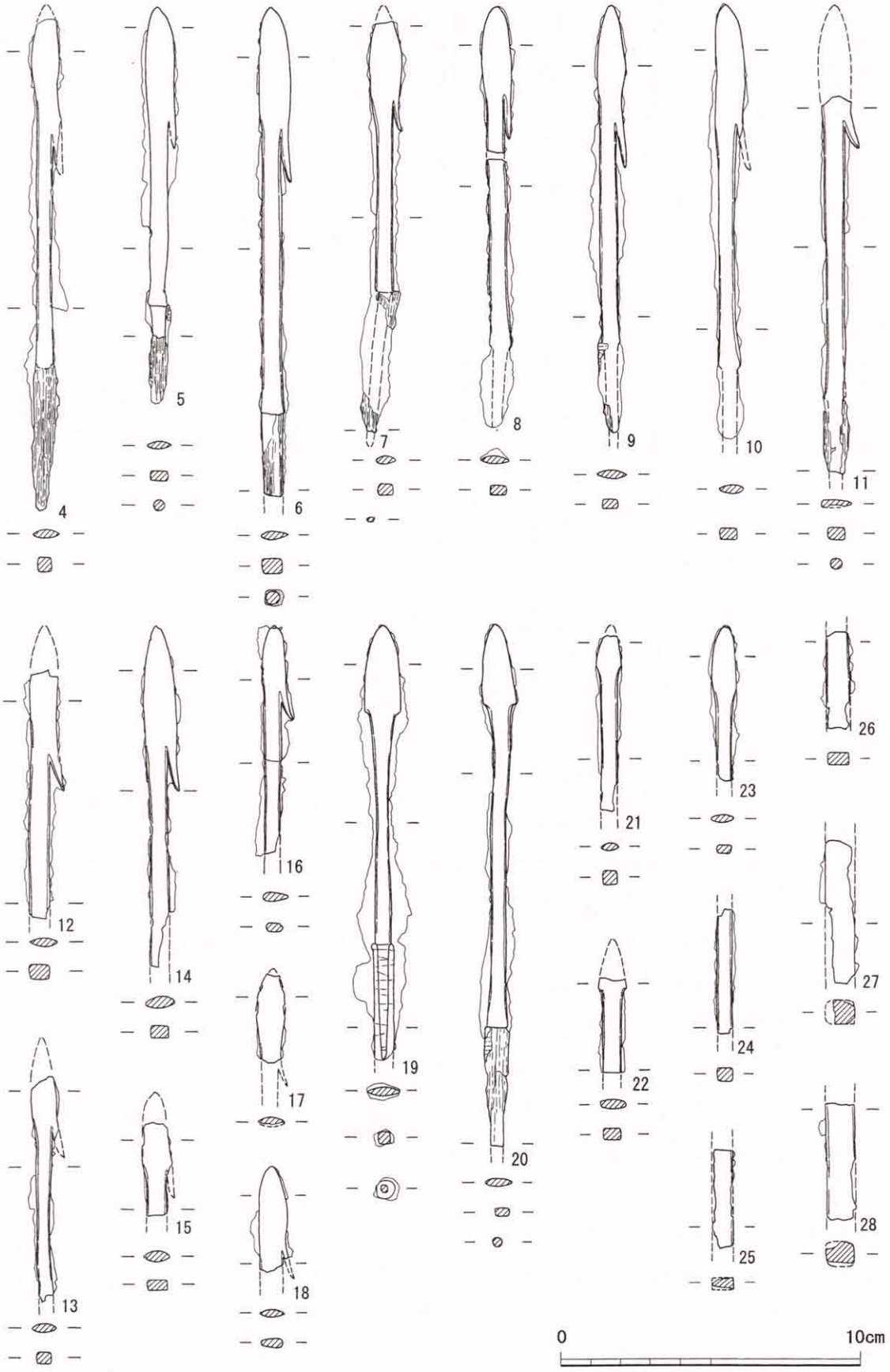
１は鉄剣である。全長39.7cmを測る。関は非対称な斜め関を呈し、刃部は明瞭な鎬を持たない両丸造りの断面形を呈する。茎は短く、茎尻はやや丸みを帯びている。目釘孔は２孔確認される。刀装具の装着痕は認められるが、具体的な復原ができるほどの遺存状況ではない。

２は鉄矛である。全長34.6cmを測る。袋部は断面円形を呈する。袋部には対称方向に目釘孔が設けられ木釘が遺存している。刃部は厚手の造りであり明瞭な鎬をもつ。関は斜め関である。

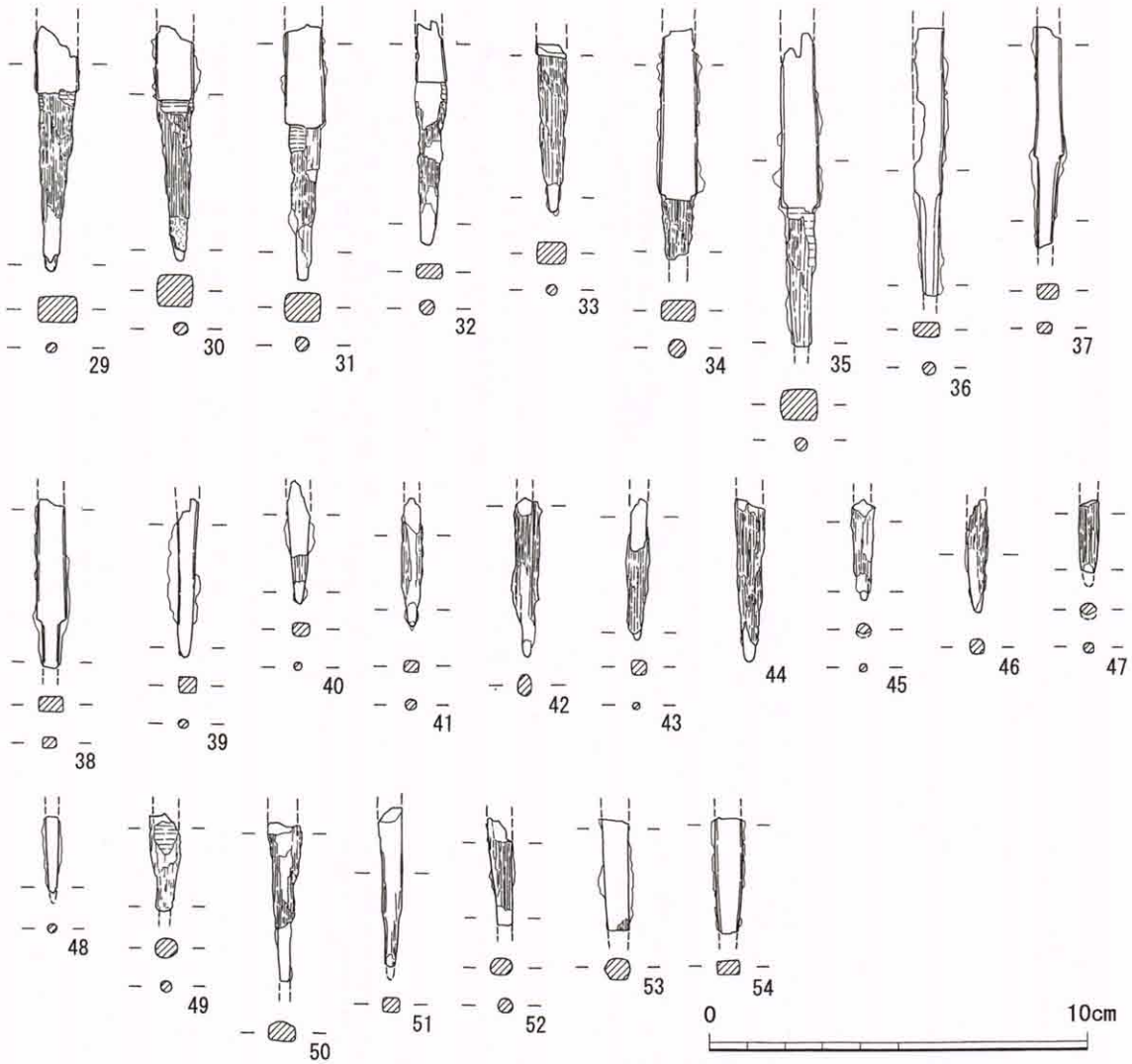
３は単体としてみれば曲刃鎌であるが、鉄剣(１)と組み合わさって検出されたことや、後述する曲刃鎌とは形態的な差が大きいことから鉄剣と組み合わされ戟として使用されていた可能性が



第79図　ＢＳＸ033出土鉄器（１）



第80図　ＢＳＸ033出土鉄器（２）



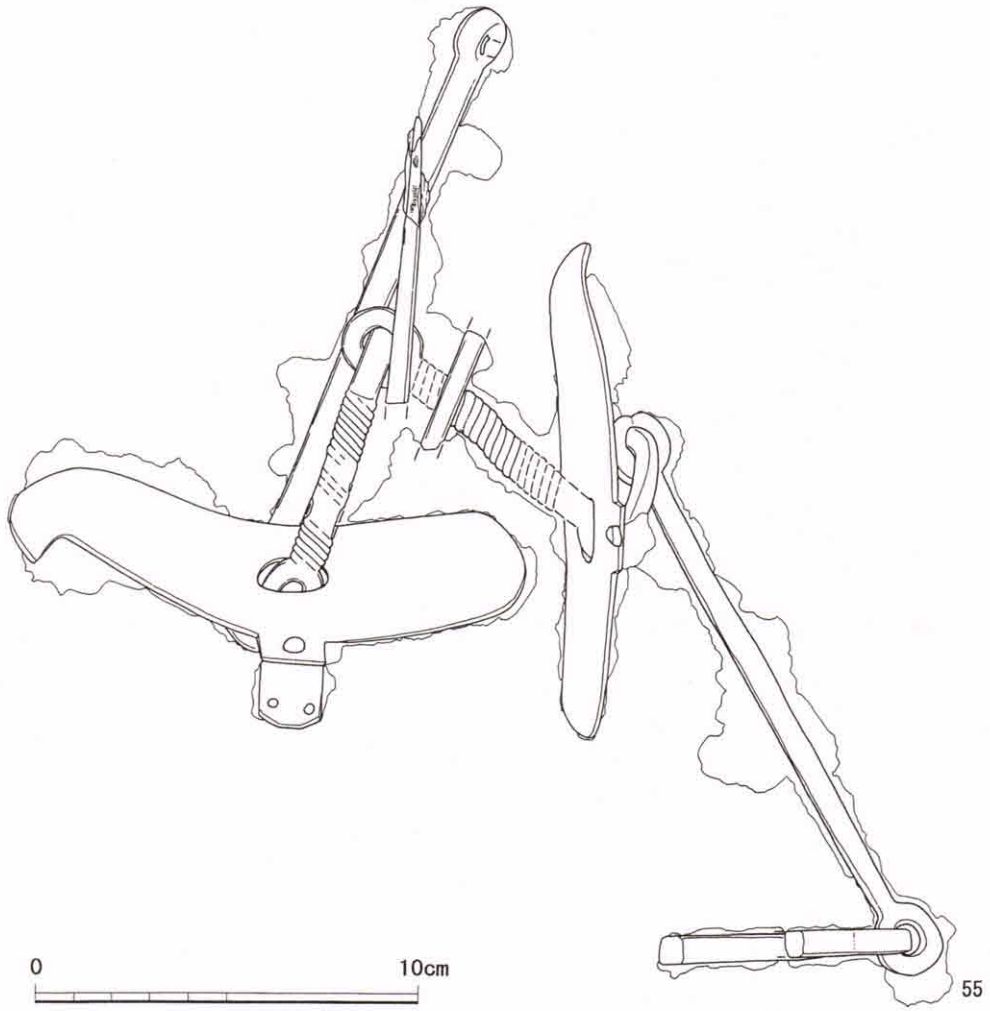
第81図　ＢＳＸ033出土鉄器（３）

ある。全長15.6cm・刃部幅1.3cmを測る狭長な形態を呈する。また基部の折り曲げも短い。

４～54は鉄鏃である。鉄鏃は鏃身部の確認できるものが20点、頸部の関の確認できるものが20点、茎の先端部がほぼ確認できるものが20点を数える。轡と錆着している個体もあるため、厳密な点数は明確にできないが総数20数点存在したものとみられる。いずれも長頸鏃である。鏃身の形態から大きく２形式に大別できる。４～18のように、平面柳葉系で片逆刺をもつ鏃身のものと、19～22のように平面三角形の鏃身をもつものである。また、１点のみ、柳葉で逆刺を持たないもの(23)が存在する。鏃身部断面は両丸造りである。確認できるものではいずれも茎に木質が遺存しているため矢柄を装着した状態で副葬されたものと考える。頸部の関はいずれも台形関である。

馬具には轡・鉸具・革金具が認められる。

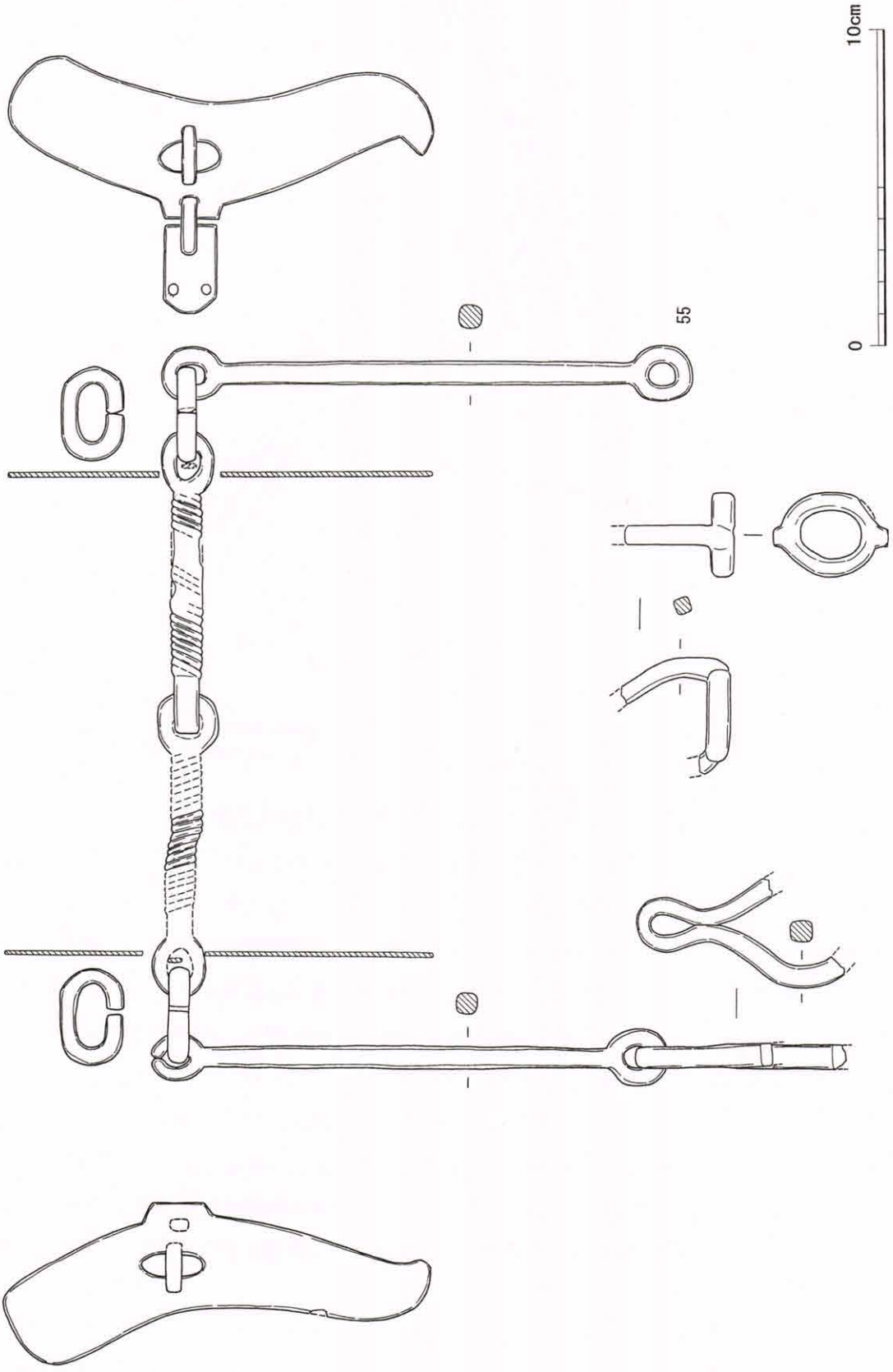
55は鉄製ｆ字形鏡板付轡(注15)である。一連の轡を構成する部品はほぼ遺存している。銜は２連銜で、引手金具とは楕円形の遊環を介して接合される。銜は捩りをかけられている。錆のため、詳細は不明であるが、Ｘ線写真から判断して一本の鉄棒に捩りをかけたものとみられる。銜の全長は右側が9.7cm・左側が9.7cmをそれぞれ測る。引手金具手綱側には瓢形引手壺が連接される。右側引



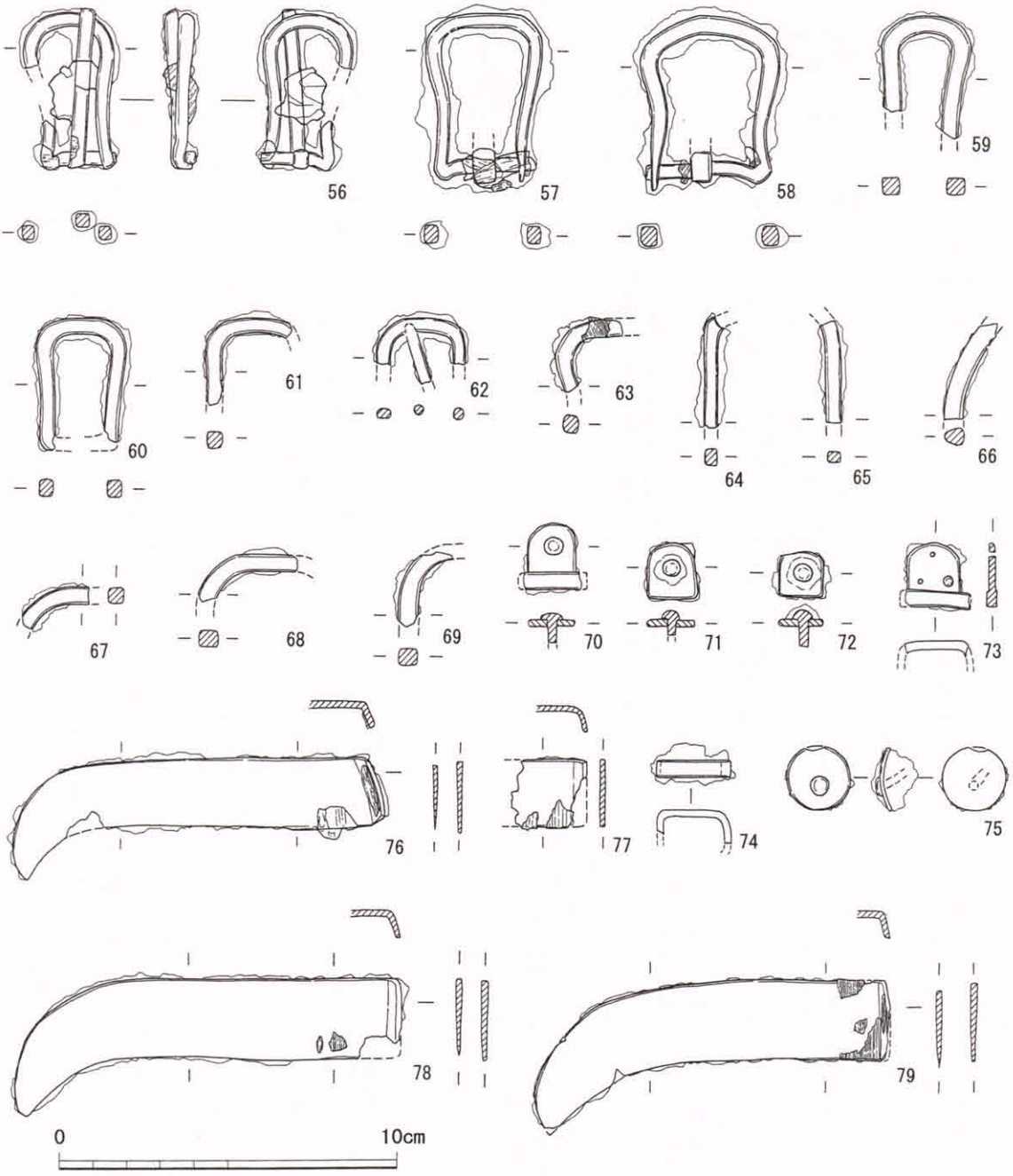
第82図　ＢＳＸ033出土鉄器(４)　鉄製ｆ字形鏡板付轡

手手綱側にも引手壺の小片が遺存している。また、分離して検出された引手壺は右側引手に繋がるものと考えられる。引手は右側が全長16.9cm、左側が16.4cmを各々測る。

鉄製ｆ字形鏡板は、右鏡板が長さ13.5cm・幅3.1cmを測り、左鏡板が長さ13.7cm・幅2.6cmを測る。全体の屈曲度は弱く、横方向に長い。左右とも先端を上方に屈曲させるが、左側鏡板の屈曲度が低く先端が丸みを帯びている。立聞は幅2.0cm・高さ0.5cmを測り、立聞孔は立聞本体からやや下方、鏡板本体にかけて穿たれる。右側鏡板では立聞孔を介して鉤金具が装着される。鉤金具は上方の丸い長方形を呈し、上水平方向に２か所の鋲がみられる。全長2.8cm・幅1.7cmを測る。鉤金具裏面には皮革と推測される有機質の痕跡が残る。長楕円形の銜通し孔に対し銜留金具は縦方向に存在するが、銜留金具と鏡板本体との接合方法など詳細な観察は実施できていない。左側鏡板については他の部品との錆着のため銜通し孔などの詳細な観察を行うことはできなかった。鉸具は破片を含め総数14点を確認した。細片化しているため、本来の点数は不明であるが、少なくとも９点は存在したことが残存する破片から推測できる。便宜上馬具として報告するが矢盛り具の装着具を形成していた可能性もある。幅３cm以上の幅広のもの(57～58・68)と、幅３cm以下の幅狭のもの(56・59・60・62)が認められる。鉸具本体は一本の鉄棒を曲げることにより成形さ



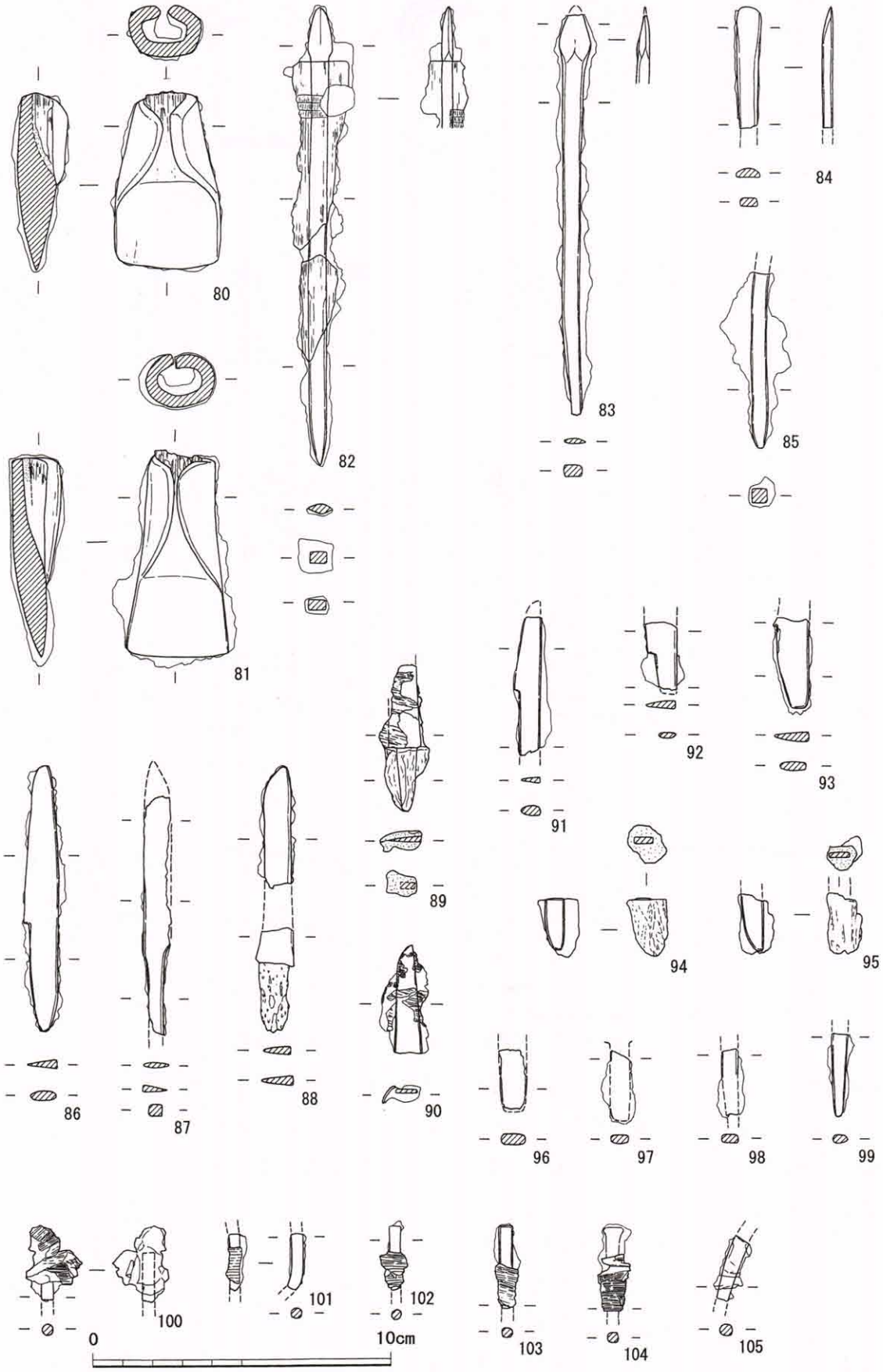
第83図　ＢＳＸ033出土鉄器（５）　轡展開図



第84図　ＢＳＸ033出土鉄器(６)　馬具・農工具

れ、Ｘ線により観察された56では端部を絡めた後に鍛接していることが確認される。また、57・58は鉸具先端を円孔に貫通させている状況が明らかにされている。刺金の遺存するものでは鉸具軸部との連接が巻き付けによることが認められる。木質の遺存するものもみられるが、これは棺材の痕跡と判断される。

革金具は５点を確認した。70～73は先端が丸みを帯びる方形のものである。鋲は１か所のものと、３か所のものがある。また、責金具をもつもの(70・73)が存在する。74は責金具のみ遺存している。いずれも漆皮膜状の付着物が表面に観察される。75は円形の革金具である。凸形の断面形態を示し、中央に鋲が１点確認される。他の革金具同様、表面に漆の皮膜状の付着物が認めら



第85図　ＢＳＸ033出土鉄器（７）

れる。

農工具類には曲刃鎌・鉄斧・鉇・鑿・刀子が確認される。

鉄鎌は先述した(3)を含め、5点を確認した。形態の判別するものは曲刃鎌である。残存する木質の状況や根元の折り曲げの角度からみて、柄との装着状況には、柄と直角に装着されたもの3点(77～79)と柄に対して広角に装着されたもの1点(76)の2種がみられる。また79では裏面にも木質が遺存しており木製柄に透かし孔を設け、鎌本体をそこに差し込んで固定する方法をとっていたことが分かる。

鉄斧はいずれも袋状鉄斧である。80は刃部幅3.5cm・全長5.9cm、81は刃部幅3.4cm・全長6.2cmを測る小型品である。袋部内面には木質が遺存しているため、柄が装着されていたものと考えられる。

鉇は2点を確認した。82は刃部が細くほとんど反りがみられない。柄に装着された状態であり、X線写真撮影により柄に直交する樹皮状のものが確認されている。83は刃部幅が広くほとんど反りがみられない。両者とも刃部に明確な鏑をもたない。

84は刃部が直線であるため鑿と考えた。保存処理前は全長9cm程度残存していたが、処理後に実測を実施したところ、刃部以外の部分を同定することができない状態であった。

また、轡に錆着している個体のうち茎まで遺存するものや、85についても、頸部の関が認められないため　もしくは鑿の可能性を考えておきたい。

刀子は破片として14点を図示した。茎先端まで遺存するものは10点存在するため、10点は副葬されていたものと判断される。いずれも小型品であり、鹿角製刀装具をもつものが5点(88・89・93・94・95)確認される。関の遺存するものでは片刃関のもの(86・91・92・93)と両関のもの(87・88・89)が存在する。

100～105は釘状の性格不明鉄製品である。直径約0.4cmの断面円形の棒状を呈する。一方の端部には、長軸方向に直交して木質が観察される。現状では2つの板材に貫通したとみられる個体は確認できない。また、頭部側に相当する部分には漆状の被膜が付着し、木質は認められないものが多い。以上の状態から木製の本体に途中まで打ち込まれ、頭部には漆が塗布されたものと考えられる。調査段階では小型の釘の可能性が考えられたが、上記の点から釘ではないものと考える。類例が乏しく、断定することはできないが、弓に伴う弭などの金具の可能性を考えておきたい。

(石崎善久)

b．周溝内出土遺物

周溝内出土遺物には埴輪・弥生土器・須恵器・土師器・鉄製品などがある。先述のとおり、この古墳は奈良時代に大きく改変を受けているとみられ、古墳に伴う遺物が原位置で出土したとは考えにくい。少なくとも埴輪はこの古墳に伴う遺物とみられるが、その他のものは古墳造墓以降に周辺から流入したものとみられる。以下、各遺物について概観する。

埴輪(第86～96図)

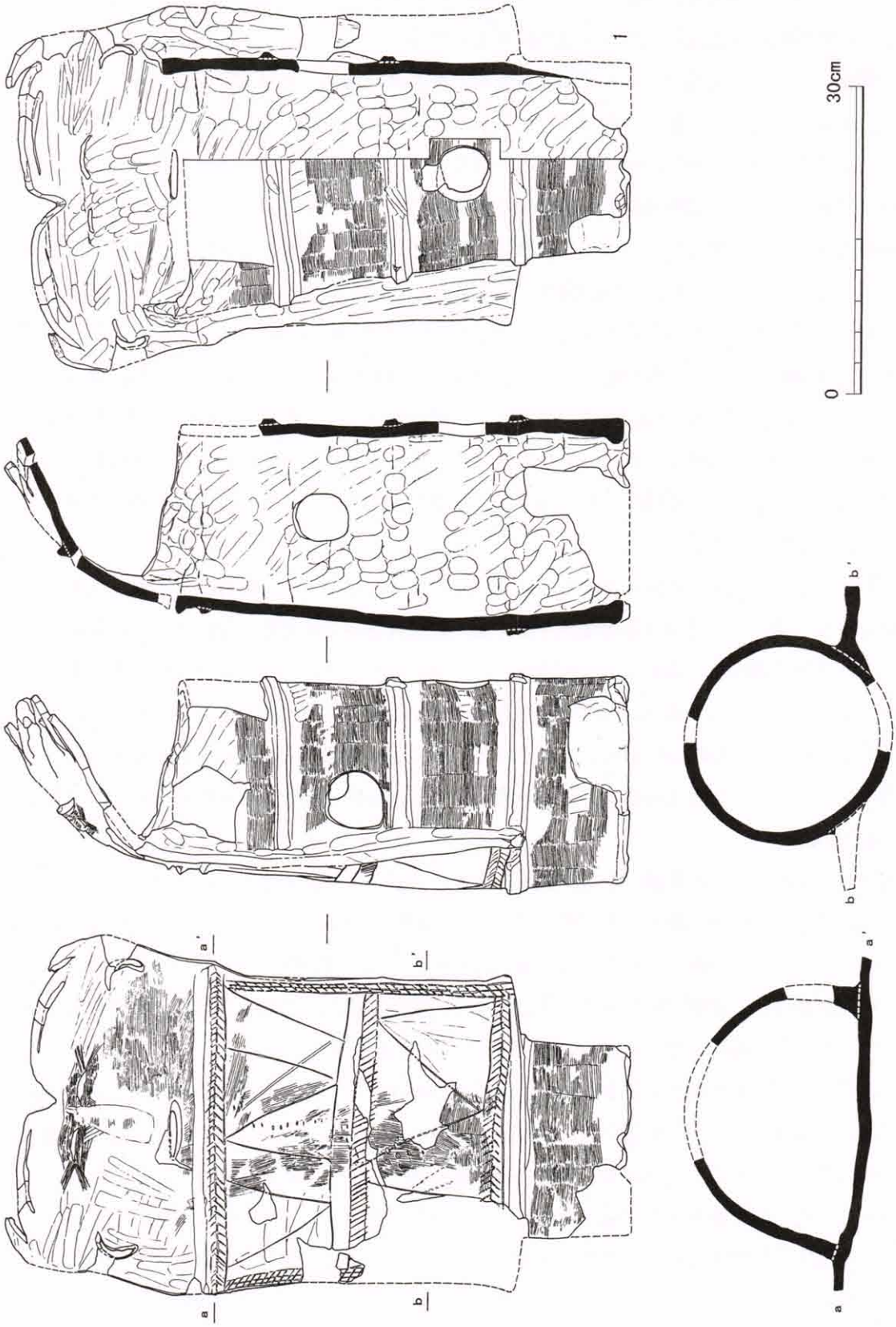
出土した埴輪は、形象埴輪のみで、円筒埴輪や朝顔形埴輪は確認していない。その器種には盾持ち人形埴輪・人物埴輪・甲冑形埴輪・盾形埴輪があり、この他に不明形象埴輪がある。[注16] これらのうち、盾持ち人形埴輪のみが須恵質で、残りは土師質の埴輪である。

ア．盾持ち人形埴輪（１）　欠損部があるものの、完形に近い状態に復原できた。頭部が盾面とは別に造形されず、盾面と同じ面上に造形されるという、盾持ち人形埴輪としては非常に特異な形態を呈する。胎土は細砂や１～３㎜程度の砂粒をやや多く含み、やや粗雑である。色調は暗灰褐色を呈する。焼成は堅緻である。現存高は62.0㎝、円筒部の底径は20.5㎝である。頭部は、盾面と同化した扁平な面上に作られており、円筒部の支えが途切れたところから後方へ大きく反っている。もとより、このように製作されたとは考えられず、本来は盾面からほぼまっすぐに立っていたと考えられるが、乾燥中もしくは焼成中に反ってしまったものと考えられる。頭部の背後には、何らのかの支持が行われていた痕跡は認められなかった。盾面の製作は、下半部では円筒部の表面とその両側に鰭を貼付けて盾面を形成する（第86図断面ｂ－ｂ’）のに対して、上半部では半円筒部に板状の盾面を貼付けて盾面を形成している（第86図断面ａ－ａ’）。したがって、上半部の製作は、円筒部の完成後、その上部を斜めに切り取った可能性がある。あるいは、半円筒部と盾面の製作を同時に行った可能性もある。以下、盾面、頭部、円筒部の各部位について述べる。

頭部　半円形の板状に造形されており、他の盾持ち人形埴輪にみられるような立体的な造形はみられない。頭頂部の中央に逆三角形の切れ込みがあり、両端には角状に突起がある。逆三角形の切れ込みと両側の角状の突起の間には、それぞれ長さ８㎝、幅0.5～１㎝の細長いスカシ状のものが穿たれている。頭部の両側辺付近には耳を表現したと思われる「Ｃ」字形のスカシ状のものが穿たれている。眉は若干、隆起しており、立体的に表現されている。同じく立体的に表現されていたと思われる鼻は、焼成中もしくはそれ以前に剥離したため失われている。両目の周囲は細く、短い線刻で隈取り状に線刻が行われている。市毛勲氏分類のＡ系列第Ⅱ群のＧ類とＫ類の特徴を合わせもつ。[注17] 市毛氏はＧ・Ｋ類を顔面赤彩の可能性を指摘されており、本資料も必ずしも入墨とは限らない。

頭部の特異な意匠については、盾持ち人形埴輪によくみられる被り物の類の表現と考えられる。ただし、時塚１号墳出土の盾持ち人形埴輪と同じような被り物の例は、管見による限り、確認できない。また、耳が顔と一体化して大きく表現されている点も、盾持ち人形埴輪の多くが耳を誇張して表現されていることから、同様の理由によるものと考えられる。したがって、頭部を立体的に表現せず、盾面と同一の平面上に描く時塚１号墳出土例は、特異ではあるが、盾持ち人形埴輪が持つ特徴を十分に備えているということができる。

盾面　高さ31㎝、幅30～32㎝で、ほぼ正方形を呈する。盾面の下端は最下段の突帯の直上にみられ、盾面と円筒部の間に段差は認められない。盾面の周囲は、上下を綾杉文、左右に斜線文を施して縁取りを表現している。盾面のほぼ中央で上下２段に区画するための界線を斜線文で施す。二分された空間にそれぞれ無文の鋸歯文を描くが、上段は鋸歯文が連続せず矩形の領域がみられ



第86図　時塚１号墳出土埴輪実測図（１）

る。下段は一部欠損するため不明であるが、矩形の領域は存在しないようである。この盾面の特徴として、内区・外区の区別が存在しないという点にある。このように、本資料の盾面の文様は、後述する盾形埴輪の文様と比べても稚拙に感じられる。

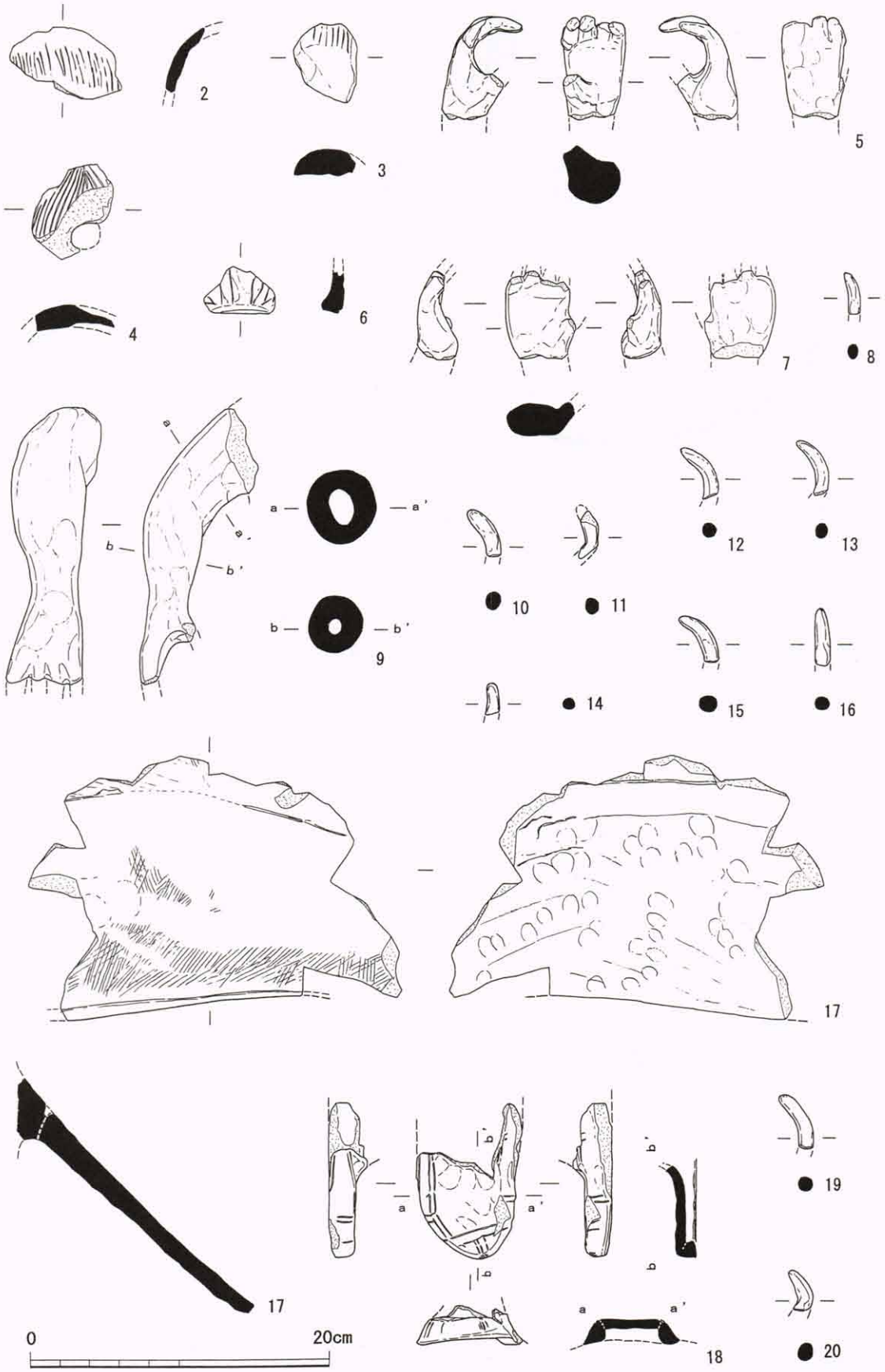
円筒部　突帯を３条貼付けて４段構成とする。高さは47.0cm、底径は20.5cmである。透孔は円形で、下から２段目に１個、３段目に２個みられる。透孔の穿孔方向は直交する。突帯は断面台形状を呈する。突出高は0.5～0.8cmであまり高くない。突帯間隔は約12cmで、底部高は若干低く約11cmである。外面の調整として、連続的な横方向のハケ調整を各段に施すが、最上段上半部には斜め方向のナデ調整を施す。内面の調整は、斜め方向のナデ調整を主体とし、突帯の接合部にのみユビオサエ痕がみられる。外面調整は、一瀬和夫氏が川西宏幸氏の「Ｂ種ヨコハケ」[注18]を、さらにＢａ～Ｂｄ種の４つに細分されたもの[注19]のうち、「Ｂｂ種ヨコハケ調整」に相当する。

イ．人物埴輪（２～22）　細片化が著しく、全容のわかる資料はない。胎土や色調、焼成などから、一応５個体分の人物埴輪に分けた。以下、人物埴輪Ａ～Ｅと呼称し（人物Ａ～人物Ｅと略記）、報告する。ただし、残存する破片の量があまりにも少ないので、これらが確実に別個体であるとは言い切れない。少なく見積もるならば、黄褐色系の人物Ａ・Ｃ・Ｄと橙褐色系の人物Ｂ・Ｅの２つに大別が可能である。

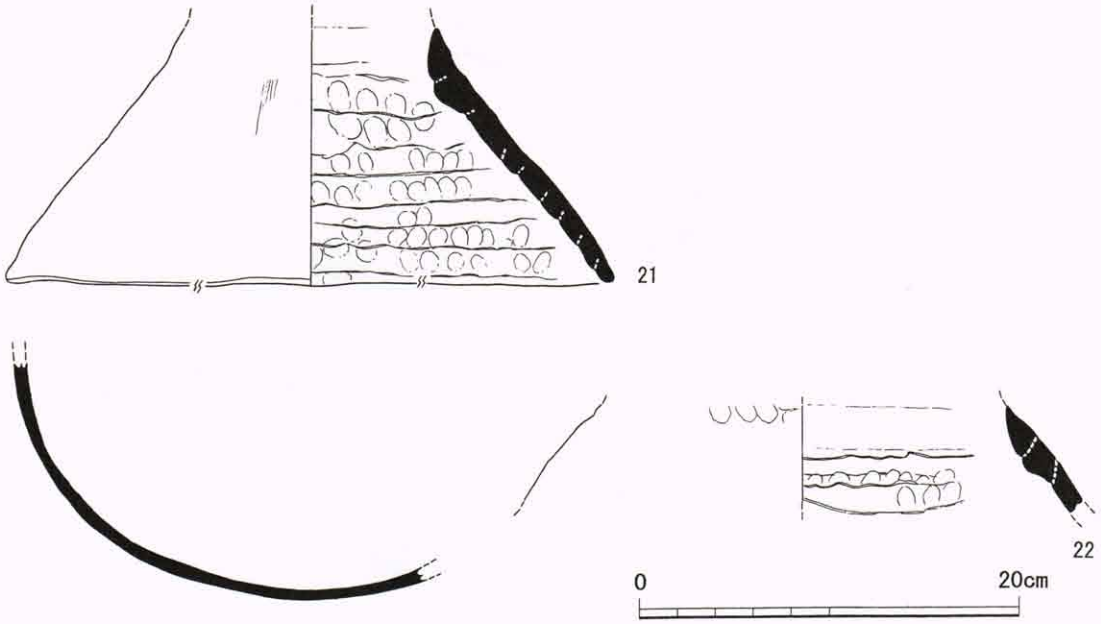
人物Ａには、頭部や掌の破片がある（２～５）。胎土は細砂や１～２㎜程度の砂粒を含み、やや粗雑な印象を受ける。色調は淡黄褐色を呈する。焼成は良好であるが、掌はやや磨滅気味である。２～４は頭部の破片で、線刻で頭髪を表現したと思われる。４には目の表現と思われる穿孔が認められる。５は左の掌である。５本のうち３本の指が遺存する。後述する７・９とともに、写実的な形態をなし、母指球も写実的に表現されている。指の形状から何らかの器物を捧げ持つような所作を呈していたと考えられる。甲から指にかけて部分的に赤彩の痕跡が見られる。残存高は6.8cmである。

人物Ｂには鼻と思われる破片や掌がある（６～８）。胎土は細砂や１～２㎜の砂粒をやや多く含み、粗雑である。色調は明るい橙褐色を呈する。焼成はやや軟質である。６は人物の鼻と考えられる破片で、背面に剥離痕がみられる。表面に線刻による文様が描かれる。市毛氏分類のＡ系列第Ⅰ群のＡ類ないしＢ類に相当すると考えられ、入墨の可能性もある。７は右の掌である。指はすべて欠損する。残存高は5.8cmである。８は７に伴う指と考えられる。

人物Ｃには腕と指の破片がある（９～15）。胎土は細砂と１～２㎜程度の砂粒を含むが、比較的密である。色調は淡黄褐色を呈する。焼成は良好である。９は体部との接合部から掌まで遺存する。腕は手首付近まで中空である。手首付近では直径１cmほどの円形の空洞であることから、棒状品を芯に粘土板を巻き付けて腕を製作した可能性もある。ただし、粘土板を用いた痕跡は確認できなかった。上腕部では空洞が大きく押し広げられて、体部との接合面をユビオサエで調整した後、直接、肩の穴に接合している。腕がどのような所作をしていたかは不明であるが、10～15の指の多くが屈曲していることから、５と同様にならんかの器物を捧げ持つような所作をしていたのではないかと考えられる。14は比較的短く、小指と考えられる。



第87図　時塚１号墳出土埴輪実測図（２）



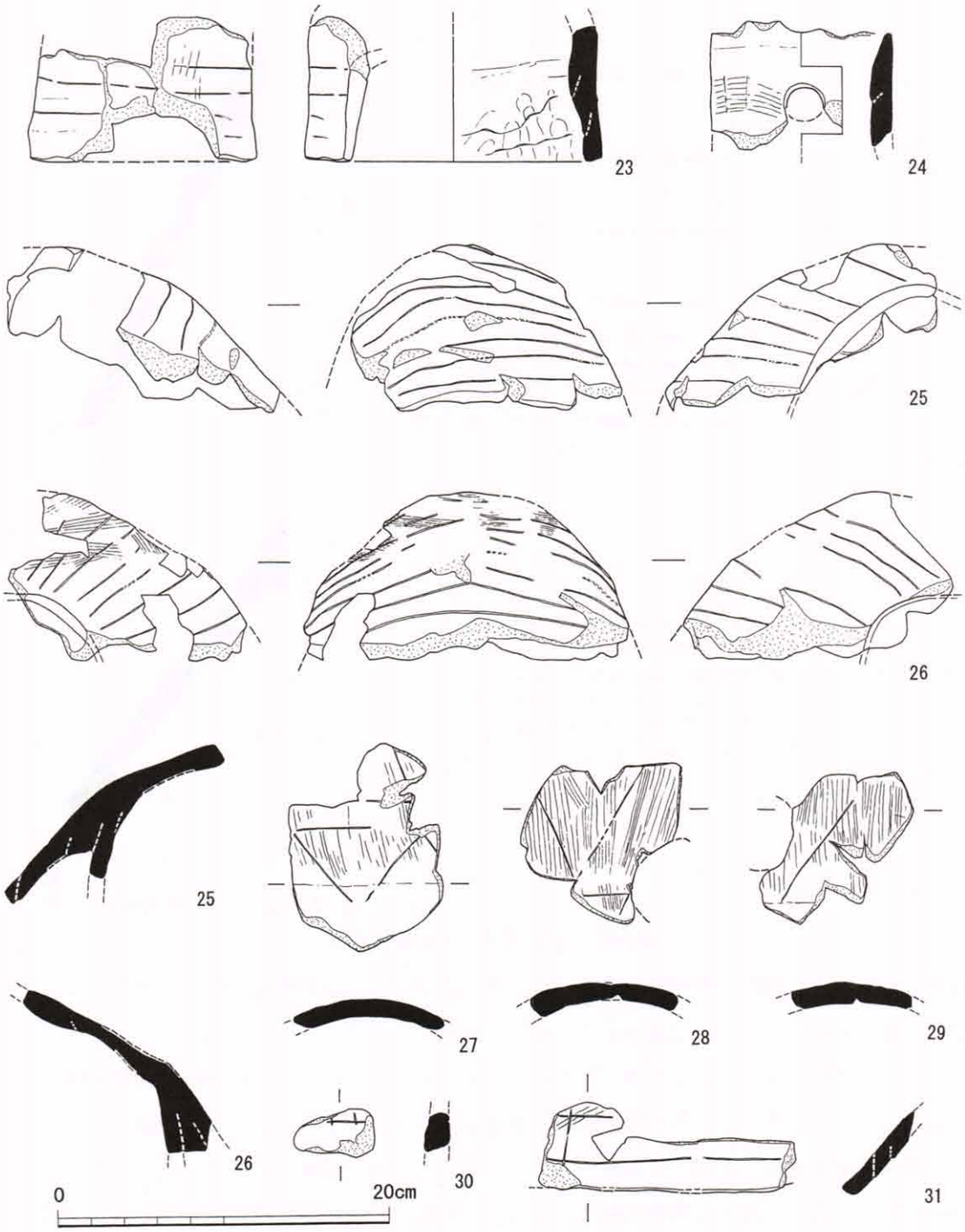
第88図　時塚１号墳出土埴輪実測図（３）

人物Ｄには衣服の裾、沓、指の破片がある(17～20)。胎土は細砂を含むが、砂粒はあまり多くない。色調はやや淡い黄褐色を呈する。焼成は良好である。17は衣服の裾と考えられる。全体に大きく裾広がりの形態を呈するが、端部は水平にならない。破片の外面上部に剥離痕がみられ、帯を着けていた可能性がある。内面の上部にも剥離痕があり、円筒部への接合部と考えられる。外面は粗いハケ調整の後、ナデ調整で仕上げているが、裾付近はハケメをナデ消さずに残している。内面はナデやユビオサエなどで整形しており、粘土接合痕はほとんどみられない。18は右足の沓である。つま先から足首の手前まで残存する。残存長10.3cm、幅6.5cm、残存高2.6cmである。表面には２本の線刻による帯状の文様が描かれている。本資料と同じような沓の出土例として、奈良県四条１号墳出土例がある(注20)。19・20は指の破片である。

人物Ｅには衣服の裾がある(21・22)。胎土は細砂や１㎜程度の砂粒を含むが、密なものである。色調はやや明るめの淡橙褐色を呈する。焼成は良好である。21・22は同一個体と思われるが、接合しないので、別々に図示した。17と同様に大きく裾広がりの形態を呈する。内面にも円筒部との接合部が確認できる。しかし、外面に剥離痕がみられず、帯を着用していたかどうかは不明である。外面は丁寧なナデ調整により仕上げられている。内面はナデ調整やユビオサエが施されるが、17とは異なり、粘土接合痕が明瞭に残る。21の下部の横断面形をみると、本資料が円形ではなく楕円形を呈することがわかる。復原すると、長軸長32cm前後、短軸長28cm前後になる。また、残存高は13.3cmである。

16は人物埴輪の指と考えられるが、胎土や色調が他の個体とは異なるため、さらに別の個体が存在した可能性がある。

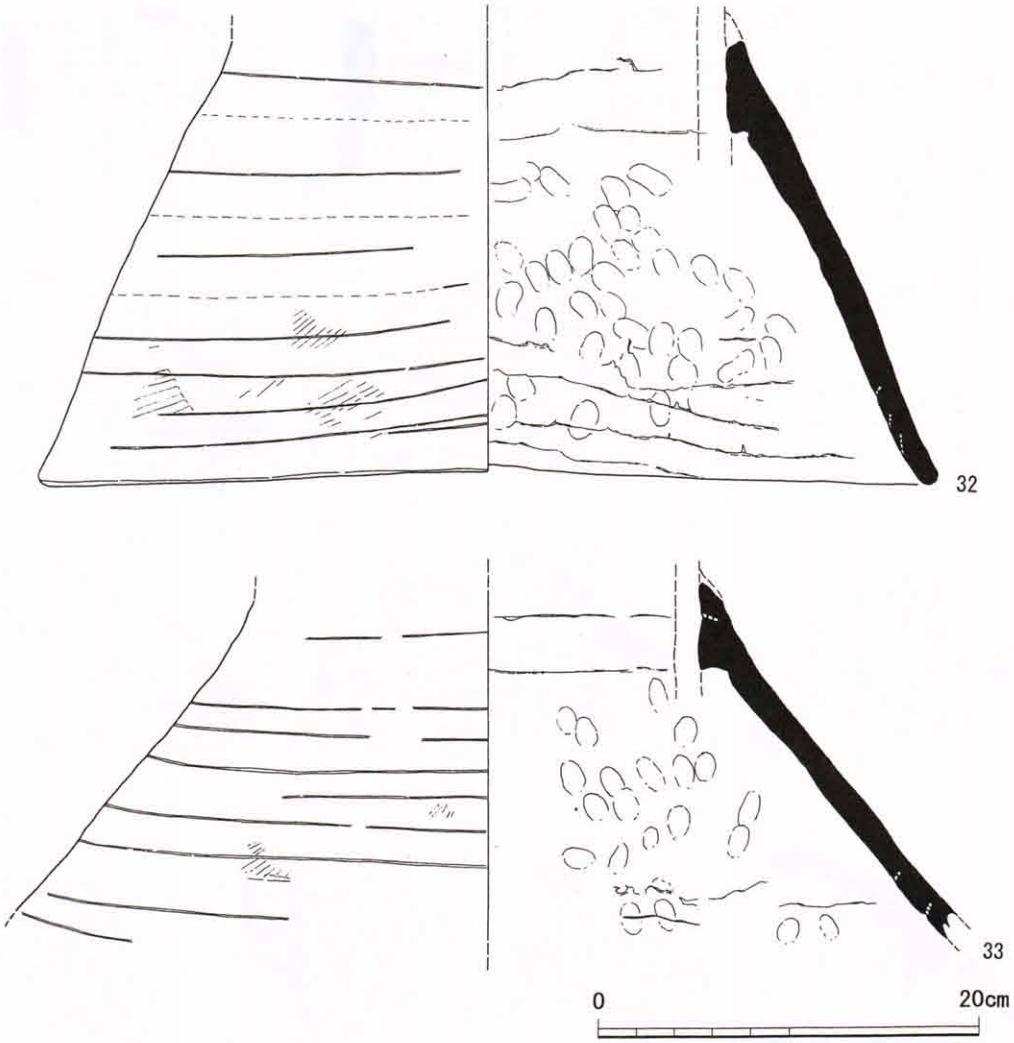
ウ．甲冑形埴輪(23～33)　これらも細片化が著しく、全容は不明である。埴輪群の中でもやや北に偏って出土した。各破片は、接合しないものの、胎土や色調、焼成状況などから、同一個体と判断した。確認できた部位には、冑の錣、肩甲、短甲、草摺の各破片があり、これらは冑から



第89図　時塚１号墳出土埴輪実測図(４)

草摺まで一体で成形された可能性が高い。したがって甲冑形埴輪は１点と考えられる。胎土は細砂や１～２㎜程度の砂粒をやや多く含むため、やや粗雑な感じを受ける。色調は淡黄褐色を呈する。焼成は軟質である。

23は冑の錣の破片と考えられる。錣の前端を確認することができる。錣は、左右にやや長く、横断面の形状はやや扁平な楕円形を呈し、長軸長18.0cm、短軸長13.6cmに復原される。残存高は8.7cmである。1/3程度が残存する。冑本体は未確認であるが、30が冑の一部である可能性がある。24は錣の内部に接合する可能性の高い円筒状のもので、中央に直径2.5cmの透孔が確認できる。



第90図　時塚1号墳出土埴輪実測図(5)

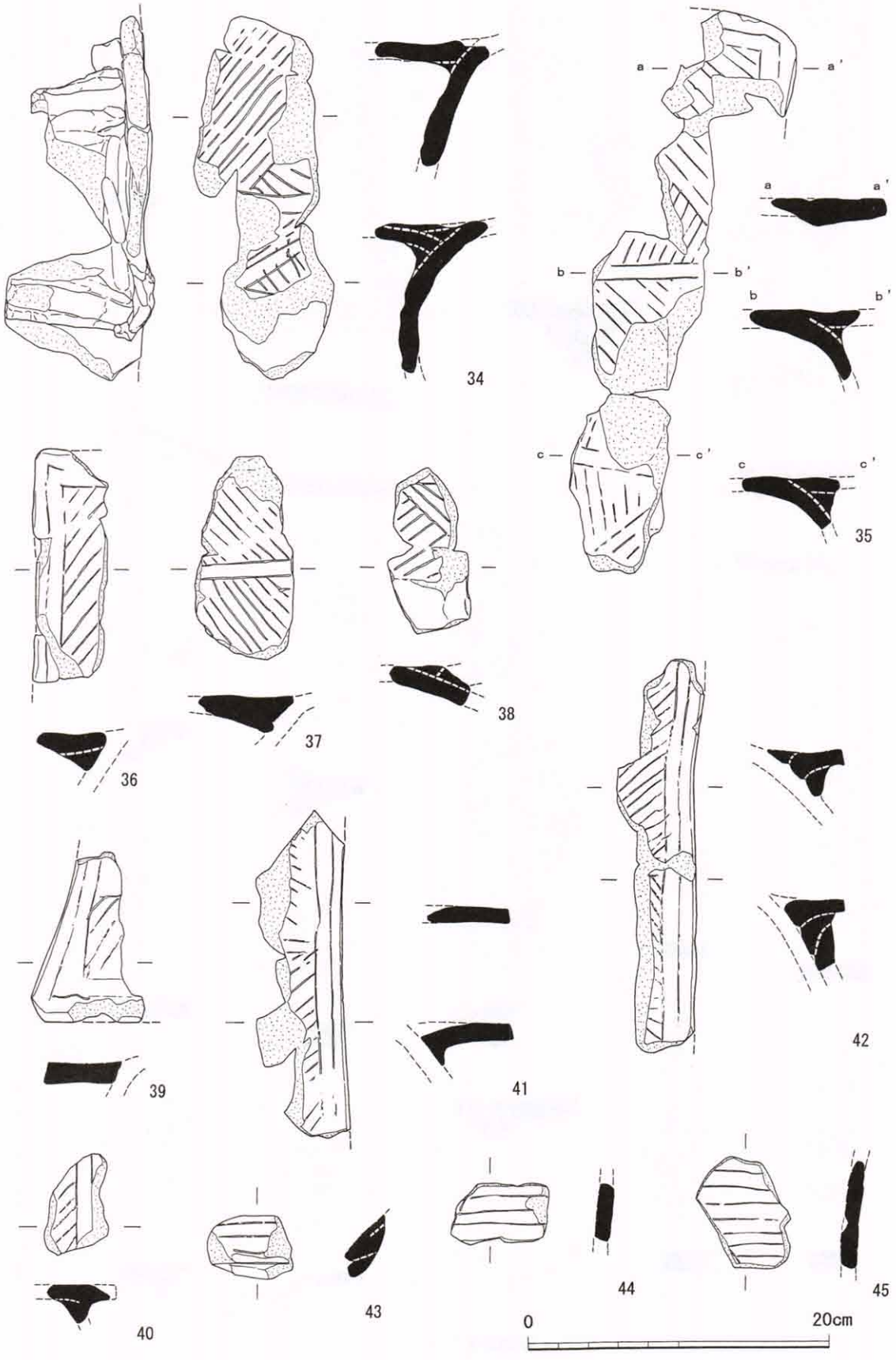
冑から草摺まで一体作りの甲冑形埴輪では、冑の内部に人面の造形を行わず、透孔を設けた例が多い。本資料もそうした例に該当すると考えられる。

25・26は肩甲である。25が左の、26が右の肩甲と考えられる。肩甲の細長い鉄板を線刻によって表現している。なお、この甲冑形埴輪に頸甲が伴っていたかどうか明らかでない。

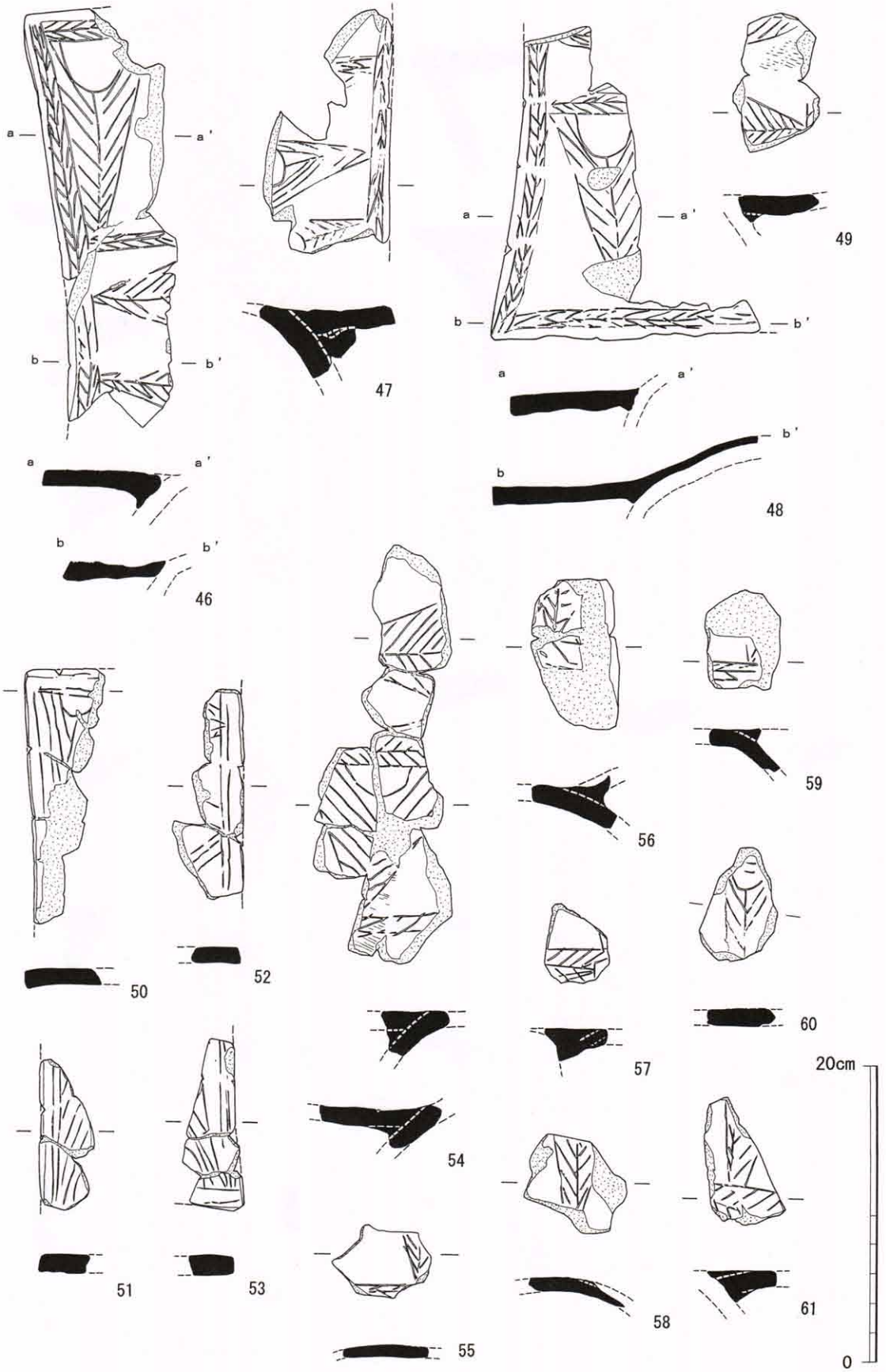
27～29は短甲を表現した破片である。27・28からこの甲冑形埴輪の短甲は三角板であることがわかる。27には細いながらも帯金も確認できる。三角板や帯金の結合法としての革綴じや鋲留めは表現されていない。28・29は透孔が認められることから、短甲の正面または背面ではなく、側面である可能性が高い。27は残存高12.5cmである。

31～33は草摺である。32・33は大型の破片で、横方向の平行線を10条ほど刻むことから鉄製草摺を表現したものと考えられる。31には縦方向の線刻がみられ、縦線帯となるのかもしれない。草摺の裾は正円とはならないと思われるが、32は裾径46.0cm、残存高23.1cmである。

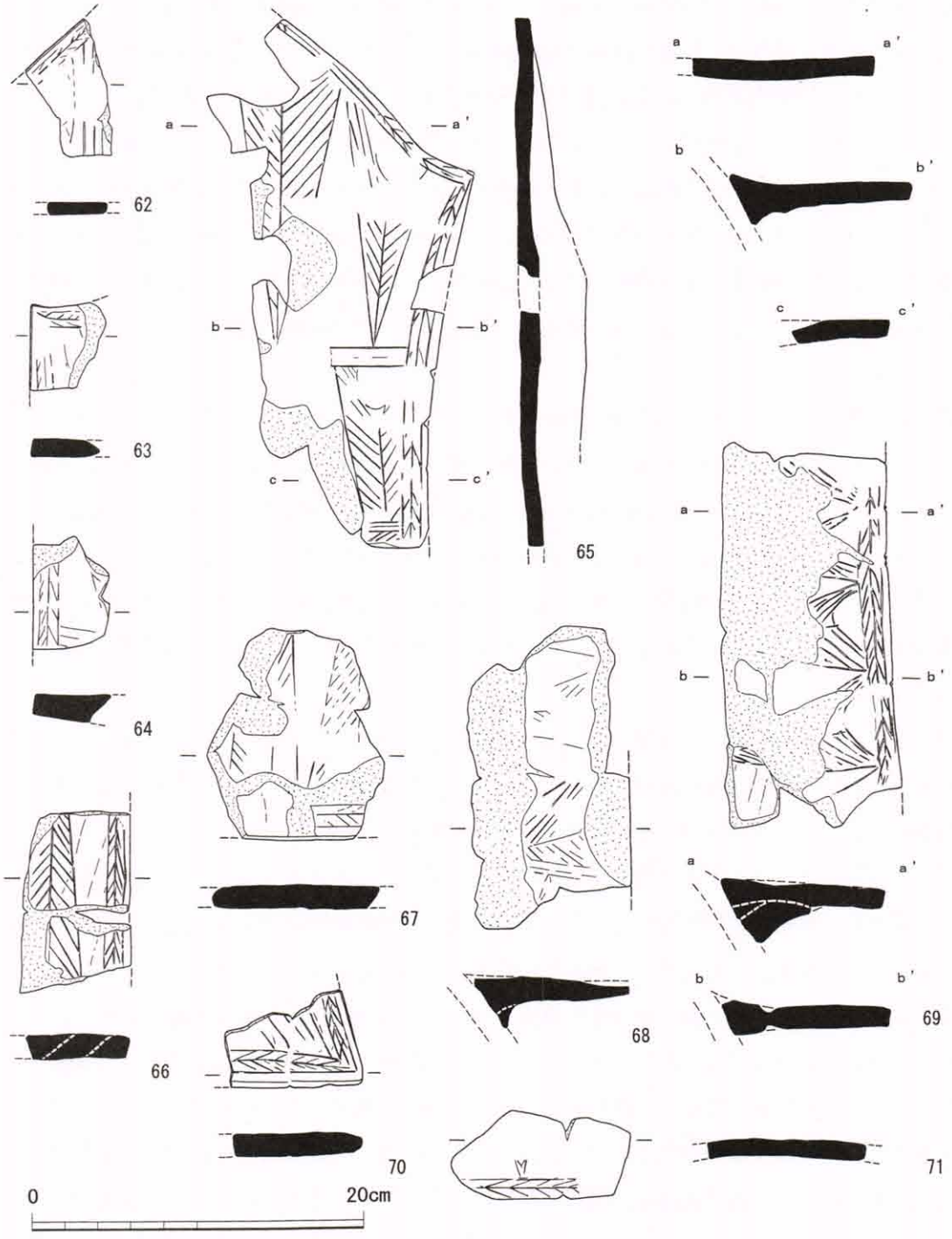
エ．盾形埴輪(34～71)　今回出土した埴輪の中ではもっとも数が多い。しかし、人物埴輪や甲冑形埴輪と同様に、細片化が著しい上、欠損している箇所も多いので、全容は明らかでない。胎土や色調、焼成、調整、さらに盾面の文様などから少なくとも6個体分の盾形埴輪が出土した。



第91図　時塚１号墳出土埴輪実測図（６）



第92図　時塚1号墳出土埴輪実測図（7）



第93図　時塚1号墳出土埴輪実測図(８)

以下、これらを盾形埴輪Ａ～Ｆと呼称する(盾Ａ～盾Ｆと略記)。盾面の調整は一部にハケ調整が認められるものの、原則としてナデ調整で仕上げている。また、いずれの盾形埴輪も、円筒部の外面を盾面として利用していたと考えられる。これは円筒部の両側にのびる盾面と円筒部の接合状況から判断できる。ただし、盾面中央部付近の破片は確認できていない。なお、盾形埴輪の円筒部と思われる資料があるが、直接盾面と接合するものがなく、後で改めて報告する。

34～38は盾Ａである。胎土は細砂や１～２㎜程度の砂粒をやや多く含む。色調はやや明るい淡

橙褐色を呈する。焼成は比較的良好である。盾面は周囲を２条の線刻によって縁取りを行うが、縁取り自体は無文である。盾面の内部は12～13cmごとに２条の線刻で横方向の界線を引いて区分し、それぞれを鋸歯文あるいは斜線文によって充填する。残存する資料による限り、盾Ａでは、盾面全体に文様が充填されているようである。盾Ａの特徴として、円筒部から盾面側辺までの長さがやや短い点にある。この点は次に掲げる盾Ｂも同様である。34は盾面と円筒部の一部が確認できる。円筒部には２条の突帯を確認することができる。残存高は23.8cm、盾面の幅は7.8cm、突帯間隔は約14cmである。35は盾面右上の角から内部にかけての破片である。盾面の文様の構成方法について知ることができる。残存高は37.1cmである。36は盾面左上の角、37・38は盾面内部の破片である。

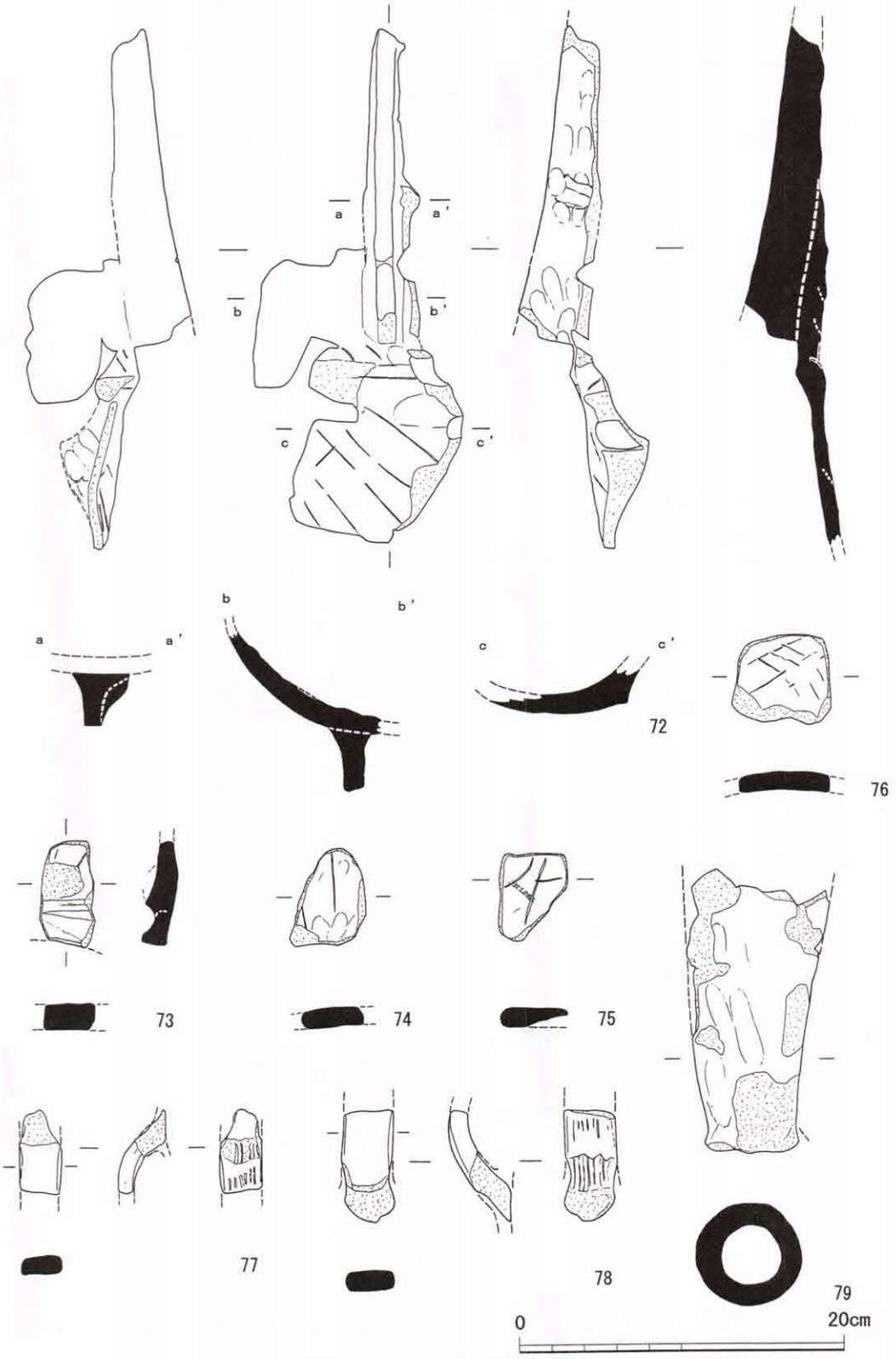
39～42は盾Ｂである。胎土・色調・焼成はいずれも、盾Ａに類似している。出土位置に若干のまとまりが認められた。盾Ａ同様、２条の線刻によって縁取りを行うが、無文である。文様の構成もおおむね同じである。40・42の断面から、盾面の側辺部が円筒部からそれほど突出しない状況がうかがえ、盾Ａと区別しうる。39は盾面の左下の角の破片である。盾面の側辺は緩やかに弧状を呈すると考えられる。残存高は11.4cm、残存幅は7.5cmである。40は盾面の文様や42の例からほぼ側辺部の破片と考えられる。41・42は側辺部の破片である。41は残存高21.6cm、42は残存高26.1cmである。

43～45は盾Ｃである。胎土は細砂と１mm程度の砂粒を含む。色調は橙褐色を呈する。焼成は良好である。基本的に横方向の線刻によって盾面の文様を表現するが、他の破片のように盾面の縁辺部があるわけではないので、他の器種の可能性もある。

46～49は盾Ｄである。胎土は盾Ａ・盾Ｂに類似するが、砂粒が若干多い。色調は明るめの淡橙褐色を呈する。焼成は比較的良好である。盾面の文様は盾面の縁辺に沿って綾杉文で縁取りを行い、その内部に鋸歯文で充填する。鋸歯文は基部に半円文を重ねたもので、盾Ｄ・盾Ｅ・盾Ｆに共通して認められる。46・48の破片から盾面の上部と下部を綾杉文による界線で分割し、少なくとも３分割していたと考えられる。そして、上部と下部は下方を向いた鋸歯文を、中央部は左右の外方を向いた鋸歯文を施していたと考えられる。なお、後述する54～61の破片も含めて、内区の文様と思われる破片は確認できない。46は盾面左上の角、48は盾面右下の角と盾面下端の破片である。46・48から盾面の側縁部が弧状を呈していること、46の上辺の状況から盾面の上辺が山形を呈する可能性が高いことなどがわかる。また、48には盾面の下端部が残存しており、盾面の下端が円筒部と完全に一体化しておらず、わずかに段差を設けていたことがわかる。このことと、盾面と円筒部の断面形がおおむね水平に近いことから、田中秀和氏分類のＣ類に相当する[(注21)]。46は残存高27.8cm、残存幅7.7cmである。48は残存高20.5cm、残存幅17.8cmである。

50～53は盾Ｅである。胎土・色調・焼成は基本的に盾Ｄと同じである。盾面の文様もおおむね盾Ｄと同じだが、縁取りに綾杉文がみられないことから別個体として扱った。50は盾面左上の角である。53は盾面の右下角である。50は残存高16.9cm、残存幅5.2cmである。

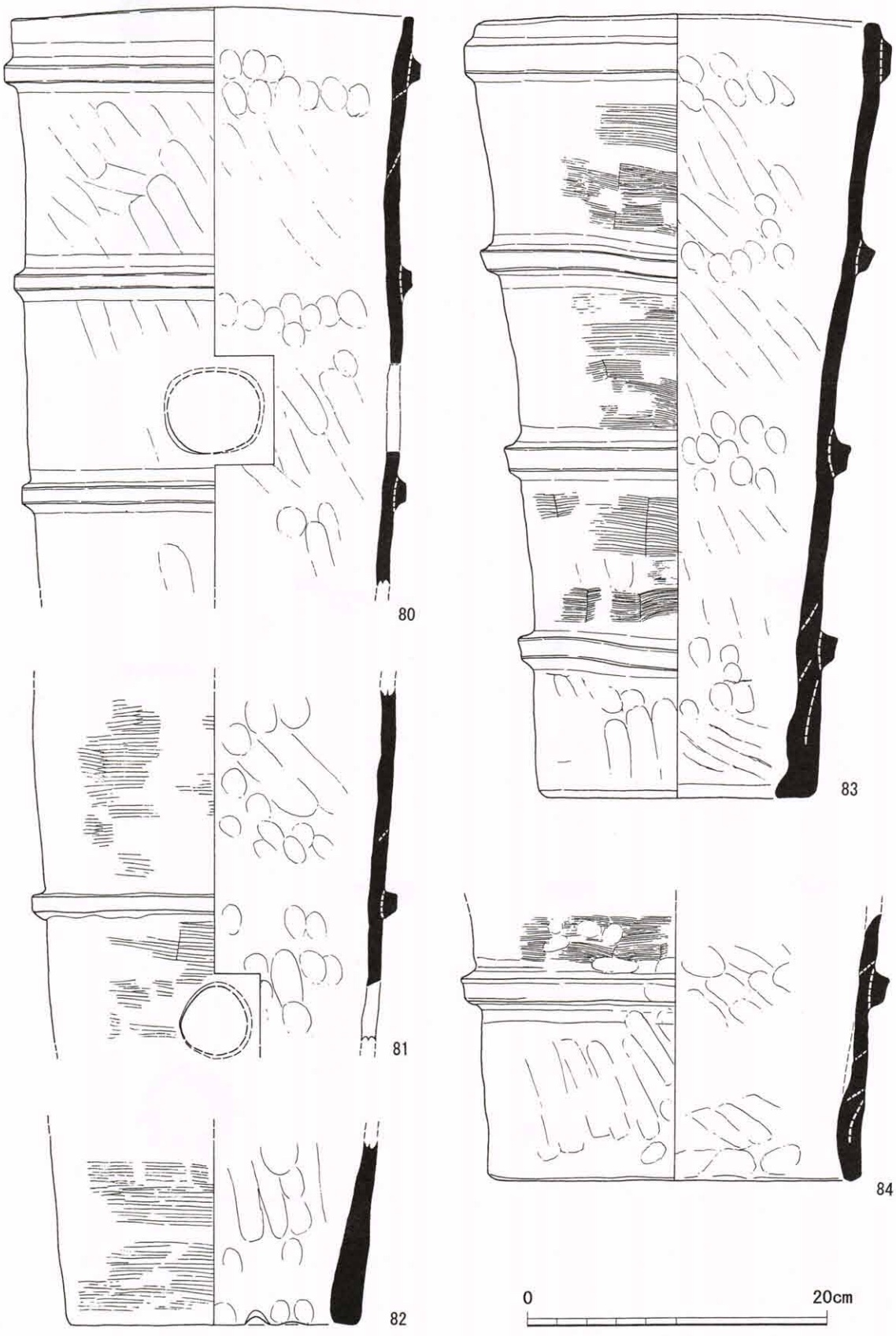
54～61は盾Ｄまたは盾Ｅの盾面内部の破片と考えられるものである。上述のように盾Ｄと盾Ｅ



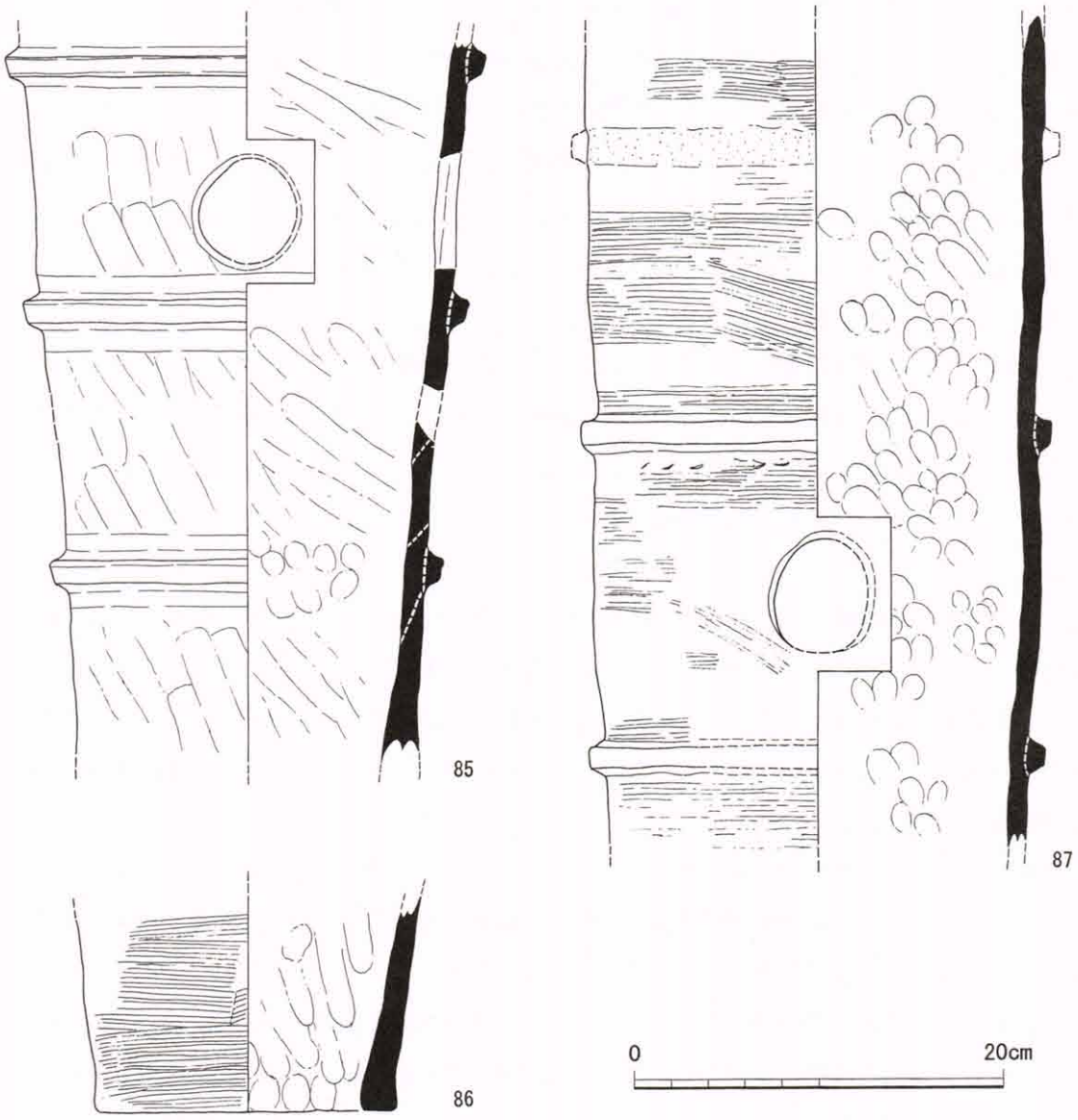
第94図　時塚1号墳出土埴輪実測図(9)

は縁取りの文様に違いが見られるだけなので、盾面の縁辺部以外は区別することができない。基本的に半円文を一体化した鋸歯文がみられる。54は残存高27.7cmである。

62～71は盾Fである。胎土は細砂や1mm程度の砂粒を比較的多く含み、全般的に粗い。盾Fの胎土は甲冑形埴輪に類似する。色調は淡黄褐色ないし淡黄灰色である。焼成は軟質である。盾面



第95図　時塚1号墳出土形象埴輪円筒部実測図(10)



第96図　時塚1号墳出土形象埴輪円筒部実測図(11)

の文様は綾杉文による横方向の界線によって少なくとも４つに区分させる。65にみられるように、最上段と２段目に下方を向いた半円文と鋸歯文を組み合わせた文様を描く。その次は、69にみられるような内方を向いた鋸歯文を施す。４段目と推定されるのは67など表されているような下辺の綾杉文から上方に向いた鋸歯文である。62は盾面頂部左側の破片、63は盾面左上の角である。65は今回の調査で出土した盾形埴輪の破片としては最も大きく、盾面頂部右側辺から右上の角、右側辺へと続く破片である。65は残存高31.5cm、残存幅14.5cm、69は残存高23.0cm、残存幅10.7cmである。

オ．不明形象埴輪(72～76)　72は不明形象埴輪である。胎土は細砂と１～２㎜程度の砂粒をやや多く含み、やや粗い。色調は明るい橙褐色を呈する。焼成はやや軟質で、磨滅が著しい。復原直径24～28cmの円筒状のものに幅2.0～3.5cmほどの鰭を貼り付けたものである。残存高は32.0cmであるが、1/4程度しか残存しないため、全容は不明である。また、何を形象したものか

不明である。粘土接合痕から上下を判断したが、必ずしも正しい上下の位置関係を示せているかどうかは定かでない。円筒下半部には線刻による文様が描かれている。残存範囲が狭く、何が描かれているのか判断できない。また、下半部は2か所の凹部が確認できるが、何を表しているのか不明である。類似したものに、後述する73の小破片がある。上半部は円筒の一部と鰭の一部が残存する。円筒部はわずかな線刻が認められるものの、基本的に文様はみられない。鰭は、下半部の文様まではのびず、片面は突帯等もみられないが、その反対面には突帯の剥離痕がみられる。鰭の残存長は19.4cmである。

73～75は、72とほぼ同じ胎土・色調・焼成を呈する破片であるが、天地や部位などについては全く不明である。73は凹部を有し、その上部に剥離痕がみられる。何を造形したものか全く不明である。74・75は外面に線刻が認められる。

76は、74・75に類似した不明形象埴輪である。胎土が72～75とは異なるため、別の個体と考えられる。

カ．その他の形象埴輪　77・78は人物埴輪が持つ大刀の勾金の可能性がある破片である。胎土は細砂や1～2㎜の砂粒を多く含み、少し粗い。色調は非常に淡い橙褐色を呈する。焼成は良好である。他の時塚1号墳出土埴輪とは胎土や色調が異なる。ただし、時塚遺跡で出土した弥生時代中期の土器とも胎土や色調が異なることから、弥生土器の可能性もない。77は残存高5.2cm、78は残存高6.9cmである。

79は動物、もしくは人物の脚部と考えられる破片である。全高18.0cm、直径5.7～8.6cmである。胎土は細砂や1㎜程度の砂粒を比較的多く含み、全般的に粗い。胎土は盾形埴輪Ｆや甲冑形埴輪に類似する。色調は淡黄褐色を呈する。焼成は軟質である。

キ．形象埴輪円筒部・基台(80～87)　ここでは、形象埴輪の円筒部や基台について報告する。円筒部の形態や器面の調整から少なくとも7個体は確認できる。以下、円筒部Ａ～Ｇと呼称する(円筒Ａ～円筒Ｇと略記)。

円筒Ａ(80)　80は円筒部上半部の破片である。突帯3条分と3段分、および口縁部段が確認できる。口縁部段は最上段の突帯からわずか2.5～3cmほどを測るに過ぎず、盾形埴輪の円筒部の口縁部と考えられる。復原口径は26.6cm、残存高は38.3cmである。胎土は細砂や1～2㎜程度の砂粒を多く含み、やや粗雑な印象を受ける。色調は淡橙褐色を呈するが、さらに淡い。焼成はやや軟質である。外面調整として縦方向のナデ調整を施す。内面調整はナデとユビオサエを施す。突帯は断面台形状を呈し、高さは0.8cm前後である。突帯間隔は約14cmである。上から2段目のところに円形の透孔がある。器壁の厚さが83や85と異なり、別個体と考えられる。胎土や色調から盾Ａ～盾Ｅのいずれかの円筒部と考えられる。

円筒Ｂ(81・82)　81は口縁部と底部を欠損した円筒部の破片である。突帯1条分とその上下2段分が確認できる。残存高は23.3cm、円筒部径は21.5～24.0cmである。胎土は細砂や1～2㎜程度の砂粒を比較的多く含み、全般的に粗い。色調は淡黄橙色である。焼成はやや甘く、全体に磨滅が著しい。外面調整はわずかに静止痕が認められるもののハケメどうしの切り合いが目立つ。

内面調整は縦方向のナデ調整やユビオサエを施す。突帯は断面台形状を呈する。下の段に円形の透孔がある。胎土や調整技法などから盾形埴輪Fや86・87と同一個体の可能性が高いが、接合箇所がない上、81は淡い黄橙色を呈することから別個体の可能性もある。82は81と同一個体と考えられる底部である。最下段のみが確認できる。底部径19.0cm、残存高12.7cmである。胎土・色調・焼成は81と同一で、全体に磨滅が著しい。外面はヨコハケ調整を施すが、静止痕を確認できないので、B種ヨコハケ調整かどうかは明らかでない。内面は縦方向のナデをやや丁寧に施す。

円筒C(83)　今回報告する円筒部では、唯一、全容を知ることができる個体である。出土位置も若干のまとまりが認められた。4条4段構成で、短い口縁部段がある。口縁部段は1.0～1.6cmで、80と同様、盾形埴輪の円筒部の口縁部で盾面の支えを兼ねていたと考えられる。復原口径26.0cm、全高52.2cm、底径18.5cm、最下段の高さ10.6cmである。胎土は細砂や1～2㎜程度の砂粒を多く含み、やや粗雑な印象を受ける。色調は淡橙褐色を呈する。焼成は良好である。外面調整は静止痕が認められることからB種ヨコハケ調整を施しているものの、ハケメどうしの切り合いが認められる箇所もある。内面調整はナデ調整やユビオサエを施す。突帯は断面台形状を呈し、高さ0.8～0.9cmであるが、最上段のみやや低く、0.6cm前後である。突帯間隔は12.5～13.5cmである。胎土や色調から盾形埴輪A～Eのいずれかの円筒部と考えられるが、出土位置から盾Bの円筒部である可能性が高い。

円筒D(84)　1条目の突帯と2段目の一部が残存する底部である。底径は25.0cm、残存高は17.7cm、最下段の高さは13.3cmである。胎土は細砂や1～2㎜程度の砂粒をやや多く含む。色調は淡橙褐色である。焼成は良好である。外面調整は、1段目に縦方向のナデ調整、2段目にB種ヨコハケ調整を施す。内面調整は、磨滅が著しいが、ナデ調整である。突帯は断面「M」字状を呈し、高さは約1cmである。胎土や色調から盾形埴輪A～Eのいずれかの円筒部である可能性が高い。

円筒E(85)　口縁部と底部を欠損した円筒部の破片である。突帯3条と3段分を確認することができる。図示した最下段は、器壁の厚さから円筒部最下段に相当すると考えられる。また、図示していないが、突帯が盾面との接合か所で剥離した破片がある。ただし、上述の盾形埴輪の盾面と接合するものは確認することはできなかった。残存高39.3cm、円筒部径18.6～24.5cmである。胎土は細砂や1～2㎜程度の砂粒をやや多く含む。色調は橙褐色を呈する。焼成は良好である。外面調整は縦方向のナデ調整を施す。なお、突帯接合時のヨコナデとの切り合いから外面調整のナデ調整は突帯接合前の一次調整に当たり、二次調整を施していない。内面調整はナデ調整やユビオサエを施す。突帯は断面台形状を呈し、高さ1cm前後である。突帯間隔は13～14cmである。下から3段目に円形の透孔がある。胎土や色調から盾形埴輪A～Eのいずれかの円筒部と考えられる。

円筒F(86)　最下段のみ残存する底部である。底径は16.2cm、残存高は11.6cmである。胎土は細砂や1～2㎜程度の砂粒を比較的多く含み、全般的に粗い。色調は淡黄褐色である。焼成は軟質である。全体的に磨滅が著しい。外面調整はわずかに静止痕が認められることからB種ヨコハ

ケ調整を施していると考えられる。ただしハケメには切り合いが認められる。内面調整は縦方向のナデ調整を施す。胎土や色調、法量から甲冑形埴輪の基台である可能性が高い。なお、87も胎土や焼成は類似するが、法量が異なることから、87の底部とは考えられない。

円筒G(87)　口縁部と底部を欠損した円筒部である。突帯3条と4段分が残存する。残存高は45.1cm、円筒径は22.6～25.0cmである。胎土・色調・焼成は86に類似するが、胎土は細砂や砂粒がより多く含まれており、粗い。色調もやや灰色味が強い。全体的に磨滅が著しい。外面調整は静止痕が認められる箇所もあるが、ハケメの切り合いが認められる箇所が多い。断続的なヨコハケ調整を施したと考えられる。内面調整はユビオサエ痕やナデ調整がみられる。下から2段目に円形の透孔が確認できる。胎土や色調、法量から盾形埴輪Fの円筒部である可能性が高い。

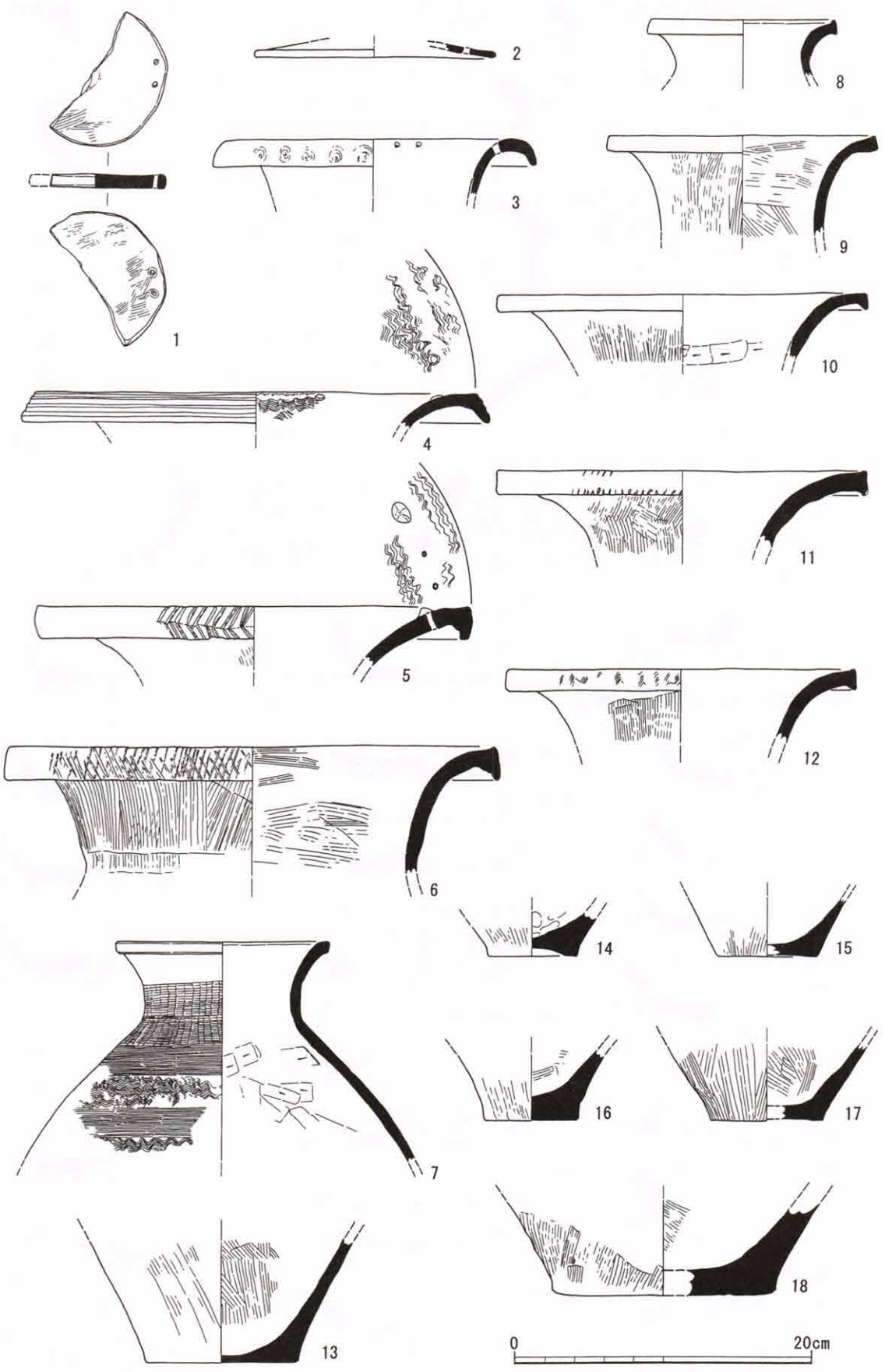
（筒井崇史）

弥生土器・須恵器・土師器(第97・98図)

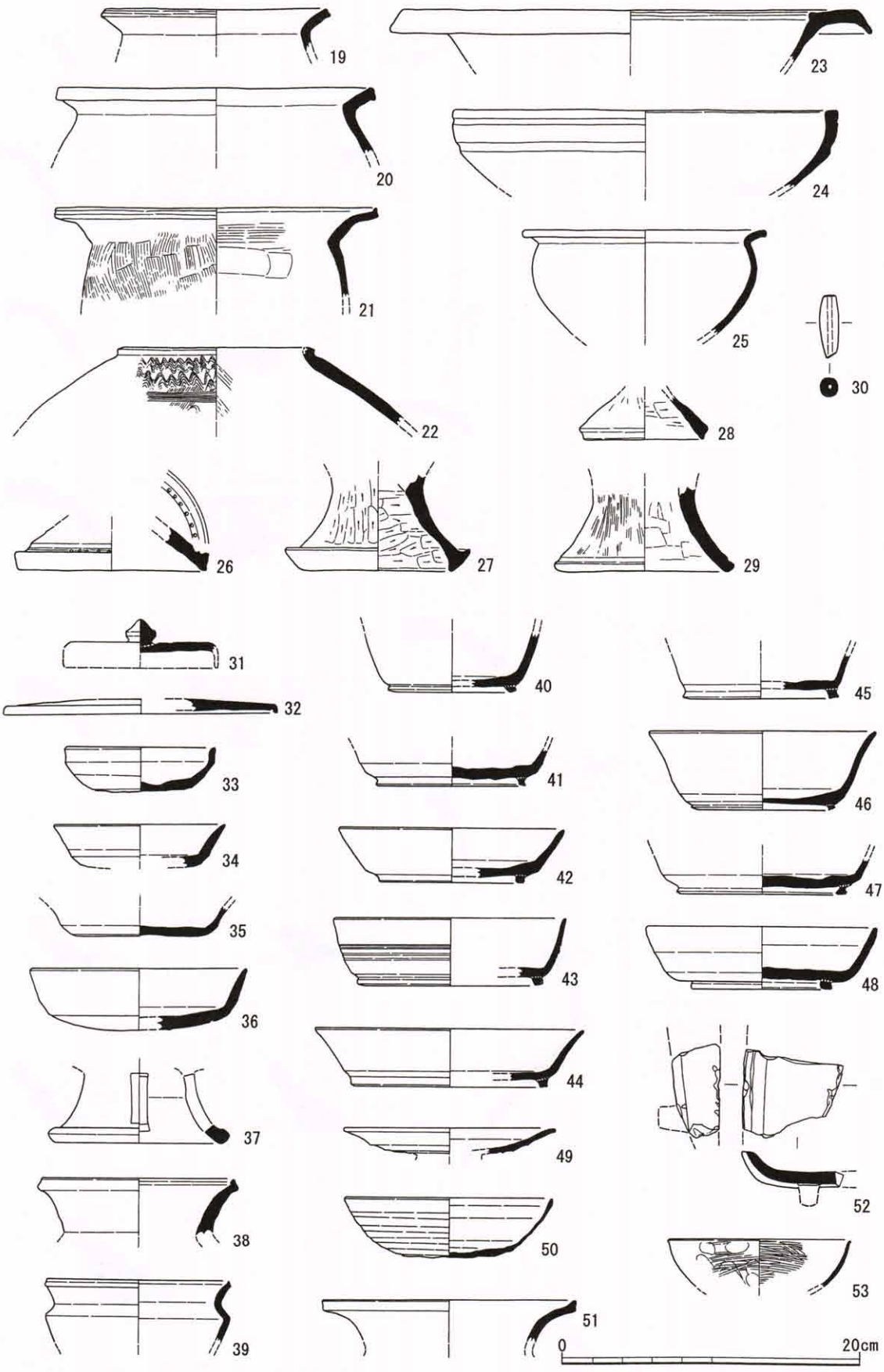
周溝埋土中から出土した土器を図示した。1号墳東側のコーナー付近の上層から出土したものは、弥生土器3・7・15・25、土錘30と須恵器31・32・34・35・42・44で、中層から出土したものは、弥生土器1・8・9・10・11・14・20・24・27・28・29と須恵器33・37・38・41・48である。南側コーナー付近の上層から出土したものは、弥生土器2・5・6・12・16・17・18・21と須恵器36・39・40・43・46・47・49・51・52・53で、中層から出土したものは、弥生土器13・22・26と須恵器45である。造出しのある側の中層から出土したものは、弥生土器4・19・23である。

弥生土器は、櫛描き直線文や凹線文を施すものがあり、弥生時代中期前半から後半のものが主体である。須恵器は輪状高台を底部縁より内側に貼り付けるものや、底部縁をめぐるもの、体部から口縁部にかけて水引き成形するものなど、奈良時代中葉から平安時代後半にかけての土器がみられる。また、53の黒色土器も出土している。これら様々な時期の土器が時塚1号墳周溝の上層や中層から出土している。埴輪が多量に出土した最下層から土器は出土していない。

1・2は扁平な蓋である。口縁端部付近に2個1対の小孔を設ける。内外面ハケ調整をする。3～12は壺の口縁部である。3は口縁端部に2個1対の小孔をもつ。口縁部外面に櫛描による円形文を施す。4は口縁部外面に3条の凹線文を巡らし、内面には波状文と円形浮文を施す。5は口縁部内面に2個1対の小孔と断面三角形の突起を持つ。口縁部内面には小孔を挟んで2帯の櫛描波状文、口縁端部外側面にはヘラによる綾杉文が施される。頸部外面は縦方向のハケで調整する。6は口縁部端面に櫛描きによる格子紋が施される。頸部外面は縦方向、内面は横方向のハケで調整する。7は口縁部から体部にかけて緩やかに湾曲する。頸部から肩部にかけ簾状文を、体部上半には櫛描直線文と櫛描波状文を施す。体部内面にはヘラケズリが認められる。8は口縁端部を上方につまみ上げる。調整は不明である。9は外面を縦方向の、内面を横方向と斜め方向のハケにより調整する。10は外面を縦方向のハケ調整、内面はヘラケズリする。11は口縁端面の上下にキザミを施す。外面はハケ調整する。12は口縁部端面に櫛描波状文を施す。頸部外面には縦



第97図　時塚１号墳周溝内出土土器実測図（１）



第98図　時塚１号墳周溝内出土土器実測図（２）

方向のハケが認められる。

13～18は壺もしくは甕の底部である。内外面ともハケにより調整するものが大半であるが、14のみ内面はナデにより調整している。

19～21は甕である。19・20は摩滅のため調整不明である。21は口縁端部を上方につまみ上げる。外面は縦方向のハケ調整、内面は上部が横方向のハケ調整、下部はヘラケズリする。

22は無頸壺である。外面は縦方向のハケ調整後櫛描直線文と櫛描波状文を施す。内面は斜め方向のハケ調整である。

23は水平にのびる口縁を持つ高杯である。端部は斜め方向に短く垂下する。24は高杯の杯部とみられる。口縁外側面に2条の凹線文を施す。両者とも摩滅のため調整は不明である。

25は鉢である。丸みを帯びた体部に短く外反する口縁をもつ。

26～29は脚部である。28・29は外面を縦方向のハケ調整、内面はヘラケズリする。27は内外面ともヘラケズリする。26は脚端部に1条の凹線が巡り、竹管文が配される。

30は土錘である。長さ4cm、最大径1.2cmを測る。

31～51は須恵器である。31は口縁端部が下方に屈曲する壺蓋である。擬宝珠形のつまみが付く。内外面ナデ調整である。32は口径の大きな蓋である。天井部は平坦で口縁端部を短く屈曲させる。33は内湾する体部を持つ杯身である。内外面ナデ調整、底部はヘラ切りである。陶邑編年ＴＫ217型式併行期である。34～36は平坦な底部から外上方に立ち上がる平底の杯である。内外面ナデ調整する。37は短脚高杯の脚部である。内外面ナデ調整し、小片ではあるが4方スカシとみられる。38・39・51は、大きく外反する口縁部と「く」字状に屈曲する体部からなる鉢である。口縁端部は、内上方につまみ上げる。内外面ロクロナデ調整である。40・41・45～47は、高台をもつ杯である。内外面ロクロナデ調整する。42～44・48は口径が15～18cmと大きく、器高の低い杯である。底部外縁やや内側に高台をもつ。内外面ロクロナデ調整する。49は体部半ばに稜をもつ皿である。50は椀である。

52は須恵質の風字硯である。使用痕は認められない。

53は黒色土器の椀である。外面はヘラミガキ後ナデ調整、内面はヘラミガキにより調整する。

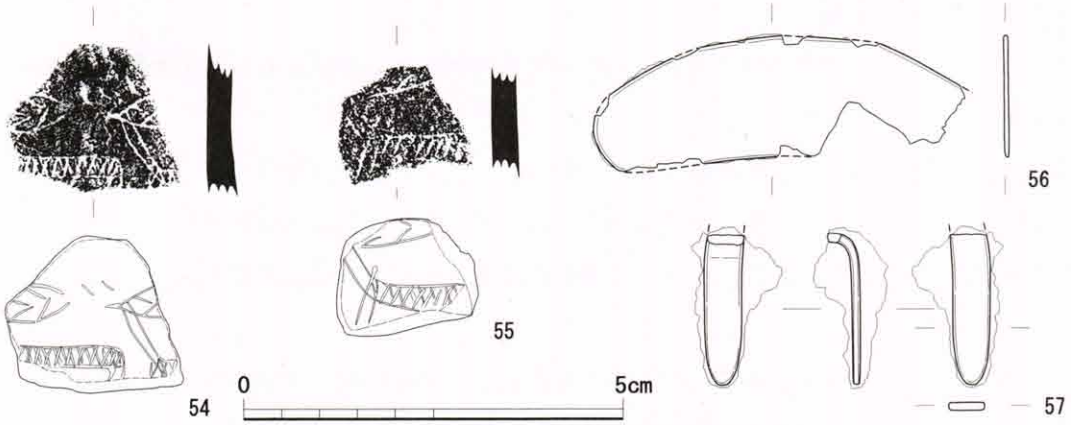
（岡崎研一）

絵画土器（第99図）

54・55は絵画土器である。弥生土器の壺体部片とみられるが詳細は不明である。54では1匹の、55では2匹の左を向いた牡鹿を先端の尖ったヘラ状工具で線刻する。意匠はほぼ同一であり、角は枝角が向かい合うように描かれている。また、胴体内部には斜格子による表現が行われている。

鉄製品（第99図）

56・57は周溝上面から検出された鉄製品である。これらの鉄製品は、中心主体部に伴っていた可能性もある。57はほぼ直角に先端を折り曲げた鉄製品である。先端は丸みを帯びている。56は鉄鎌状の鉄製品であるが刃部が形成されていない。両者とも用途や性格は不明である。



第99図　時塚１号墳周溝内出土土器実測図（３）

（石崎善久）

時塚２号墳

Ａ．墳丘

第８次調査Ｄ地区の北東部で、「く」の字状に屈曲する溝ＤＳＤ500を検出した（第７・100図）。この溝の埋土から須恵器などの古墳時代中期に属する遺物が出土したため、この溝を古墳の周溝と判断し、時塚２号墳と呼称することとなった。時塚１号墳から北東約70ｍの地点に位置する。

古墳の周溝は、北辺と西辺を検出し、北辺で約8.6ｍ、西辺で約12ｍ、幅は最大で約2.5ｍ、深さは最深で約0.4ｍを測る（第100図）。また、調査時の掘削土置き場とするために東隣の耕作地の表土（耕作土）を掘削した際、周溝の北辺の延長と北東部の屈曲部分を平面的に確認することができた。この部分は、調査対象外であるため、平板による図化作業のみを実施した。

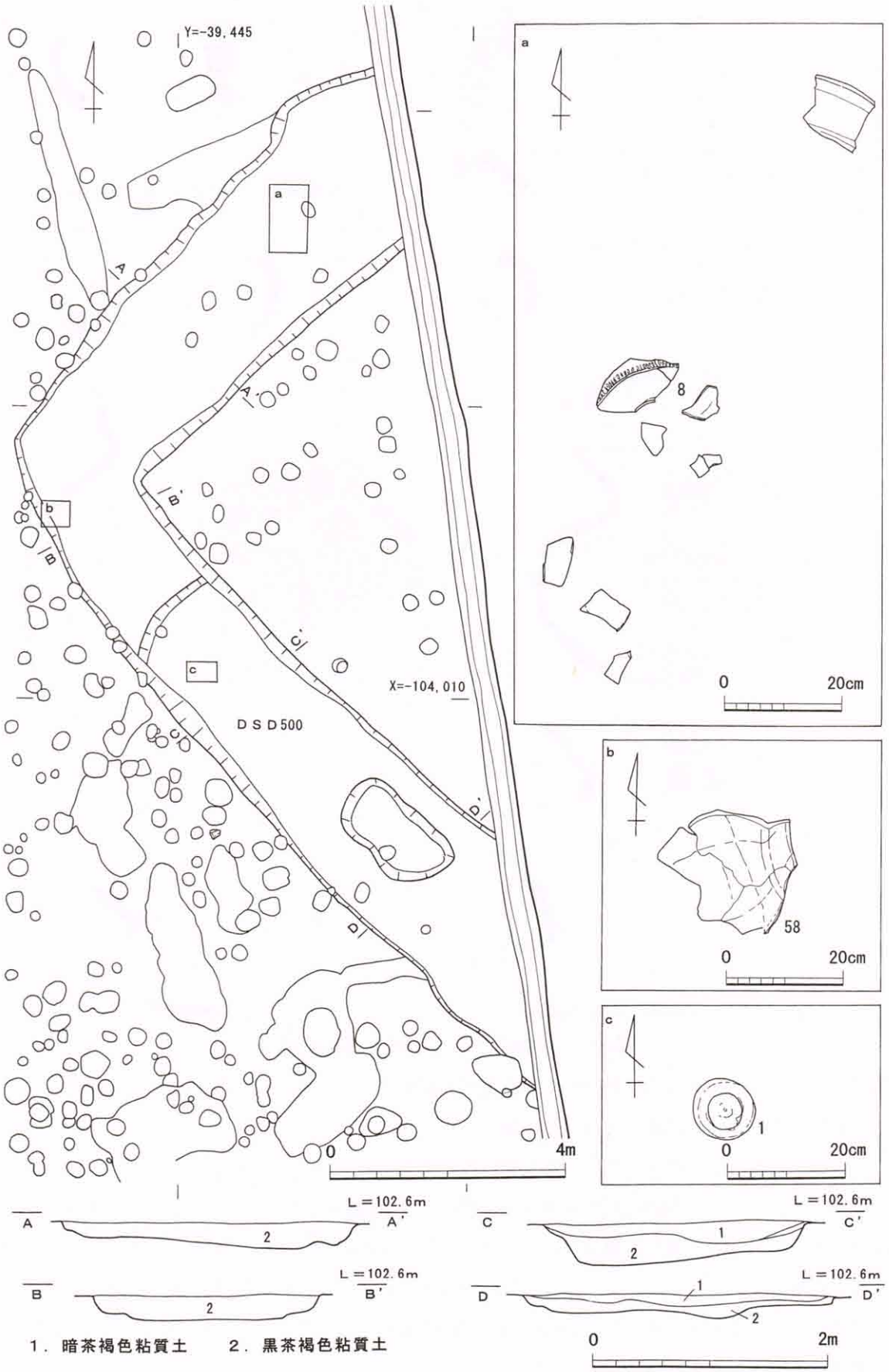
以上の状況から、時塚２号墳は一辺12ｍの方墳で、周囲に幅2.5ｍ前後の周溝を巡らせていることが明かとなった。墳丘主軸はＮ45°Ｗを測り、時塚１号墳とほぼ同一方位をとる。残存する墳丘の高さは周溝の底から測定すると約0.4ｍであり、後世に大部分が削平されたものとみられる。また、埋葬施設については今回の調査範囲内では確認できなかった。後世の削平による消滅、もしくは調査区外に存在すると考えられる。

周溝内からは、壺・甕などの古墳時代中期末に属する須恵器や土師器が出土した（第101図）。古墳時代の遺物は、周溝の最下層である黒茶褐色粘質土層から出土している。また、周溝内には弥生時代中期後半に属する弥生土器や奈良・平安時代の須恵器なども出土しているが、周溝が完全に埋没するまでの段階に混入したと考えられる。

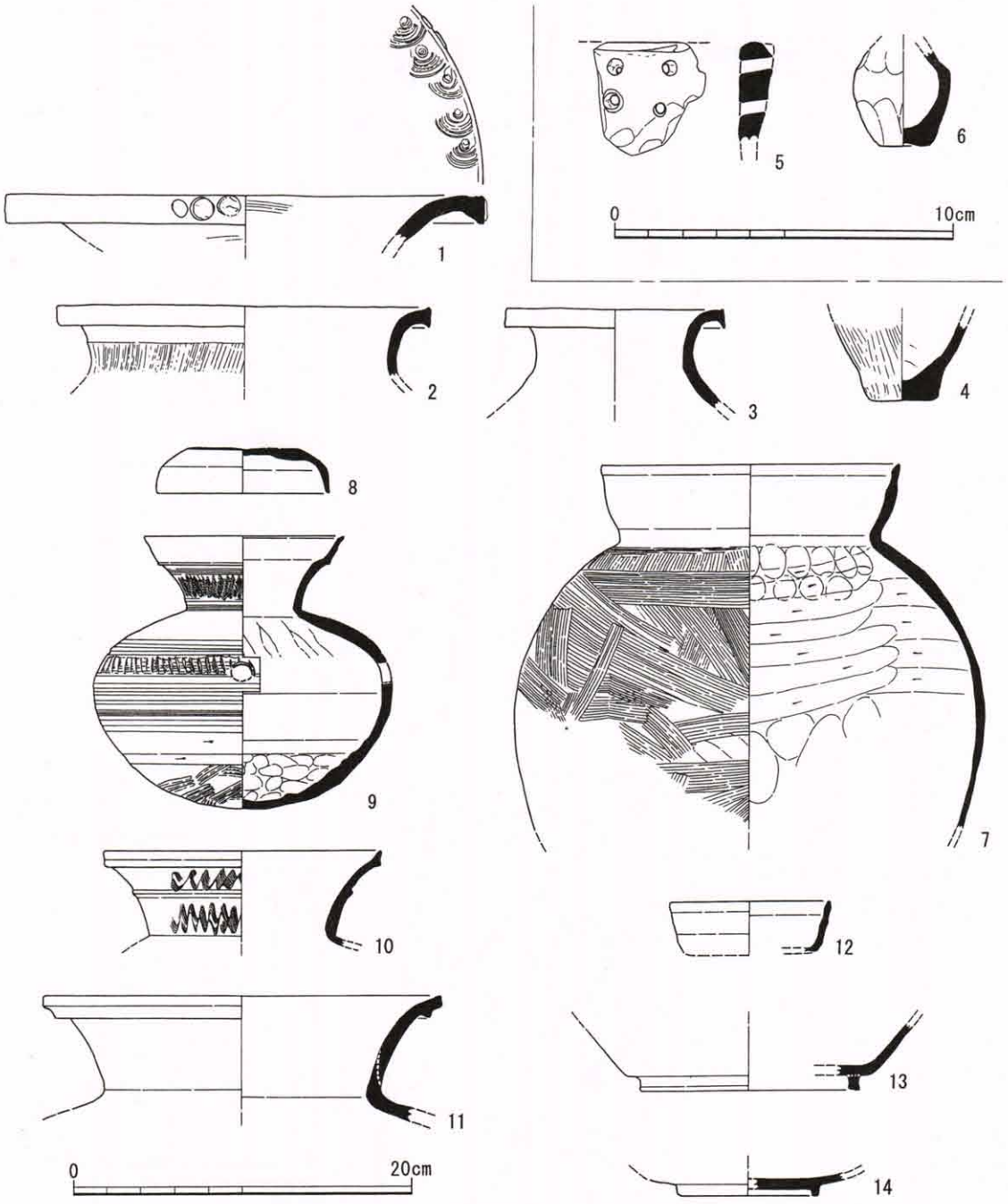
Ｂ．出土遺物

２号墳出土遺物には周溝内出土の弥生土器・須恵器・土師器がある。古墳に伴うと考えられる遺物は第101図に示す須恵器蓋（９）および須恵器甕２点（10・11）、土師器甕１点（７）である。そのうち土師器甕については、出土状況から周溝外からの転落、もしくは投棄によるものとみられる。須恵器杯蓋（８）は古墳時代後期以降のものである。

１～４は弥生土器である。いずれも中期後半に属する。１～３は広口壺の口縁部で、１は口縁



第100図　時塚２号墳実測図



第101図　時塚２号墳周溝内出土遺物実測図

部内面に扇状文を、下方に拡張された口縁端部外側面に３個１対の円形浮文を貼り付ける。４は壺の底部である。外面に縦方向のハケを施す。

８は周溝西辺の中央部から出土した須恵器蓋である(第100図のc)。平坦な天井部と下方を向く口縁部からなる。９は周溝北辺の中央部から出土した須恵器甕である(第20図のa)。体部最大径17.6cm・器高16.0cmを測る大型品である。外面の頸部は波状文、肩部には櫛状工具による刺突文により加飾する。また、体部最大径付近にはカキメが施される。円孔は体部最大径よりやや上方に設ける。底部外面にはタタキ痕、底部内面には指頭圧痕が一面に見られ観察される。７は周溝北西隅から出土した土師器甕である(第100図のｂ)。口縁は内湾気味に立ち上がり、端部は内傾

する面をもつ。調整は体部外面に縦方向のハケを行った後、肩部に横方向のハケを施し、最終的に斜めもしくは横方向のハケを施している。内面は横方向のヘラケズリと指頭圧痕による調整がみられる。10は須恵器甕口縁部である。端部を上下に拡張し面をもたせる。復原口径16.8cmを測る。頸部外面には突帯を挟んで2条の波状文が施されている。11は須恵器甕の口縁部で、口縁外下端に断面三角形の粘土帯を付する。復原口径23.6cmを測る。

12は須恵器の杯で、底部が欠損している。13は須恵器の皿または杯の高台部分で、底部縁よりやや内側に断面方形の高台を貼り付ける。高台径は13.1cmを測る。14は須恵器椀の底部で、高台は削り出す。高台径8.2cmを測る。

5は土師質の土製品で、用途は不明である。口縁部下に1cm前後の円形の孔を4か所設けた多孔土器である。6はミニチュアの壺と思われる。口縁部が欠損している。胎土からみて弥生時代のものと判断する。

（村田和弘）

10. 小結

以上、時塚遺跡第6・8・10次調査の概要について記してきた。その結果、縄文時代から中世にいたる各時期の遺構・遺物を検出することができた。今回の調査成果について時期ごとに簡潔に記しておきたい。

A．縄文時代中期末

遺構や風倒木痕埋土から縄文土器片が出土した。また、縄文時代に属するとみられる石鏃が調査地各所で検出されている。遺構としては、土坑ＡＳＫ344だけであるため、その広がりについては不明であるが、近年桂川東岸域で増えつつある縄文時代の資料に新たな資料を加えることができた点で、貴重な成果と言える。

B．弥生時代中期中葉～末

今回の調査では、弥生時代中期の集落と、それに伴うと考えられる方形周溝墓群を検出することができた。当該期の時塚遺跡では、遺構が遺跡の立地する段丘上に広範に展開していることが明らかとなった。

集落域は、調査対象地の北側を中心に展開しているとみられる。遺構の遺存状況が良好ではないが、各地区から出土する弥生土器から、Ⅲ様式からⅣ様式の間にその存続期間を求めることができるとみられる。居住域は段丘の北側を中心に移動しつつ展開するようであるが、今回の調査対象地ではＥ地区も含めて、全てのトレンチで遺構を検出していることから段丘周辺部分には農耕生産に伴う水利施設や、水田などが展開している可能性を指摘できる。また、集落内では石器生産や、玉類の生産も実施されていた様相を窺うことのできる資料を得ることができた。

方形周溝墓群は南半を中心に検出されている。周溝の方位や、造墓原理の差異によっていくつかのグループに分けることができる可能性がある。

C．古墳時代中期後半～後期前半

古墳時代の成果として新たに古墳群の存在を確認することができた。このうち、今回は時塚１号墳・２号墳の２基について報告を行った。

時塚１号墳は中型の造出し付方墳であり、埴輪・葺石をもつ首長墓の１基であるといえる。以下、若干のまとめを行っておきたい。

時塚１号墳からは、前述のように埴輪が出土したが、この中に円筒埴輪は含まれていない。そこで、器財埴輪や人物埴輪の研究成果によりながら、時塚１号墳出土埴輪の時期について検討する。また、盾持ち人形埴輪や盾形埴輪の円筒部については、円筒埴輪の研究成果と比較し、検討を行う。ただし、この作業は必ずしも有効な作業とは考えていない。あくまでも傾向を把握することが目的である。なお、不明形象埴輪とした72などは、比較的大型の破片であるが、何を形象したものか不明であるため、ここでは検討の対象から省く。

盾持ち人形埴輪については、盾面と頭部が同化しているもので、一般によく知られている盾持ち人形埴輪とは大きく異なる点を特色としている。しかし、盾持ち人形埴輪は、顔や耳、あるいは本体そのものが大きく作られる傾向にあるといわれている[注22]。このように考えるならば、盾面と同一の大きさを持つ本資料の頭部(顔)は、頭部を究極まで大きくしたものといえる。こうした特異な発想が生まれるのは、盾持ち人形埴輪がある程度、定型化した段階ではなく、それ以前のものであることを示していると考えられる。つまり、出現期の試行錯誤の段階と考える方がふさわしい。また、辰巳和弘氏は、本資料のように盾面と顔が一体化したデザインは盾持ち人形埴輪が盾を擬人化したものであるという本来の性格をよく表しているとされる[注23]。

次に円筒部の技法上の特徴を円筒埴輪研究の成果と比較することにしたい。まず、本資料の円筒部の外面調整は、一瀬氏分類の「Bb種ヨコハケ」を主体とするものである。古市古墳群出土埴輪の検討を行った上田睦氏の円筒埴輪編年(以下、上田編年)によれば、Ⅲ期２段階からⅣ期１段階にかけて主体的にみられるという[注24]。一方、本資料の底部高や突帯間隔は、Ⅳ期１段階から同２段階にかけてみられるという。円筒埴輪どうしを比較しているわけではないので、必ずしも一致しないと考えられるが、本資料が、Ⅳ期２段階、もしくはそれ以降の所産である可能性が高いのではないだろうか。ただ、近畿地方をはじめとする各地の盾持ち人形埴輪の出現時期を具体的に示すような資料は知られておらず、時塚１号墳の盾持ち人形埴輪についても埴輪そのものから出現時期を想定するのは困難である。

次に人物埴輪は、頭部、腕、掌、衣服、沓などが確認できたものの、出土量が少なく、その種類を特定することは困難である。出土資料のうち、掌は指が一本ずつ造形されており、写実的である。腕や掌、衣服の造形から、男覡形埴輪、あるいは武器を持った男子埴輪の可能性がある。また、沓は線刻によって、文様が写実的に表現されている。沓の存在から、両足で立った人物埴輪を想定することができる。若松良一氏はその人物埴輪編年(以下若松編年)で、両足で立った人物埴輪は、巫女形埴輪などに若干遅れて出現し、第２期に位置づけておられる[注25]。

甲冑形埴輪は一体型成形と考えられるもので、甲冑類の埴輪としてはやや新しい様相を示し、その特徴から高橋克壽氏の器財埴輪編年の第４期に位置づけられる[注26]。また、若松氏は第１期に位

置づけておられる。一方、甲冑を着用した武人埴輪の出現は、他の人物埴輪に比べて若干遅れると考えられ、若松氏はその出現を第２期と考えておられる。

ところで、人物埴輪と甲冑形埴輪が出土した古墳として、大阪府蕃上山古墳がある。蕃上山古墳からは、巫女形埴輪、男覡形埴輪、弓を持つ男子埴輪などの人物埴輪とともに甲冑形埴輪が出土している。時塚１号墳の様相は、巫女形埴輪がみられないものの、蕃上山古墳出土埴輪群の様相に近いと考えられる。蕃上山古墳を上田氏はⅣ期３段階に、若松氏は第１ｂ期に位置づけられている。

最後に盾形埴輪であるが、盾面の文様については、残存状況が良好とは言えないため、詳細な検討は行わない。ただ盾面の製作方法から田中秀和氏のＣ類に当たることは先に指摘した通りである。次に、盾持ち人形埴輪と同様に、技法上の特徴を円筒埴輪研究の成果と比較、検討することにしたい。盾形埴輪のうち、ヨコハケ調整を施したものが５点、ナデ調整だけのものが２点確認できた。外面調整は、断続的なヨコハケ調整の特徴を持ち、一瀬氏分類のＢａまたはＢｂ種ヨコハケ調整と思われるものが多い。また、突帯間隔や底部高は、個体ごとのばらつきが目立つものの、上田編年のⅢ期２段階からⅣ期１段階にかけての特徴に類似する。これは盾持ち人形埴輪と類似した特徴で、盾形埴輪と盾持ち人形埴輪が近接した時期、あるいは同じ集団において製作された可能性を示す。

以上、時塚１号墳出土埴輪ついて、これまでの研究成果によりながら時期の検討を行ってきた。上述した中から特に注目できるのは、時塚１号墳出土埴輪に近い様相を持つと考えた蕃上山古墳の時期について言及している若松氏の人物埴輪編年と上田氏の円筒埴輪編年である。前者は第１ｂ期に、後者はⅣ期３段階に位置づけられている。時塚１号墳出土埴輪の中には若松編年第２期まで下がると考えられる資料(沓)も含まれているため、年代幅はやや長めにみておく必要がある。また、盾持ち人形埴輪や盾形埴輪にみられた特徴も、古い様相を残すものの上田編年のⅣ期３段階まで下がっても何ら差し支えないと考えられる。若松・上田両氏の研究成果を参照すれば、時塚１号墳出土埴輪の時期は古墳時代中期後葉と考えられる。

一方、鉄製ｆ字形鏡板付轡は中條英樹氏の論攷によれば、古相を示す段階のものにはいり、Ⅰ段階に比定される。須恵器の型式に対応させるならば、陶邑編年ＴＫ208～ＴＫ23型式併行期とすることができる。他の鉄製品では、直刃鎌を含まず曲刃鎌のみで構成される点、定型化した長頸鏃の形式からみてもこの年代観と矛盾しない。

以上のように時塚１号墳は出土した形象埴輪群や造出しの主体部ＢＳＸ033副葬遺物の様相から、古墳時代中期後葉の築造年代を考えることができる。

近隣の中期古墳との比較では、馬路町池尻に所在する坊主塚古墳がほぼ同時期の古墳と考えることができる。坊主塚古墳は二重周溝をもつ造出し付き方墳であり、墳頂部の主体部からは横矧板鋲留衝角付冑・三角板鋲留短甲・片甲・頸甲・籠手・草摺の武具一式、鉄刀４点・鉄剣３点・鉄鉾１点・鉄鏃16点以上・仿製神獣鏡１面の副葬品が出土している。築造時期は時塚１号墳と前後する時期とみられる。中心主体と造出しの副次的な主体部という差異はあるものの、坊主塚古

墳が武器・武具といった戦闘具に偏りを見せるのに対し、時塚１号墳では武器に加え、馬具・農工具を含む点が大きく異なるなど被葬者の性格を表しているのかも知れない。

近隣地域における埴輪との比較では、坊主塚古墳から本例に近い意匠の盾持ち人形埴輪が出土している(注27)。また、盾形埴輪においても南丹市塚本古墳出土埴輪中に本例と共通する鋸歯文をもつものがある。塚本古墳と坊主塚古墳で出土した円筒埴輪には最上段に線刻がみられるものがあり、そのうち鹿の線刻をもつものは非常に酷似した意匠となっている。このように、南丹波における中期中葉から後葉にかけての中型古墳間には埴輪の共通性が存在することを指摘でき、南丹波地域の在地的な埴輪群として捉えることができよう。今後、ハケ工具などの同定を行うことにより当該地域における製作工人や工房の実態に迫ることができるものと期待される。

時塚２号墳は一辺約12mの小規模な方墳である。出土須恵器である大形甕と須恵器甕の年代観からＴＫ23～ＴＫ47併行期に位置づけられる。古墳の規模・位置関係から１号墳に後出して造墓されたものとみられる。規模や築造時期からは１号墳に直接後続する古墳というよりは、むしろ従属的な古墳である可能性が高い。

以上のように、南丹波地域の古墳時代中期の様相を考える上で今回の調査は貴重な資料を提示したといえる。今後、時塚古墳群については15・17次調査の整理を進める中で更に詳細な検討を加えたいと思う。

（石崎善久・福島孝行・筒井崇史・村田和弘）

Ｄ．奈良～平安時代

今回の一連の調査で検出した遺構は多くないが、遺構の主軸からいくつかのグループにわけることができる。すなわち、Ｎ９°～10°Ｗ、Ｎ12°～15°Ｗ、Ｎ18°Ｗ前後の３グループである。ただし、これらの遺構から出土している土器は、出土量が少ない上、おおむね平安時代前・中期のもの限られ、各グループの時期比定は必ずしも明確にはできない。また、これらに先行する遺構として井戸ＣＳＥ042のような明らかに奈良時代にさかのぼる遺構が存在する。当該期の遺構の変遷については、ここで指摘したように、少なくとも４段階程度の時期差が認められる。

Ｅ．中世　この時期の顕著な遺構は、井戸ＧＳＥ492のみであり、周辺に関連する掘立柱建物跡等は検出されなかった。また、遺物の出土量も大幅に減少する。このような傾向は第15次・第17次調査地においても認められる。したがって、中世段階の集落は、当該地より東方の丘陵部に移動した可能性もある。出土した土器はおおむね12世紀代のものと考えられ、それ以降の土器はほとんど出土していない。

（岡崎研一）

(2)時塚遺跡第10次J地区

1．調査経過

時塚遺跡10次J地区は、時塚遺跡の北西部、池尻遺跡の北東部に位置する。標高100m前後を測り、ちょうど丘陵裾部から沖積地平坦部に地形が変換するところに当たっている。遺跡地図上では両遺跡の重複する範囲になるが、慣例により時塚遺跡として取り扱われることが京都府教育委員会文化財保護課の指導により決定された。

時塚遺跡J地区は、調査対象範囲に4か所の調査トレンチ(J－1トレンチ・J－2西トレンチ・J－2中央トレンチ・J－2東トレンチ)を設けている。調査面積は合計1300㎡である。

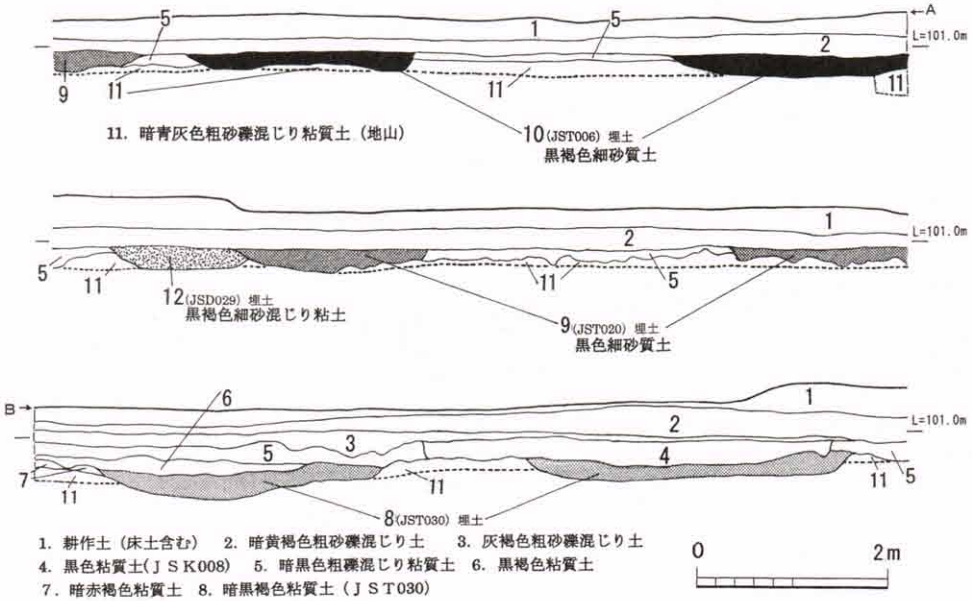
調査は重機により表土・床土を除去したあと、人力による精査をかけた。その結果、いずれのトレンチからも遺構・遺物を検出することができた。

2．層位

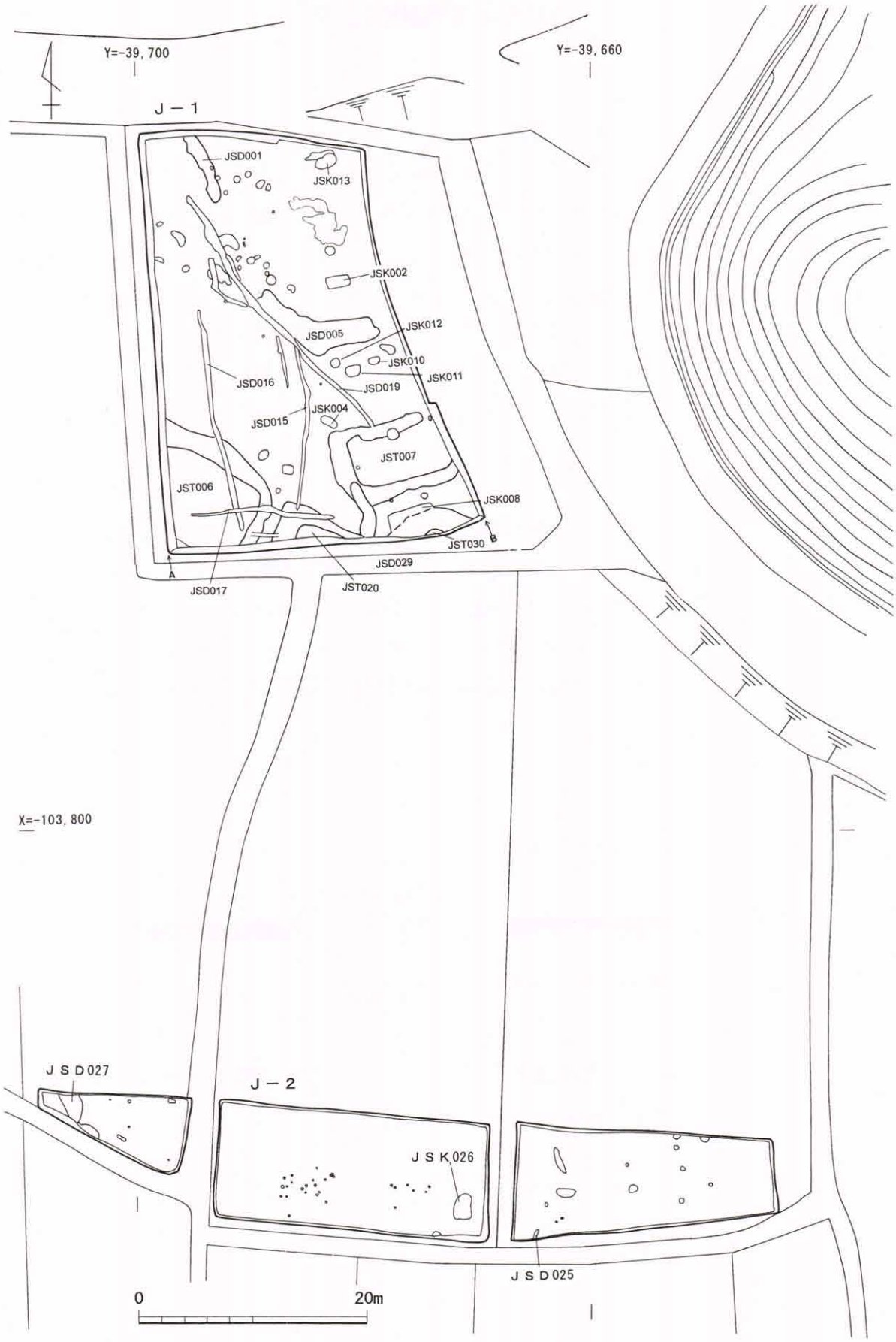
J－1トレンチ南壁を中心に、土層の基本層序についてみておきたい(第102図)。表土・床土(1層)、暗黄褐色粗砂礫混じり土(2層)に続き、灰褐色粗砂礫混じり土(3層)の洪水起源とみられる粗砂、さらにその下層において暗黒色粗礫混じり粘質土(5層)が広がり、この5層上面で弥生時代中期から中世にいたる遺構を検出することができた。なお、J－2西・J－2中央・J－2東の各トレンチでは、5層にかわって、暗褐色細砂質土が基層となり、その面から鎌倉時代の遺構が切り込んでいる。

3．検出遺構

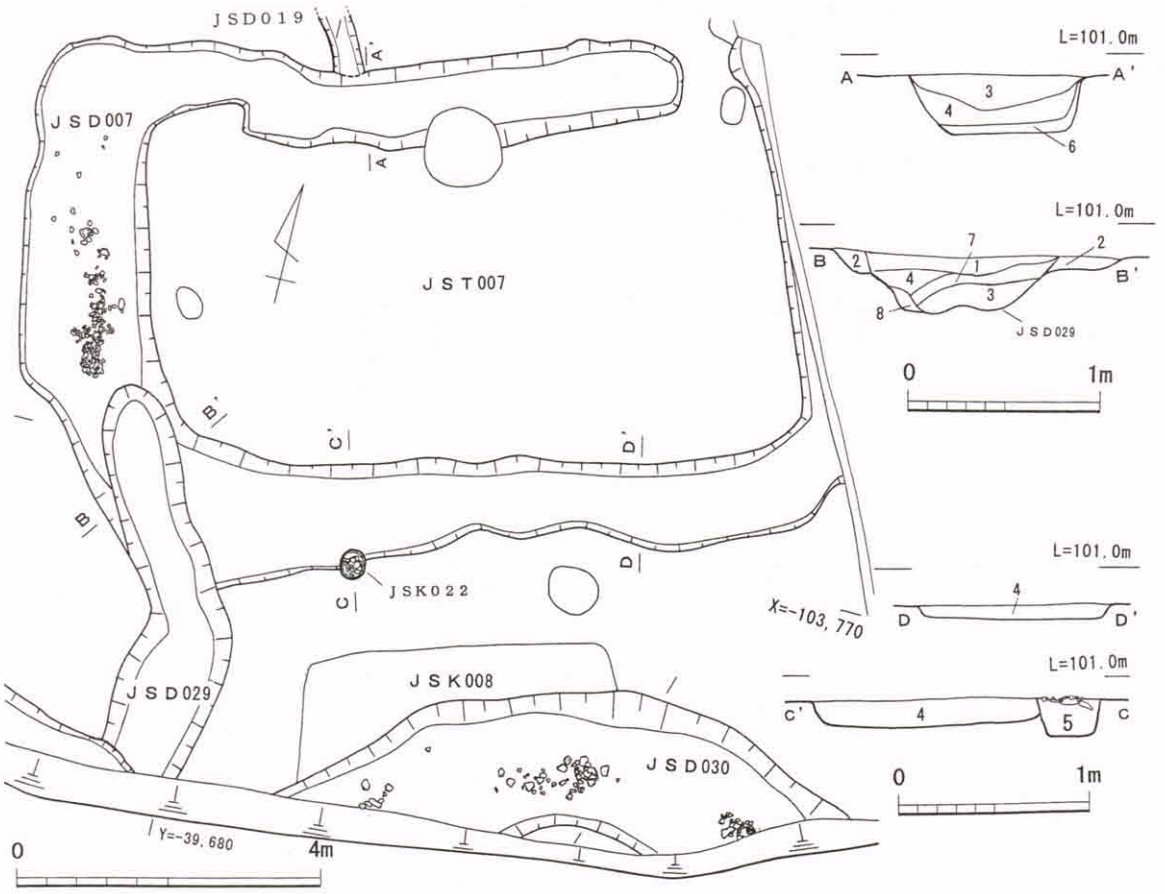
A．J－1トレンチの遺構(第103～109図)



第102図　J地区土層図



第103図　J地区遺構配置図



1. 黒色粘質土　2. 暗黒色粘質土　3. 黒褐色粘質土　4. 暗黒褐色粘質土
5. 暗黒灰色粘質土　6. 黒色粘質土　7. 暗灰褐色粗砂礫混じり粘質土　8. 黒灰色細砂質土

第104図　方形周溝墓ＪＳＴ007・008・030、溝ＪＳＤ029他平・断面図

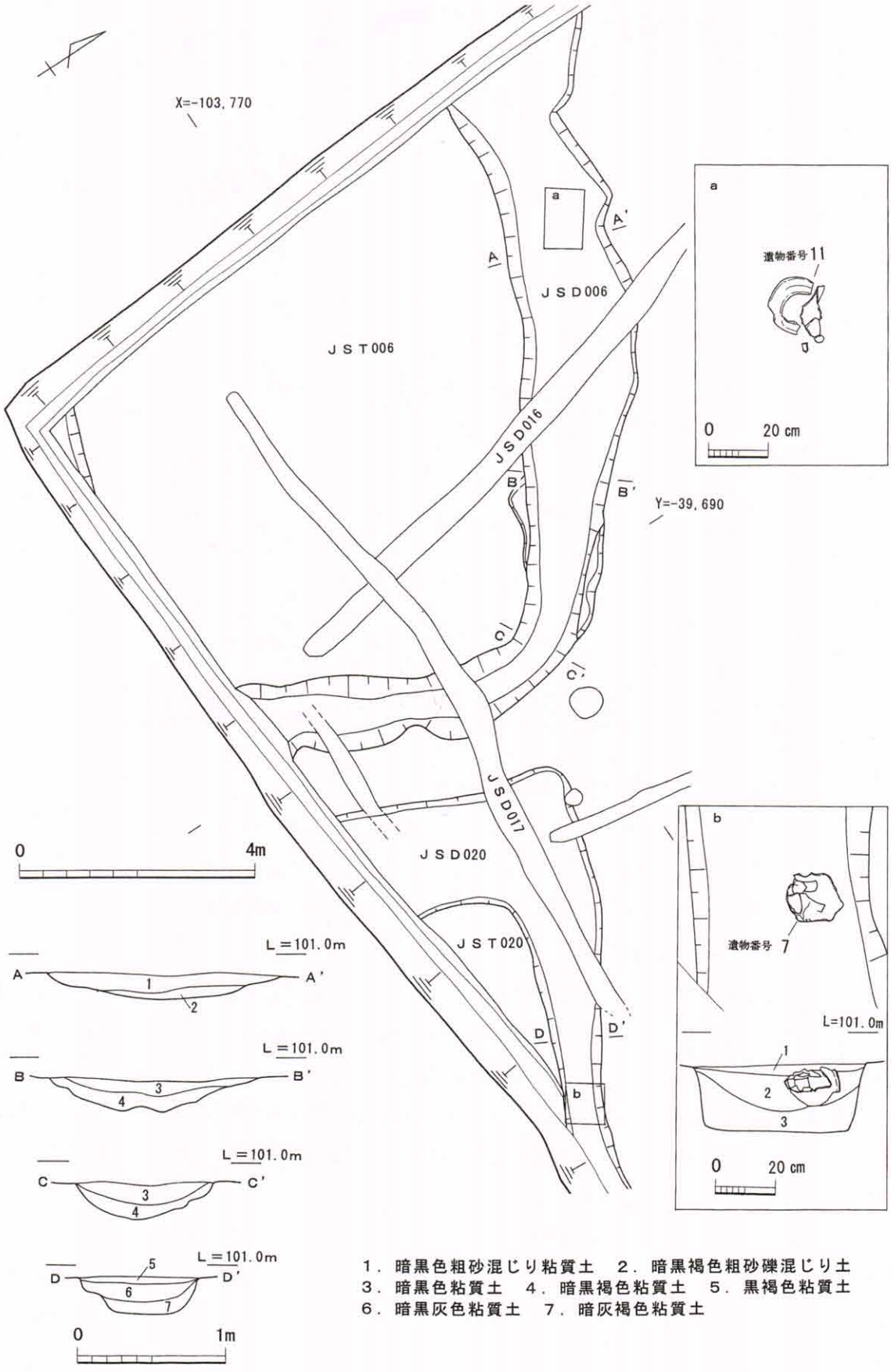
主な検出遺構は、弥生時代中期の溝や鎌倉時代の溝などがある。弥生時代中期は、方形周溝墓４基(ＪＳＴ006・007・020・030)、溝４条(ＪＳＤ001・005・019・029)、土坑３基(ＪＳＫ004・013・022)がある。鎌倉時代のものには、溝(ＪＳＤ015～017)がある。なお、方形周溝墓の各周溝には、便宜上ＪＳＤと表記した遺構名を与えている。その他、時期不明のものとして、土坑５基(ＪＳＫ002・008・010～012)などがある。

方形周溝墓はＪ－１トレンチの南半部で検出した。北半部は後世の削平が顕著で、溝や土坑などもかなり浅くなっている。しかし弥生時代中期の遺構はＪ－１トレンチ全体から検出された。鎌倉時代の溝も、トレンチ南半部において顕著である。

方形周溝墓ＪＳＴ030　調査区南壁にかかって、周溝の一隅のみの検出である(第103図)。幅約1.7～２m、深さ0.4mを測る。暗黒褐色粘質土の埋め土である。溝内から壷(19)、甕(20)をはじめ、弥生時代中期の土器が出土した。

方形周溝墓ＪＳＴ007　調査区南東部で、東辺を除く３辺を検出した(第103・104図)。長方形である。長辺と短辺をそれぞれ内側で測ると、8.6m・4.4m、溝幅も内側で1.75～１m、深さは0.1～0.32mを測る。溝の断面形は逆台形で暗黒褐色粘質土の埋め土である。西辺の中間部底から弥生土器(15～17)などが出土した。

方形周溝墓ＪＳＴ020　調査区南壁にかかる周溝の一隅のみの検出である。(第103・105図)。



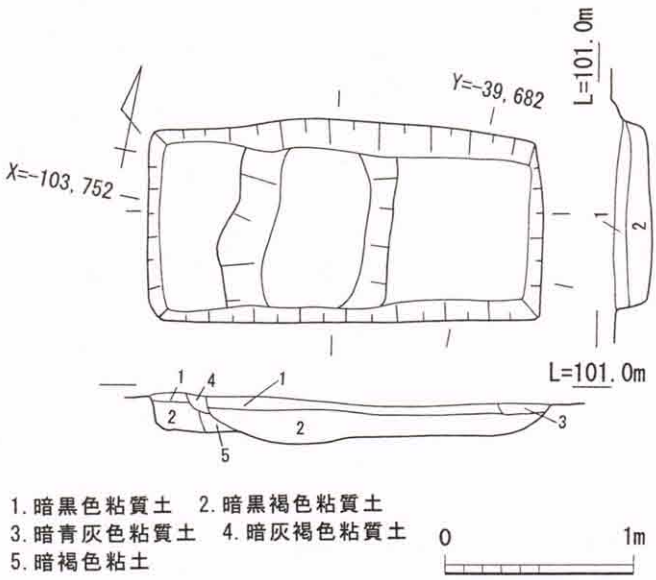
第105図　方形周溝墓ＪＳＴ006・020他平・断面図

幅0.65～1.9m、深さ0.2mを測る。断面は逆台形で、黒色細砂質土を埋め土とする。東側の南壁近くで、弥生土器の壷１個体(７)が出土した。溝ＪＳＤ029と切りあい関係をもつ。

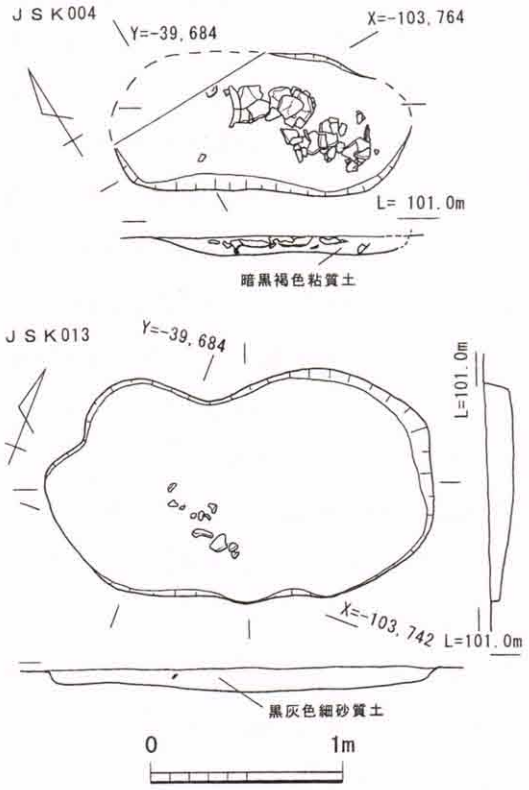
溝ＪＳＤ029　調査区南壁にかかる約５m分の検出である(第103図)。幅1.1～1.3m、深さは0.3mを測る。黒褐色細砂混じり粘土を埋土とする。断面形はほぼU字形である。中期の弥生土器(８・９)などが出土した。方形周溝墓ＪＳＴ007の一隅を壊し、かつ方形周溝墓ＪＳＴ020に分断されている。したがって、方形周溝墓ＪＳＴ007→溝ＪＳＤ029→方形周溝墓ＪＳＴ020の順に新しくなる(第103～105図)。

方形周溝墓ＪＳＴ006　調査区の南西隅で、ほぼ半分の検出である(第103・105図)。長方形を呈し、短辺の溝の内側は7.3m、長辺は９m以上を測る。溝幅は0.9～２m、深さは0.15～0.25mを測る。断面形は逆台形で黒褐色細砂質土が埋め土である。弥生時代中期土器(10～12)などが出土した。

土坑ＪＳＫ004　方形周溝墓(ＪＳＴ007)の北西にあり、0.75～1.55mの楕円形である(第107図上)。残存の深さは0.1mと浅く、黒褐色粘質土を埋土とする。壷(25)が一個体あり、埋葬にともなう土器棺の可能性が高い。



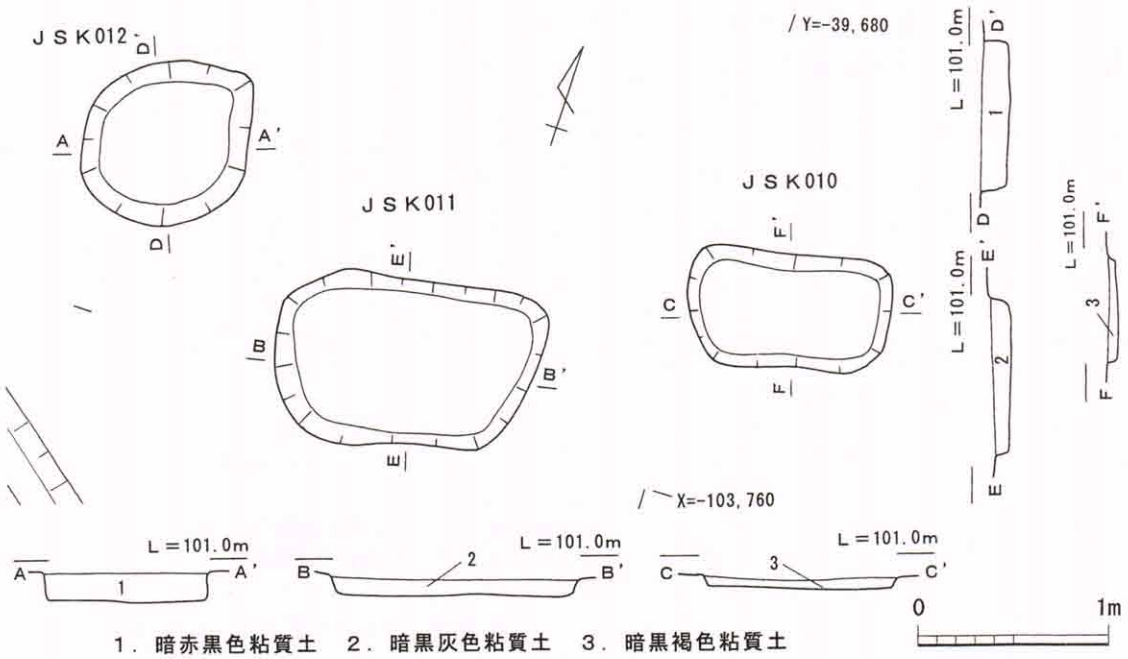
第106図　土坑ＪＳＫ002平・断面図



第107図　土坑ＪＳＫ004・013平・断面図

土坑ＪＳＫ013　調査区北東側にあり、やや不定形な楕円形(長軸1.2m・短軸２m)である(第107図下)。深さは0.15mを測る。黒灰色細砂質土を埋め土とする。底は平坦ではなく凸凹である。弥生時代中期の高杯(24)が出土している。

土坑ＪＳＫ022　柱穴状で方形周溝墓(ＪＳＴ007)の溝ラインを切る。黒褐色粘質土の埋土で、径0.4×0.45m、深さ約0.25mを測る。上面で弥生土器(18)が出土した。



１．暗赤黒色粘質土　２．暗黒灰色粘質土　３．暗黒褐色粘質土

第108図　土坑ＪＳＫ010・011・012平・断面図

土坑ＪＳＫ002・008・010・011・012　いずれも黒色系の粘質土を埋土とする、方形(ＪＳＫ002・008)や隅丸楕円形(ＪＳＫ010・011)、円形(ＪＳＫ012)の土坑である(第106・108・109図)。５基とも出土遺物はなく、掘削時期・用途とも不明である。

土坑ＪＳＫ002は、１～２ｍの掘り方をもち、深さは0.25ｍを測る。棺痕跡や副葬品はない。

土坑ＪＳＫ010は長軸1.1ｍ・短軸0.6ｍ・深さ0.1ｍで、暗黒褐色粘質土を埋土とする。

土坑ＪＳＫ011は長軸1.4ｍ・短軸0.85ｍ・深さ0.08ｍを測り、暗黒灰色粘質土の埋土である。

土坑ＪＳＫ012は0.8～0.85ｍ、深さ0.15ｍのほぼ円形で、暗赤黒色粘質土の埋土である。

土坑ＪＳＫ008は、方形周溝墓ＪＳＴ030を一部こわして２段に掘られている。一辺4.2ｍ、深さ0.25ｍを測る。中からは角礫がまばらに出土したが、土器などの遺物はなかった。

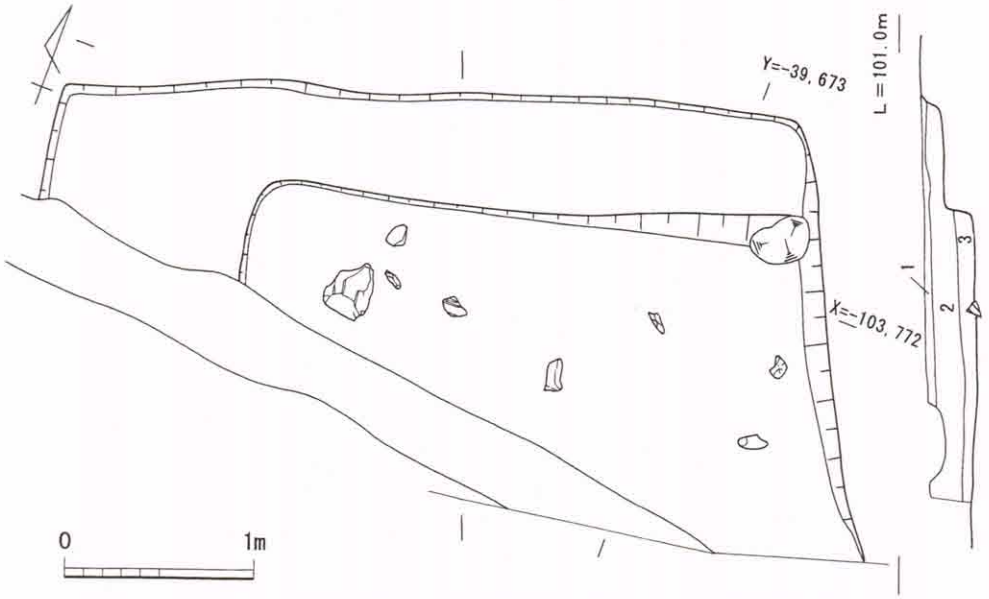
溝ＪＳＤ001　調査区北壁にかかって6.5ｍ分の検出である(第103図)。幅は0.4～0.7ｍ、深さ約0.1ｍを測る。暗褐色粘質土を埋め土に、断面形は皿形を呈する。弥生時代中期の土器(１・２)などが出土した。

溝ＪＳＤ005　調査区中央部で屈曲する溝で、約10.5ｍ分、幅2.1～３ｍ、深さ0.15～0.2ｍを測る(第103図)。弥生時代中期の土器(３～６)などが出土し、方形周溝墓の残欠の可能性もある。中期の溝(ＪＳＤ019)に壊されている。

溝ＪＳＤ019　調査区の中央部を北西から南東方向に走る溝で、方形周溝墓ＪＳＴ007の周溝に接続する(第103図)。長さ26ｍ、幅0.2～１ｍ、深さ0.1～0.2ｍを測る。暗褐色細砂質土の埋め土で、断面形はＵ字形や皿形である。溝ＪＳＤ005を壊す。弥生時代中期の土器(23)が出土し、当該期の溝とみられる。同じ中期の方形周溝墓ＪＳＴ007および溝ＪＳＤ005よりも新しい。

溝ＪＳＤ015～017　鎌倉時代の溝で、いずれも幅0.2～0.25ｍ、深さ0.05～0.1ｍ前後と小規模である(第103図)。瓦器椀断片などがごく少量出土した。灌漑や耕作に伴うものであろう。

Ｂ．Ｊ－２西・Ｊ－２中央・Ｊ－２東トレンチの遺構(第103・110図)



1．黒色粘質土　2．暗黒色粘質土　3．暗赤黒色粘質土

第109図　土坑ＪＳＫ008平・断面図

すべて鎌倉時代のものである。小規模な柱穴および大小の溝、土坑がある。

溝ＪＳＤ027　Ｊ－２西トレンチの東端から検出し、幅１～1.6m、深さ0.2～0.45mを測る。黒褐色細砂質土の埋め土で、断面形はＵ字形である。顕著な出土遺物はなく、掘削時期は不明。

溝ＪＳＤ025　Ｊ－２東トレンチ南西隅の南壁にかかって検出した小規模な溝である（第110図）。長さ0.9m分、幅0.35m、深さ0.18mを測る。鎌倉時代の土師器皿１点が出土した。

土坑ＪＳＫ026　Ｊ－２中央トレンチ東側から検出した不定形土坑。長軸2.4m、短軸1.5m、深さ0.4mを測る。黒褐色砂質土を主な埋め土とし、断面形はＵ字形である。出土遺物はない。

４．出土遺物

出土遺物は方形周溝墓、土坑、溝から出土した弥生時代中期（畿内第Ⅱ～Ⅳ様式期）の土器、鎌倉時代の溝からの土師器、そして包含層からの平安時代の瓦片、土師器、瓦器椀などがある。ほとんどがＪ－１トレンチからの遺物である。

弥生時代中期（第111・112図）　すべて土器資料で、石器、金属器、木器などの出土はない。

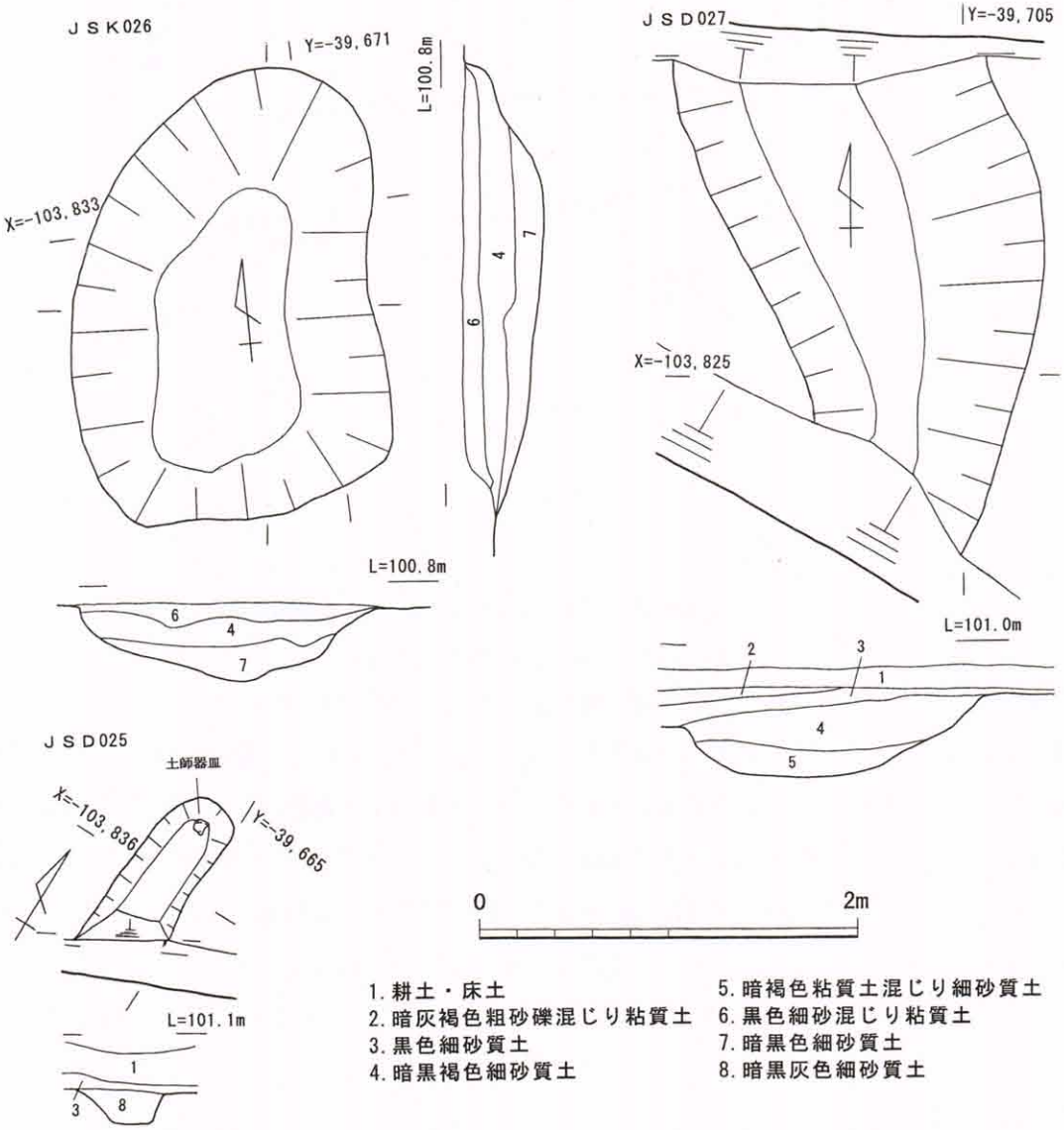
１は口縁端部をやや肥厚させ、くの字に外反する甕の断片である。口縁部と体部の境に細かなタタキ痕をとどめる。２は底部の断片である。１・２は溝ＪＳＤ001から出土した。

３は口縁端部を水平に拡張させて大きく開く広口壷の断片である。端部内面に扇形文が描かれている。４～６は底部断片である。３～６は溝ＪＳＤ005から出土した。

７は広口壷または細頸壷で、口縁部を欠損する。頸部および体部内外面をハケ目調整する。また体部上半に波状文を認める。方形周溝墓ＪＳＴ020の溝底から出土した。

８は、口縁端部をやや肥厚させ、体部との境を鈍く屈曲させた甕である。外面にハケ目調整がみられる。９は底部断片である。８・９は溝ＪＳＤ029から出土。

10は口縁端部がやや肥厚し、体部内外面をハケ目調整する甕である。11は広口壷の口縁～頸部



第110図　Ｊ－２トレンチ溝ＪＳＤ025・027、土坑ＪＳＫ026平・断面図

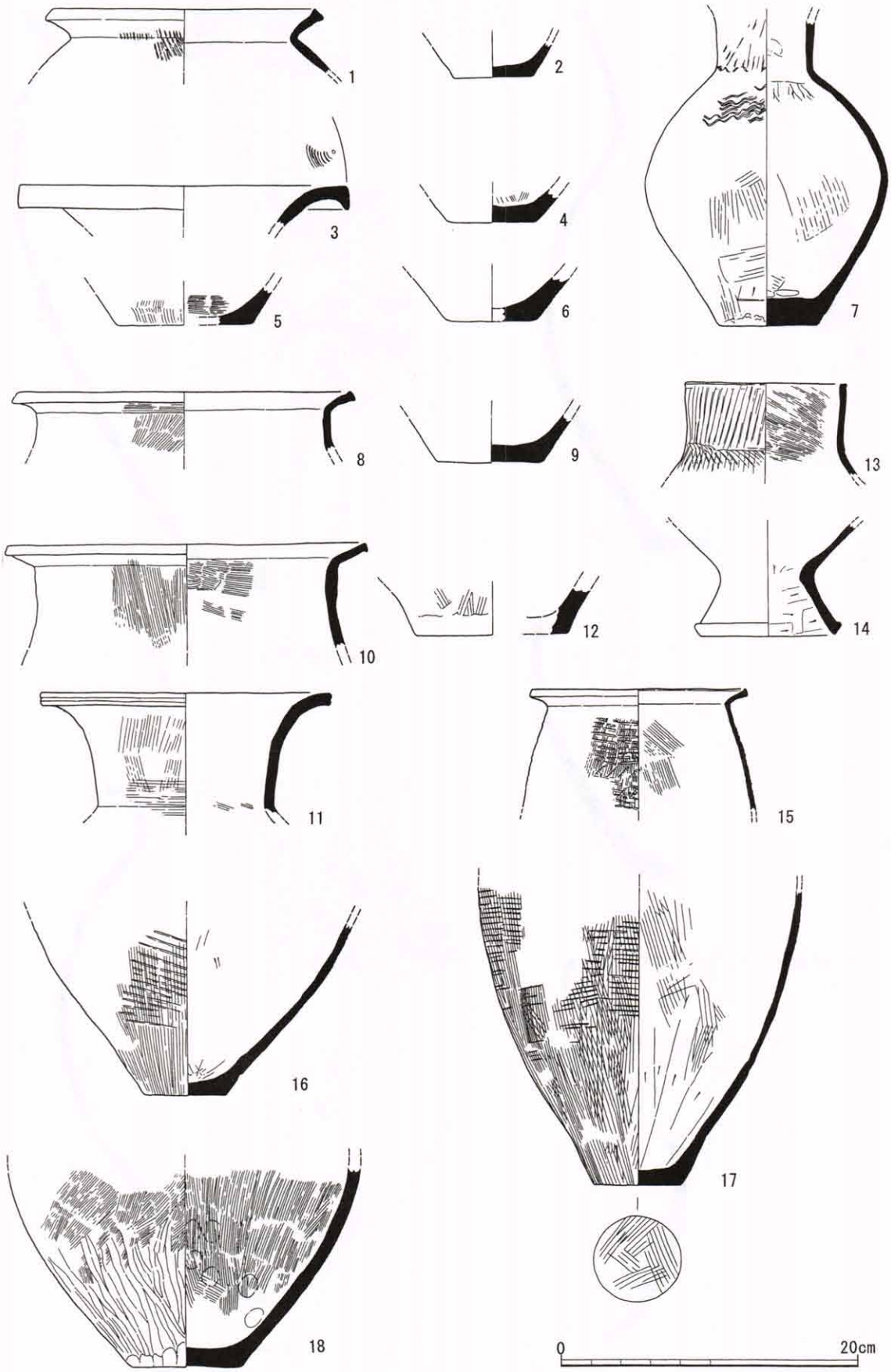
の断片である。端部に１条の凹線が入り、頸部外面はハケ目調整される。12は底部断片である。10～12は方形周溝墓ＪＳＴ006の溝内から出土した。

13は短頸壺の口縁から頸部にかけての断片である。外面はほぼ縦方向に幅広のハケ目調整が、内面は細かな左上がりのハケ目調整が施される。14は壷または鉢の台であろう。15は甕で、体部外面にハケ目調整の後、タタキ調整が施され、体部内面はハケ目調整される。

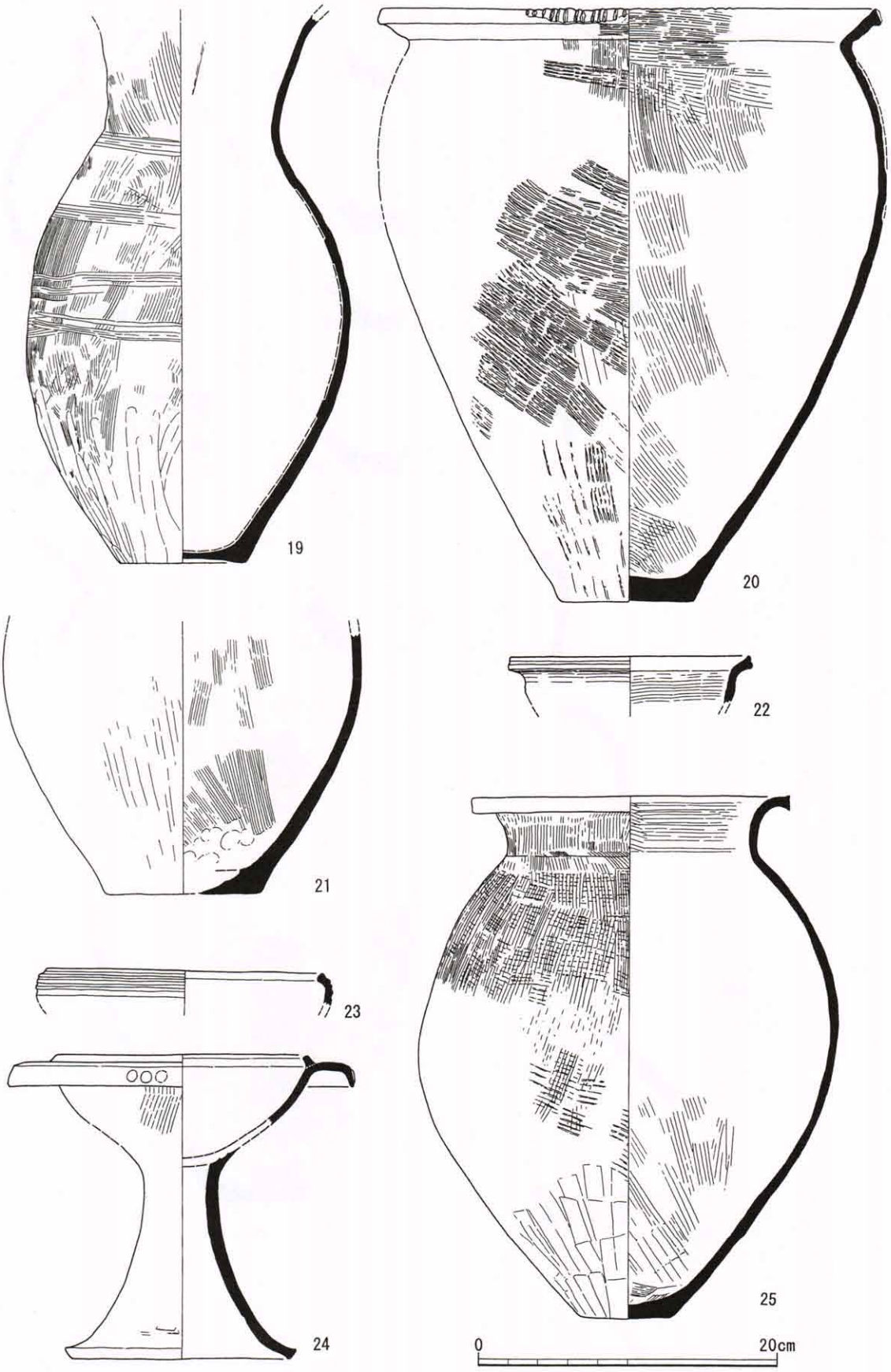
16、17はおそらく甕の体部下半で、ともに外面に縦方向のハケ目調整したのち軽微なタタキ痕をとどめている。13～17は方形周溝墓ＪＳＴ007からの出土である。

18は、壺の体部下半である。内・外面をハケ目調整する。土坑(ＪＳＫ022)から出土した。

19は、広口壷または細頸壷である。口縁端部を欠く。体部外面に粗いハケ目調整ののち、上半部に櫛描直線文が４条、不定間隔で描かれている。その描かれ方は波打ち、最終の繋ぎ部も齟齬をきたし整美さを欠く。典型的な第Ⅱ様式期の壷である。20は大型の甕である。口縁部は体部からくの字に短く屈曲し、端部に面を作り、そこに刻みを施す。内外面はハケ目調整。体部外面は



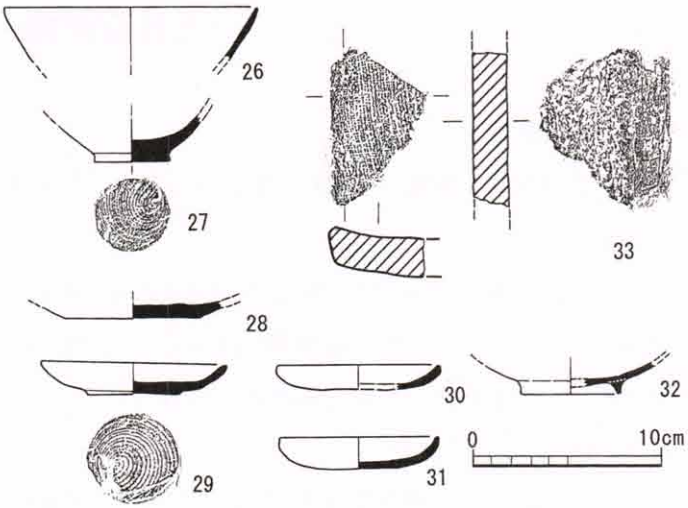
第111図　弥生土器実測図(方形周溝墓・溝・土坑)



第112図　弥生土器実測図(方形周溝墓・溝・土坑)

ハケ目調整のち左上がりのタタキ痕、内面はハケ目調整される。21は甕または壷の体部である。22は鉢である。口縁端部に１条、口縁部と体部との境に５条の凹線が施される。体部内面は水平方向のハケ目調整がみられる。19～22は方形周溝墓ＪＳＴ030の溝内から出土している。

23は台付鉢の口縁部から体部にかけての断片である。４条の凹線文が施されている。第Ⅲ～Ⅳ様式であろうか。溝ＪＳＤ019からの出土である。



第113図　出土土器・瓦実測図(溝・包含層)

24は口縁端部を水平に拡張させ、端部を垂下させた高杯である。垂下させた面に3個ひとまとまりの円形浮文が付く。土坑ＪＳＫ013内からの出土。25は広口壷である。倒卵形の体部に太く短い頸部から口縁部が短く開く。ほぼ80パーセントの完形率である。土坑ＪＳＫ004からで、壷棺とされたものであろう。

平安～鎌倉時代(第113図)

26は土師器椀の体部から口縁部の断片で、内外面ナデ調整されている。時期は判然としない。Ｊ－１調査区南東部の包含層中から出土した。27は灰釉陶器椀の底部断片である。Ｊ－２西トレンチの包含層中から出土した。28は土師器皿の底部である。溝ＪＳＤ015からの出土である。29は底部糸切りの土師器皿である。口径9.6cm、底径4.8cmを測る。平安時代末のものである。Ｊ－１トレンチ南側の包含層中から出土した。30・31は土師器皿である。鎌倉時代のもので、30がＪ－１トレンチ溝ＪＳＤ017から、31がＪ－２トレンチ溝ＪＳＤ025から出土した。32は瓦器椀の底部片である。高台の作りから、平安時代(11世紀末)に比定できる。Ｊ－１トレンチ溝ＪＳＤ015から出土した。33は平安時代の平瓦の断片である。１側縁の面取り、上面の布目痕や下面の縄目痕が認められる。平安時代に比定できる。29とほぼ同じ地点の包含層中より出土した。

５．まとめ

方形周溝墓４基と土坑墓２基の検出により、今回の調査地は弥生時代中期の墓域の一角を占めることが明らかとなった。土器の形態から畿内第Ⅲ様式期を中心に、中期後半まで存続したといえる。また、包含層中から平安時代の瓦や土器、さらに溝から瓦器椀などが出土し、古代・中世にいたっても人々の生活の足跡は途切れることはなかった。ただ、中世以降は、しばしば河川の洪水による砂礫が当地を覆い、集落跡を示す遺構は検出できなかった。鎌倉時代の小規模な溝１条、時期不明の土坑や小柱穴をわずかに確認できたのみである。

(黒坪一樹)

（3）三日市遺跡第9次

1．調査経過

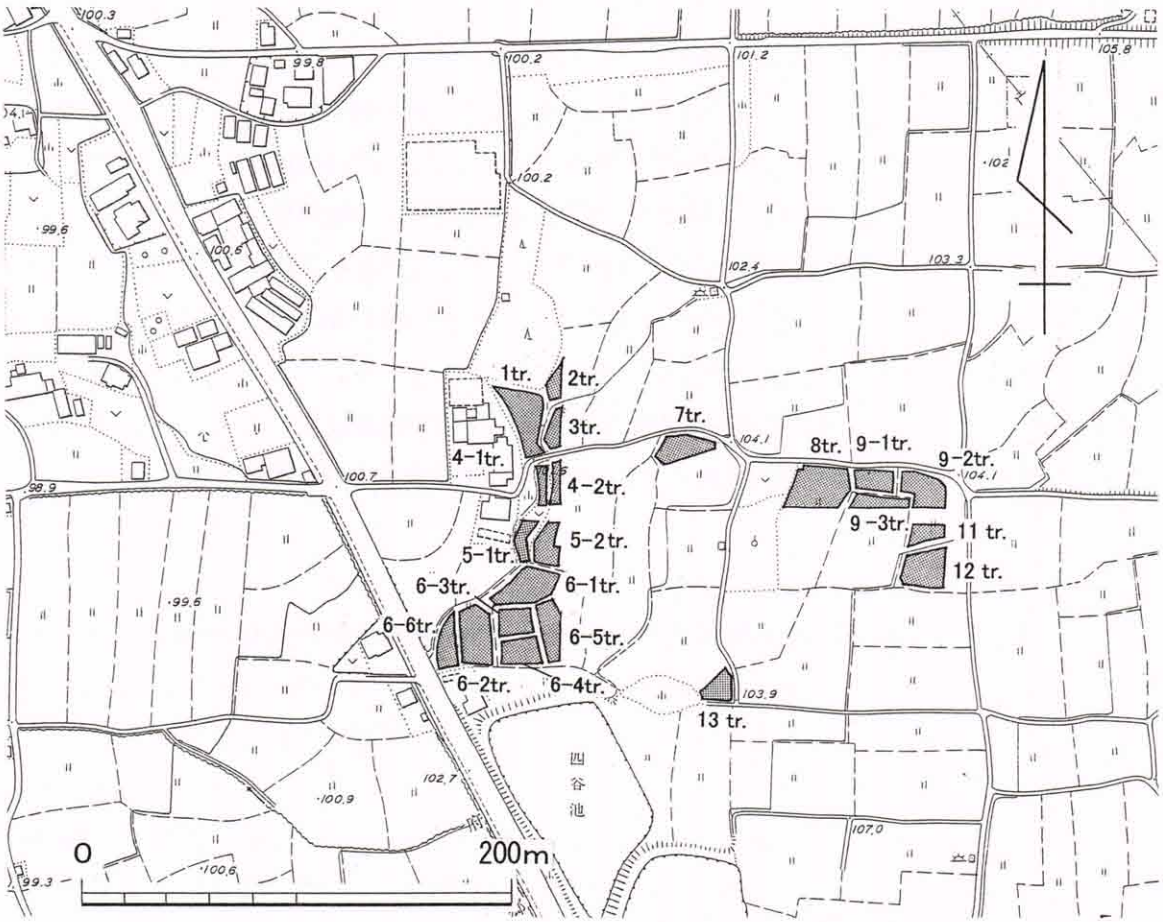
三日市遺跡は、亀岡市千歳町千歳、河原林町河原尻地内に所在し、今回の発掘調査は第9次調査にあたる。

今回の調査地の西側には、府道郷ノ口余部線が通っており、府道をほぼ境にして東側が段丘で、西側が平地となっている。府道の西側に近接して山塊があり、この上に円墳2基で構成される三日市古墳群がある。その南約50mのところでは、踏査により縄文時代中期末葉の土器片（北白川C式）が採取されている。(注28)

これまでの三日市遺跡の調査は、おもに府道の西側の平野部で調査が行われている。三日市古墳群のある山塊の西側の第3次調査では丹波国分寺の創建瓦を焼成した瓦窯跡の灰原が検出されている。また、第4次調査では奈良時代の墨書土器片を含む包含層が確認されている。

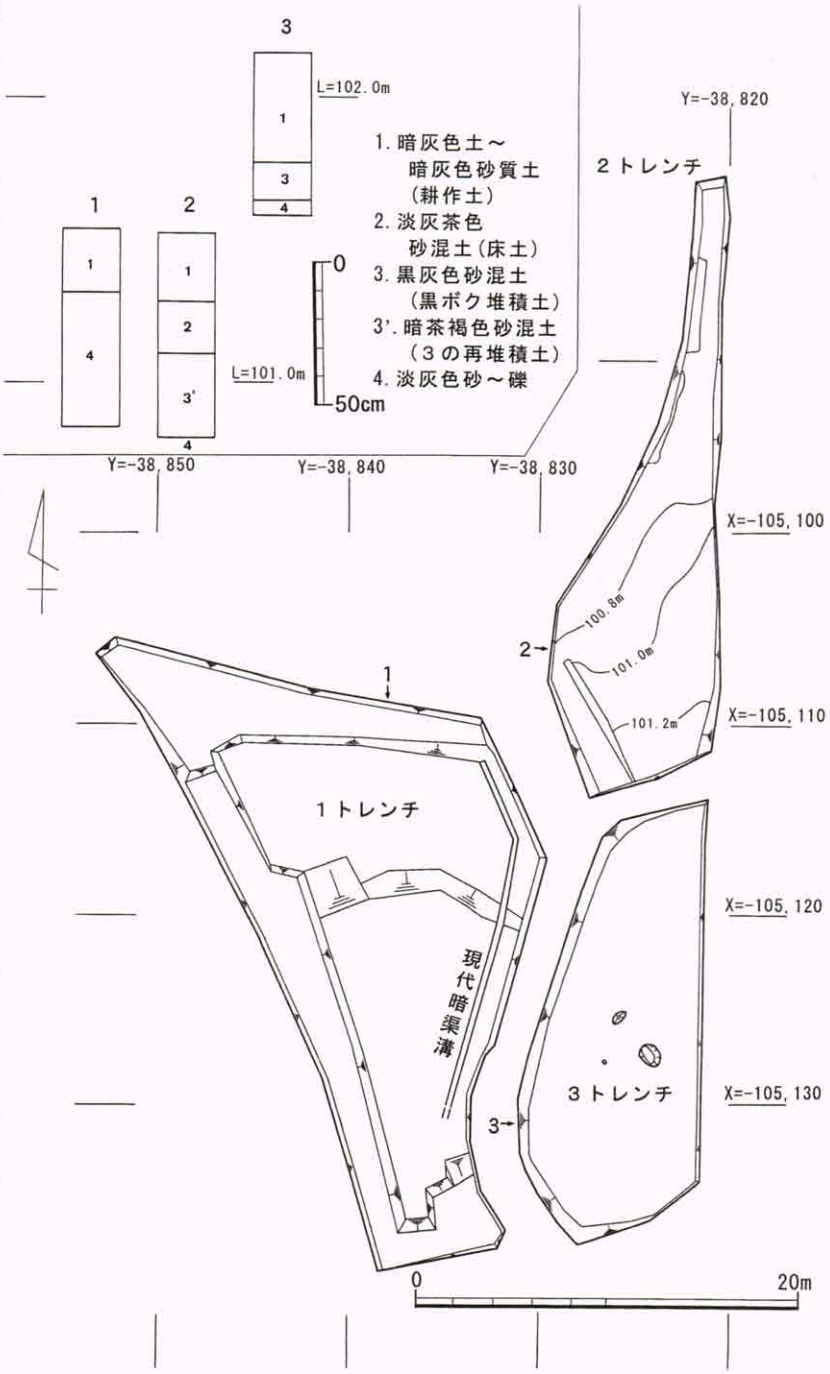
今回の調査地は府道の東側の丘陵上にあることや周辺の状況から、縄文時代の集落や古墳の存在が予想された。

今回の調査は、平成16年度に亀岡市教育委員会が三日市遺跡の遺構・遺物の拡がりを確認するために行った試掘調査の成果を受けて、ほ場整備により切土となる範囲に21か所の調査トレンチ



第114図　調査トレンチ配置図

を設定して、発掘調査を実施した。当初は、現在の田畑の畦畔を取り払って、調査トレンチを設定する予定であったが、最終的に現田畑の畦畔を残して一筆毎に調査を行うこととなった。そのため、トレンチ番号に一筆毎の枝番を付してトレンチ名とした。なお、調査対象地の東端に10トレンチを設定する予定であったが、調査ができなかったため、欠番となっている。



第115図　1～3トレンチ平面図、土層柱状図

2．調査概要

A．1～3トレンチ

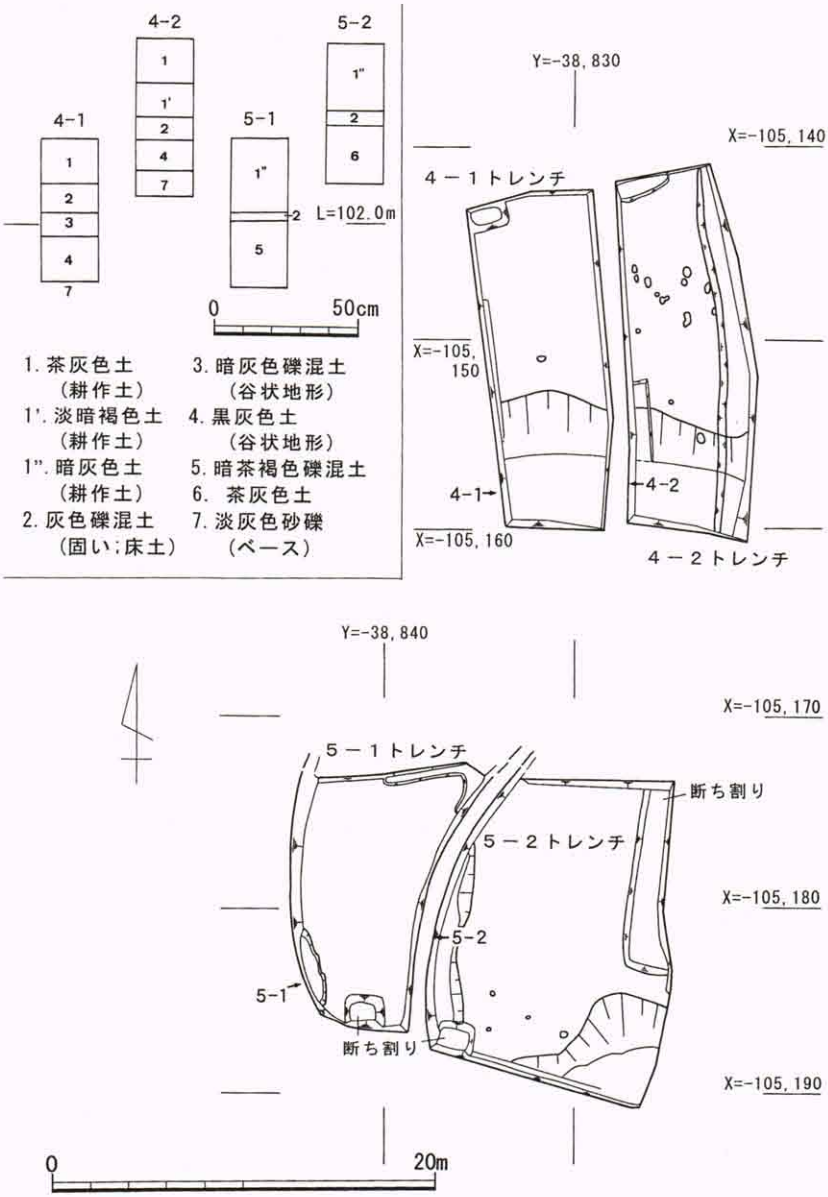
1～3トレンチは、北西方向に伸びる丘陵尾根の先端近くのトレンチである。

1トレンチは、耕作土の直下が淡灰色砂ないし砂礫層となる。西壁と北壁で部分的に約1mの深さで断ち割りを行ったが、堆積状況に変化はなく、この砂礫層が遺跡を形成するベース面と判断した。耕作土を除去すると、ベース面に部分的に淡茶灰色混じり灰白色シルトが薄く堆積していたが、遺物は含まれていなかった。最終的に、ベース面では、現代暗渠溝一条を確認したに留まった。調査面の標高は101.2～101.3mである。包含層中より瓦器椀土師器皿など(第128 図1～4)が出土している。

2トレンチは、耕作土・床土の下層に3層の暗茶褐色砂混じり土が堆積しており、平安時代頃の土器小片が含まれていた。ただし、トレンチ南辺部では床土直下がベース面の4層淡灰色砂～砂礫となり、暗茶褐色砂混じり土は認められなかった。この層を除去すると、南々東から北々西に下る傾斜面となり、トレンチ内では最大0.6mの高低差が認められた。すなわち、暗茶褐色砂

混じり土が堆積している厚さ分だけ、ベース面が下がっていることになる。この暗茶褐色砂混じり土は黒ボクの再堆積層に砂礫が混入したものと判断される。トレンチの南辺部には暗茶褐色砂混じり土が堆積しておらず、平坦になっていることから、田畑の造成時に削平を受けたものと判断された。調査地内では、現代暗渠溝一条を確認したに留まった。瓦器椀(第128図５)が包含層中から出土した。

３トレンチは、耕作土直下に黒ボク層と判断される黒灰色砂混じり土が堆積しており、この下層にベース面である淡灰色砂～砂礫層が堆積していた。この黒灰色砂混土は色調が濃いことから、元来の旧表土に近い堆積層と判断される。南東部が高く、北西部に向けて下る傾斜面をもち、標高101.65～101.8m付近である。調査の結果、ベース面で土坑２基、小ピット１基を検出した。ただし、土坑２基は不定形で、遺物の出土もないことから人為的なものではないと思われる。小ピットは径0.3m、深さ0.15mで、ほぼ円形である。



第116図　４・５トレンチ平面図、土層柱状図

B．４・５トレンチ

４・５トレンチは調査地の西半中央部に位置している。

４－１トレンチは、耕作土・床土の下層には暗灰色礫混じり土(最大で約10cm)が堆積しており、その下層がベース面となる淡灰色砂礫層である。暗灰色礫混じり土はトレンチ南西部に堆積しており、北・東に向けて徐々に薄くなり、北・東端ではこの層が無く、床土の直下がベース面となる。暗灰色礫混じり土は、黒ボク層が再堆積したものと判断され、この暗灰色礫混じり土から瓦器片が出土している。調査はベース面で実施し、標高は102.1m付近である。調査面はトレンチ全体でほぼ平坦である。調査の結果、小ピット状の窪

みと、トレンチの南端部で幅７m以上、深さ0.25mの谷状の流路を検出した。この流路の埋土は黒灰色土で、黒ボクの再堆積層と判断される。暗灰色礫混じり土がトレンチ南西半部にだけに堆積していることや調査面が平坦であることから、トレンチの東半及び北半は、おそらく田畑の造成時に削平を受けているものと判断される。

４－２トレンチは、４－１トレンチの東側にあり、現地表で約0.25m高い位置にある。層序は、耕作土・床土の下層がベース面の淡灰色砂礫層で、この上面で調査を実施した。調査面の標高は、トレンチの北辺で102.3m、谷状の流路を検出した東端で102.35m、西端で102.15mと、北東から南西に向かって傾斜している。調査の結果、トレンチの南端では、幅５m以上、深さ0.15mの谷状の流路を検出した。４－１トレンチと違って、黒ボクの再堆積層が谷状流路内でしか認められず、平坦面には堆積していないのは、田畑造成時に削平を受けたためと判断される。

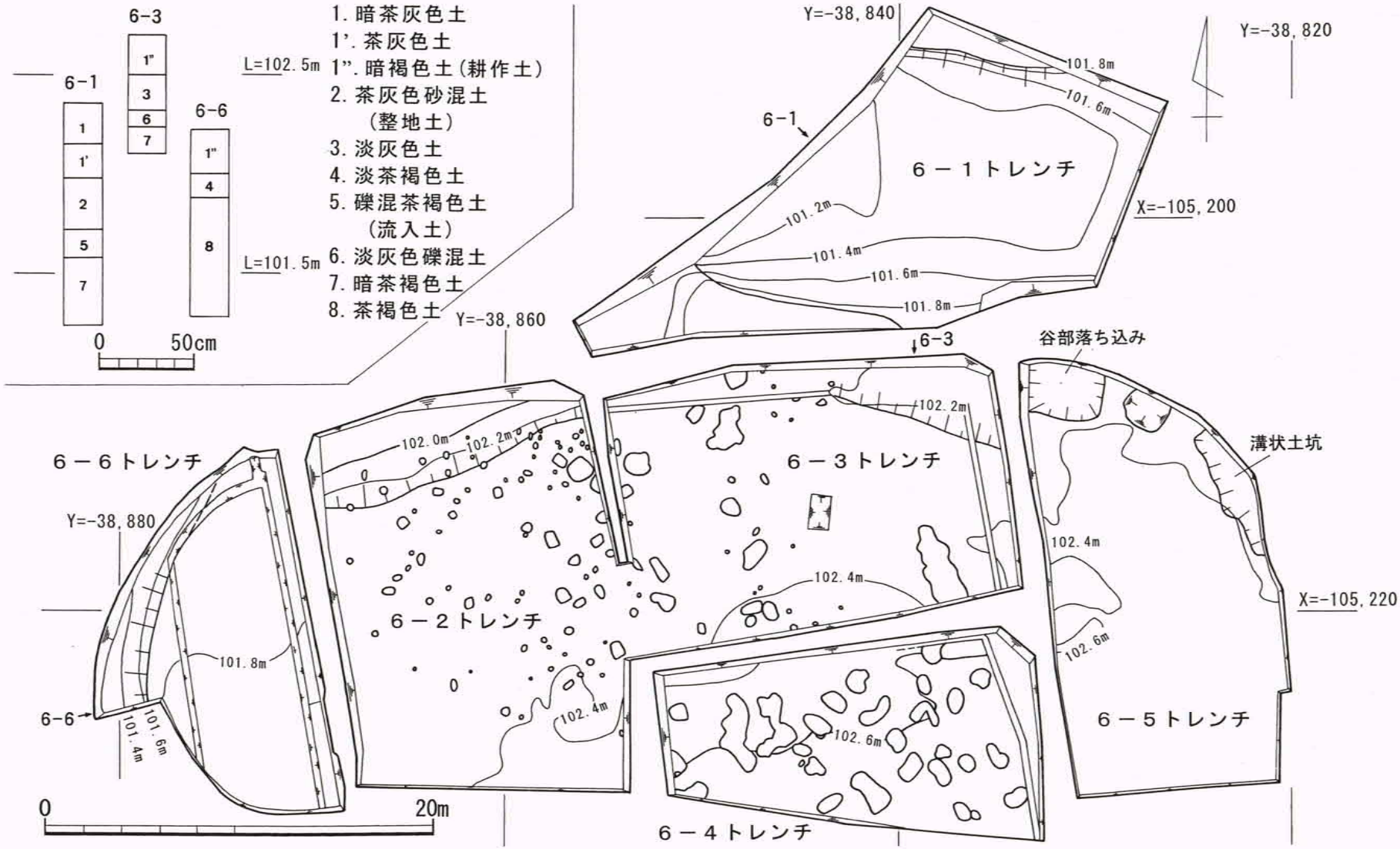
５トレンチは４トレンチの南側に、約７mの間隔を空けて設定した。

５－１トレンチの層序は、耕作土、床土の下層が淡灰色砂礫のベース面となる。ベース面は標高101.9～102.1mで、ほぼ平坦である。ベース面を精査し、トレンチの南西部で南北方向の溝状の落ち込みを確認した。埋土は暗茶褐色礫混じり土で0.25m程度の深さを確認した。検出状況から、田畑形成以前の旧地形の斜面と判断した。これ以外に遺構は検出されなかった。

５－２トレンチの層序は、５－１トレンチと同じく、耕作土、床土、淡灰色砂礫(ベース面)となる。ベース面で調査し、その標高は102.2～4mで、ほぼ平坦である。精査の結果、５－１トレンチと同じく、西辺に沿って溝状の落ち込みを検出したが、田畑造成以前の旧地形と判断した。南東部では、黒灰色砂混土を埋土とする長さ６m、幅４～７m、深さ0.3mの土坑状の落ち込みを検出した。南側に、後述する６－１トレンチで確認した谷地形が存在することから、その谷地形に下る斜面の一部と判断した。この落ち込みからは、弥生土器片や縄文土器片がわずかながら出土している(第128図７～13)。また、トレンチの南半では、径0.1～0.3m、深さ0.05～0.15mの数基のピットを検出したが、時期は不明である。本来は遺構が全面に広がっていたのが、北半部を中心に、黒ボク再堆積層が完全に削平されるまで平坦に整形したためにほとんどの遺構は削平を受けたものと判断される。

C．６トレンチ

５トレンチの南側の丘陵の張り出し上に６か所のトレンチを設定して、ほぼ全面を調査した。６－１トレンチは、５トレンチの南隣の一筆に設定した。調査前の現況では、北側の５トレンチ、南側の６－３・６－５トレンチとほぼ同じ標高の田畑が営まれていること、西側の水田が約２mの比高差で低く造られていることから、６－１トレンチは丘陵上に位置していると判断された。しかし、調査の結果、６－１トレンチで谷状地形を検出し、それを埋め立てて田畑を造成していることが判明した。谷状地形の肩部は、北側の５－２トレンチと南側の６－３トレンチで確認しており、幅約23～25m、深さ最大1.2mの規模である。層序は、耕作土(１・２層；厚さ40cm)、水田造成時の整地層と判断される２層の茶灰色砂混土(厚さ30cm)、黒ボク再堆積層と判断される礫混じり茶灰色土(５層；厚さ15cm)及び暗茶褐色土(７層；厚さ35cm)である。谷状地形の底面の



第117図　6トレンチ平面図、土層柱状図

標高は101.15～101.45mである。整地層の出土遺物より、この谷状地形は近世に埋め立てられて、田畑に造成されていることが判明した。最下層の暗茶褐色土からは、瓦器や須恵器に混じって縄文土器片や弥生土器片が出土した(第126・127図１～10・12～28・第128図23～27)が、これらの土器片は上流側もしくは両岸から流入したものと考えられる。

６－２～６－６トレンチは、現況の地形を見る限りでは４・５トレンチと同じ丘陵上に位置すると考えられたが、６－１トレンチにおいて小規模な谷状地形が検出されたため、南東から北西に張り出す主たる丘陵尾根筋から、西に張り出す小規模な丘陵上に位置していることが判明した。６－２トレンチは、北側の水田と約２mの比高差を有している。

調査対象地内の６－２～６－５トレンチは東から西に緩やかに下る平坦面を形成している。６－６トレンチは丘陵の先端部にあたり、現地形を見ると東側の６－２トレンチと0.5mの比高差で低くなっており、大きく削平を受けているものと推測された。６－２～６－５トレンチの土層を見ると、耕作土以下、淡灰色土・淡暗灰色砂礫が10～30cm程度堆積しており、その下層がベース面となるが、６－２・６－３トレンチでは淡灰色細砂～砂礫、６－４トレンチでは淡灰色砂礫、６－５トレンチでは淡灰色細砂がベースの層である。これらのトレンチでは、黒灰色ないし茶灰色系統の黒ボクの再堆積層が認められない。調査は、ベース面である淡灰色系統の細砂～砂礫上面で行った。

各トレンチのベース面の標高を見ると、６－２トレンチが102.4m、６－３トレンチが102.3～102.4m、６－４トレンチが102.4～102.7m、６－５トレンチが102.4～102.8mである。南東部が高く、北・西方向に下る地形となっている。

６－２トレンチでは、ほぼ全面で直径0.2～0.5m程度、深さ0.2～0.3m程度の土坑を多数検出したが、最終的には風倒木痕と判断した。また、トレンチの北辺に沿って、北側に下る傾斜面を確認し、淡灰色土・暗茶褐色土が堆積していた。田畑造成以前の丘陵斜面と判断される。

６－３トレンチでは、風倒木痕と判断される不定形な大小の土坑を検出した。トレンチ北東部では、６－１トレンチの谷状地形へと続く傾斜面を検出し、内部には淡灰色礫混土・暗茶褐色土が堆積していた。少量の縄文土器片(第126・127図３・７・10・15・18・22)が出土した。その他には、現代の暗渠排水溝２条を検出したに留まった。

６－４トレンチでも風倒木痕と考えられる径１～２mの土坑を多数検出した。内部からは、縄文土器(第127図９・13・14)や弥生土器が出土した。

６－５トレンチでは、トレンチの北西部分で６－１トレンチの谷状地形へと続く落ち込みを検出した。また、北東部分では、トレンチ壁面に沿って、長さ10m、最大幅２mの溝状の土坑を検出した。埋土は黒ボクと判断される黒灰色土で、深さは最大で40cmを測る。内部からは弥生土器片のほか、縄文土器片が比較的まとまって出土した(第127図８・17・19・20・23～28・第128図15～17)。その性格は不明である。この他に、風倒木痕を検出した。

６－６トレンチの層序は、耕作土下が淡灰色砂～砂礫のベース面となり、101.7～101.9mが調査面である。トレンチ西側1/3にはベース面の上層として淡茶褐色土・茶褐色土が耕作土直下に

堆積しており、これを除去すると北・西側に下る傾斜面となった。丘陵の先端部を形成する斜面である。この堆積層からは弥生土器片および少量の縄文土器片(第126・127図1・2・5・6・12・21)が出土している。平坦面では現代暗渠排水溝数条を検出しただけで、遺構は全く検出できなかった。層序のあり方から、東側2/3は田畑の造成のために削平を受けたものと判断される。

上述のように、6トレンチでは、6－1トレンチで谷地形、6－5トレンチで不明土坑を確認したに留まる。これは、6－1・6－2・6－3・6－5・6－6トレンチでは平坦部が田畑造成時に大きく削平を受けたため、遺構・遺物が消失してしまったものと考えられる。

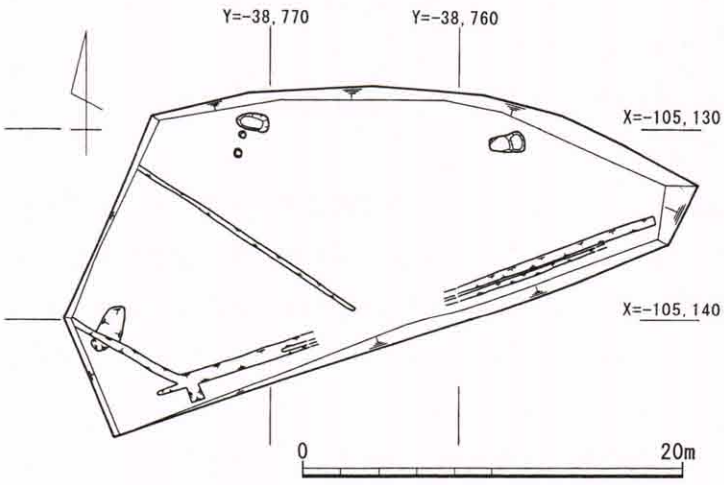
6－4トレンチの風倒木痕や6－1・6－5トレンチの黒ボク再堆積層からは弥生土器・縄文土器片が出土していることから、調査地及びその周辺には出土土器と同時期の集落が営まれていた可能性が高い。各トレンチとも関連する遺構は認められないが、調査地の東南方向の現地形は急激に丘陵が高くなっていくので、遺構・遺物が良好に残っていることが期待できる。

D．7トレンチ

7トレンチは、1～3トレンチの東側に設定したトレンチである。耕作土(厚さ約20cm)の下に淡灰白色砂礫(φ1cm未満)が15～25cm堆積しており、その下層がベース面である明黄褐色砂礫となる。調査はベース面で行い、黒ボクが再堆積した黒褐色粘質土が部分的に認められ、これを除去すると、大きくはトレンチ南辺の東端と西端が高く、北に向けて下る地形でありながら、南辺中央部から北辺中央部の南北方向に小さな谷状地形が確認された。標高102.7～103.2mである。黒褐色粘質土内からは須恵器杯・灰釉陶器椀などが出土している。

E．8・9トレンチ

調査対象地東半では、8、9－1～9－3、11、12トレンチの調査を行った。そのうち、北辺部分が8、9トレンチである。8、9－1、9－2トレンチは東西に並んでおり、これら3か所のトレンチを貫いて飛鳥時代の溝1条を検出した。幅1.1m、深さ最大0.3mで、総長約55mにわたって、ほぼ東西方向に掘削されていた。9－2トレンチの南辺で小ピットを検出したが、それ以外の遺構は確認できなかった。



第118図　7トレンチ平面図

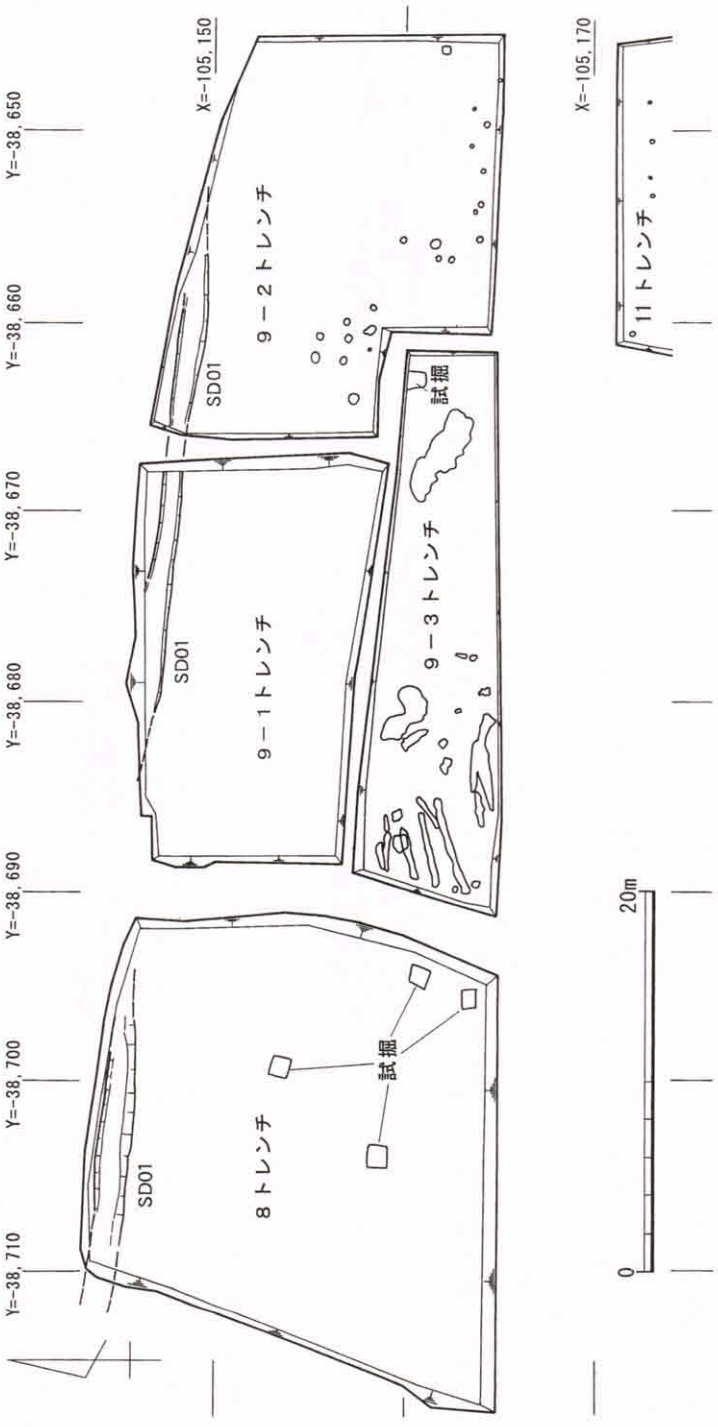
8トレンチは、南壁土層で見ると、耕作土(暗灰色土)、淡黄灰色砂質土、淡黄灰色礫混じり土(地山)となる。西壁では、耕作土、淡灰白色砂質土、淡灰色細砂質土(旧耕作土)、淡茶褐色シルト、淡茶灰色シルト、淡黄灰色礫混じり土(地山)が堆積している。灰黄色砂礫(φ5～10cm)は淡灰白色砂質土中にレンズ状に堆積しており、土石

流により堆積したものと推定される。地山直上で調査を行い、調査面の標高は104.1～104.5mである。東が高く、西に向けて下る傾斜面である。検出した遺構は、トレンチの北辺に沿って東西方向の溝１条だけである。東端部は削平のために消失している。溝の底面は東側から西側に向かって低くなっている。断面は扁平なU字形を呈している。検出長14.3m、幅は最大で1.5mで、深さは最大で0.35mである。埋土は上位より、淡暗褐色砂礫混土、暗褐色砂礫混土、淡茶黄色粘質土で、黒ボクが溝内に再堆積した状況である。内部より須恵器(第129図35～37)が出土している。

９トレンチは、８トレンチの東側に設けた調査区で、田畑の一筆毎に１～３のトレンチを設定した。

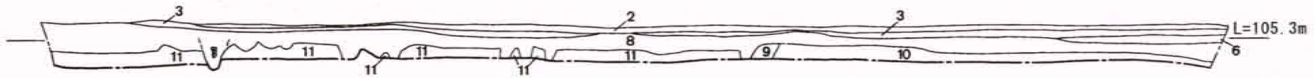
９－1トレンチは、耕作土・床土の下層は、淡茶褐色砂礫混じり土が40cm程度堆積し、明黄褐色シルト～砂礫の地山となる。淡茶褐色砂礫混じり土は細石が多く含まれており、土石流が一気に堆積した層と判断される。調査はベース面で行ったが、標高は104.5～104.85mで、東から西に向けて下る傾斜である。調査の結果、トレンチの北壁に沿って溝１条を検出した。西半はトレンチ北壁の外側へと伸びていくが、長さ18.6mにわたって確認した。幅は１m、検出した深さは最大で0.2m、溝の断面は浅い皿状を呈している。この他に、風倒木痕を検出した。土師器甕(第129図42)が包含層より出土した。

９－２トレンチは、９－1トレンチの東側のトレンチである。南壁土層で層序を見ると、耕作土・床土の下層に黒ボクの再堆

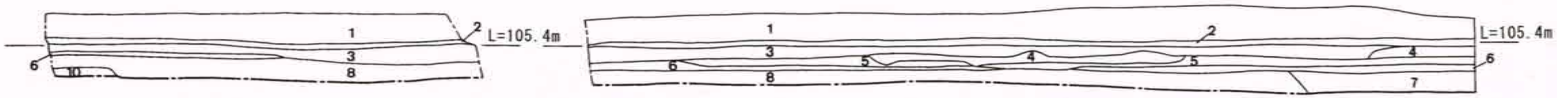


第119図　８・９トレンチ平面図

9－2トレンチ南壁土層

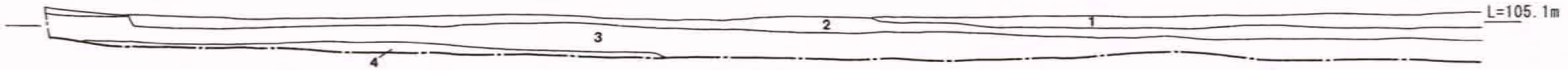


9－2トレンチ西壁土層

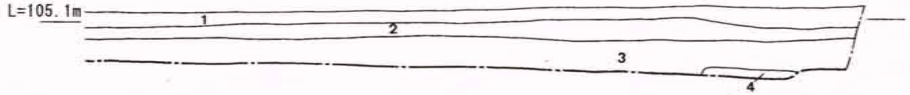


1. 暗灰色土（軟；盛土）
2. 暗灰色土（耕作土）
3. 明黄褐色土（床土）
4. 淡黄褐色砂礫
5. 黄褐色砂礫混土（8層より細かい砂礫）
6. 明褐色砂礫混土
7. 黄褐色シルト（溝埋土）
8. 茶褐色砂礫混土（φ5㎝大の礫）
9. 明黄褐色シルト
10. 灰白色～灰色砂礫（φ2～3㎝の円礫・地山）
11. 明黄褐色シルト（地山）

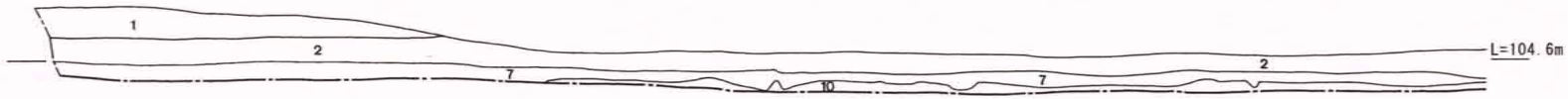
9－3トレンチ南壁土層



1. 暗灰色土（耕作土）
2. 明黄褐色土（床土）
3. 淡茶褐色砂礫混土
4. 明黄褐色シルト（地山）

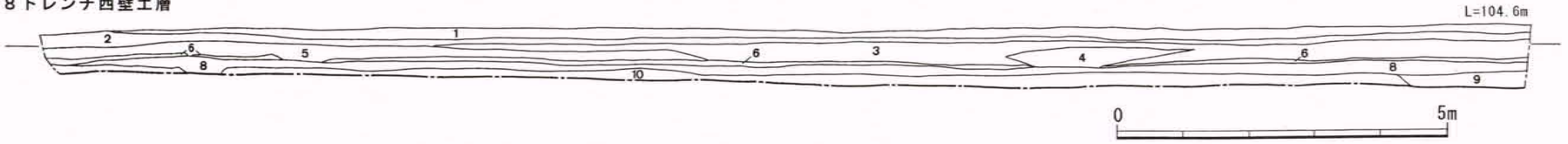


8トレンチ南壁土層

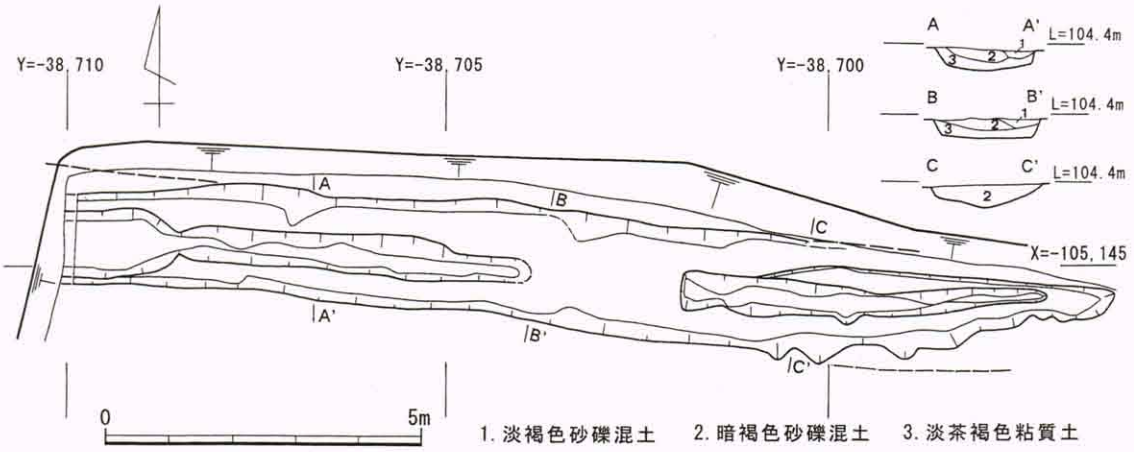


1. 暗灰色土（軟；盛土）
2. 暗灰色土（耕作土）
3. 淡灰白色砂質土（整地土）
4. 灰黄色砂礫（φ5～10㎝大礫；土石流）
5. 淡灰色細砂質土（水田整地土）
6. 淡茶褐色シルト
7. 淡黄灰色砂質土
8. 淡茶灰色シルト
9. 明茶褐色土（溝ＳＤ01）
10. 淡黄灰色砂質土（地山）

8トレンチ西壁土層

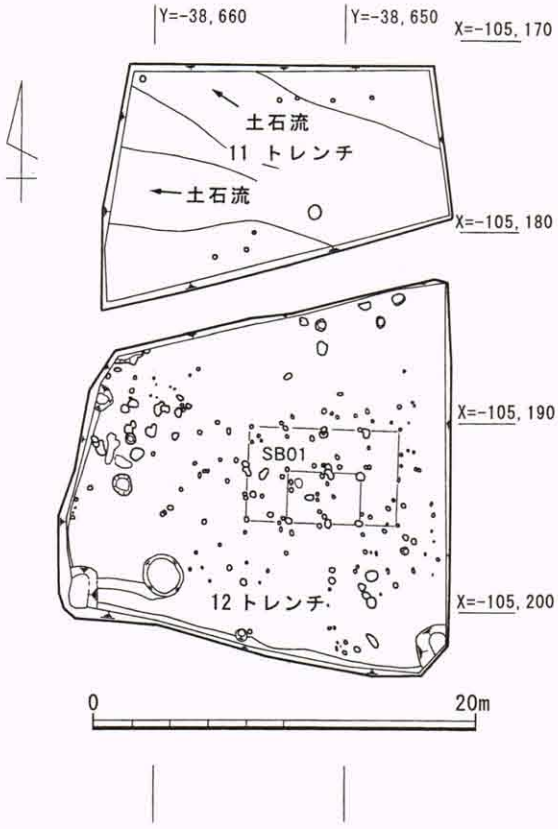


第120図　8・9トレンチ土層図



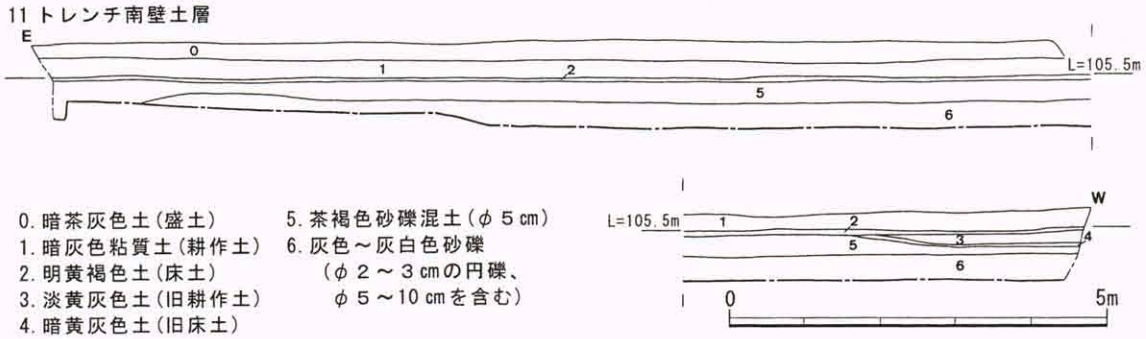
第121図　8トレンチＳＤ01平面図・土層図

積層と考えられる茶褐色砂礫混じり土があり、地山として灰白色～灰色砂礫、明黄褐色シルトが堆積している。茶褐色砂礫混じり土は西・北にいくほどその色調が薄くなる。また、トレンチの北東部にはこの層が分布しておらず、削平を受けているようである。遺構は、茶褐色砂礫混じり土を切り込んで東西溝を検出している。調査面は標高104.85～105.1mで、南から北へやや下る傾斜面である。検出した遺構は、溝１条、柱穴状のピット数基がある。トレンチの北辺で検出した溝は、８・９－１トレンチで検出した溝と同一の溝で、検出長9.5m、幅1.3m、深さは最大で0.4mを測る。須恵器(第129図40・41)が出土している。柱穴はトレンチの南辺と中央部西半で検出している。南辺部の柱穴群は径0.1～0.3mの円形を呈しており、深さは0.1m程度で、埋土は茶褐色砂礫混土である。埋土は比較的締まりがあり、埋土中には瓦器片等が含まれていた。中央部西半の柱穴群は、径0.4～0.6mとやや大型で、埋土は暗茶褐色土で礫をほとんど含まず、埋土の締まりもなく、若干の遺物を含むものもあるが、風倒木痕であるのか、人工的なものであるのか判断できなかった。

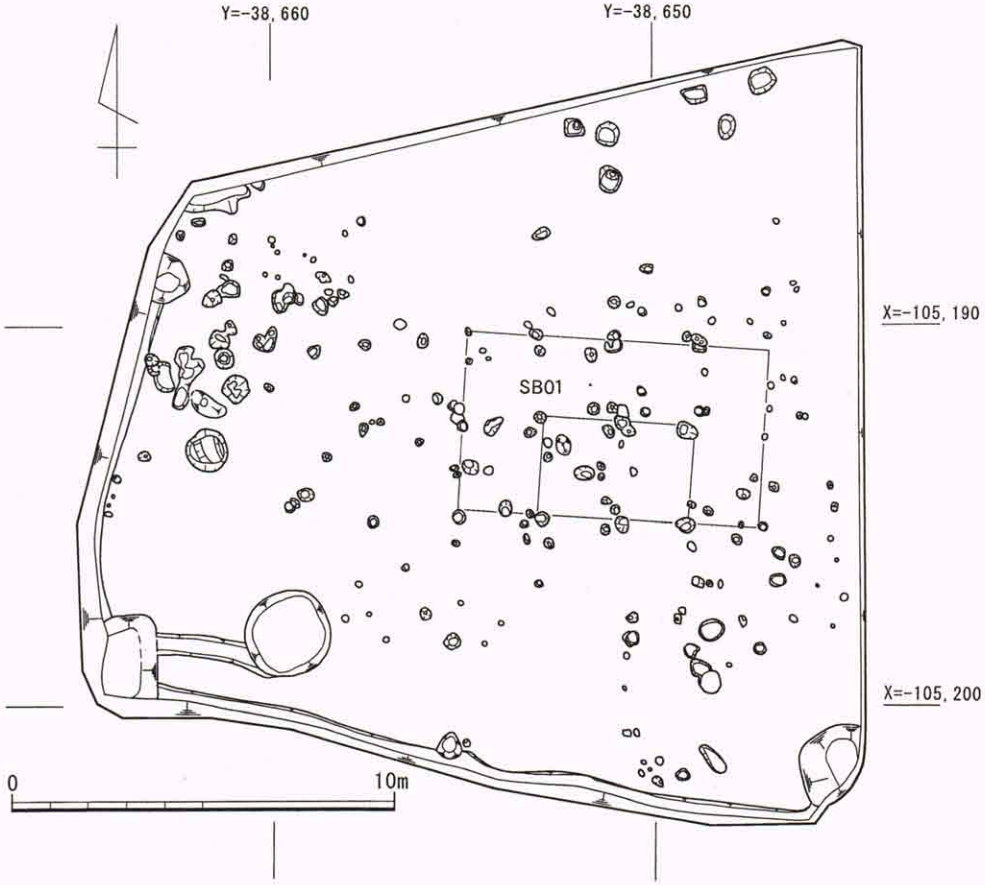


第122図　11・12トレンチ平面図

９－３トレンチは、９－１トレンチの南側に設定したトレンチである。層序は、耕作土・床土の下層が淡茶褐色礫混じり土、その下層が地山である明黄褐色シルトとなる。淡茶褐色砂礫混じり土は９－１トレンチのものと同じく、土石流の堆積層と判断される。調査したのは、標高104.5～104.9mで、東から西に下る傾斜を持つ。このトレンチでは、土坑状の風倒木痕とトレン



第123図　11トレンチ土層図



第124図　12トレンチ平面図

チ西端で不明溝数条を検出したに留まる。須恵器(第129図38・39)が包含層から出土した。

F．11トレンチ

9－2トレンチの南側に11トレンチを設定した。このトレンチの層序は、耕作土、床土があり、その下には茶褐色砂礫混じり土、灰色～灰白色砂礫が堆積しており、西端の一部に淡黄灰色土、明黄灰色土が堆積している。褐色砂礫混じり土は直径5cm大の円礫が、灰色～灰白色砂礫は直径2～3cm大の円礫が主体となっており、土石流によって一気に流され、堆積した状況である。調査は、灰色～灰白色砂礫の上面で精査を行った。調査面は南東が高く、北西方向に下る地形で、南東部の標高が105.3mで、北西部が104.8mである。調査の結果、数基の土坑・ピットを検出した。埋土を掘削したところ、内部より土師器小片が出土した。この南側の12トレンチでは柱穴や

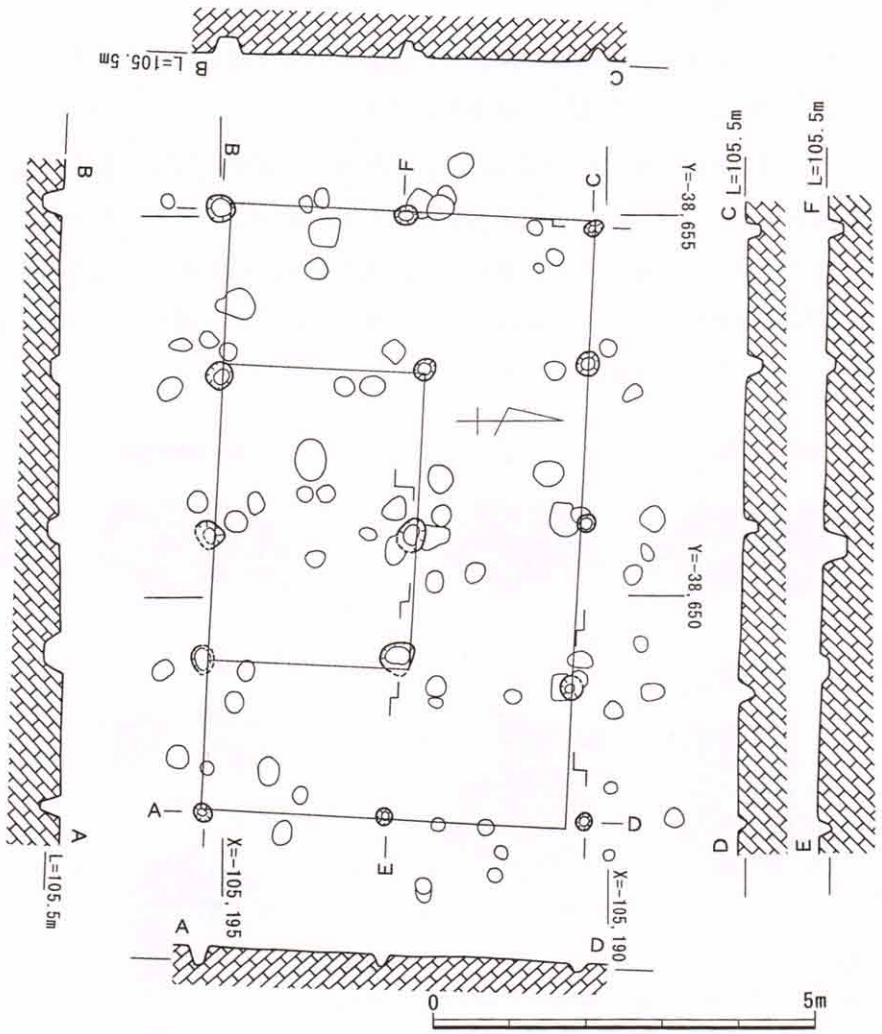
土坑を検出していること、12トレンチ北辺と11トレンチ南辺の遺構面の高さが約0.2mの高低差しかないため、本来は土坑やピットがあったのが、土石流により削平を受けた遺構の残欠と判断される。

G．12トレンチ

耕作土、床土、淡黄褐色～茶褐色砂礫混じり土があり、その下に黄褐色～灰色砂礫土の地山となる。調査面は105.25～105.75mと約0.5mの高低差があり、南から北、および東から西に向けて下る地形である。

12トレンチでは、調査地の全面で柱穴及び風倒木痕を検出した。北辺部東半では柱穴が全く認められなかったが、中央部に較べて0.1～0.2mほど低くなっていることから、土石流の削平により遺構が消失したためと判断される。また、南辺部も中央部と較べて遺構の分布密度は小さい。遺構検出面の標高は105.6m、105.5mとほぼ同じであることから、本来は南に向けて上がる傾斜面に遺構が穿たれていたものが、南辺部が後世に削平されて、遺構が消失したものと判断される。12トレンチでは平安時代後期の掘立柱建物跡１棟を検出した。

掘立柱建物は東西２間、南北１間の母屋に、北・東・西の三辺にそれぞれ一間の廂が付くものと復原できる。柱穴掘形は、母屋が径0.3～0.4m、廂が径0.2～0.3mの円形で、やや規模が小さいものである。母屋の柱間は東西が1.95m(6.5尺)、南北が2.7m(９尺)、廂は北に2.1m(７尺)、東・西に1.95m(6.5尺)である。柱穴の埋土から瓦器椀が出土している。ほぼ正方位を向いている。平安時代後期と考えられる。



第125図　12トレンチ掘立柱建物跡実測図

H．13トレンチ

13トレンチは、調査対象地の中央部南半に設定した調査区である。重機により

耕作土(約20cm)を除去し、その下の灰白色砂礫を一部掘り下げた。最大で深さ0.6mの掘削を行い、灰白色砂礫が厚く堆積しているのを確認したが、湧水も甚だしいため、調査の継続を断念せざるを得なかった。遺構の検出はなく、遺物の出土もなかった。灰白色砂礫上面の標高は105.7mである。

(岩松　保)

3．出土遺物

調査により出土した遺物には、縄文土器、弥生土器、飛鳥時代の須恵器、奈良～平安時代の土師器・須恵器、近世陶磁器類などがある。

A．縄文土器

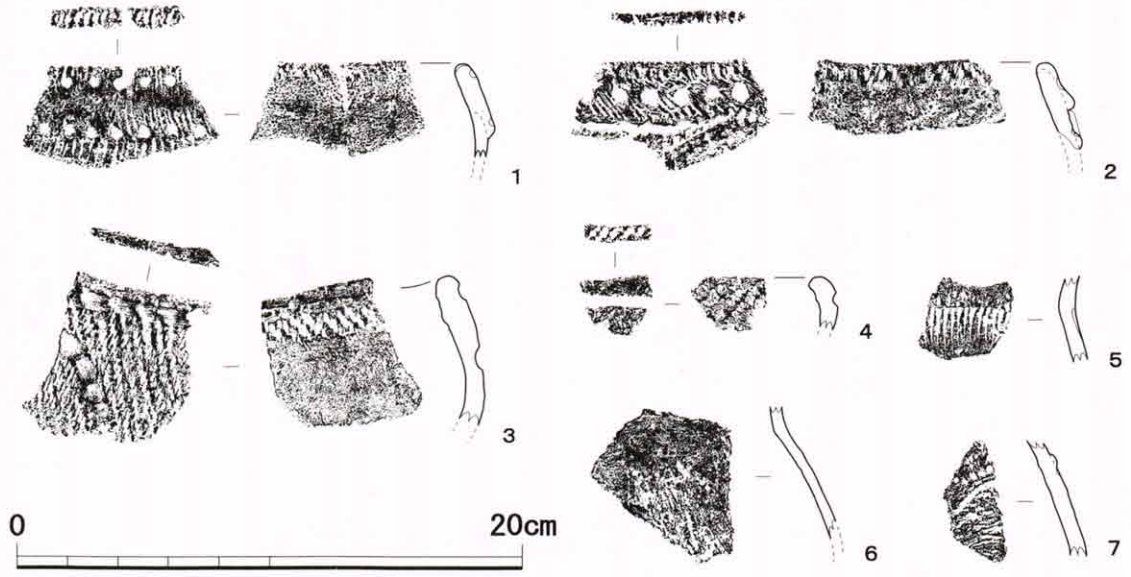
本遺跡では、縄文時代中期前葉と晩期中葉の土器が出土している。数量は比較的少ないので、ここでは、部位や文様、器種がわかる土器片を報告する。

a．中期前葉

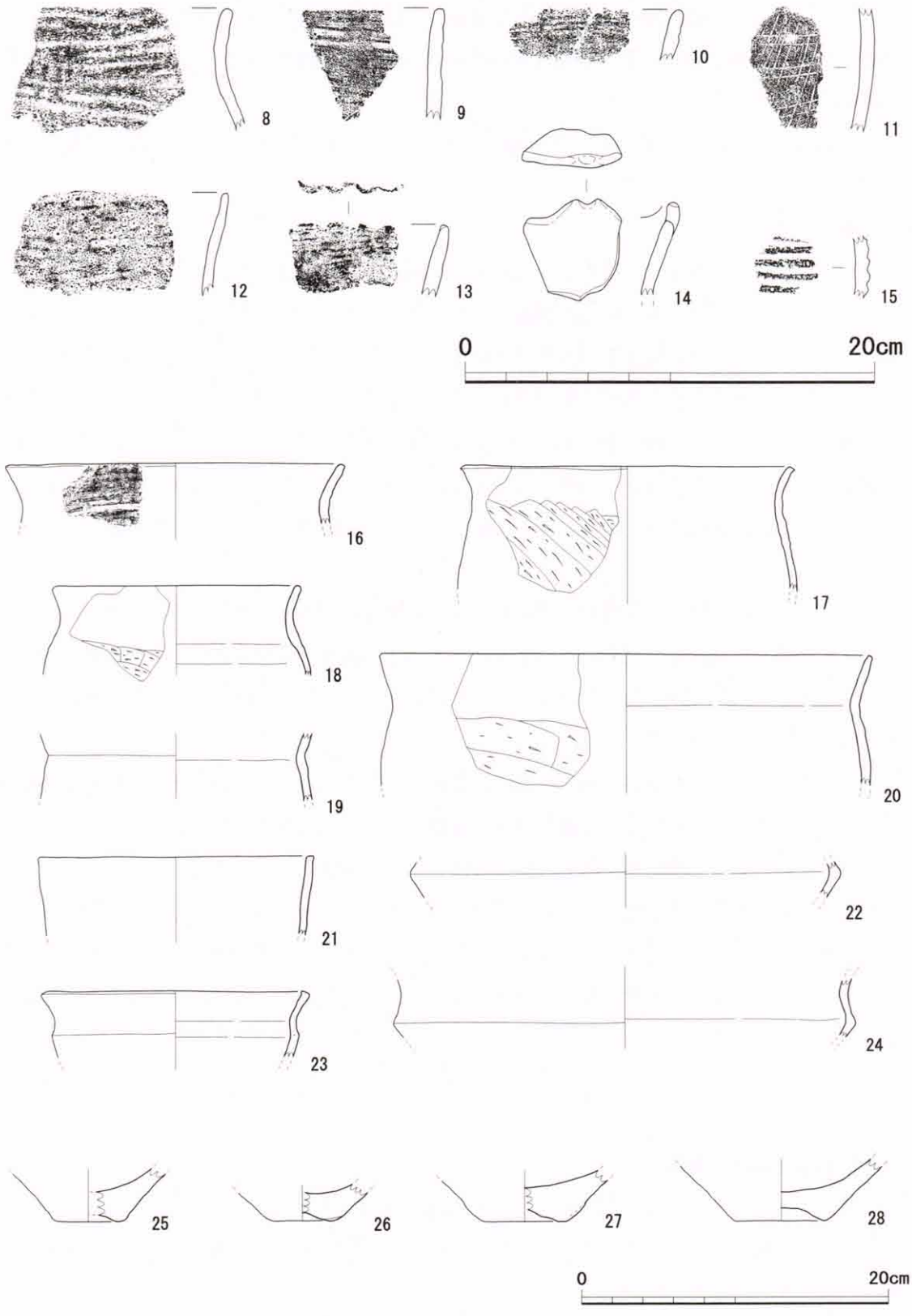
1～3は撚りが荒く節の細長い縄文を地文とする、キャリパー形深鉢の口縁部片である。口縁部内面にも縄文帯をもつ。

1は内湾する口縁部外面に縦長のC字形爪形文を施し、その両端に列点を刺突する。口縁端部はC字爪形文によって刻む。船元Ⅰ式である。

2は内湾する口縁に粘土紐を貼り付けた後、Ⅰ字形爪形文を斜めに施し、さらにその上に列点を刺突する。下部には粘土紐を貼り付けた後、両側に上部のそれより小さい列点を穿つ。粘土紐上の施文は摩耗により不明である。3は内湾する口縁部外面に角棒状工具による押引沈線をひく。口縁端部は面取りする。内面はていねいなナデで平滑に調整している。2・3は船元Ⅰ式終末期からⅡ式に比定できる。



第126図　出土遺物実測図(縄文時代中期前葉の土器)



第127図　出土遺物実測図(縄文時代晩期中葉の土器)

4は内湾する口縁部外面に1条の沈線をもつ。口縁端部と口縁部内面には節が楕円形の縄文を施す。

5・6はキャリパー形深鉢の頸部～肩部である。5は上部が深いI字形爪形文を施す。6は外面に撚りの荒い縄文を施す。7は胴部片である。撚りの荒い縄文を地文として隆帯を貼り付け、その両端に列点を施す。

1・2・5・6は、6－6トレンチ北西部出土である。3・7は、6－3トレンチ出土である。

b．晩期中葉

8～28は滋賀里a～b式古段階である。器形から深鉢と浅鉢に2分できる。

8～13・16～21は深鉢。ふくらんだ胴部をもち、頸部でくびれて口縁部で外反しながらひらく器形(8・12・16～20)と、砲弾形の器形(21)があり、前者が大半を占める。胴部には正面からみて右下から左上にケズリがなされるものが多い(17・18・20)。内面は丁寧なナデによって調整する。口縁部外面に二枚貝条痕を施すものと、ナデにより平滑にするものが半数ずつある(n=18)。口縁端部はほぼすべてが面取りするが、両端から刻んで波状にするもの(13)と上から刻むものが1点ずつある。20は頸部を強く横位にナデており、やや古い様相を示す。11は格子状に条線を施す。

14・15・22～24は浅鉢で、九州地方に由来する黒色磨研浅鉢の系譜をひくものである。く字形に屈曲する胴部から頸部でくびれ、口縁部で外反する。器面は丁寧なナデによって平滑に調整する。14は器壁とほぼ同じ厚さのいわゆるリボン状の突起をもつ。15は複数条の沈線を横位に施す。23は口縁部を面取りする。

25～28は底部。いずれも凹底である。側面は摩滅などにより調整が判別できず、時期比定は困難であるが、胎土からみて、すべて晩期中葉の深鉢底部である可能性が高い。

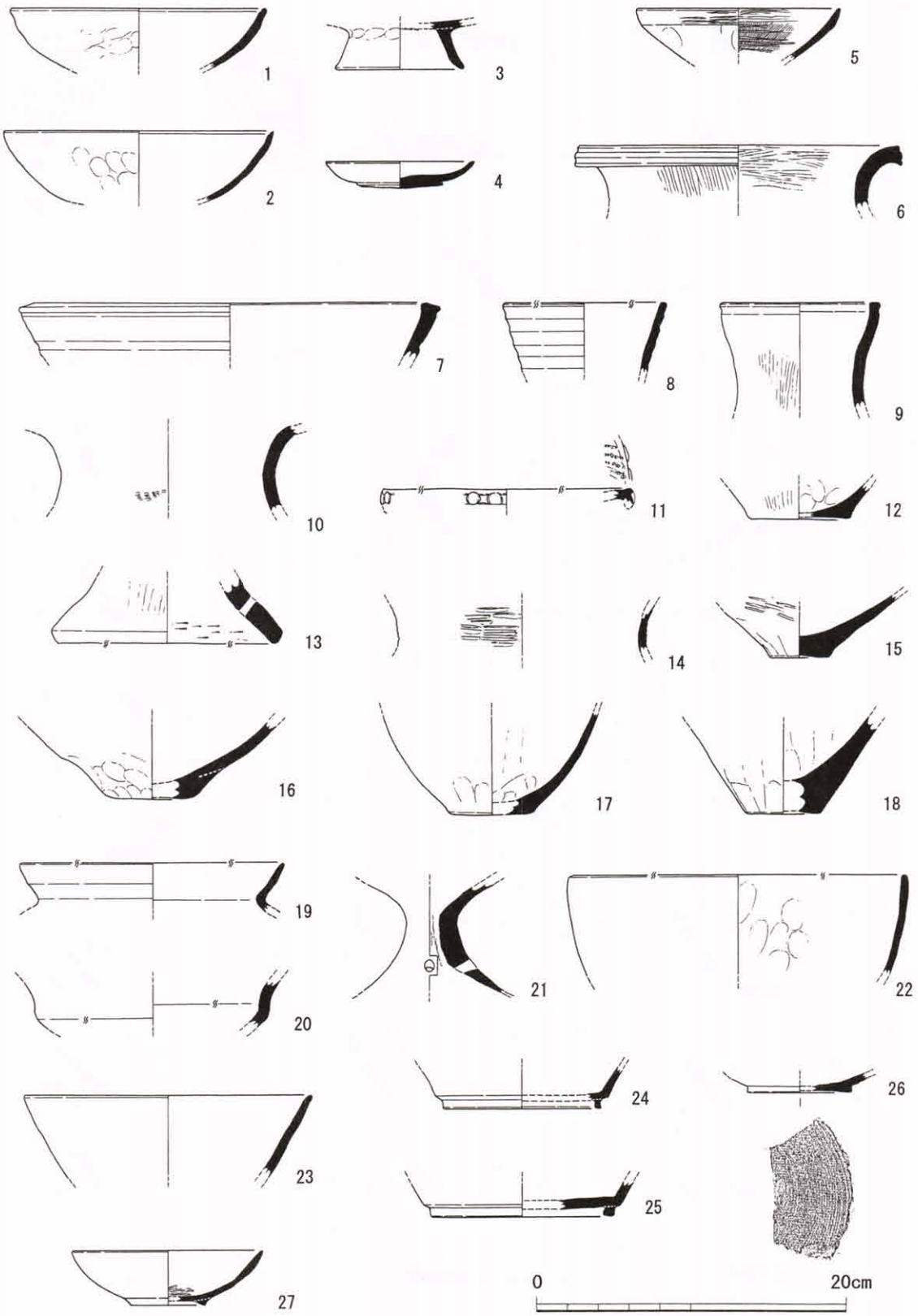
11は、5－2トレンチ南東部で出土した。16は、6－2トレンチで出土した。10・15・18・22は、6－3トレンチで出土した。9・13・14は、6－4トレンチで出土した。12・21は、6－6トレンチ北区で出土した。17は、6－5トレンチ西部で出土した。以上はいずれも包含層もしくは自然地形の落ち込みから出土した。上記以外は、6－5トレンチ土坑からややまとまって出土した。

(稲畑航平)

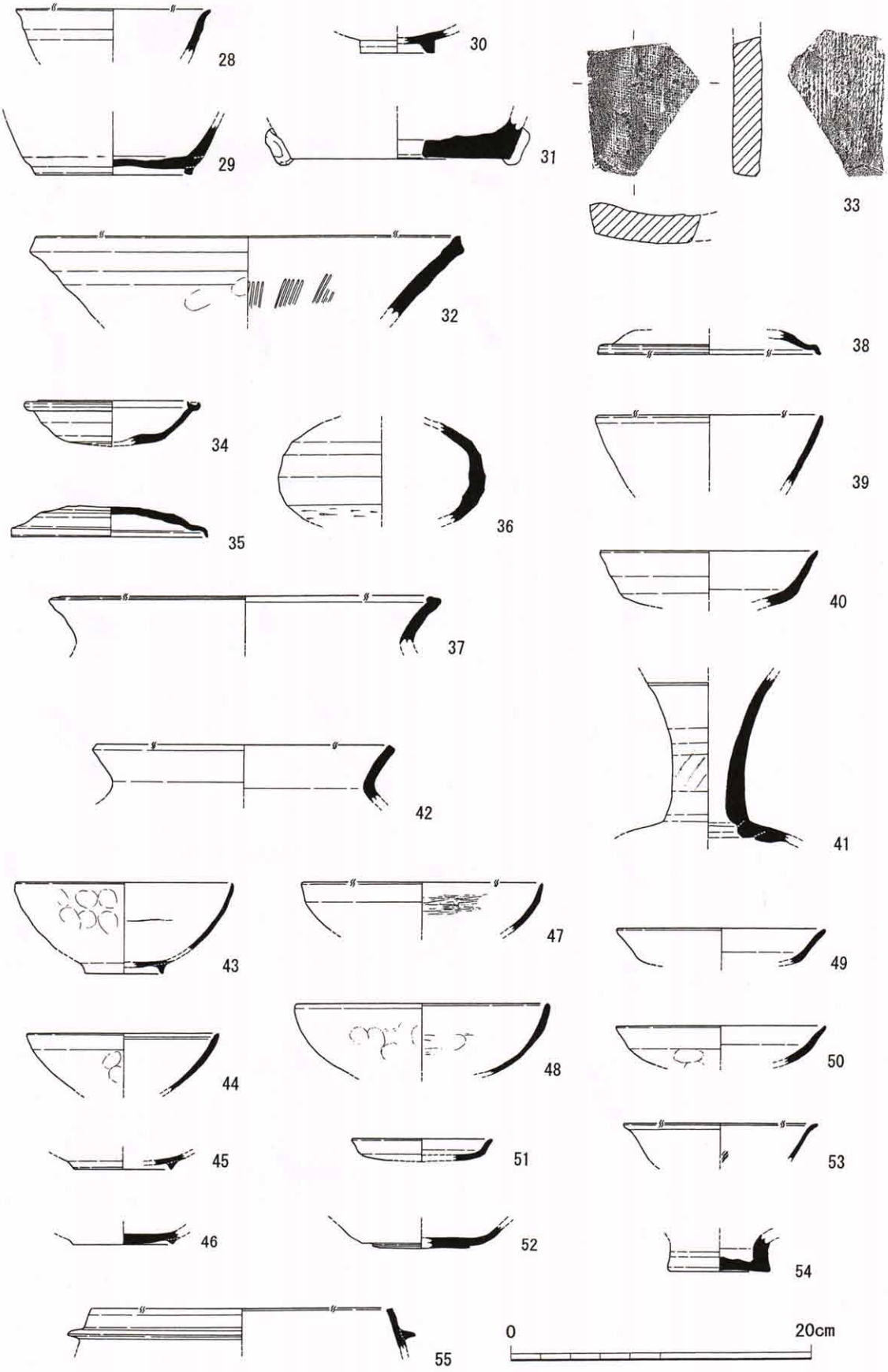
B．弥生時代以降の遺物

1～4は1トレンチ出土の土器である。いずれも包含層出土である。1・2は瓦器椀である。口縁部内面に沈線を施す。3はやや高めの高台を有する土師器杯ないし椀である。4は土師器皿である。底部外面に糸切り痕がみられる。

5は2トレンチ包含層出土の瓦器椀である。器表面が荒れておらず、内面はナデ調整ののち暗文を施す。口径は13.0cm、残存高は3.4cmである。



第128図　出土遺物実測図(弥生時代以降の土器１)



第129図　出土遺物実測図(弥生時代以降の土器２)

6は4－1トレンチの重機掘削中に出土した弥生土器である。口縁部外面に2条の擬凹線を有する広口壺と思われる。頸部外面は縦方向のハケ調整、内面は横方向のハケ調整である。口径は20.6cm、残存高は4.1cmである。

7～13は5－2トレンチの南東部で検出された谷部で出土した弥生土器である。7は有段の広口壺の口縁部である。8・9は水差し形土器の口縁部である。8は外面に凹線文5条を施す。9は頸部が外反した後、口縁部がやや内湾気味に立ち上がる。口縁端部外面に凹線文を1条施す。10は広口壺の頸部である。口縁端部は残存しない。内外面ともヨコナデ調整を施す。11は器台の口縁部と考えられる。口縁端部に円形浮文を貼り付ける。口縁部上面に刺突文を施す。12は底部である。13は器種を特定できないが、厚手の脚部で、直径0.5cmほどの小孔が1個確認できる。11は弥生時代後期、13は時期不明で、他は弥生時代中期の土器と考えられる。

14～27は6トレンチ出土の土器である。14は頸部の破片である。弥生時代中期の土器とは胎土が異なり、縄文土器の可能性もある。15～18は弥生土器の底部である。15～17は6－5トレンチの溝状土坑から出土したもので、15・16は壺の底部、17は鉢の底部であろう。18は6－2トレンチ出土で、壺の底部である。19は口縁部外面に屈曲を有する甕の口縁部である。20は二重口縁状を呈する壺の破片である。口縁端部や頸部は残存しない。21は器台の筒部である。口縁部・脚端部ともに残存しない。透孔は3個確認できるが本来は4方向に穿孔されていたものと考えられる。残存高は7.3cmである。22は口縁部がやや内湾気味の破片で、内外面ともナデ調整である。やや粗雑な胎土で、外面に2次的な焼成痕があることや、形態から製塩土器と考えられる。6－4トレンチ出土である。23は須恵器である。斜め上方に直線的にのびる口縁部を持ち、杯と考えられる。24・25は高台を有する須恵器杯である。26は底部外面に糸切り痕を残す須恵器椀である。27は比較的小型の瓦器椀である。口径は12.2cm、器高は4.8cmである。23～27は6－1トレンチにおいて遺構検出中に出土したものである。

28～33は7トレンチ出土の土器である。いずれも包含層の出土である。28・29は須恵器杯である。29は高台を有し、底径は10.4cmである。30は灰釉陶器椀の底部である。高台は削り出す。31は陶器の鉢である。底部中央に穿孔が認められる。32は須恵質の摺り鉢である。5本一組の摺目が複数確認できる。33は平瓦の破片である。外面に縄目タタキ痕、内面に布目圧痕がみられる。残存長は9.1cm、残存幅は7.4cmである。胎土や焼成などから、国分寺の瓦を焼成した三日市瓦窯で生産されたと考えられる。

34～37は8トレンチ出土の土器である。34は包含層、35～37は溝ＳＤ01出土である。34は受け部を有する須恵器杯である。口径10.0cm、残存高2.9cmである。35はつまみを持たない形式の須恵器蓋である。口径13.0cm、器高2.1cmである。36は須恵器長頸壺の体部と思われる破片である。体部下半に回転ヘラケズリ調整を施す。37は土師器甕の口縁部である。小破片のため、口径はあくまでの推定である。

38・39は9－3トレンチ包含層出土である。38は須恵器蓋、39は須恵器杯である。40・41は9－2トレンチの溝ＳＤ01出土である。40は高台を有さない須恵器杯である。口径14.3cm、残存

高3.7cmである。41は須恵器長頸壺の口縁部から肩部にかけての資料である。内外面とも回転ナデ調整を施す。残存高11.3cmである。42は９－１トレンチで出土した土師器甕の口縁部である。

43～55は12トレンチ出土の土器である。43～48は瓦器椀である。44は、45と同一個体であろう。44は口縁端部内面に沈線を１条めぐらすが、43・47・48にはみられない。49・50は土師器の杯である。51は土師器の皿である。52は土師器の杯または椀と考えられる。底部外面に糸切り痕がみられる。53は白磁椀である。小破片のため口径は推定である。色調は灰白色を呈する。54は土師器杯または椀の底部である。底部外面に糸切り痕がみられる。55は土師器の羽釜である。

（筒井崇史）

４．まとめ

概述したように、今回の調査では、遺構は全体として希薄であるが、遺物は各トレンチで出土することから、全域で何らかの土地利用がなされていたと考えられる。その後の田畑の造作や土石流のために遺構が消失したものと推定される。これは各トレンチで部分的に旧地形が検出されたことからも推測される。

特に６トレンチ周辺では、包含層や風倒木痕から多くの縄文土器や弥生土器が出土した。これらの埋土は、黒ボクの再堆積層である。６トレンチの南側や東側には、丘陵が急激に高くなっていく地形であることから、今回の調査地の南東側に縄文時代や弥生時代の集落が存在している可能性が高いと思われる。

また、調査対象地東半の８・９トレンチでは、北辺に沿って飛鳥時代の溝を総長55mにわたって検出した。ほぼ直線的に掘削されているが、その性格は不明である。９－２トレンチの南辺部や、南側の12トレンチでも柱穴を検出していることから、本来は柱穴が８・９トレンチの全域に分布していたのが、後世の削平や11トレンチで認められたような土石流によって削平してしまったものと判断される。そして、深く掘削された溝や、削平を受けなかった小さな範囲にのみ、遺構が残存したと考えられる。出土遺物から、８～12トレンチ周辺には、飛鳥時代を中心とする遺構群と平安時代後期頃の集落が分布していたと考えられる。

特に12トレンチの南側は、南・東方面に向けて丘陵が高くなっていく地形を呈するので、今回の調査地の南側には、平安時代後期頃の集落が良好に残存している可能性が高いと考えられる。

従来、三日市遺跡は縄文土器が採取される遺跡として著名であったが、今回の調査で、丘陵先端部の南東側に縄文時代および弥生時代集落の存在が想定できる結果を得た。また、調査地東半では、飛鳥時代から平安時代後期にかけての集落が広がっていることが明らかとなった。ともに、亀岡市東北部の丘陵上の開発を知る上で重要な手がかりとなるものである。周辺地域のさらなる発掘調査が期待される。

（岩松　保）

注１　「西京都園部送電線工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」（『亀岡市文化財調査報告書』第36集　亀岡市教育委員会）　1994

注２　「市内遺跡発掘調査報告書」(『亀岡市文化財調査報告書』第55集　亀岡市教育委員会)　1999

注３　藤井　整「３　国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成15年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会)　2004

藤井　整「３　国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成15・16年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査報告書』京都府教育委員会)　2006

注４　藤井　整「３　国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成15年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会)　2004

藤井　整「３　国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成15・16年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査報告書』京都府教育委員会)　2006

注５　「時塚古墳・時塚遺跡(第６次)」(京埋セ現地説明会資料No04－05　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)平成16.8.21(土)

福島孝行他「時塚古墳・時塚遺跡第６次の発掘調査」(『京都府埋蔵文化財情報』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　2004

注６　藤井　整「３　国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成15・16年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査報告書』京都府教育委員会)　2006

藤井　整「３　国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成15・16年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査報告書』京都府教育委員会)　2006

注７　「時塚遺跡第10次・池尻遺跡第７次(Ｆ地区)」(京埋セ現地説明会資料No05－05　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)平成17.２.27(日)　　池尻遺跡第７次(Ｆ地区)は、時塚遺跡Ｊ地区に改変

注８　藤井　整「３　国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成15・16年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査報告書』京都府教育委員会)　2006

注９　「亀岡市時塚遺跡第15次」(京埋セ現地説明会資料No07－02　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　平成19.１.27(土)

注10　注４に同じ

注11　上人ケ平５号墳では墳丘第１段テラスを埴輪列の前面まで削って平坦面を造り、周溝外周の埴輪列の位置までこの面を拡張して周溝を広げている。この周溝の拡張された部分には水簸によって堆積したとされる白色の粘土が堆積していた。時塚１号墳の周溝の中層にも礫を含まない黒ボク土の層が存在する。黒ボクの再堆積土が土器の材料になり得ることは案察使遺跡での粘土採掘坑とその後の焼成実験で明らかとなっている。上人ケ平遺跡では工房で瓦を作成するため、粘土を５号墳の周溝で水簸したといわれている。そして隣接する市坂瓦窯で焼成されて、完成品は平城京へ運ばれた。時塚古墳群も奈良時代中期創建の丹波国分寺に創建瓦を供給した三日市瓦窯の隣接地である。車塚遺跡の官衙的建物群が三日市瓦窯に関するものだとする推測が的を得ているとすれば、時塚古墳群も三日市瓦窯の工房群の一角を占めていたのかもしれない。

注12　試掘調査で出土した埴輪については、本調査で出土した埴輪と接合関係にあることから、試掘調査出土埴輪も含めて、埴輪の整理作業はすべて当調査研究センターが行った。

注13　(財)元興寺文化財研究所塚本敏夫氏のご教示による。

注14　実測作業を委託したのは次のとおりである(１・２・３・19・55・56・57・58・75・76・80・81・82・85・89・90(番号は掲載番号))。その他のものについてはＸ線写真撮影を実施しておらず、現況での肉眼観察により実測図を作成している。

注15　鉄製ｆ字形鏡板付轡の各部分名称や、計測値については中條英樹「鉄製ｆ字形鏡板付轡の編年とそ

の性格」(『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集　2003年)に準じた。また、氏には現地にて遺物について様々な点でご教示を得た。

注16　調査抄報である「時塚古墳・時塚遺跡第６次の発掘調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第94号　当調査研究センター　2004)では、大刀形埴輪が報告されているが、整理作業の結果、必ずしも大刀形埴輪であるという確証が得られなかった。その可能性は残るものの、ここでは不明形象埴輪として報告する。

注17　市毛勲「人物埴輪顔面のヘラガキについて」(『考古学雑誌』第77巻第４号　日本考古学会)　1992

注18　川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』第64巻第２号　日本考古学会)　1978

注19　一瀬和夫「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」(『大水川改修にともなう発掘調査概要Ⅴ』　大阪府教育委員会)　1988

注20　奈良県立橿原考古学研究所他編『大古墳展』(東京新聞)　2000

注21　田中秀和「畿内における盾形埴輪の検討」(『大阪市文化財論集』　(財)大阪市文化財協会)　1994

注22　これは、亡き首長の眠る古墳の守護に当たり、悪霊が古墳に接近するのを察知し、あるいは追い返すためと考えられている。

注23　辰巳和弘氏のご教示による。

注24　上田睦「古墳時代中期における円筒埴輪の研究動向と編年」(『埴輪論叢』第５号　埴輪検討会)　2003

注25　若松良一「人物埴輪」(『古墳時代の研究　第９巻　古墳Ⅲ　埴輪』　雄山閣)　1992

注26　高橋克壽「器財埴輪の編年と古墳祭祀」(『史林』第71巻第２号)　1988

注27　「市内遺跡発掘調査報告書」(『亀岡市文化財調査報告書』第75集　亀岡市教育委員会)　2007

注28　亀岡市史編さん委員会『新修　亀岡市史』資料編第１巻　亀岡市　2000

〈調査参加者〉　(順不同・敬称略)

平成15・16年度

調査補助員　天池佐栄子・山岡匠平・奥　浩和・村上奈弥・村上計太・井上　亮・田村和成・北森さやか・草彅大蔵・武田雄志・田中洸太朗・平井耕平・松本景太・大道真由美・井上　優・青石達哉・畑　和弘・中津　梓・坂内裕志・石井健太・谷　秀平・吉村真美・吉田　翔・野口昌弘・中村　智・関　正樹・中村　領・安井容子・竹内律輝・杉崎哲郎・山田智子・豊田洋貴・田部直樹・塩田将人・橋本翔太・浅井達也・石井太基・津野義人・笠原直哉・戸塚悟史・野崎文人・藤本卓司・雪本敬人・宇野隼人・岡本寛明・藤田広海・澤　鮎美・的場明日香・阿部絵理子・鷲見素直・米山紗矢香・中川祐輔・竹中慎詞・田邊義高・竹内慎也

整理員　山本弥生・荻野冨紗子・丸谷はま子・西村香代子・松下道子・山中道代・内藤チエ・森川敦子・高田真由美・関口睦美・藤井矢寿子・柿谷悦子・松本順代・清水友佳子・春日満子・兵頭真千・中川香代子・阪口美智代・俣野明子・堤　百合美・中川由美子

作業員　西田千代和・村上福治・脇上トシ子・岩本勝美・田中千代子・松本栄子・大西啓之・桂　孝子・山本君代・関口澄子・岡本ユカ・石本　昇・茨木吉光・黒田武夫・牧澤文夫・森山兼夫・石本和江・桂　邦夫・八木浩二・清水満里子・沼田みさを・小幡一幸・川本みち子・岸　敬子・岸　昇・平井武夫・岸　妙子・林田洋子・茨木節子・関　徹・藤木建直・関あさ江・水谷敏夫・中西秋江・森山きよ子・近

藤正裕・寺町為三・小泉正男・中村幸二・安藤美智子・杉崎征夫・八木まゆみ・橋本幸子・畑　弥生・堤和代・才津鈴美・畑　信弘・北村　博・澤田秀子・中澤まゆみ・福島智香・堤　明裕・楠本小夜子・堤清子・中澤耕一・中澤義巳・中沢晴美・中澤一義・川村　勇・堤　富男・中野美代子・奥田　宏・畑　きく恵・堤　洋一・大西勝治・堤　富子・森江津子・平岩敬子・中川しづゑ・中澤多美・中川正之・人見正毅・中島千恵子・堤　純子・林　節子・中川慶弘・竹田晴美・広瀬宗吾・杉崎　勉・山田　優・平野かすみ・亀谷憲二・杉崎　貢・岩本滝雄・堤　達也・堤　操・中澤次雄・岩田　守・小川益次郎・堤　務・河原　博・名倉艶子・伊豆田進・堤　翼・筑前明子・上田伊佐男・飯田久美子・畑　和樹・名倉清司・畑純子・堤　真凡・鈴木眞佐子・堤　末夫・中沢好子・堤　智恵子・中野和子・堤　明・名倉達雄・中川一成・川村敏雄・中澤紀男・中川恵美子・林　八郎・人見茂美・中川　坦・小松とみ子・埜々下英美利・浅田昌子・中川将俊・浅田信仁・浅田圭二・野々村桂・村上英子・俣野明美・名倉正子・浅田マサ子・川村フクエ・人見美子・畑　貢・畑　八重子・堤　廣子・中川章代・堀口慶子・林　昭子・杉崎　稔・興津嘉子・中澤大介・酒井勝美・松本憲明・西口則幸・田中嘉男・中澤康夫

図　　版

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第１

時塚遺跡第６・８・10次

(1) Ａ地区全景(北東から)

(2) ＡＳＨ170・168、ＡＳＢ310全景(上空から、右が北)

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第２

時塚遺跡第６・８・10次

(1) C地区全景(東から)

(2) D地区全景(上空から、右が北)

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第３

時塚遺跡第６・８・10次

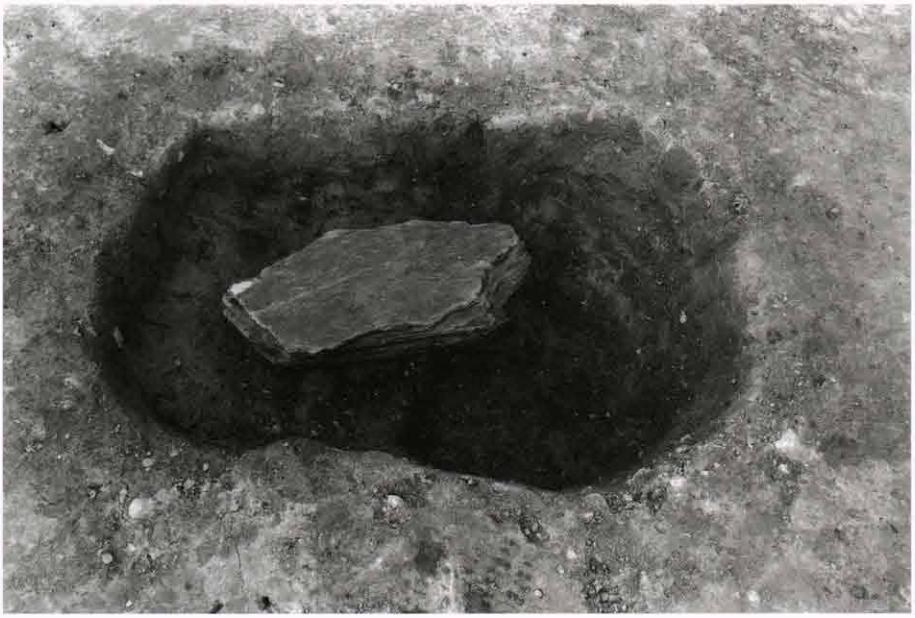
(1) G地区全景(上空から、下が北)

(2) H地区全景(上空から、上が北)

(3) I地区全景(上空から、上が北)

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第４

時塚遺跡第６・８・10次



(1)土坑ＡＳＫ344近景(南西から)

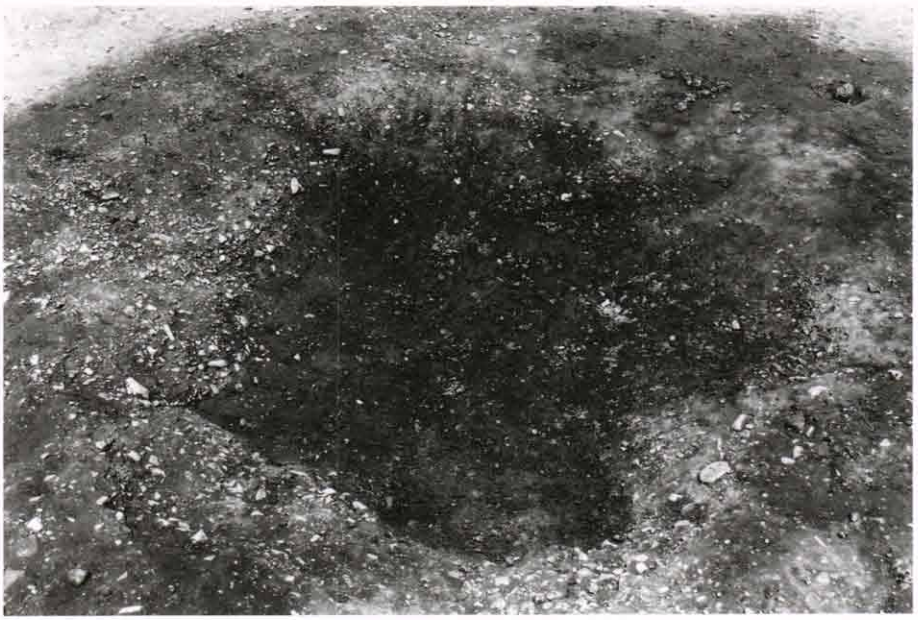
(2)竪穴式住居跡ＡＳＨ170・168
全景(北から)

(3)竪穴式住居跡ＡＳＨ170
中央土坑近景(北から)

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第５

時塚遺跡第６・８・10次

(1)土坑ＡＳＫ056近景(南東から)



(2)土坑ＡＳＫ056全景(南から)

(3)土坑ＡＳＫ019近景(南から)

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第６

時塚遺跡第６・８・10次

(1)土坑ＡＳＫ019石器出土状況（南から）

(2)柱穴ＡＳＰ244石器出土状況（南から）

(3)土坑ＡＳＫ043近景(北東から)

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第７

時塚遺跡第６・８・10次

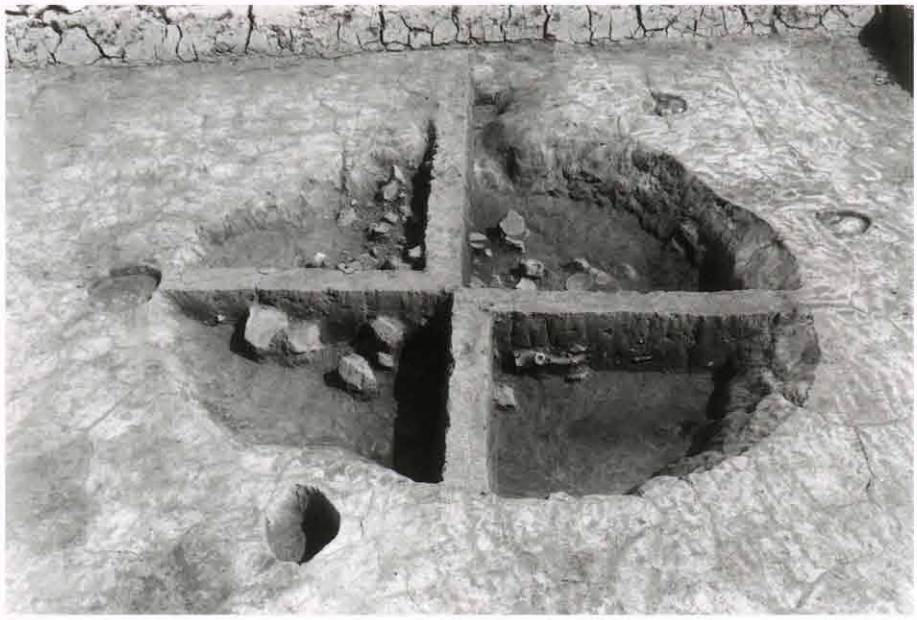
(1)Ｃ－２トレンチ遺構検出状況
（北から）

(2)柵列ＣＳＡ016・井戸ＣＳＥ
042・土坑ＣＳＫ001近景
（北西から）

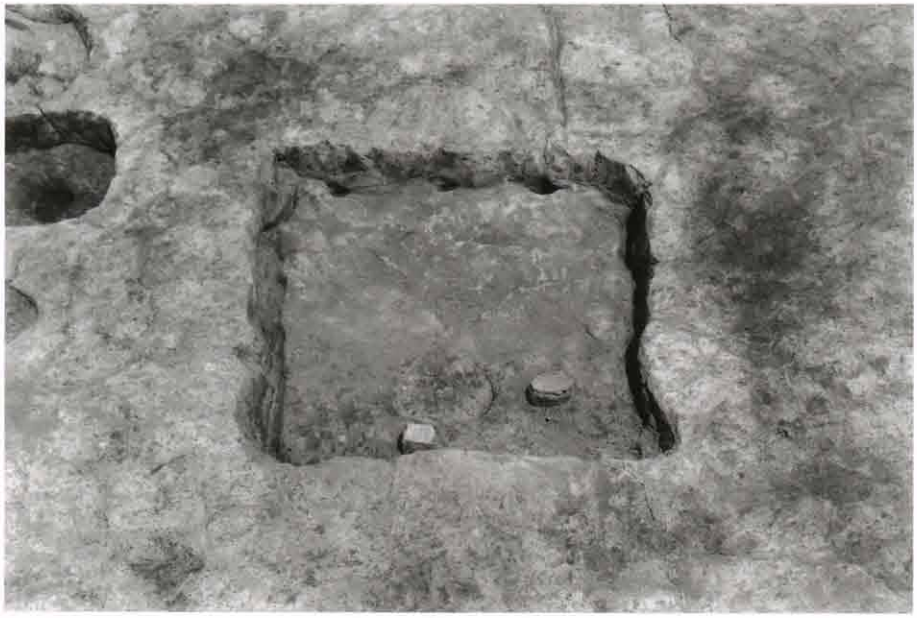
(3)柵列ＣＳＡ025近景（北東から）

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第８

時塚遺跡第６・８・10次



(1)井戸ＣＳＥ042遺物出土状況（南から）

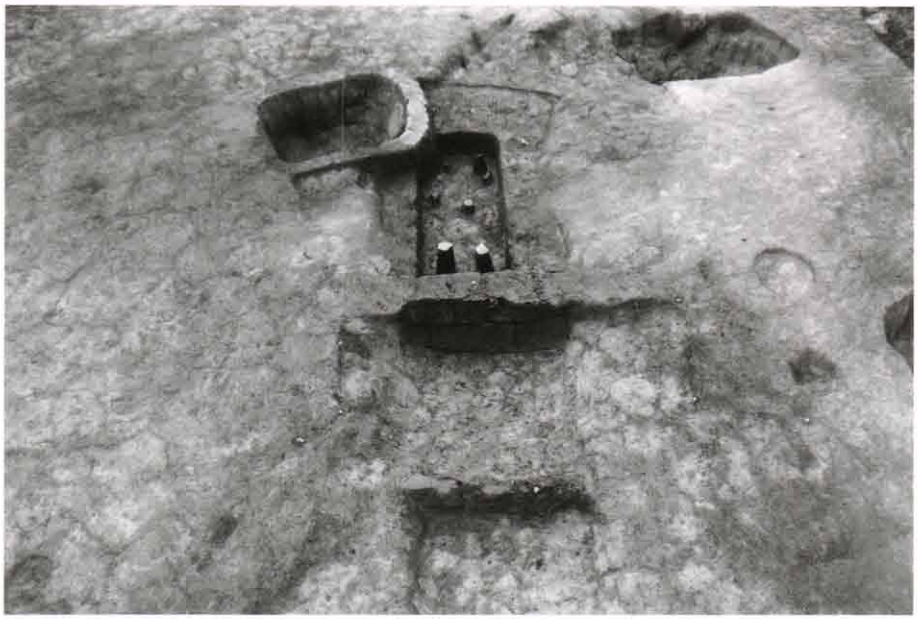


(2)土坑ＣＳＫ001近景(南から)

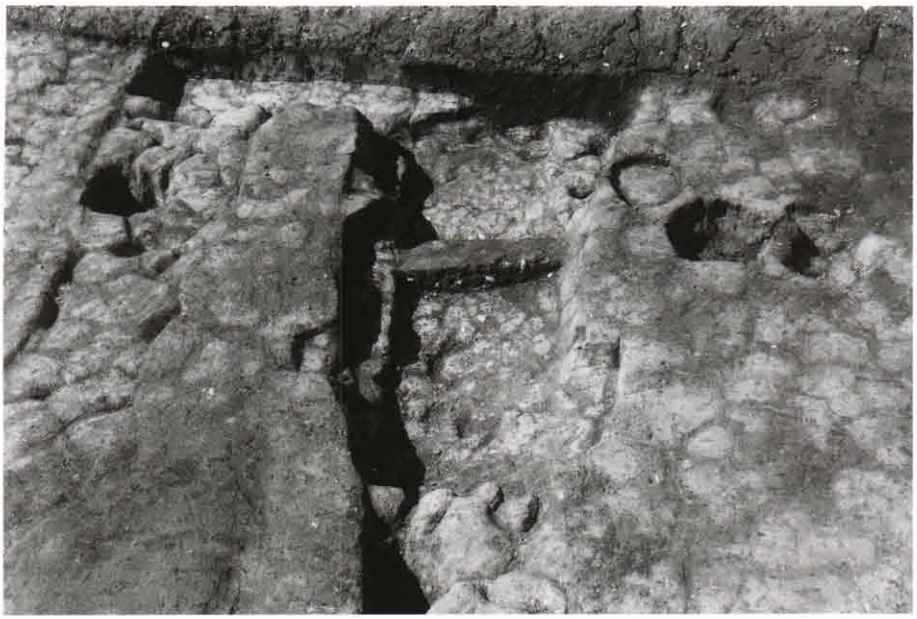
(3)柱穴ＣＳＰ044近景(北東から)

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第９

時塚遺跡第６・８・10次



(1)溝内埋葬ＣＳＫ089近景
（北から）



(2)溝内埋葬ＣＳＫ070近景
（南から）

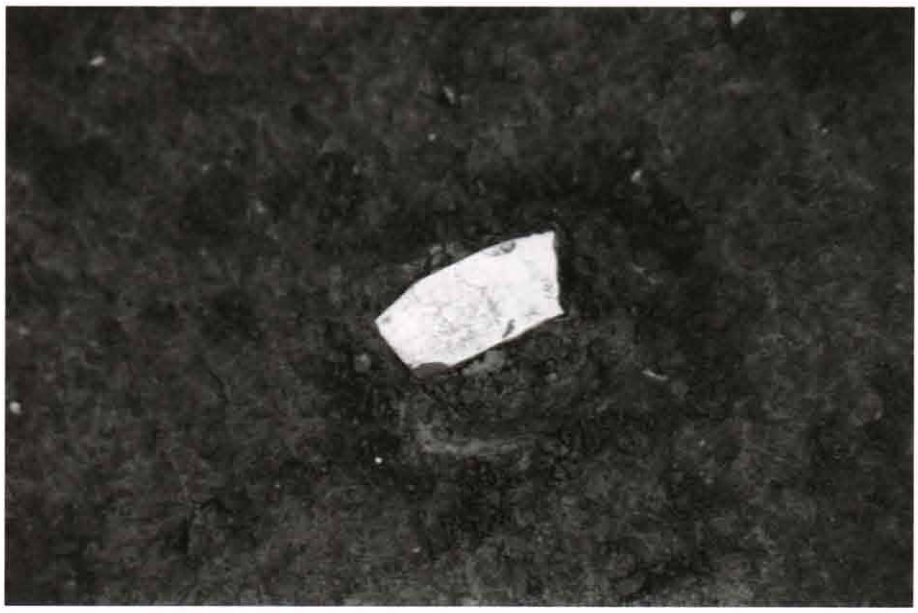
(3)方形周溝墓ＣＳＴ081
ＣＳＤ092近景（北東から）

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第10

時塚遺跡第６・８・10次

(1)方形周溝墓ＣＳＴ081
ＣＳＤ081近景(南東から)

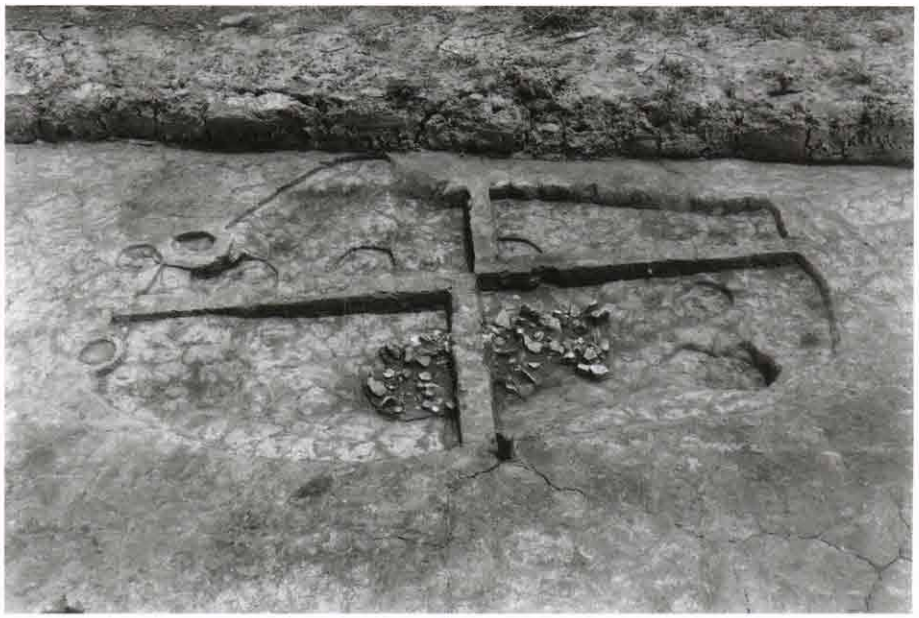
(2)方形周溝墓ＣＳＴ069
ＣＳＤ072近景(北東から)



(3)方形周溝墓ＣＳＴ081
ＣＳＤ081内遺物出土状況
(南から)

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第11

時塚遺跡第６・８・10次



(1)土坑ＣＳＫ043近景(南西から)

(2)土坑ＣＳＫ082近景(北西から)

(3)土坑ＣＳＫ082遺物出土状況
(南西から)

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第12

時塚遺跡第６・８・10次

(1)Ｄ地区北側全景(南から)

(2)周溝ＤＳＤ500付近近景(北西から)

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第13

時塚遺跡第６・８・10次

(1)Ｄ地区遺構検出状況(北から)

(2)周溝ＤＳＤ500遺物出土状況
(北西から)

(3)土坑ＤＳＫ243近景(北から)

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第14

時塚遺跡第６・８・10次

(1) Ｇ－２トレンチ南部全景
（東から）

(2) Ｇ－２トレンチ北部全景、掘立柱建物跡ＧＳＢ370検出状況
（南から）

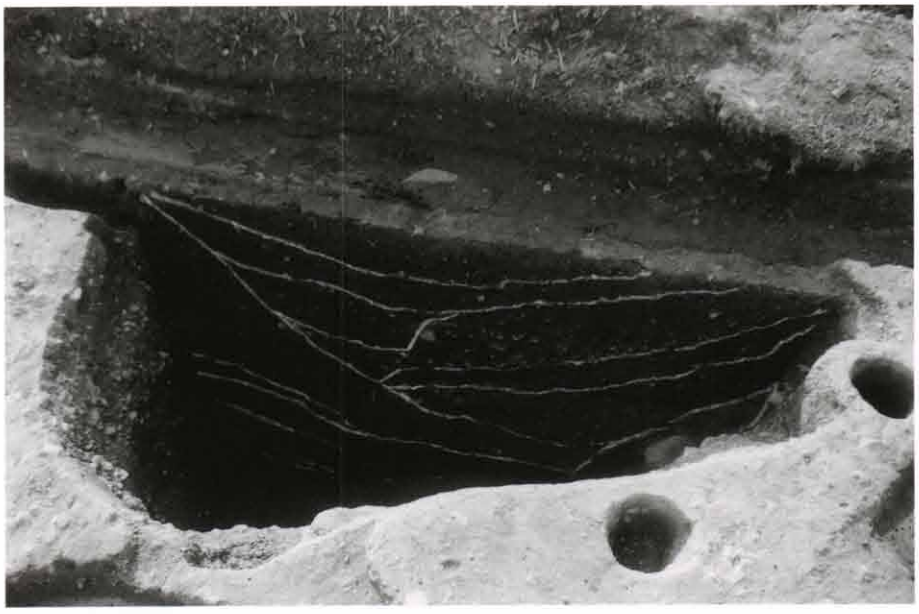
(3) 土坑ＧＳＫ965近景（北から）

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第15

時塚遺跡第６・８・10次

(1)土坑ＧＳＫ367近景(南から)

(2)井戸ＧＳＥ947近景(南から)



(3)井戸ＧＳＥ492堆積状況
(北東から)

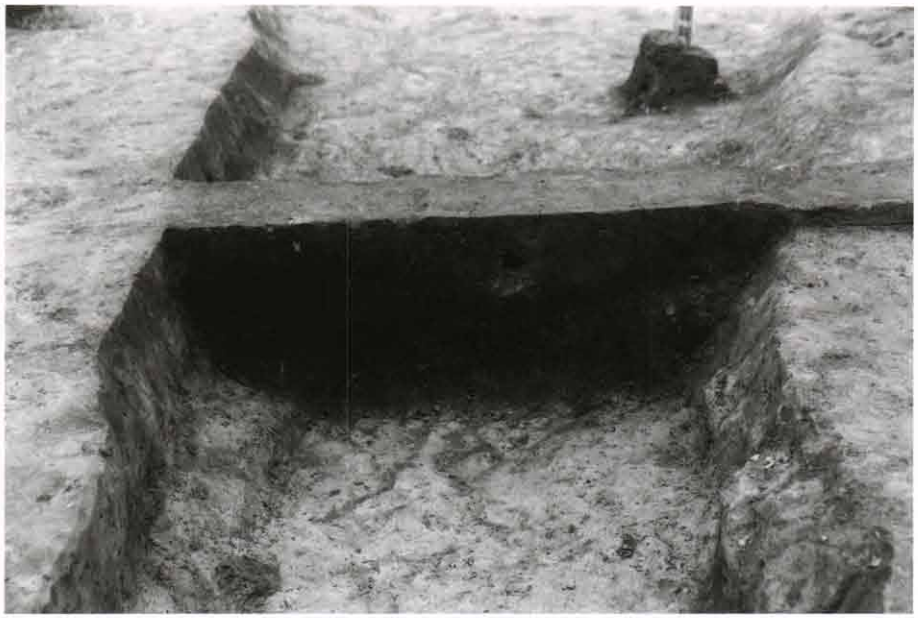
時塚遺跡第６・８・10次

(1) Ｈ地区全景(南から)

(2) 方形周溝墓ＨＳＴ002・003検出状況(南東から)

(3) 方形周溝墓ＨＳＴ003 ＨＳＤ003遺物出土状況(南から)

時塚遺跡第６・８・10次



(1)方形周溝墓ＨＳＴ003
ＨＳＤ003堆積状況(南から)

(2)方形周溝墓ＨＳＴ017
ＨＳＤ017堆積状況(東から)

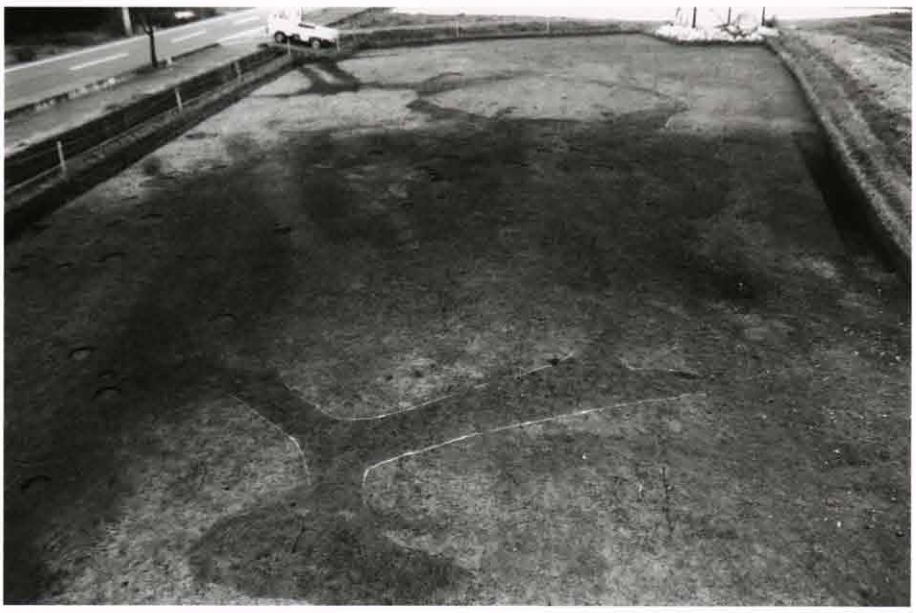
(3)方形周溝墓ＨＳＴ015
ＨＳＤ016堆積状況(南から)

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第18

時塚遺跡第６・８・10次

(1) Ｉ地区掘削土置き場遺構検出状況(南東から)

(2) Ｉ－１トレンチ全景(北東から)



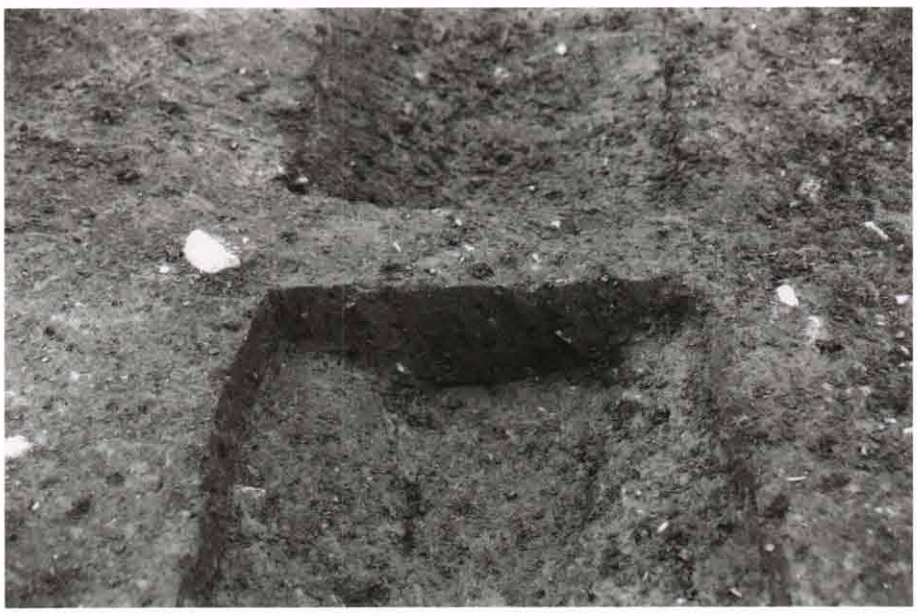
(3) Ｉ－２トレンチ全景(北から)

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第19

時塚遺跡第６・８・10次

(1)方形周溝墓ＩＳＴ043・112
近景(西から)

(2)方形周溝墓ＩＳＴ127
ＩＳＤ128堆積状況(南から)



(3)方形周溝墓ＩＳＴ039
ＩＳＤ126堆積状況(北から)

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第20

時塚遺跡第６・８・10次

(1)掘立柱建物跡ＩＳＢ041近景
（北西から）

(2)焼土坑ＩＳＫ037近景(南から)

(3)時塚遺跡西側の段丘近景
（北から）

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第21

時塚遺跡第６・８・10次

11-1

33-18

33-12

33-17

33-13

33-21

35-53

33-19

33-20

出土遺物（縄文土器、弥生土器）　挿図番号－遺物番号

35-47

32-5

32-9

36-65

33-31

32-3

37-80

出土遺物（弥生土器）　挿図番号－遺物番号

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第23

時塚遺跡第６・８・10次

34-39

34-37

34-41

34-36

34-40

34-35

34-43

34-32

ASK056

34-42

出土遺物（弥生土器）　挿図番号－遺物番号

38-87

39-94

DSK250

DSK250

37-71

37-75

39-99

39-98

38-88

38-93

出土遺物(弥生土器)　挿図番号－遺物番号

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第25

時塚遺跡第６・８・10次

37-76

37-73

36-67

CSK043

35-52

37-70

35-57

37-72

35-55

出土遺物(弥生土器)　挿図番号－遺物番号

42-137

41-126

41-122

GSP967

40-116

40-115

40-114

40-110

40-111

41-133

出土遺物(弥生土器)　挿図番号－遺物番号

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第27

時塚遺跡第６・８・10次

63-18

63-19

63-20

63-39

63-28

63-35

63-33

63-30

63-22

63-23

63-24

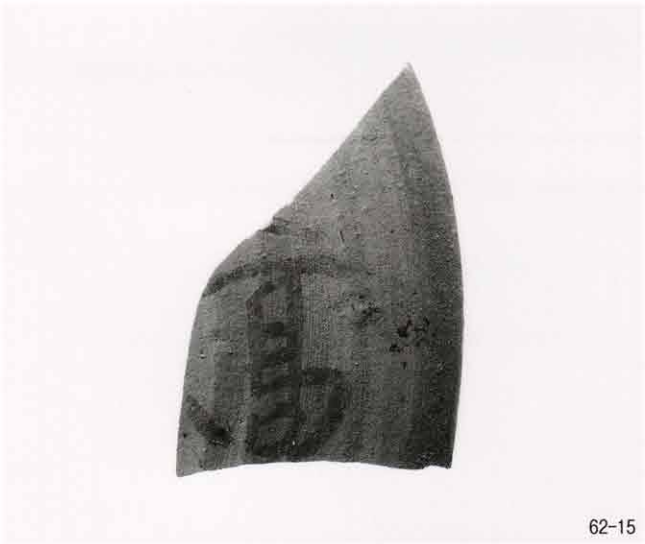
63-25

63-31

63-40

62-14

出土遺物(須恵器)　挿図番号－遺物番号


62-15

66-15

62-16

62-13

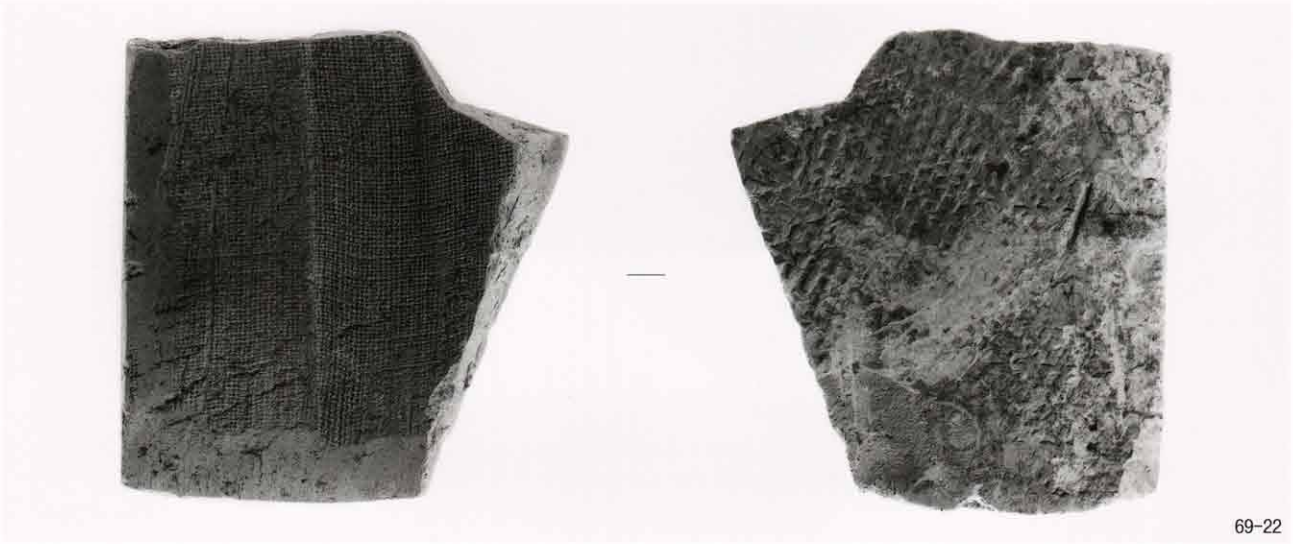
66-8

66-5

(1)出土遺物(墨書土器、緑釉陶器、瓦器、須恵器、土師器)　挿図番号－遺物番号

包含層

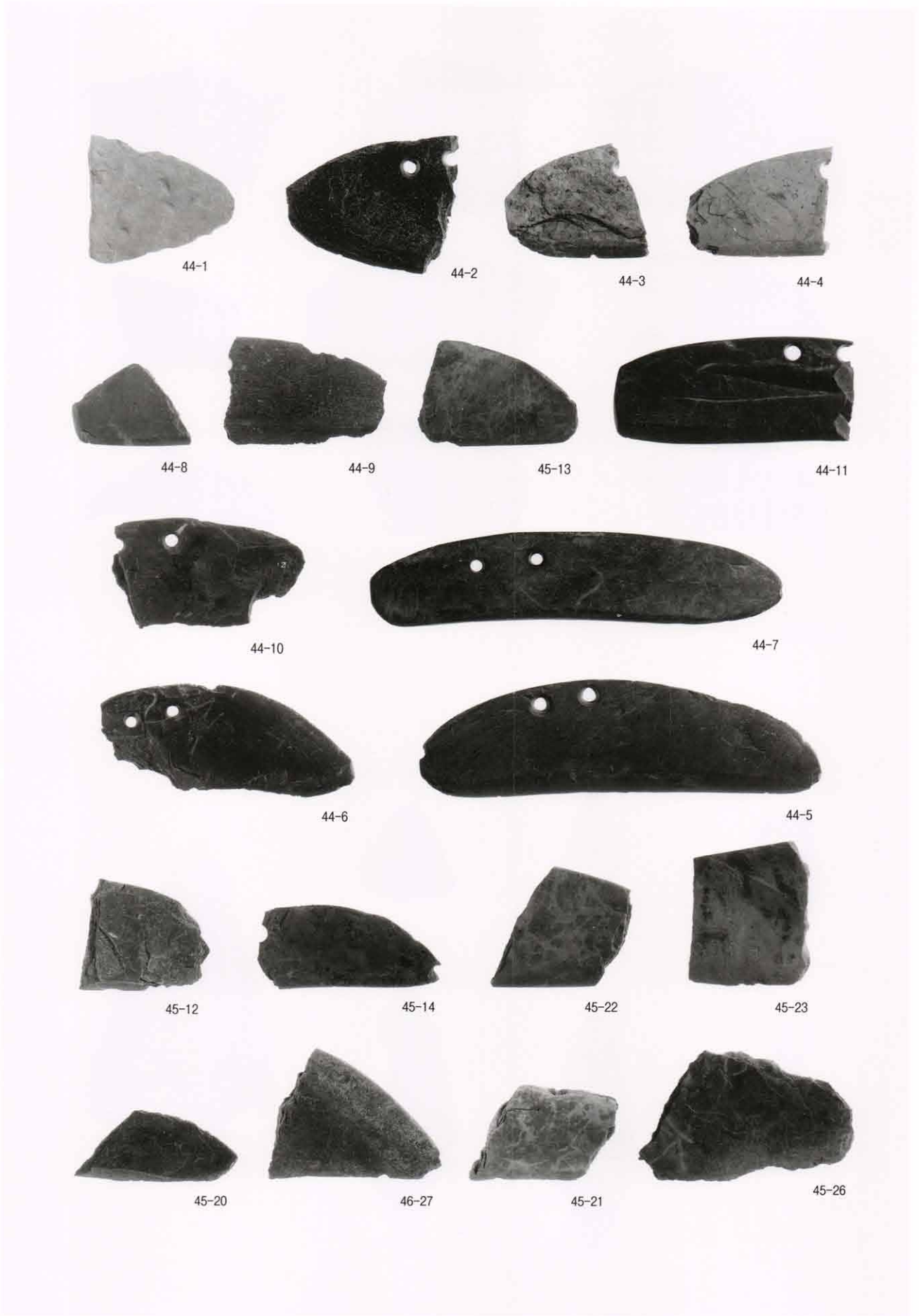
69-1


69-22

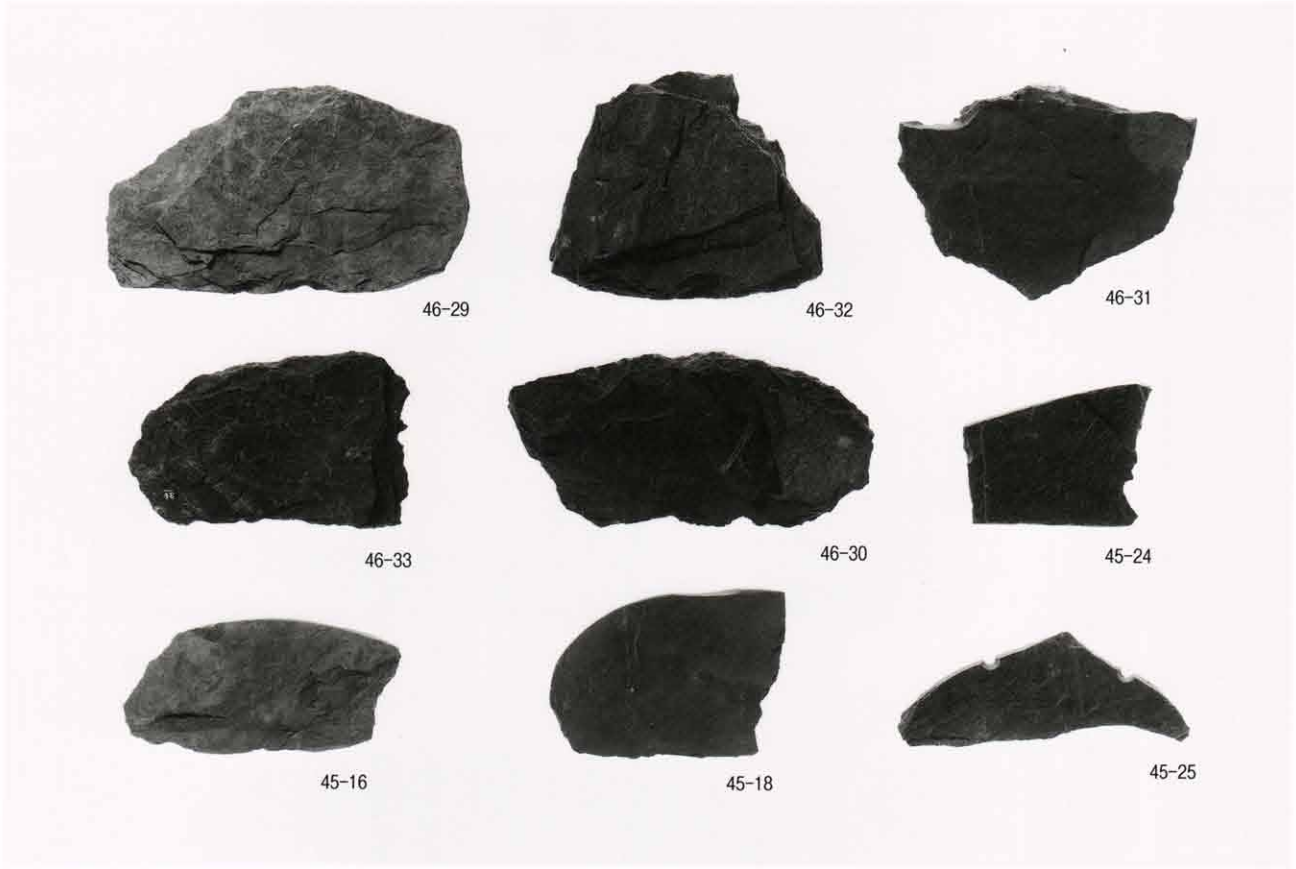
(2)出土遺物(弥生土器、瓦)　挿図番号－遺物番号

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第29

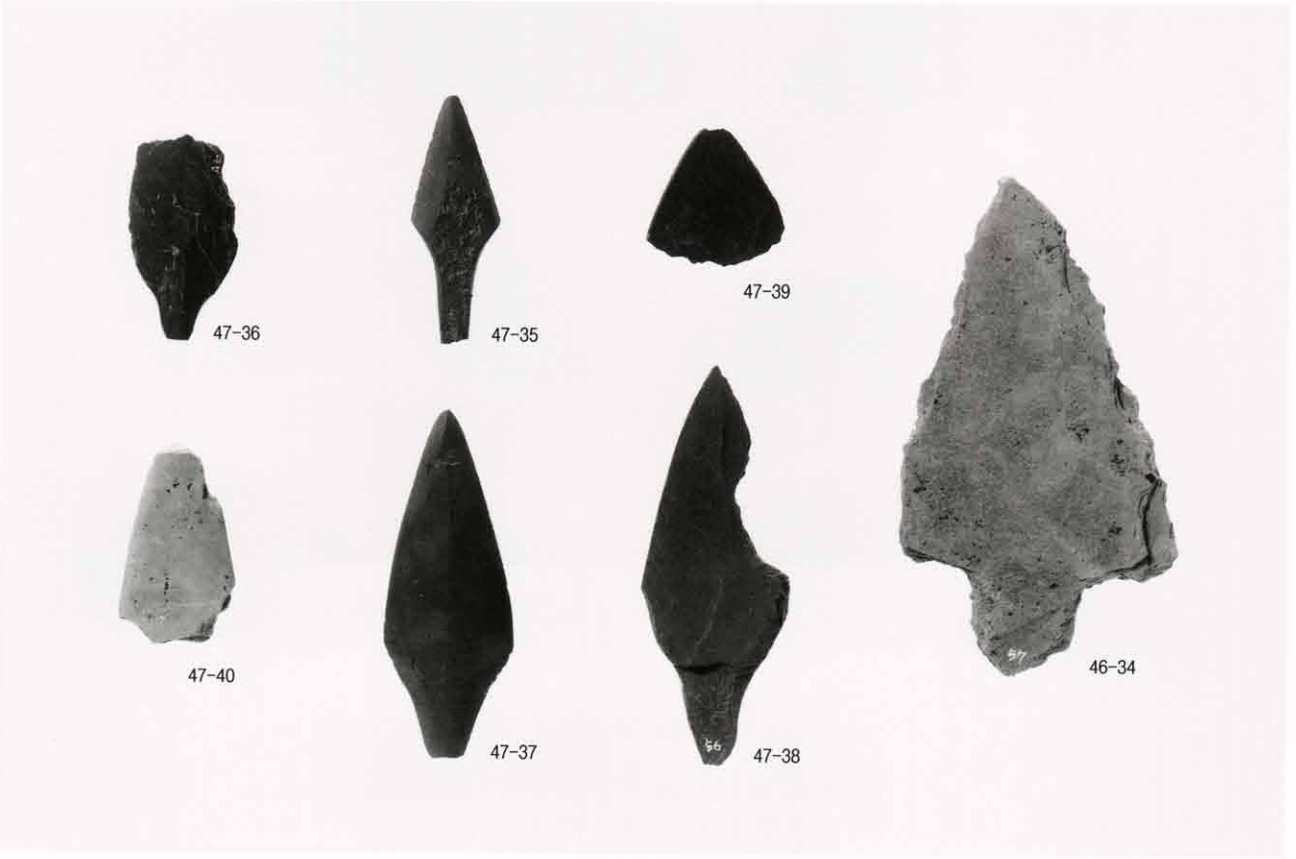
時塚遺跡第６・８・10次



出土遺物(磨製石器類)　挿図番号－遺物番号



(1)出土遺物(磨製石器類)　挿図番号－遺物番号

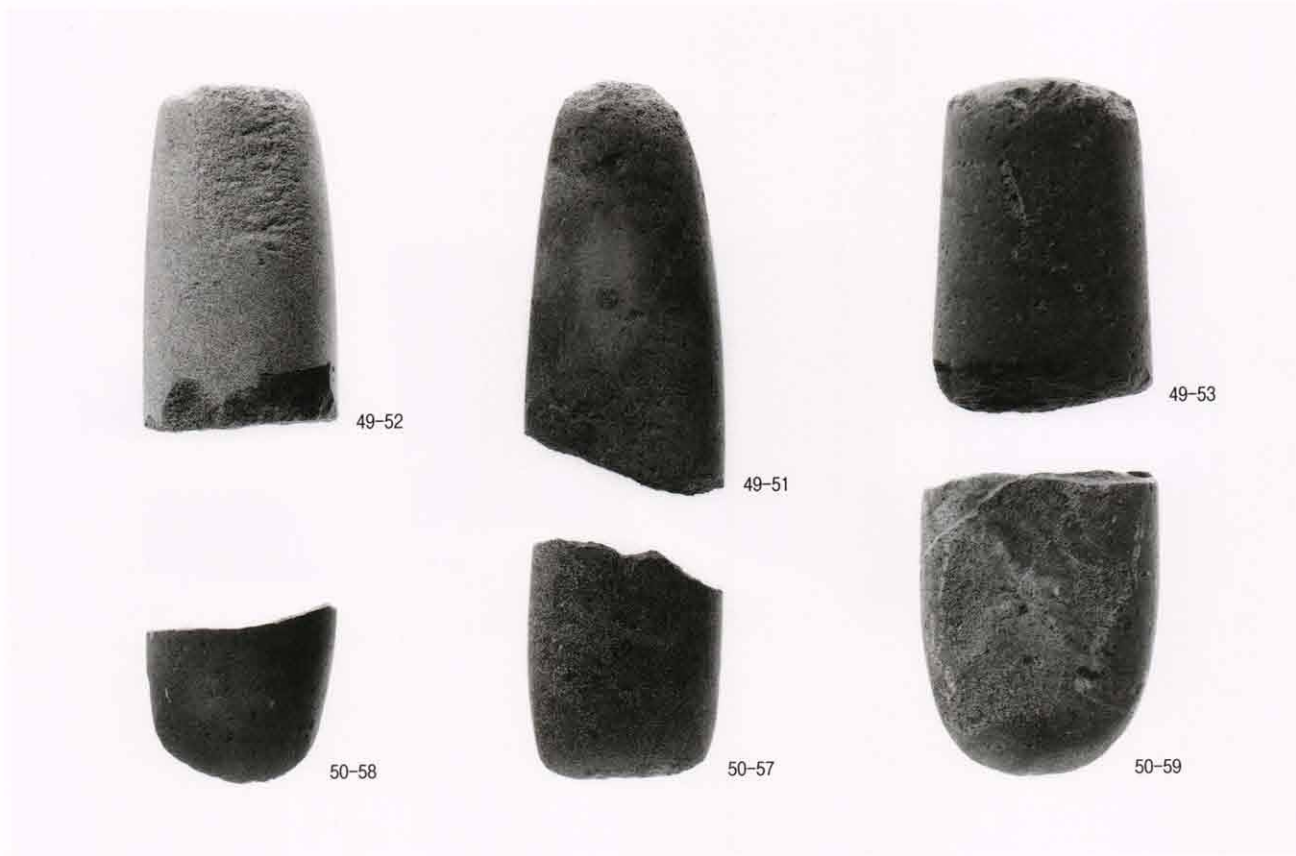


(2)出土遺物(磨製石器類)　挿図番号－遺物番号

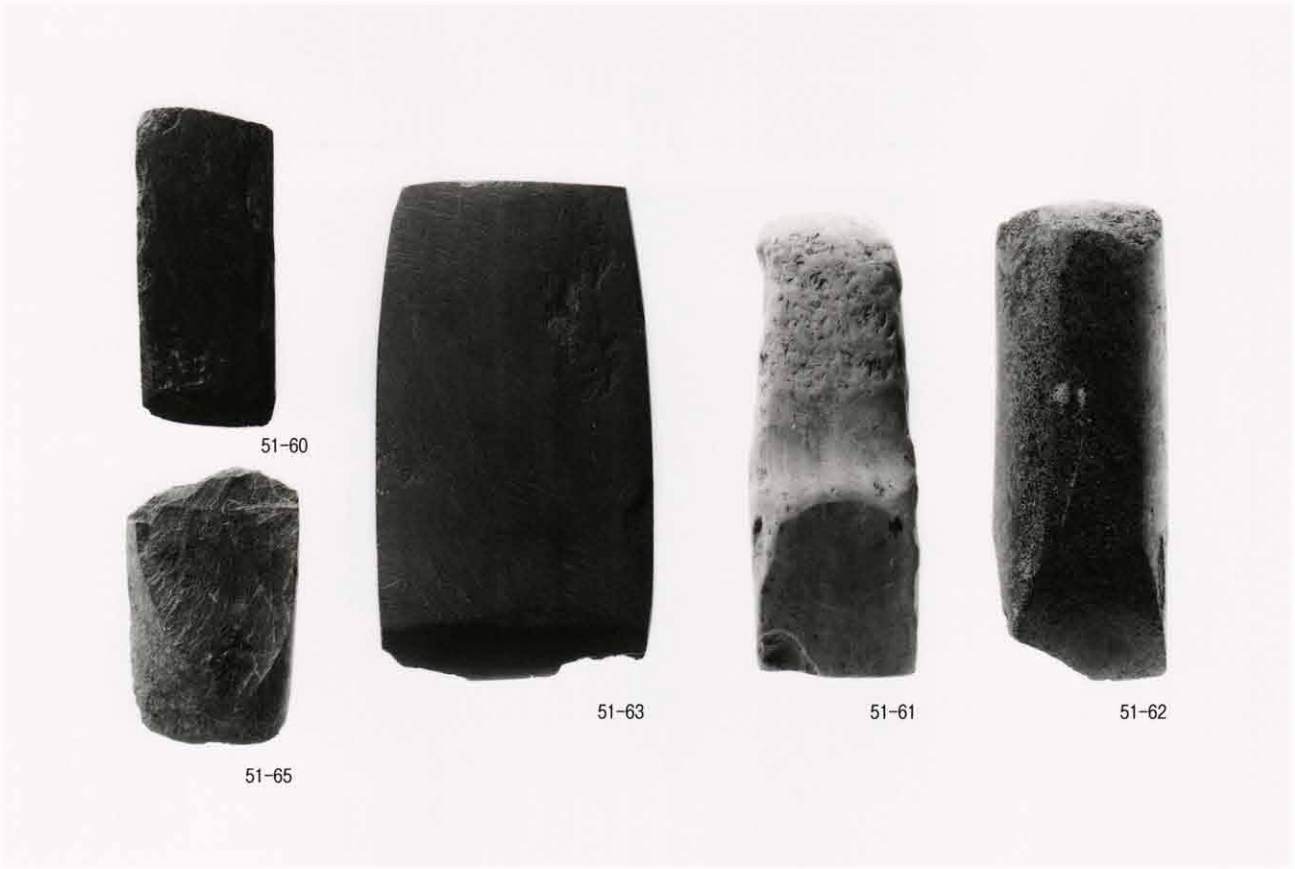
国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第31

時塚遺跡第６・８・10次

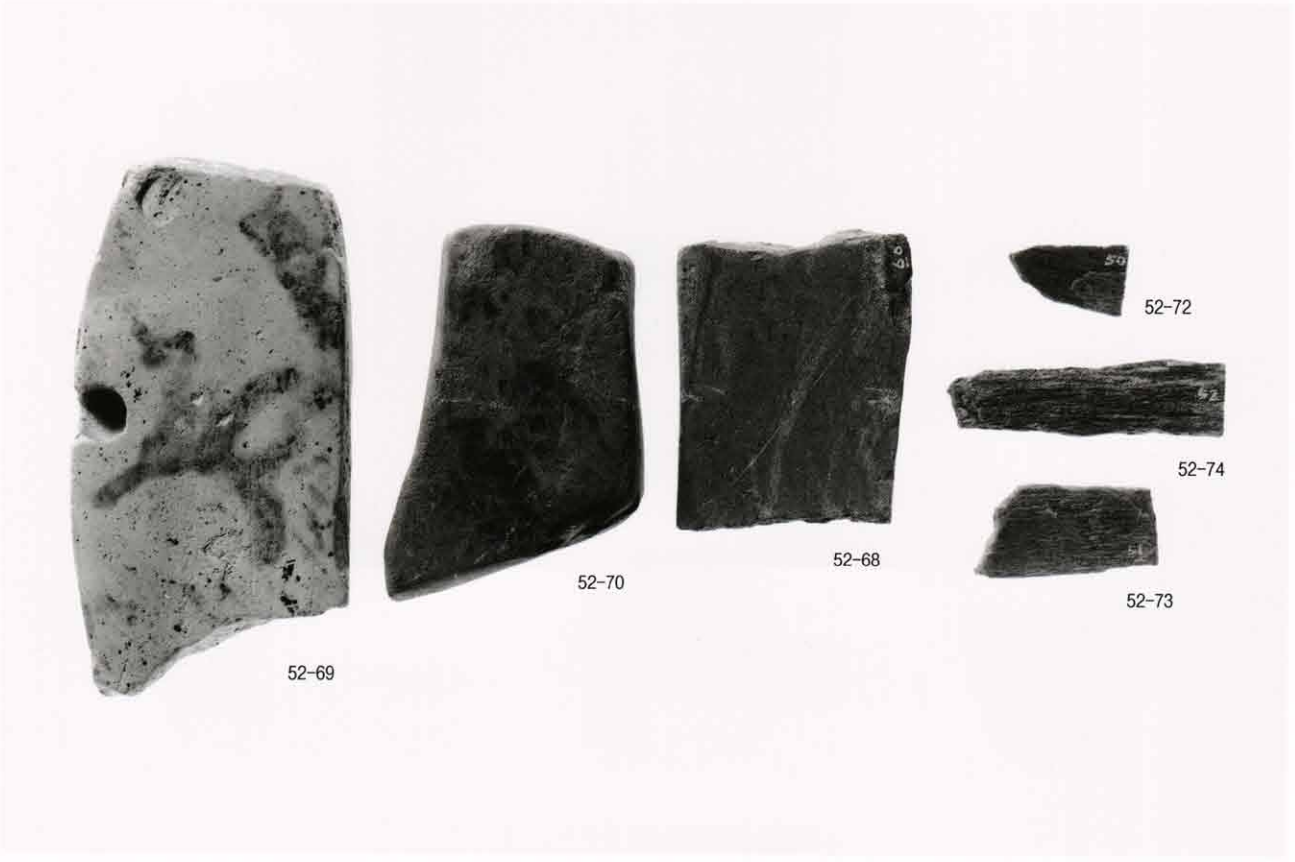
(1)出土遺物(磨製石器類)　挿図番号－遺物番号



(2)出土遺物(磨製石器類)　挿図番号－遺物番号



(1)出土遺物(磨製石器類)　挿図番号－遺物番号

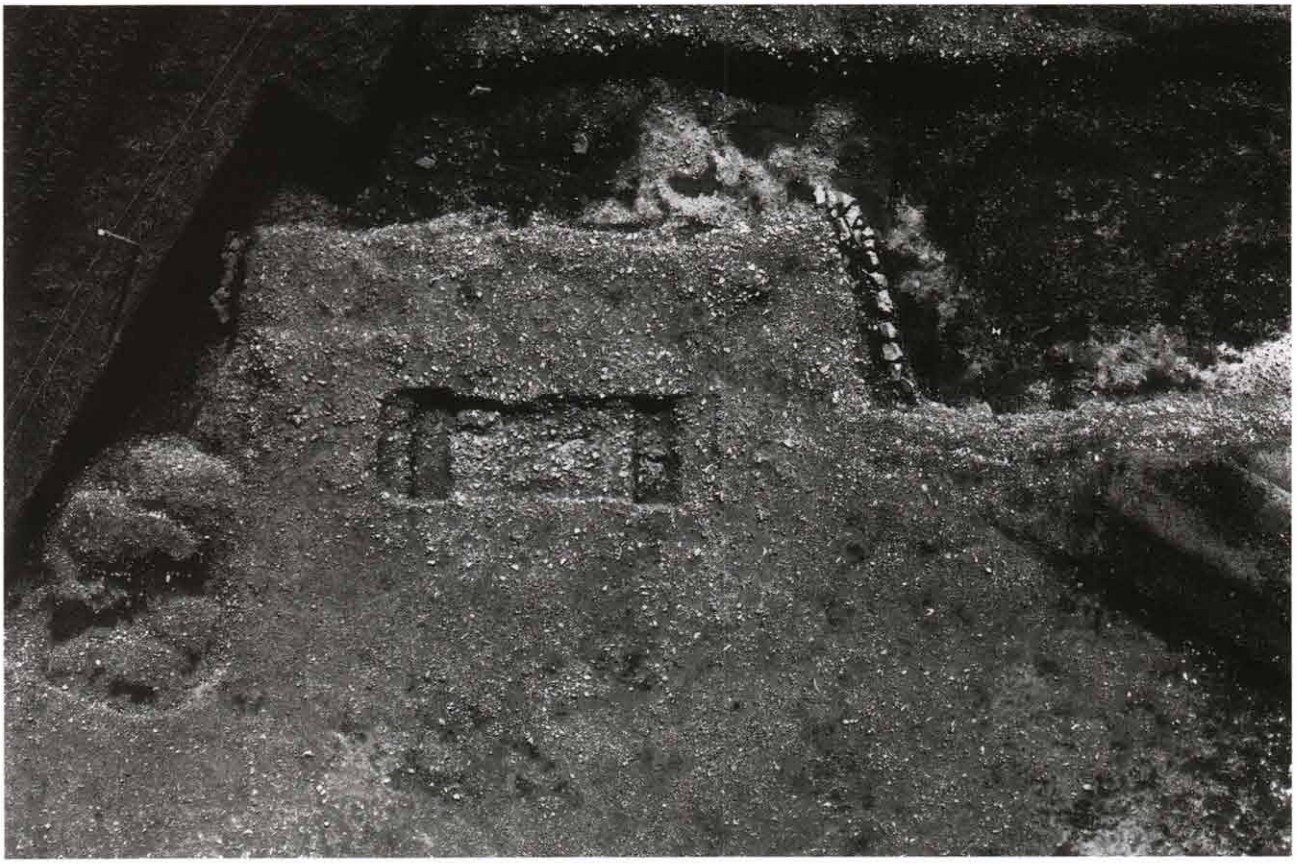


(2)出土遺物(磨製石器類)　挿図番号－遺物番号

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第33

時塚遺跡第６・８・10次

(1)時塚１号墳全景(南東から)



(2)時塚１号墳ＢＳＸ033全景(上空から、右下が北)

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第34

時塚遺跡第６・８・10次

(1)周溝内土層断面(南西から)

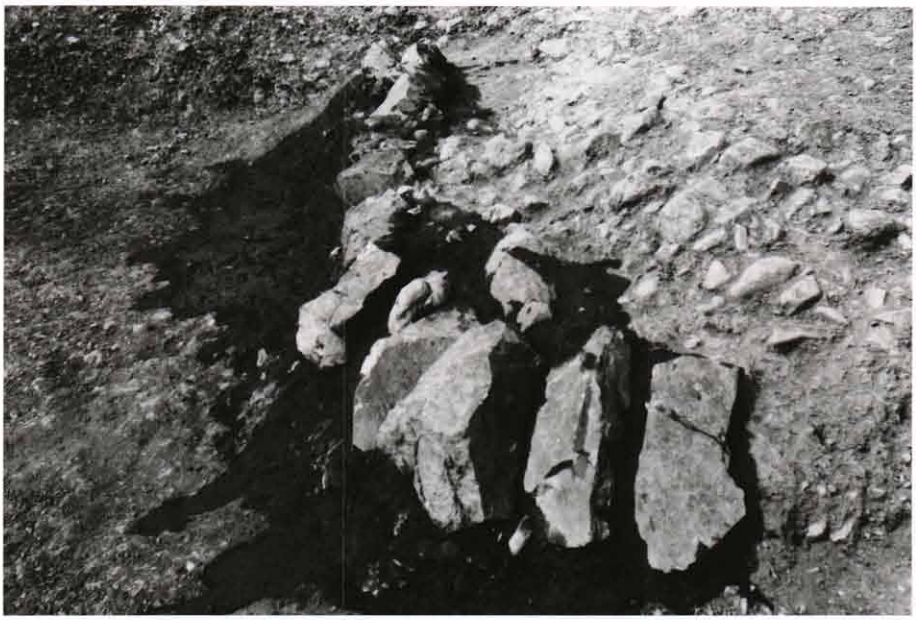
(2)埴輪出土状況(東から)

(3)拡張区埴輪出土状況(東から)

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第35

時塚遺跡第６・８・10次

(1)葺石近景(北西から)



(2)葺石近景(南西から)

(3)葺石貼り付け状況(西から)

時塚遺跡第６・８・10次

(2)主体部ＢＳＸ033近景(南東から)

(1)主体部ＢＳＸ033検出状況(北西から)

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第37

時塚遺跡第６・８・10次

(1)主体部ＢＳＸ033堆積断面
（北西から）

(2)主体部ＢＳＸ033堆積断面
（南東から）

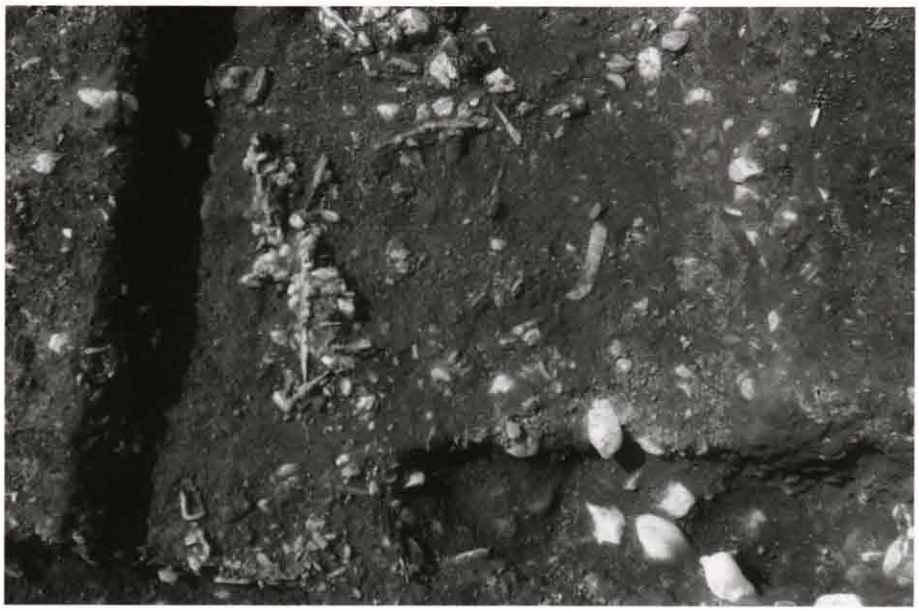
(3)主体部ＢＳＸ033堆積断面
（北東から）

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第38

時塚遺跡第６・８・10次

(1)鉄器出土状況(南東から)

(2)鉄器出土状況(南東から)



(3)鉄器出土状況(南東から)

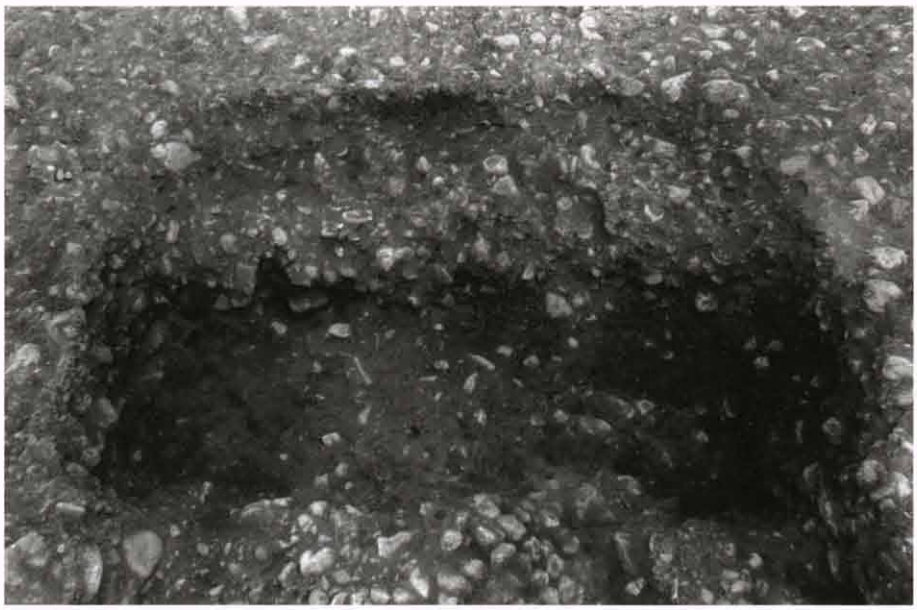
国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第39

時塚遺跡第６・８・10次

(1)主体部ＢＳＸ033内鉄器
出土状況(北西から)

(2)鉄器出土状況(南から)

(1)主体部ＢＳＸ033近景
（北西から）



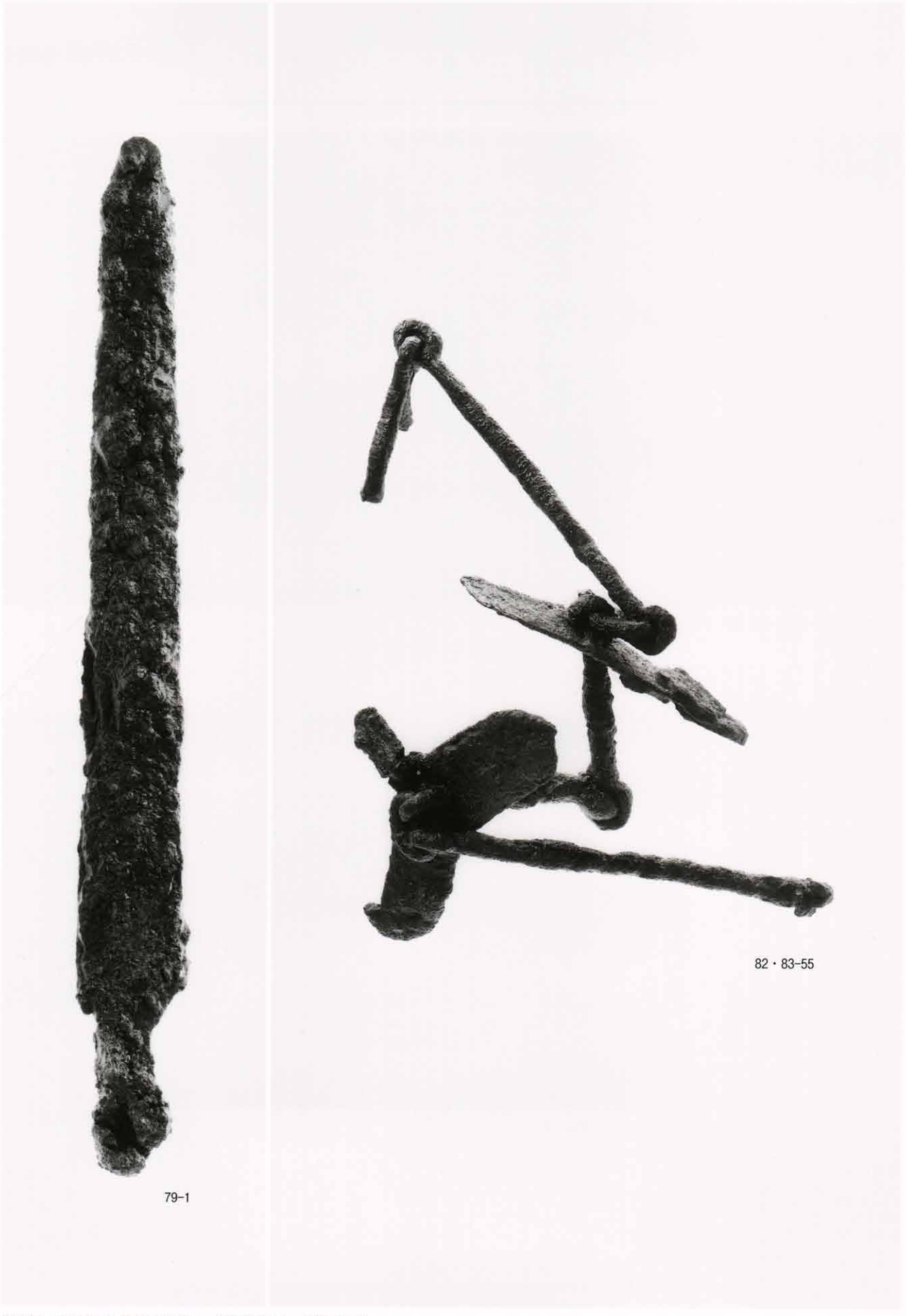
(2)木棺痕跡検出状況(北西から)

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第41

時塚遺跡第６・８・10次

(1)時塚古墳群遠景(西から)

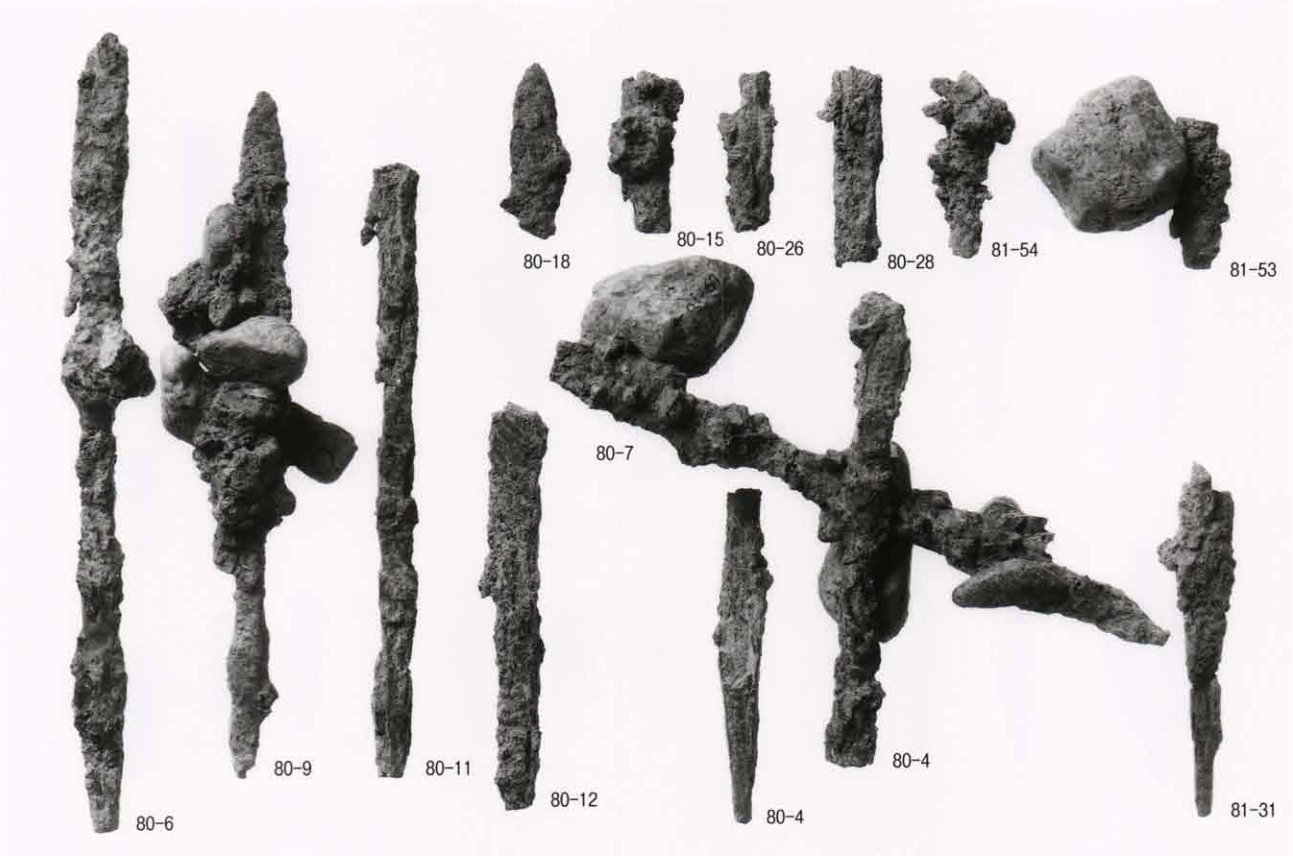
(2)時塚２号墳全景(上空から、上が北)



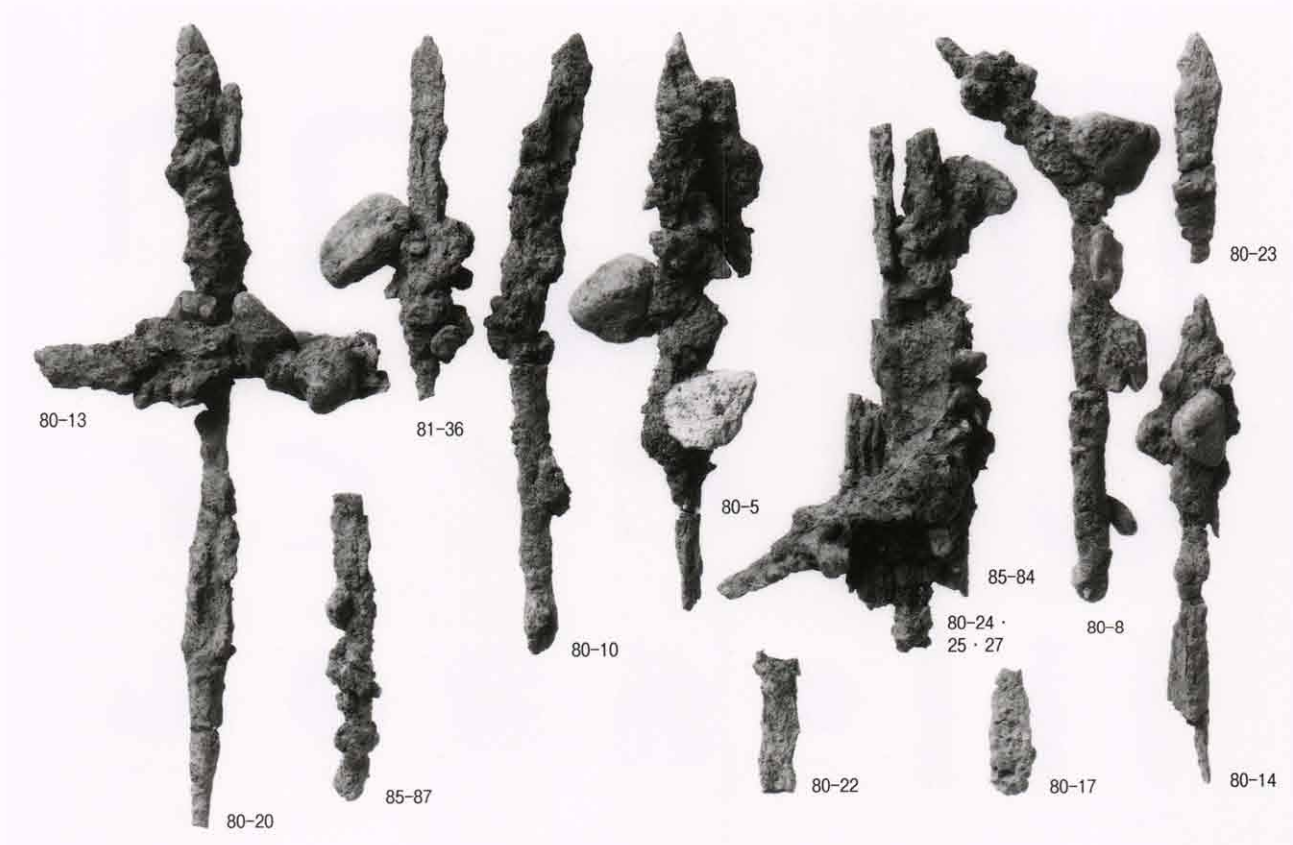
時塚１号墳出土鉄製品（１）　挿図番号－遺物番号

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第43

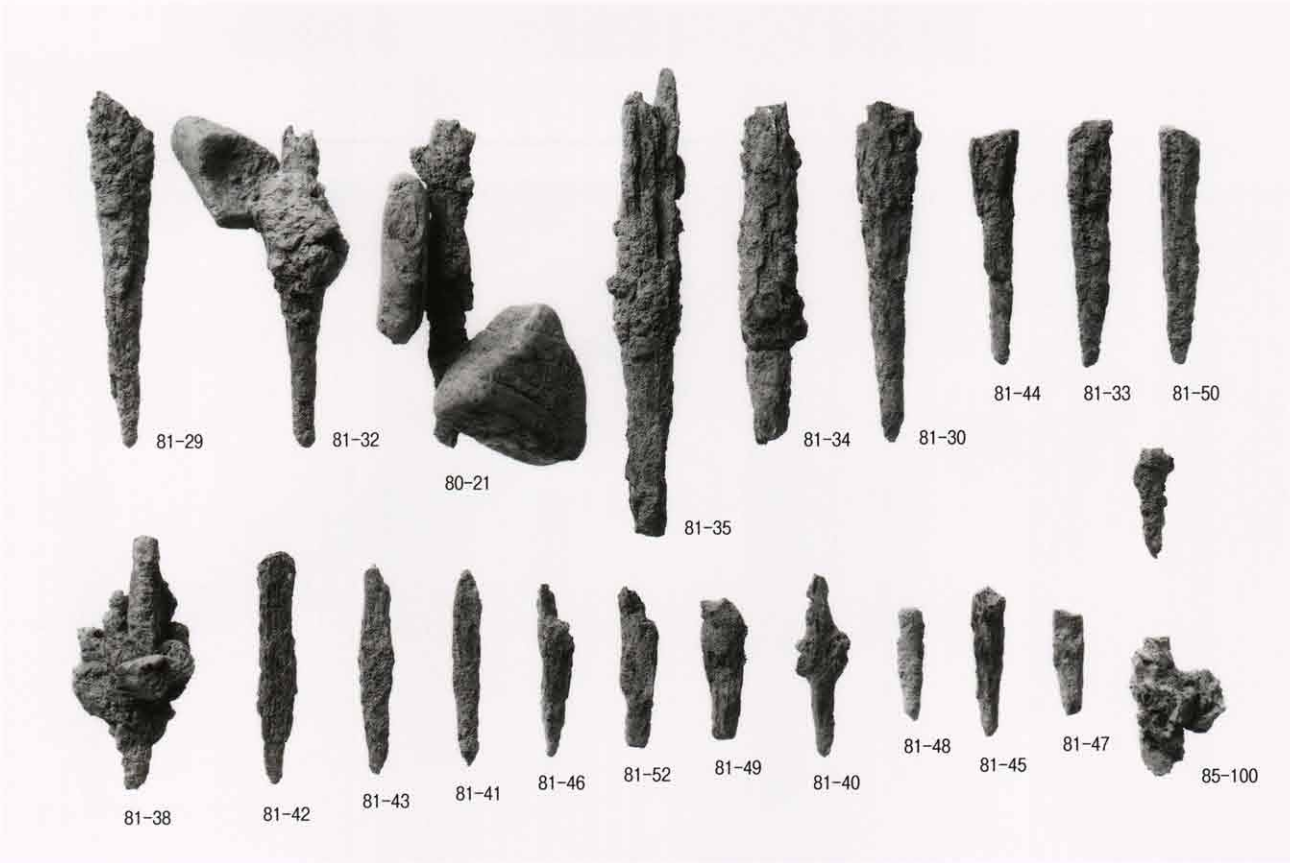
時塚遺跡第６・８・10次



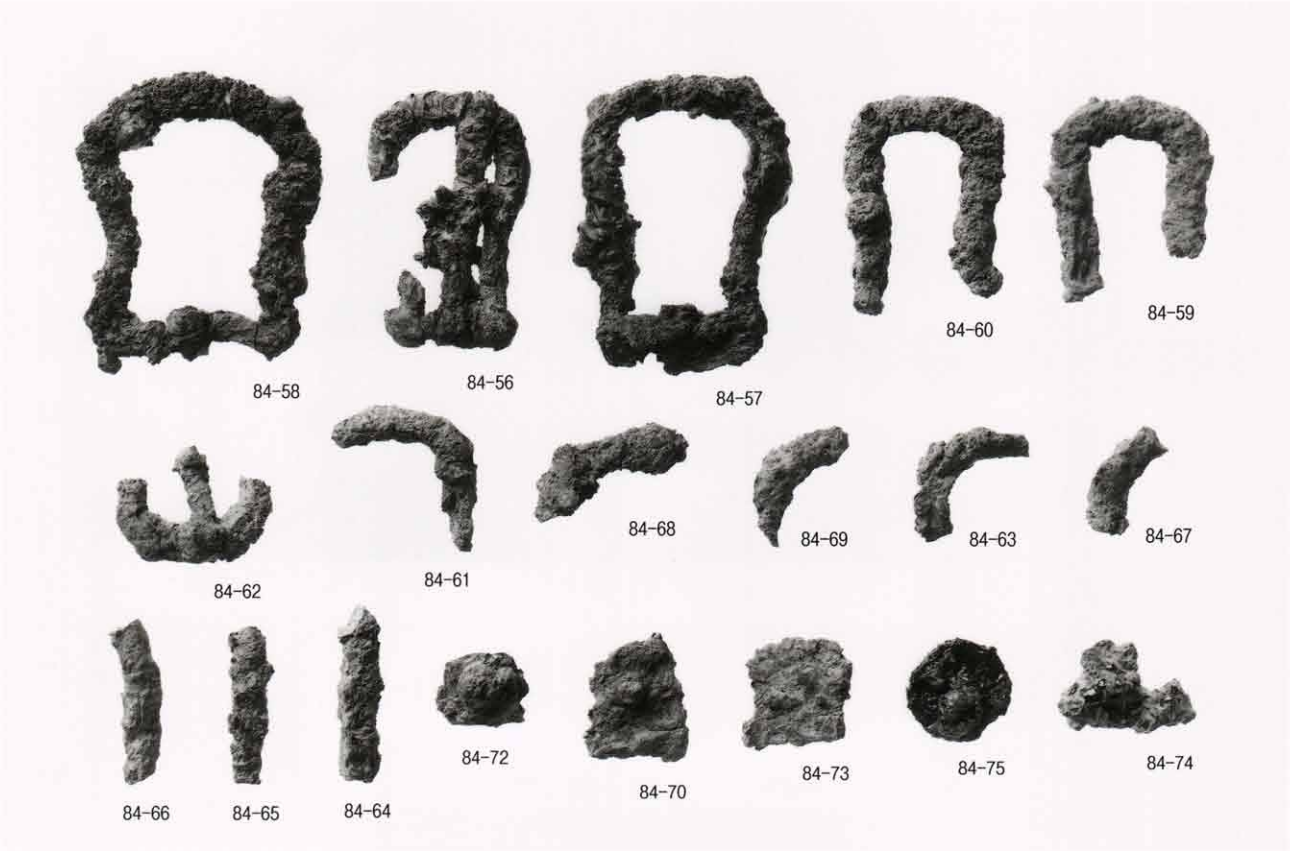
(1)時塚１号墳出土鉄製品(２)　挿図番号－遺物番号



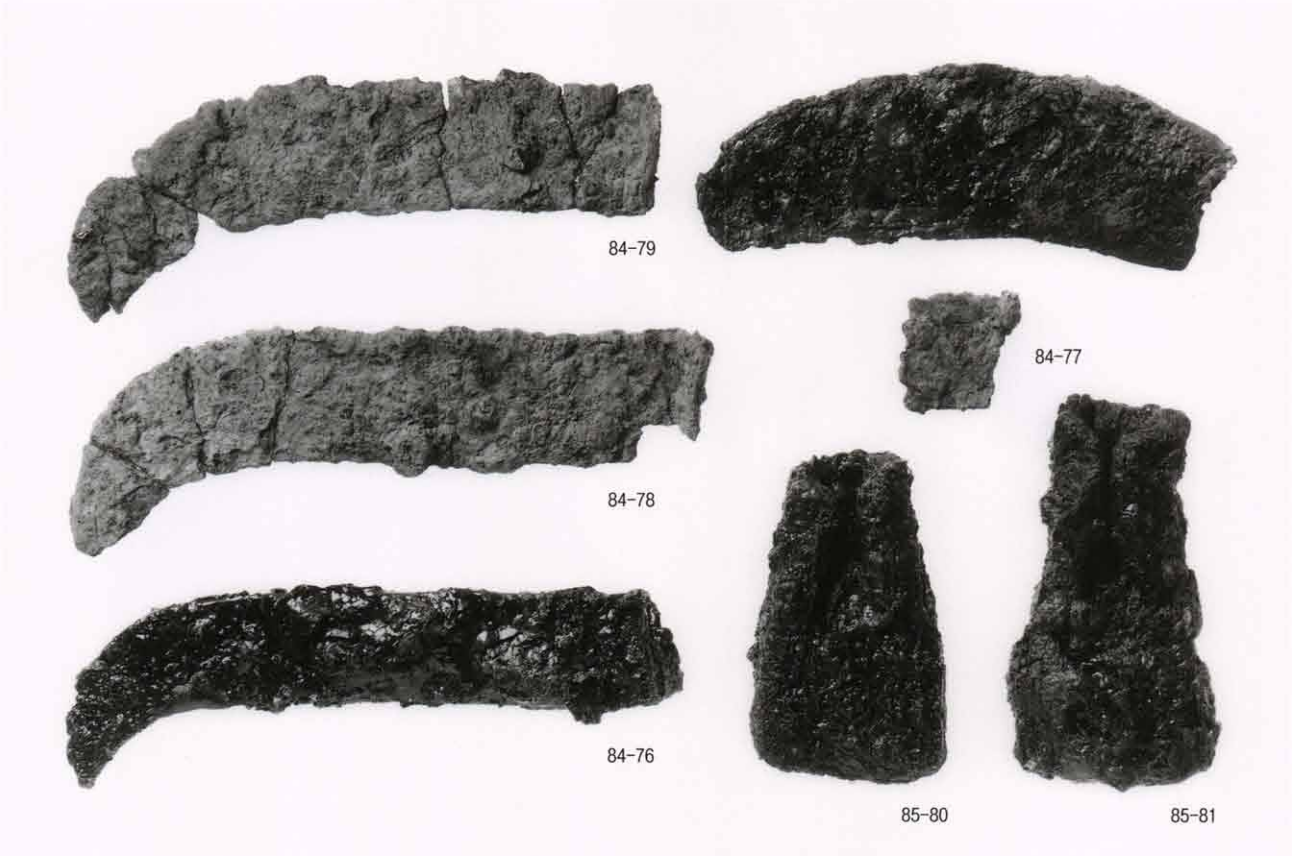
(2)時塚１号墳出土鉄製品(３)　挿図番号－遺物番号



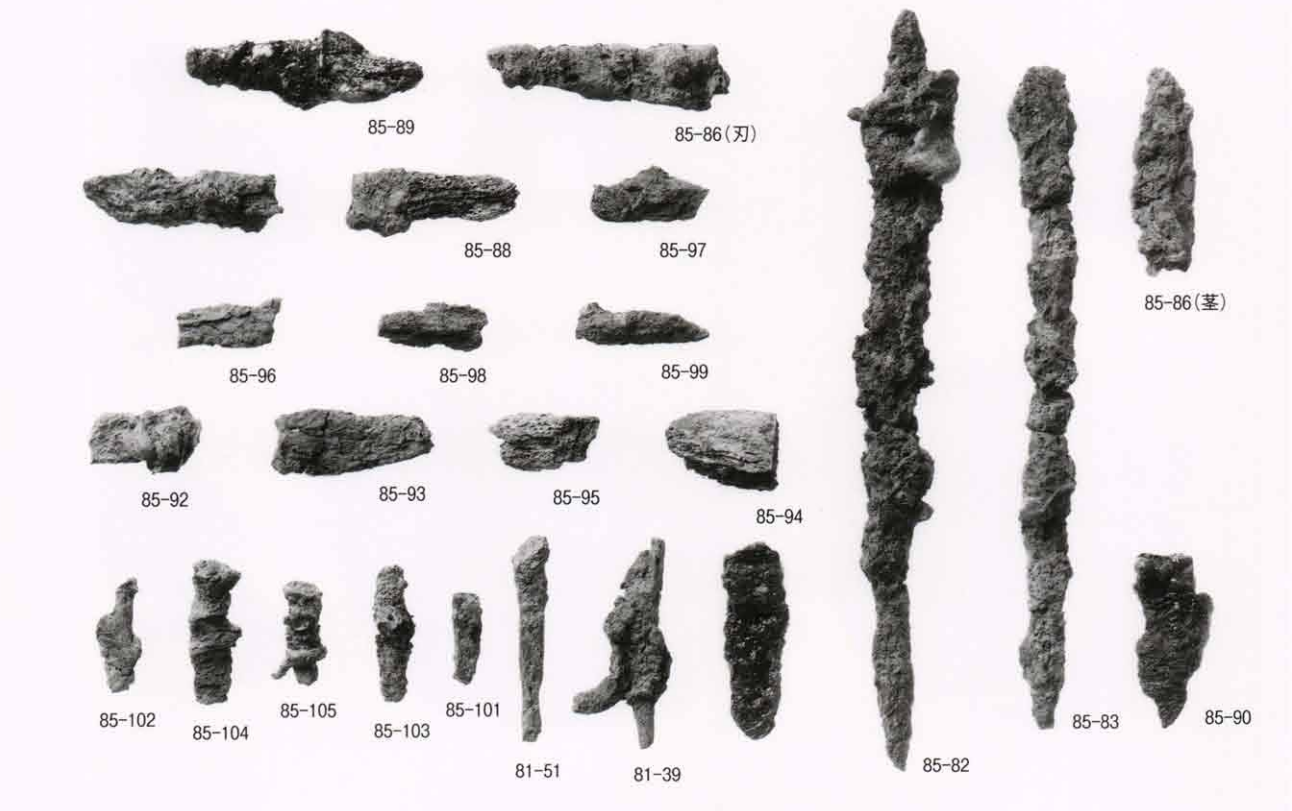
(1)時塚１号墳出土鉄製品(４)　挿図番号－遺物番号



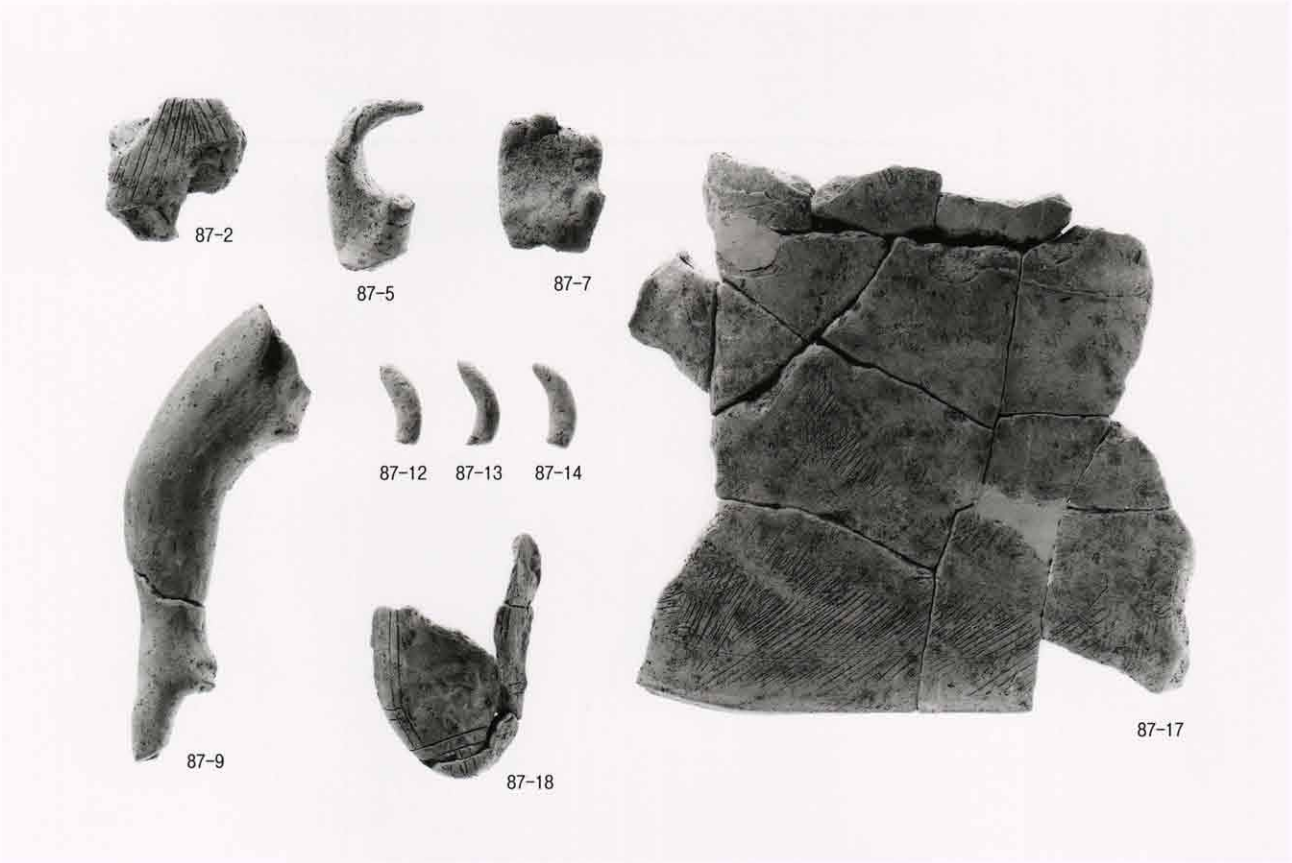
(2)時塚１号墳出土鉄製品(５)　挿図番号－遺物番号



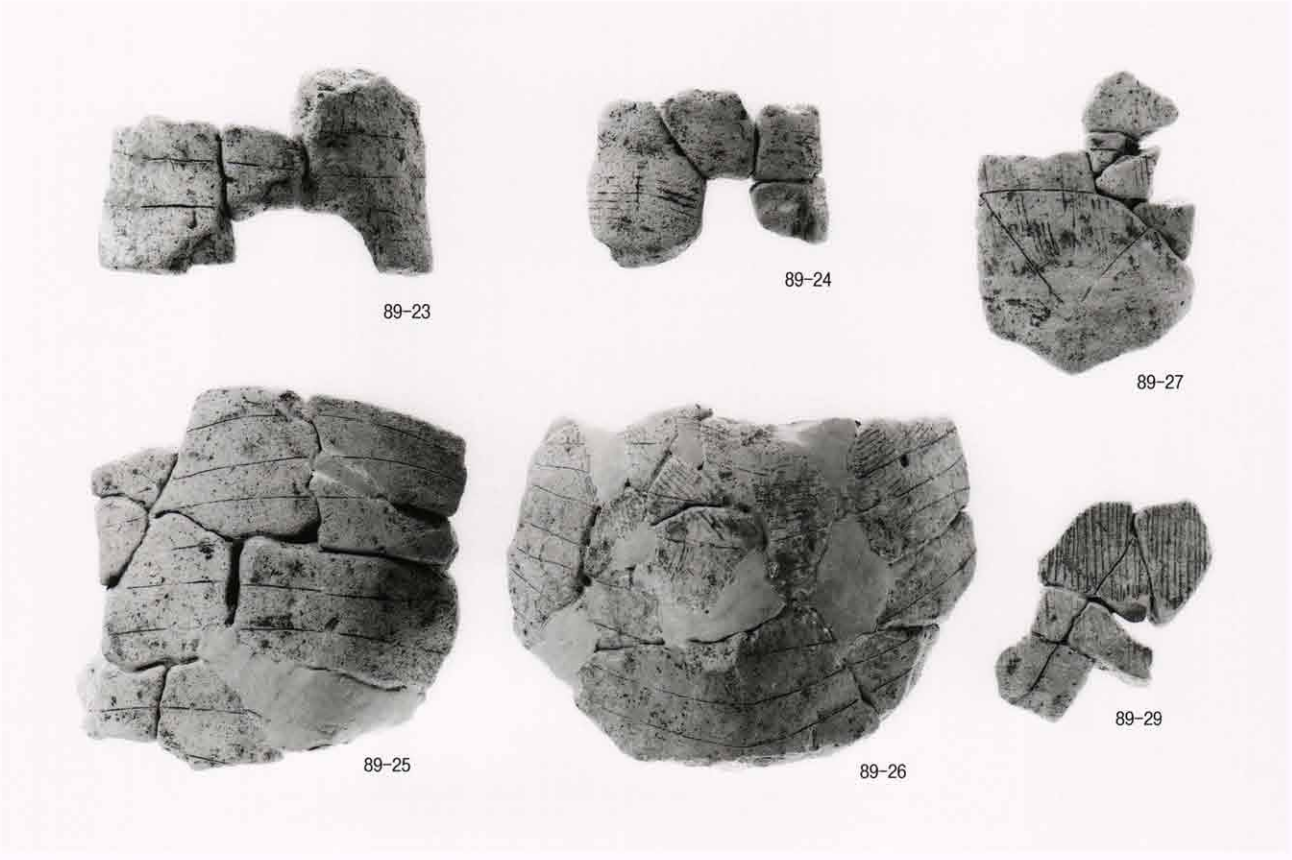
(1)時塚１号墳出土鉄製品(６)　挿図番号－遺物番号



(2)時塚１号墳出土鉄製品(７)　挿図番号－遺物番号



(1)時塚１号墳出土埴輪　挿図番号－遺物番号



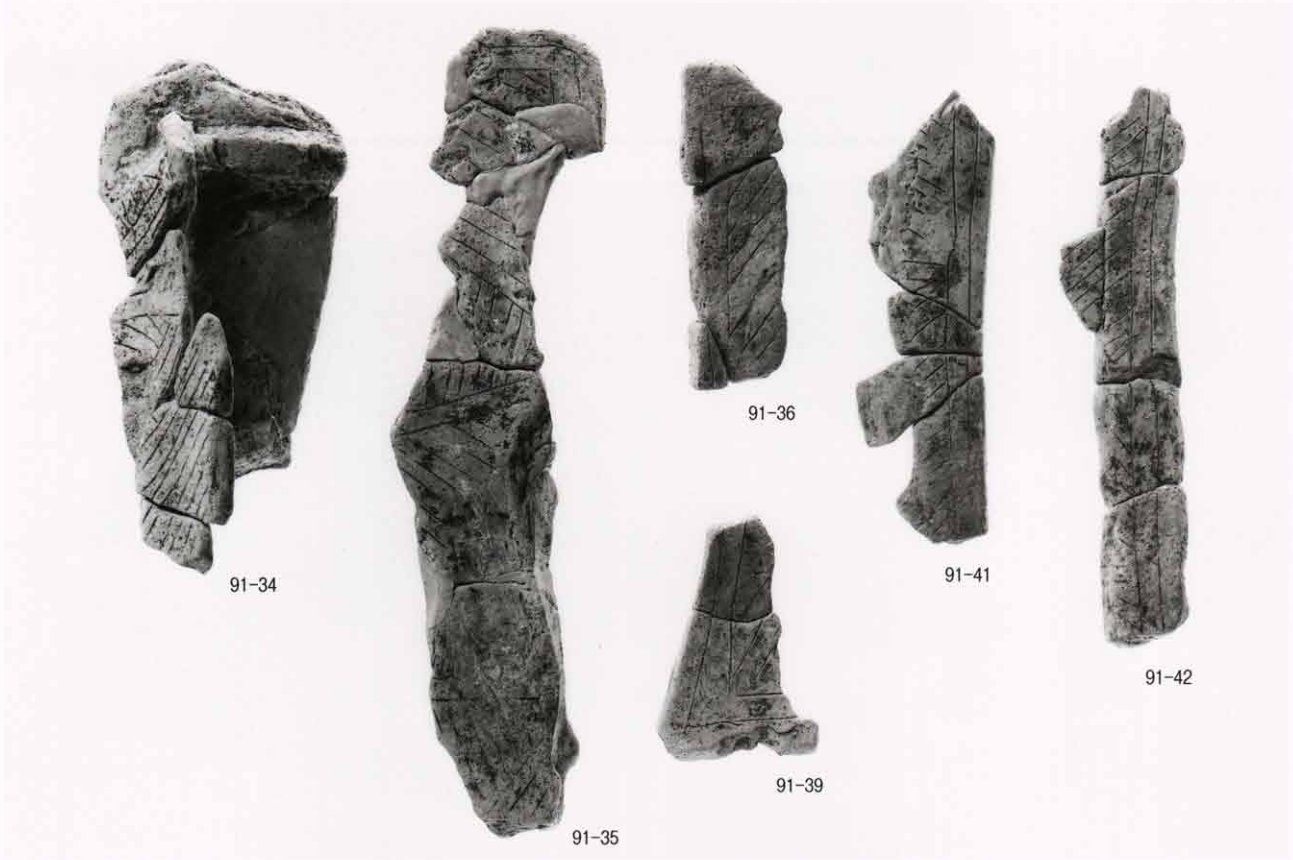
(2)時塚１号墳出土埴輪　挿図番号－遺物番号

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第47

時塚遺跡第６・８・10次

(1)時塚１号墳出土埴輪　挿図番号－遺物番号

(2)時塚１号墳出土埴輪　挿図番号－遺物番号

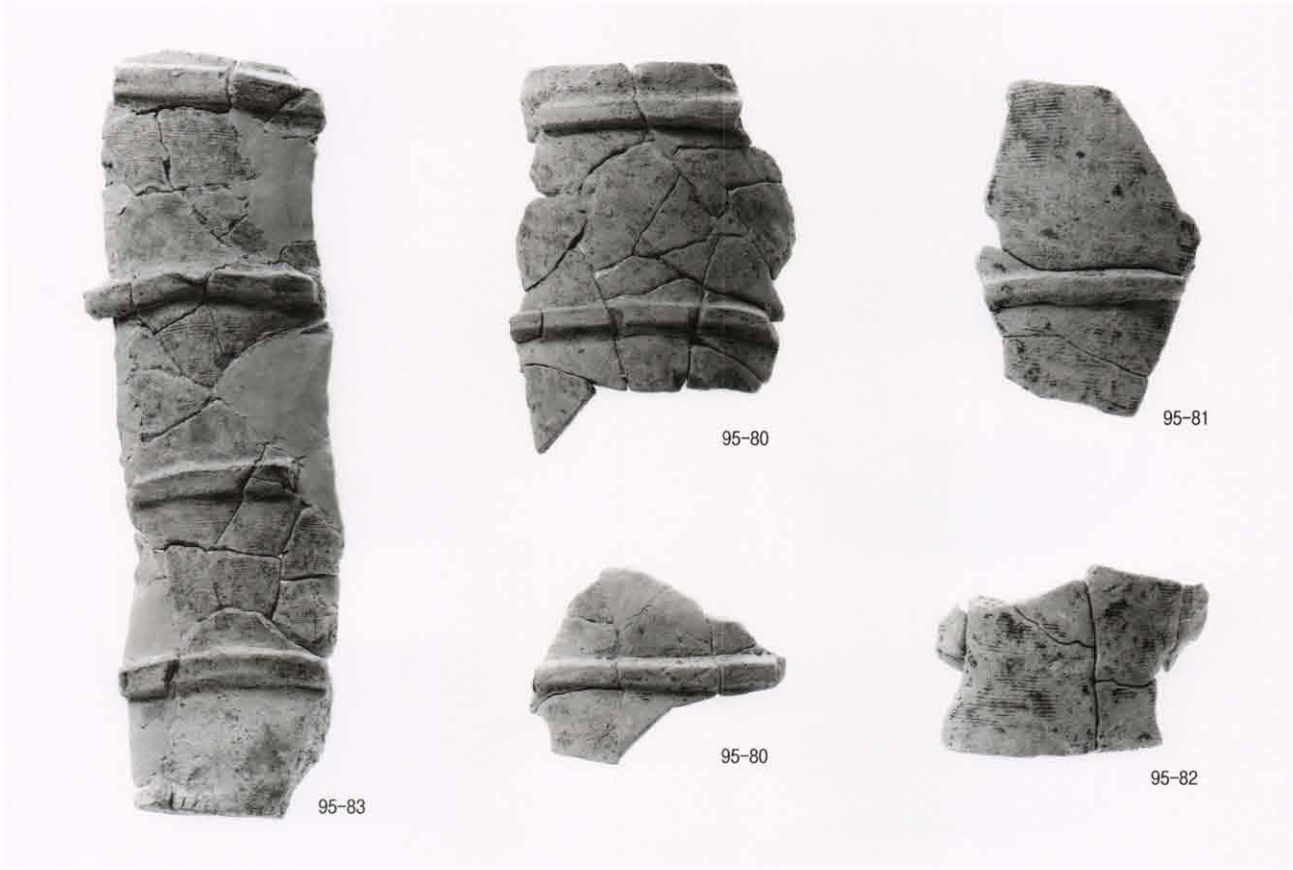


(1)時塚１号墳出土埴輪　挿図番号－遺物番号

(2)時塚１号墳出土埴輪　挿図番号－遺物番号

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第49

時塚遺跡第６・８・10次



(1)時塚１号墳出土埴輪　挿図番号－遺物番号

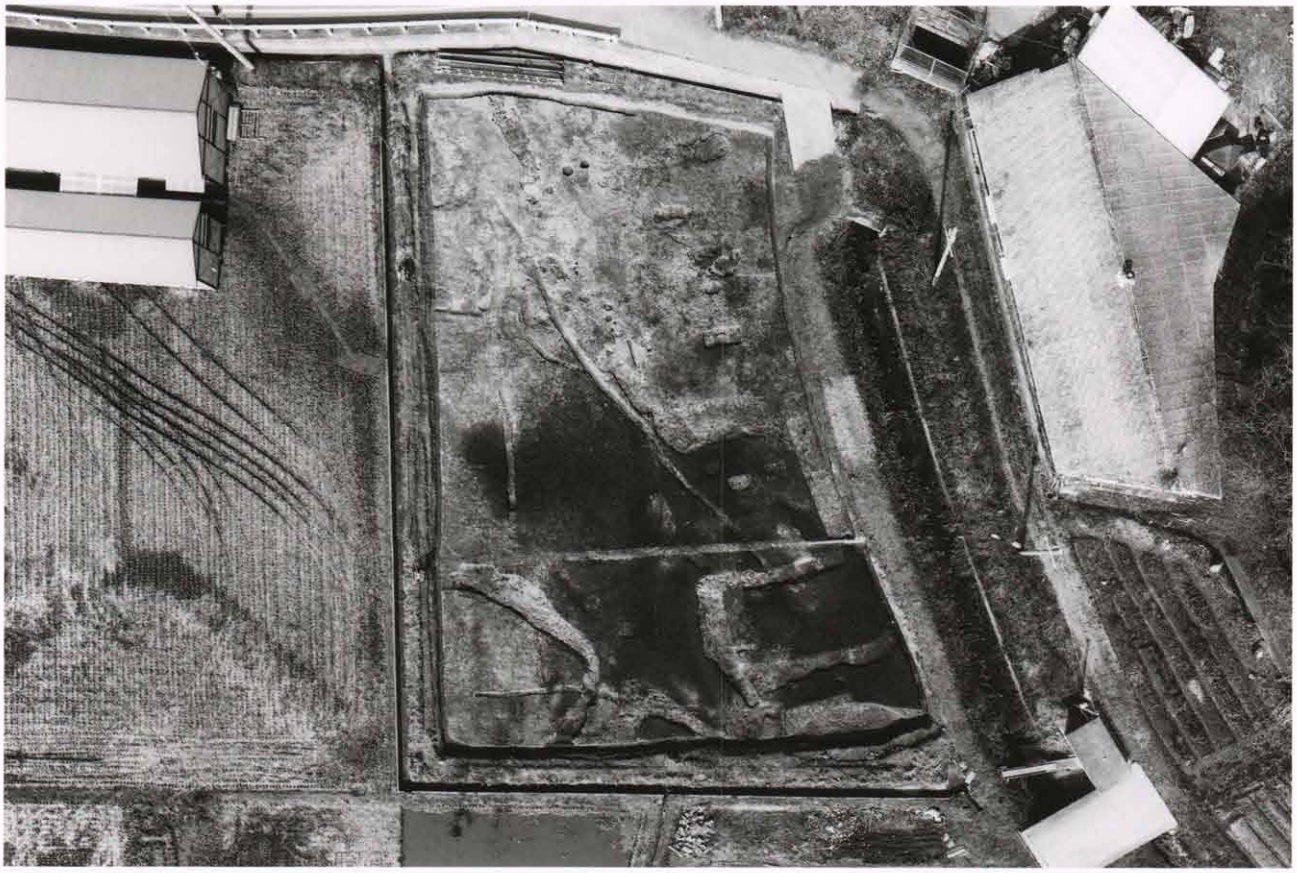
(2)時塚１号墳出土埴輪　挿図番号－遺物番号

(1)時塚１号墳周溝内出土遺物　挿図番号－遺物番号

(2)時塚２号墳周溝内出土遺物　挿図番号－遺物番号

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第51

時塚遺跡第10次Ｊ地区

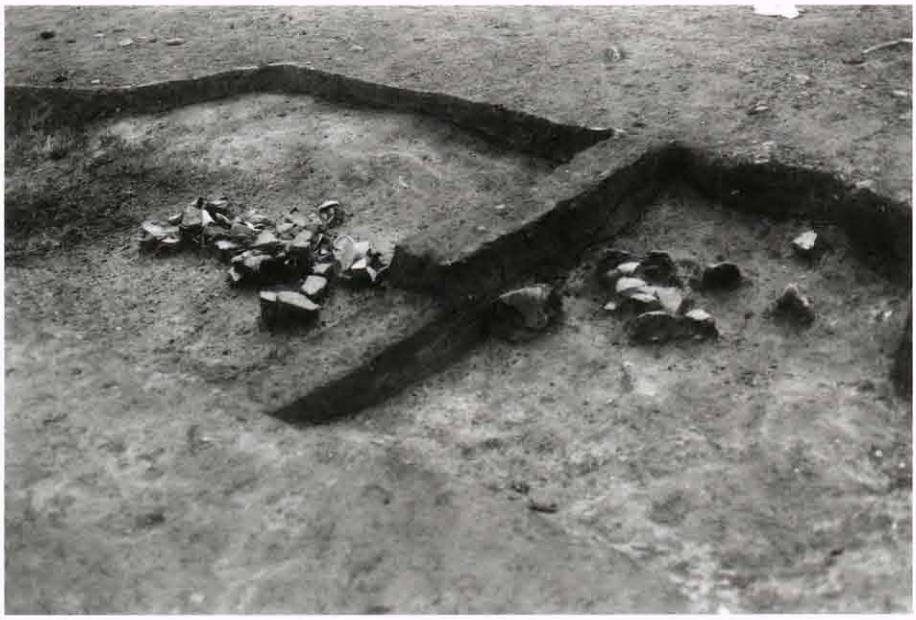


(1) Ｊ－１トレンチ全景(上空から、上が北)

(2) Ｊ－２トレンチ全景(上空から、上が北)

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第52

時塚遺跡第10次Ｊ地区



(1) ＪＳＤ007内弥生土器出土状況
（東から）

(2) 方形周溝墓ＪＳＴ007全景
（北東から）

(3) ＪＳＤ007南西部（北西から）

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第53

時塚遺跡第10次Ｊ地区

(1) ＪＳＤ007内弥生土器出土状況（北東から）

(2) ＪＳＫ008およびＪＳＤ030検出状況（南西から）

(3) ＪＳＤ030内弥生土器出土状況（北から）

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第54

時塚遺跡第10次Ｊ地区

(1) ＪＳＤ006内弥生土器出土状況（北西から）

(2) ＪＳＤ006内出土弥生土器近景（北西から）

(3) ＪＳＴ006北半部(西から)

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第55

時塚遺跡第10次Ｊ地区

(1) ＪＳＤ006Ｃ－Ｃ'土層堆積状況（北から）

(2) ＪＳＤ006Ｂ－Ｂ'土層堆積状況(北西から)

(3) ＪＳＴ006南半部および中世溝（ＪＳＤ016・017）（西から）

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第56

時塚遺跡第10次Ｊ地区

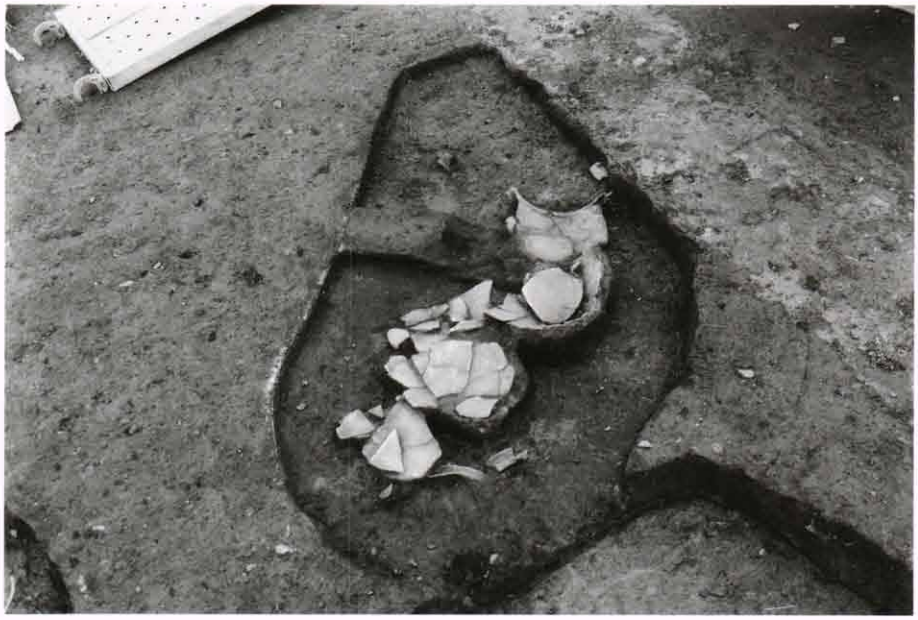
(1) ＪＳＤ020および中世溝
（ＪＳＤ017）（西から）

(2) ＪＳＤ020内出土弥生土器近景
（東から）

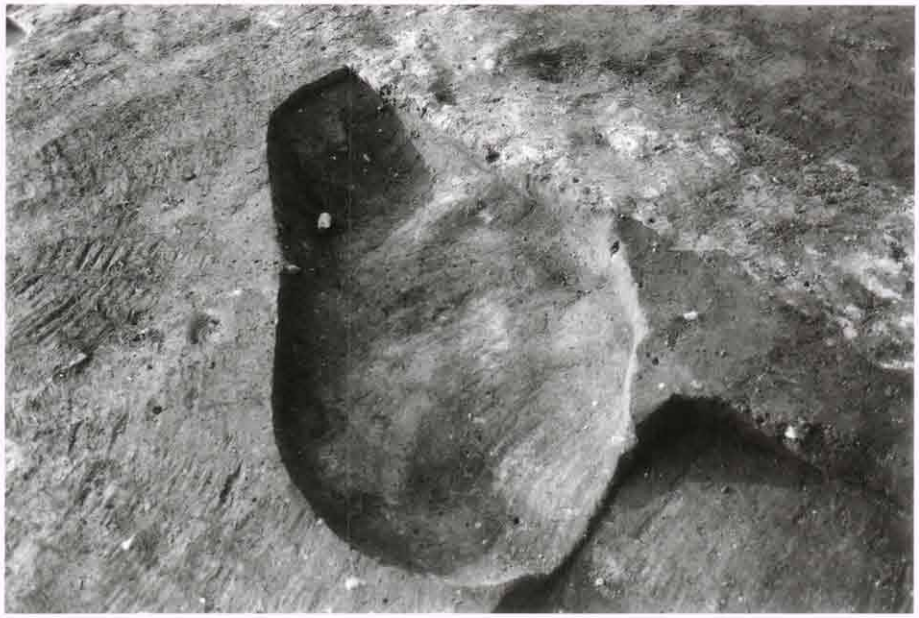
(3) ＪＳＫ013完掘状況（北から）

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第57

時塚遺跡第10次Ｊ地区



(1) ＪＳＫ004内弥生土器出土状況（南東から）



(2) ＪＳＫ004完掘状況（南東から）

(3) ＪＳＫ022内弥生土器出土状況（南西から）

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第58

時塚遺跡第10次Ｊ地区

(1) Ｊ－２区中間および東トレンチ完掘状況(西から)

(2) ＪＳＤ025内土師器皿出土状況(北から)

(3) Ｊ－２区西トレンチ完掘状況(東から)

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第59

時塚遺跡第10次 J 地区

19

20

7

17

5

18

出土弥生土器

三日市遺跡第９次

(1)三日市遺跡遠景(上空から、上が北)

(2)三日市遺跡遠景(上空から、上が南)

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第61

三日市遺跡第９次

(1) １トレンチ全景(南東から)

(2) ２トレンチ全景(南から)

(3) ３トレンチ全景(南から)

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第62

三日市遺跡第９次

(1) ４－１・２トレンチ全景
（南西から）

(2) ５－１トレンチ全景(北から)

(3) ５－２トレンチ全景(北から)

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第63

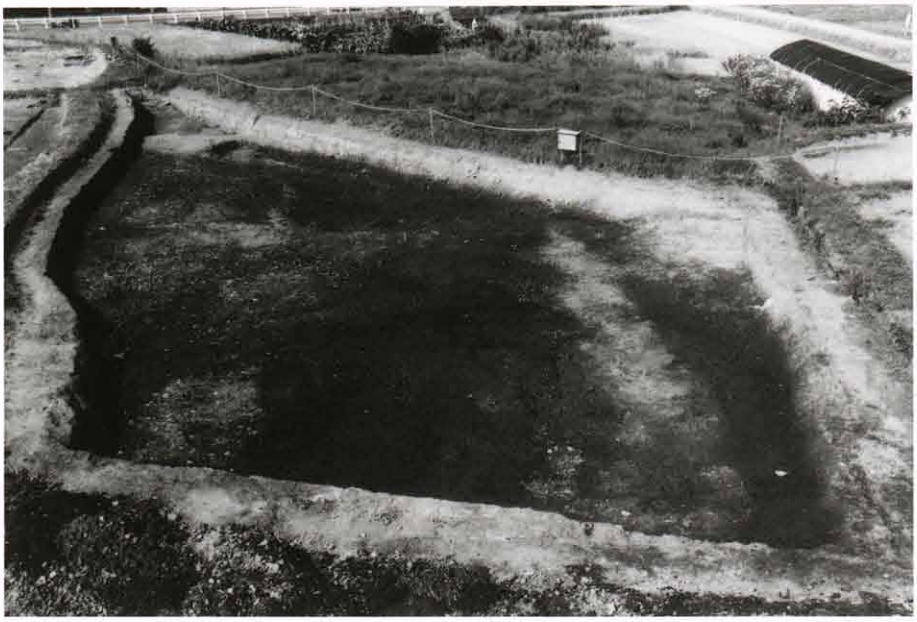
三日市遺跡第９次

(1) ６トレンチ全景(西南西から)

(2) ６トレンチ全景(手前が６－５トレンチ、東から)

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第64

三日市遺跡第９次



(1) 6 － 1 トレンチ全景(東から)

(2) 6 － 6 トレンチ全景(南から)

(3) 6 － 2 トレンチ検出土坑
(南から)

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第65

三日市遺跡第９次

(1) 6 － 4 トレンチ検出土坑
（東から）

(2)11トレンチ全景(北東から)

(3)12トレンチ検出土坑(西から)

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第66

三日市遺跡第９次

(1) 7 トレンチ全景(南西から)

(2) 8 トレンチ全景(南東から)

(3) 8 トレンチ溝ＳＤ01(東から)

三日市遺跡第９次

(1) ９－１・２・３トレンチ全景(西から)

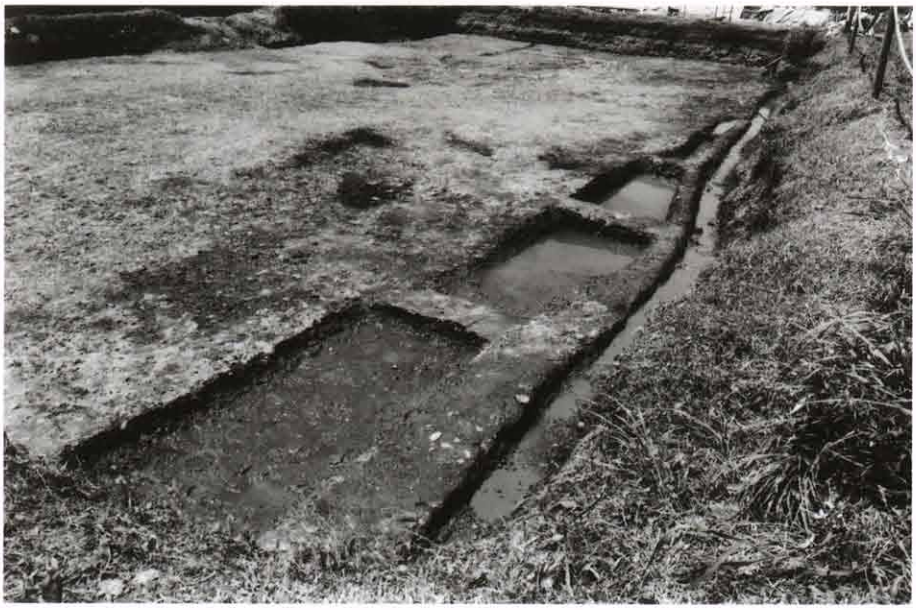
(2)12トレンチ全景(西から)

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第68

三日市遺跡第９次

(1) ９－１・２・３トレンチ全景
（東から）

(2) ９－１トレンチ全景(西から)



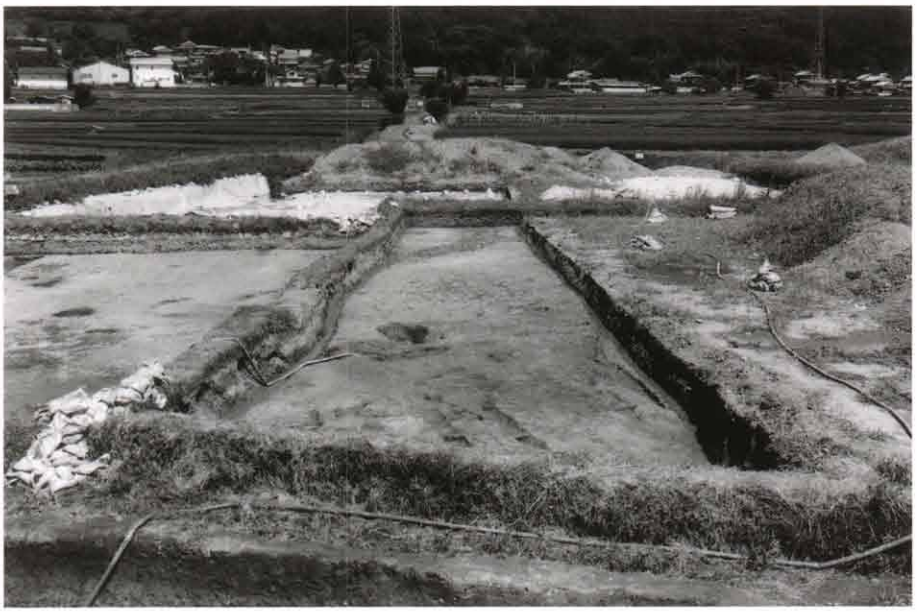
(3) ９－１トレンチ溝ＳＤ01
（東北東から）

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第69

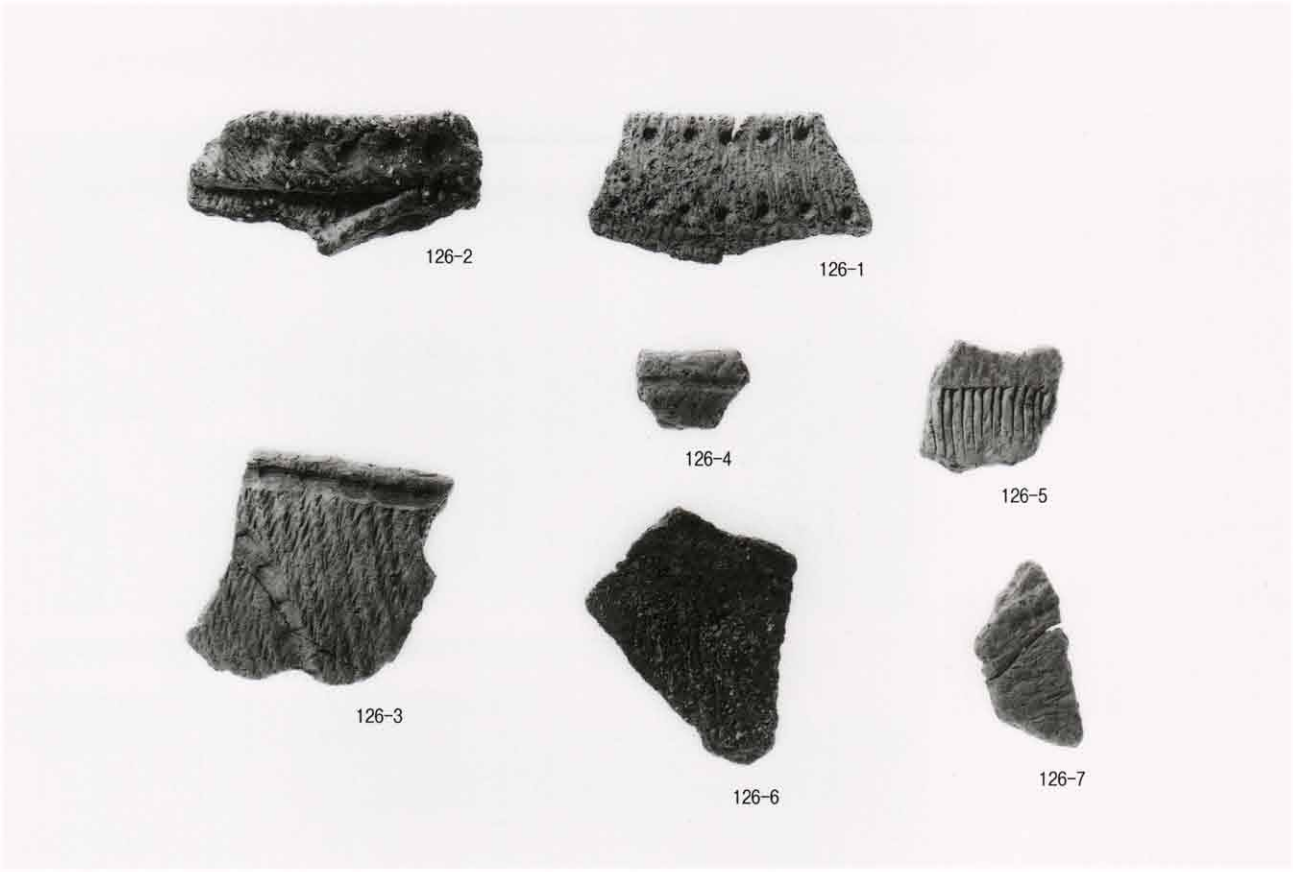
三日市遺跡第９次

(1) ９－２トレンチ全景(南から)

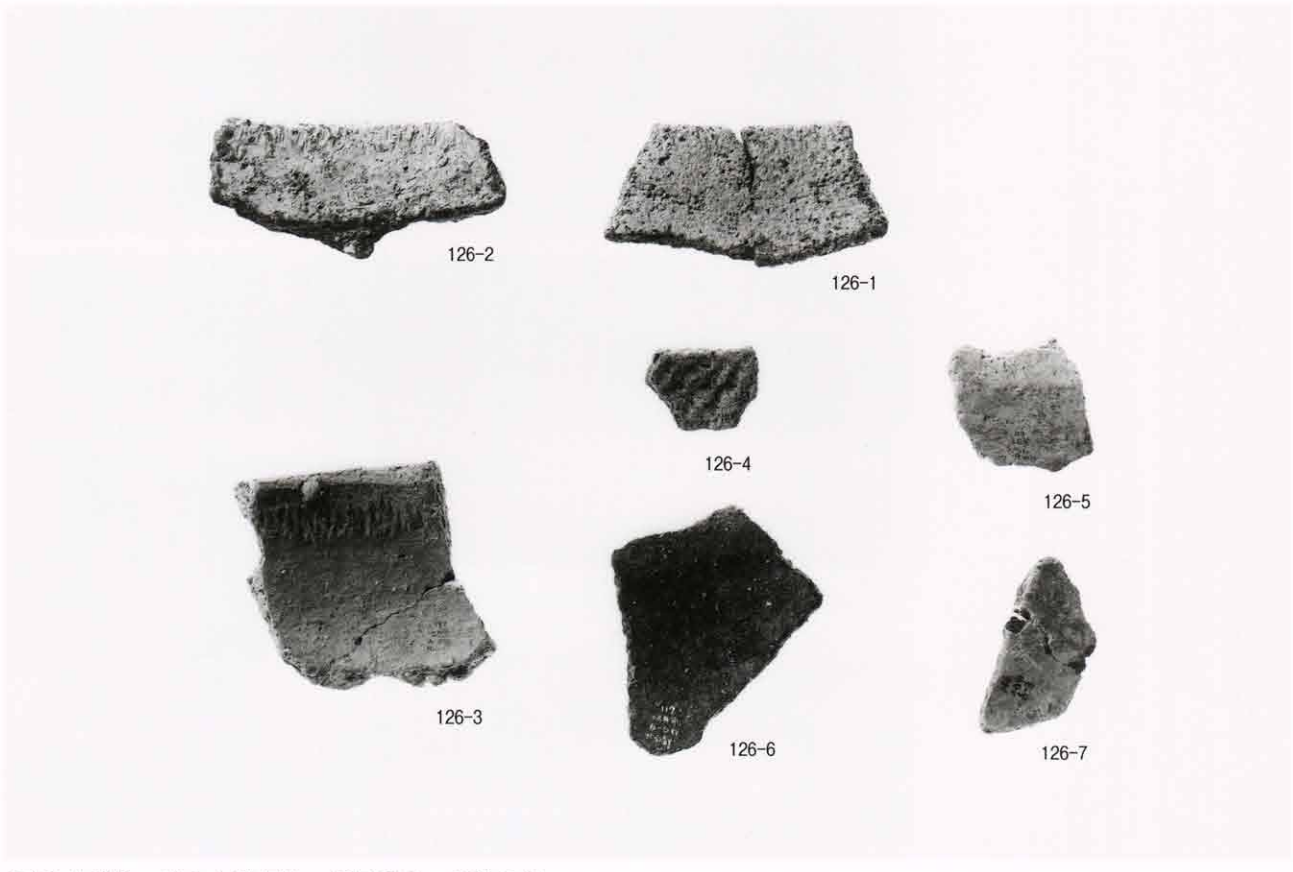
(2) ９－２トレンチ検出土坑
(東南東から)



(3) ９－３トレンチ全景(西から)



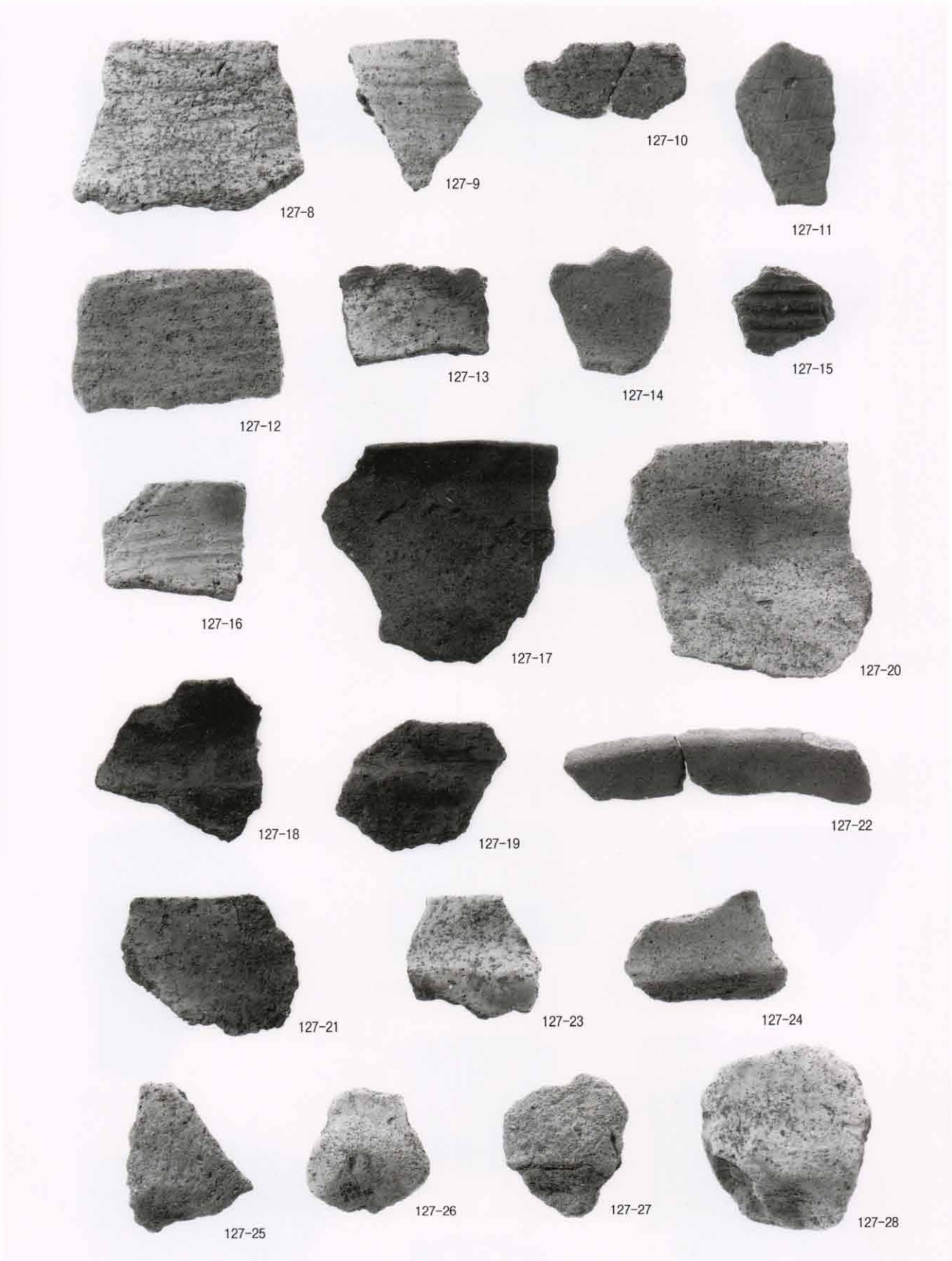
(1)出土遺物　縄文土器(表)　挿図番号－遺物番号



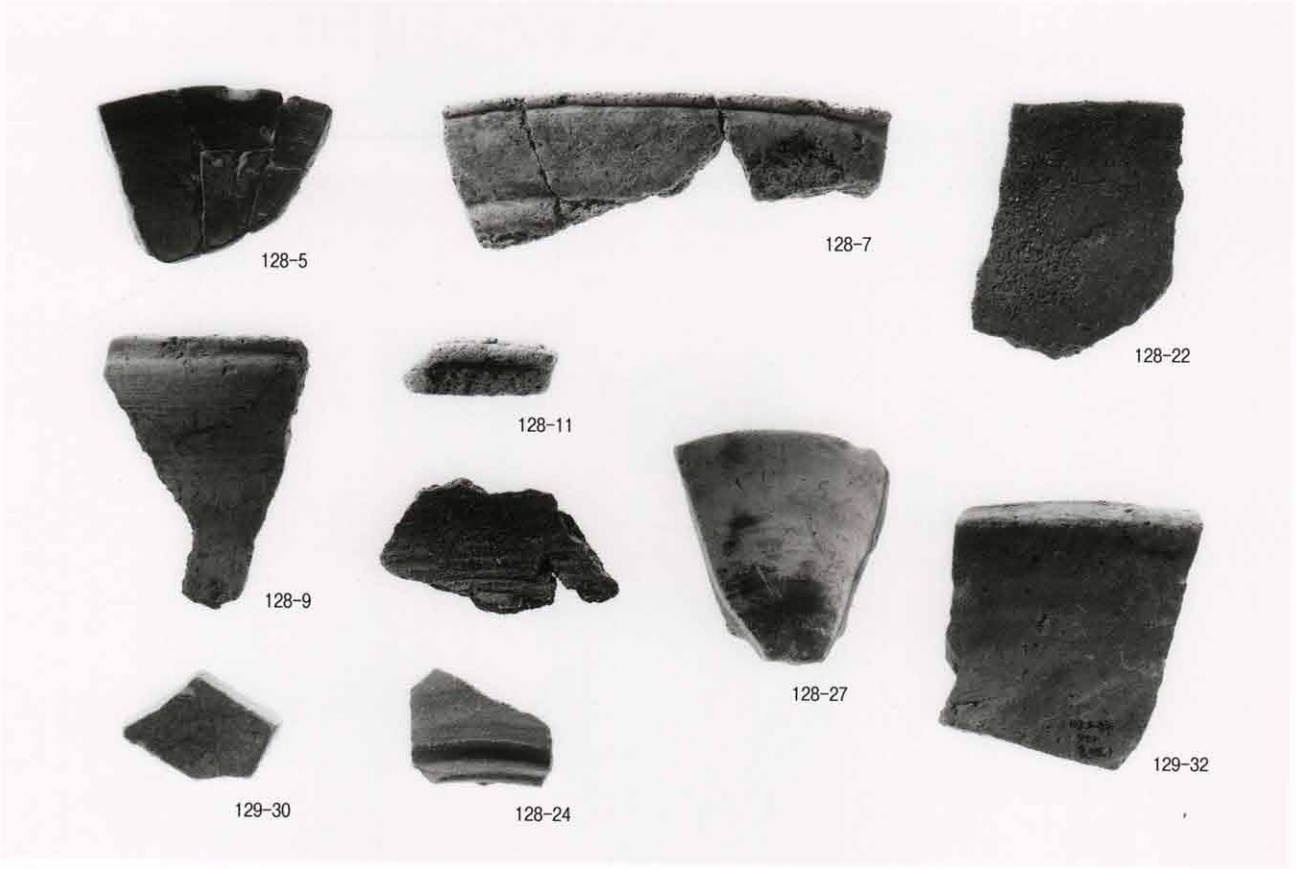
(2)出土遺物　縄文土器(裏)　挿図番号－遺物番号

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　図版第71

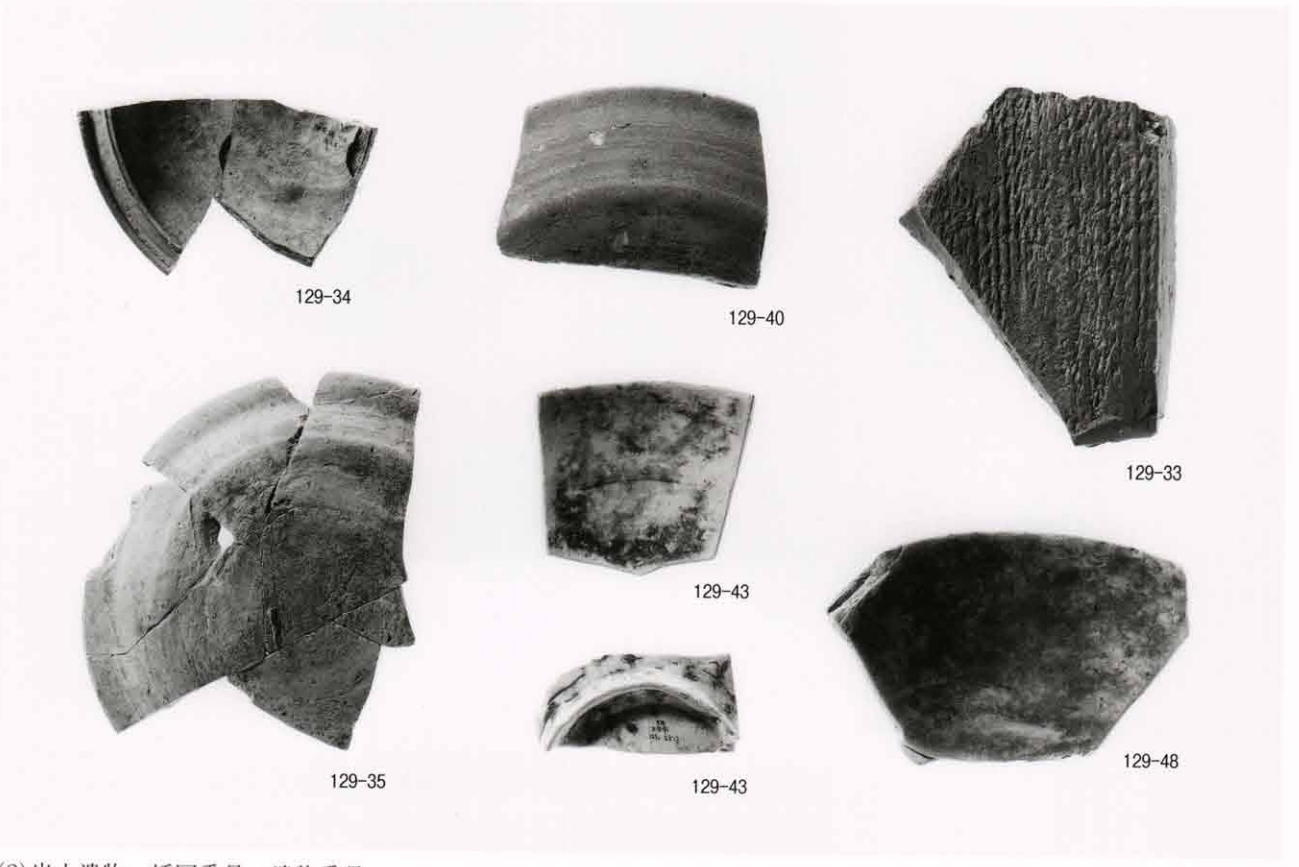
三日市遺跡第９次



出土遺物　縄文土器　挿図番号－遺物番号



(1)出土遺物　挿図番号－遺物番号



(2)出土遺物　挿図番号－遺物番号